SPARC M10 システム

プロダクトノート XCP 2350 版

マニュアル番号： C120-0065-02
2018 年 1 月

Copyright © 2007, 2018, 富士通株式会社 All rights reserved.

本書には、オラクル社および/またはその関連会社により提供および修正された技術情報が含まれています。

オラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。

本書およびそれに付属する製品および技術は、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。オラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社およびそのライセンサーの書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものでもありません。本書は、オラクル社および富士通株式会社の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフォント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者からオラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPLまたはLGPLが適用されたソースコードの複製は、GPLまたはLGPLの規約に従い、該当する場合に、お客様からのお申し込みに応じて入手可能です。オラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社にお問い合わせください。この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされているBerkeley BSDシステムに由来しています。

UNIXはThe Open Groupの登録商標です。

OracleとJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

SPARC Enterprise、SPARC64、SPARC64ロゴ、およびすべてのSPARC商標は、米国SPARC International, Inc.のライセンスを受けて使用している、同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

免責条項: 本書または本書に記述されている製品や技術に関してオラクル社、富士通株式会社および/またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限ります。このような契約で明示的に規定された保証を除き、オラクル社、富士通株式会社および/またはそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、現状のまま提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われないものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、オラクル社、富士通株式会社および/またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のもとの第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

本書は、「現状のまま」提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われないものとします。

目次

はじめに　ix

第1章　ソフトウェア要件　1

XCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ　1

ゲストドメインにOracle Solaris 10をインストールする場合の留意事項　3

Oracle Solaris 10を使用する場合の留意点　4

Oracle VM Server for SPARC 3.1以前を使用する場合の留意点　5

物理パーティションの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ　5

PCIeエンドポイントデバイスの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ　6

Software on Chip対応ソフトウェア　7

XCPおよびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCの入手　8

ウェブブラウザ　8

リモートストレージ対応ソフトウェア　8

これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報　9

第2章　XCP 2350に関連する情報　13

XCP 2350の新着情報　13

留意点および制限事項　14

Secure Socket Layer（SSL）3.0の留意点　14

タイムゾーンに関する留意点　14
監査（Audit）に関する制限事項　15
物理パーティションの動的再構成に関する留意点　15
SPARC64 X+プロセッサとSPARC64 Xプロセッサの混在に関する留意点　16
SR-IOV機能に関する留意点および制限事項　16
OpenBoot PROMに関する留意点　17
CPUメモリユニット、マザーボードユニット、XSCFユニット、PSUバックプレーン、またはクロスバーバックプレーンユニットの保守に関する留意点　19
CPUコア アクティベーションに関する留意点　26
XSCF Webに関する留意点および制限事項　27
ファームウェアアップデートに関する留意点　28
PCIボックスを接続した場合の留意点　29
二系統受電設定に関する留意点　32
Active Directoryに関する留意点　33
LDAP over SSLに関する留意点　33
論理ドメインの時刻に関する留意点　33
電源連動機能（RCIL）に関する留意点　38
リモートストレージに関する留意点　40
XSCFを再起動する場合の留意点　40
FUJITSU Storage ETERNUSディスクストレージシステムをiSCSIターゲットとしてiSCSIブートする場合の留意点および制限事項　41
遅延ダンプに関する制限事項　43
その他の留意点および制限事項　43
XCP 2350の不具合と回避方法　49
第3章　ソフトウェアに関する情報　51
留意点および制限事項　51
内蔵SASディスクドライブとOracle Solaris MPxIOの設定に関する留意点　51

SPARC M10システムのOracle Solaris 11.2へのアップデートに関する留意点　55
EFI（GPT）ラベル付きディスクのサポートに関する留意点　59
Oracle VM Server for SPARCに関する留意点　59
Oracle VM Server for SPARCのライブマイグレーションに関する留意点　62
Oracle VM Server for SPARCの復旧モード（Recovery Mode）有効時の留意点　66
SPARC M10における暗号化メソッドのアクセラレーションのサポート　67
Openssl を使用する場合の留意点　68
Oracle Solaris 11.3に関する留意点および制限事項　69
リモート保守サービスに関する留意点　69
SNMPに関する留意点　70
SPARC M12/M10 plug-in for Oracle Enterprise Manager Cloud Control の使用に関する留意点　71
XCPに関する不具合と回避方法　71
XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法　71
XCP 2350で解決された不具合　103
XCP 2340で解決された不具合　107
XCP 2332で解決された不具合　113
XCP 2330で解決された不具合　114
XCP 2322で解決された不具合　117
XCP 2321で解決された不具合　118
XCP 2320で解決された不具合　119
XCP 2290で解決された不具合　122
XCP 2280で解決された不具合　127
XCP 2271で解決された不具合　137
XCP 2270で解決された不具合　139
XCP 2260で解決された不具合　140
XCP 2250で解決された不具合　146

XCP 2240で解決された不具合　155
XCP 2232で解決された不具合　162
XCP 2231で解決された不具合　163
XCP 2230で解決された不具合　164
XCP 2221で解決された不具合　169
XCP 2220で解決された不具合　171
XCP 2210で解決された不具合　178
XCP 2092で解決された不具合　188
XCP 2091で解決された不具合　189
XCP 2090で解決された不具合　189
XCP 2080で解決された不具合　198
XCP 2070で解決された不具合　202
XCP 2052で解決された不具合　212
XCP 2051で解決された不具合　214
XCP 2050で解決された不具合　214
XCP 2050より前の版数で解決された不具合　219
Oracle Solarisに関する不具合と回避方法　235
すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法　235
Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法　241
Oracle Solaris 10で発生しうる不具合と回避方法　256
Oracle Solaris 11.3で解決された不具合　256
Oracle Solaris 11.2で解決された不具合　266
第4章　SPARC M10-1のハードウェアに関する情報　277
留意点および制限事項　277
内蔵SASドライブの使用に関する留意点　277
外付けDVDドライブの使用に関する留意点　277
USBメモリの使用に関する留意点　277
ハードウェアに関する不具合と回避方法　278
第5章　SPARC M10-4のハードウェアに関する情報　279
留意点および制限事項　279
内蔵SASドライブの使用に関する留意点　279

外付けDVDドライブの使用に関する留意点　279
USBメモリの使用に関する留意点　279
ハードウェアに関する不具合と回避方法　280
第6章　SPARC M10-4Sのハードウェアに関する情報　281
留意点および制限事項　281
内蔵SASドライブの使用に関する留意点　281
外付けDVDドライブの使用に関する留意点　281
USBメモリの使用に関する留意点　281
クロスバーボックスの交換に関する制限事項　282
拡張接続用ラック2の増設に関する制限事項　283
ハードウェアに関する不具合と回避方法　284
第7章　PCIボックスに関する情報　285
PCIボックスファームウェア版数とサポート情報　285
PCIボックスに対するダイレクトI/O機能　286
ダイレクトI/O機能を設定する／表示する　286
PCIボックスに関する不具合と回避方法　286
すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法　286
PCIボックスファームウェア版数1310で解決された不具合　288
PCIボックスファームウェア版数1220で解決された不具合　289
PCIボックスファームウェア版数1200で解決された不具合　289
PCIボックスファームウェア版数1180で解決された不具合　290
PCIボックスファームウェア版数1170で解決された不具合　292
PCIボックスファームウェア版数1150で解決された不具合　295
PCIボックスファームウェア版数1130で解決された不具合　296
PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合　297
PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合　298
PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合　298
第8章　SPARC M10のマニュアルに関する情報　301

はじめに

本書では、最新のXSCF Control Package（XCP）の情報とともに、SPARC M10 システムのハードウェア、ファームウェア、ソフトウェア、およびドキュメントに関する重要かつ最新の情報について説明しています。

注ー本書に対応したXCP版数より新しいXCPがリリースされている場合、最新のXCP版数に対応するマニュアルでのみ記載内容が更新されます。本書とともに、以下のウェブサイトで最新のXCP版数に対応するマニュアルを参照して、記載内容や使用方法など、お使いのXCP版数に関連するマニュアルの訂正がないかご確認ください。

- グローバルサイト
http://www.fujitsu.com/global/products/computing/servers/unix/sparc/downloads/manuals/
- 日本語サイト
http://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/unix/sparc/downloads/manual/

なお、SPARC M10 システムは、Fujitsu M10という製品名でも販売されています。SPARC M10 システムとFujitsu M10は、同一製品です。

対象読者

本書は、コンピュータネットワークおよびOracle Solarisの高度な知識を有するシステム管理者を対象にして書かれています。

ファームウェアに関する情報

これは富士通のお客さま向けの情報です。

お使いのサーバのファームウェアは、以下の方法で入手してください。

- グローバルサイト
  ファームウェアの最新ファイルの入手方法については、営業担当者にお問い合わせください。
- 国内サイト
  ファームウェアは、SupportDeskを契約されているお客さまは、SupportDesk-

Webから入手が可能です。

以下のファイルが提供されます。

- ファームウェアプログラムファイル（XSCF Control Package（XCP）ファイル）
- XSCF拡張MIB（XSCF-SP-MIB）定義ファイル

注ーXSCF Control Package（XCP）: XCPとは、SPARC M10 システムを構成するハードウェアの制御プログラムをパッケージ化したものです。XCPファイルには、XSCFファームウェア、OpenBoot PROMファームウェア、Power-On Self Testファームウェア、そしてハイパーバイザファームウェアが含まれます。

本書の利用のしかた

本書は、SPARC M10 システムの、すべてのモデルを対象に書かれています。お使いのサーバに応じて、以下の表に示すように、関連する項目をお読みください。

本書内の章タイトル	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S
第1章　ソフトウェア要件	○	○	○
第2章　XCP 2350に関連する情報	○	○	○
第3章　ソフトウェアに関する情報	○	○	○
第4章　SPARC M10-1のハードウェアに関する情報	○		
第5章　SPARC M10-4のハードウェアに関する情報		○	
第6章　SPARC M10-4Sのハードウェアに関する情報			○
第7章　PCIボックスに関する情報	○（導入時）	○（導入時）	○（導入時）
第8章　SPARC M10のマニュアルに関する情報	○	○	○

ファームウェア、ソフトウェアに関連する章（第1章、第2章、第3章）は、すべてのモデル共通の情報となっています。この中には、特定のモデルだけに関する記述も含まれています。この場合は、該当するモデル名が明記されています。

ハードウェアに関する情報は、モデルごとに独立した構成（第4章、第5章、第6章）となっています。このうち、すべてのモデルに共通する内容は、ハードウェアのすべての章に記載されています。そのため、複数のモデルのハードウェア情報を確認する場合は、記載内容が重複していることがあります。

PCIボックスに関する情報（第7章）は、PCIボックスを導入している場合にご確認ください。

マニュアルの変更内容（第8章）は、マニュアルごとに記載されています。お手持ちのマニュアルに変更内容があるかどうかご確認ください。

関連マニュアル

お使いのサーバに関連するすべてのマニュアルはオンラインで提供されています。

- Oracle Solarisなどのオラクル社製ソフトウェア関連マニュアル
  http://docs.oracle.com/en/
- 富士通マニュアル
  グローバルサイト

  http://www.fujitsu.com/global/products/computing/servers/unix/sparc/downloads/manuals/

  日本語サイト

  http://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/unix/sparc/downloads/manual/

次の表に、SPARC M10 システムに関連するマニュアルを示します。

SPARC M10 関連マニュアル

マニュアルタイトル（*1）
SPARC M10 システム プロダクトノート
Fujitsu M10/SPARC M10 Systems Getting Started Guide/SPARC M10 システム はじめにお読みください（*2）
SPARC M10 システム 早わかりガイド
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Important Legal and Safety Information（*2）
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Safety and Compliance Guide SPARC M12/M10 安全に使用していただくために
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Security Guide
Software License Conditions for Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 SPARC M12/M10 ソフトウェアライセンス使用許諾条件
SPARC Servers/SPARC Enterprise/PRIMEQUEST共通設置計画マニュアル
SPARC M10-1 インストレーションガイド
SPARC M10-4 インストレーションガイド
SPARC M10-4S インストレーションガイド
SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド
SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド
SPARC M10-1 サービスマニュアル
SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル
SPARC M12/M10 クロスバーボックス サービスマニュアル
SPARC M12/M10 PCIボックス サービスマニュアル
SPARC M10 システム PCIカード搭載ガイド
SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル

SPARC M10 関連マニュアル (続き)

マニュアルタイトル（*1）
SPARC M12/M10 RCILユーザーズガイド（*3）
SPARC M12/M10 XSCF MIB・Trap一覧
SPARC M12/M10 用語集
外付けUSB-DVD ドライブ使用手順書

*1: 掲載されるマニュアルは、予告なく変更される場合があります。
*2: 印刷されたマニュアルが製品に同梱されます。
*3: 特にSPARC M12/M10とFUJITSU ETERNUSディスクストレージシステムを対象にしています。

安全上の注意事項

SPARC M10 システムをご使用または取り扱う前に、次のドキュメントを熟読してください。

- Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Important Legal and Safety Information
- Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Safety and Compliance Guide SPARC M12/M10 安全に使用していただくために

表記上の規則

本書では、以下のような字体や記号を、特別な意味を持つものとして使用しています。

字体または記号	意味	記述例
AaBbCc123	ユーザーが入力し、画面上に表示される内容を示します。 この字体は、コマンドの入力例を示す場合に使用されます。	`XSCF>` **`adduser jsmith`**

`AaBbCc123`	コンピュータが出力し、画面上に表示されるコマンドやファイル、ディレクトリの名称を示します。
	この字体は、枠内でコマンドの出力例を示す場合に使用されます。
		`XSCF>` **`showuser -P`**
		`User Name:  jsmith`
		`Privileges:  useradm`
		`auditadm`

『』	参照するマニュアルのタイトルを示します。	『SPARC M10-1 インストレーションガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、項、ボタンやメニュー名を示します。	「第2章 ネットワーク接続」を参照してください。

本文中のコマンド表記について

XSCFコマンドには(8)または(1)のセクション番号が付きますが、本文中では(8)や(1)を省略しています。
コマンドの詳細は、『SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル』を参照してください。

CLI（コマンドライン・インターフェース）の表記について

コマンドの記載形式は以下のとおりです。

- 値を入力する変数は斜体で記載
- 省略可能な要素は[ ]で囲んで記載
- 省略可能なキーワードの選択肢は、まとめて[ ]で囲み、|で区切り記載

マニュアルへのフィードバック

本書に関するご意見、ご要望がございましたら、マニュアル番号、マニュアル名称、ページおよび具体的な内容を、次のURLからお知らせください。

- グローバルサイト
  http://www.fujitsu.com/global/contact/
- 日本語サイト
  http://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/unix/sparc/contact/

第1章

ソフトウェア要件

ここでは、SPARC M10 システムを使用するために必要なソフトウェア要件について説明します。

- XCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ
- XCPおよびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCの入手
- ウェブブラウザ
- リモートストレージ対応ソフトウェア
- これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報

XCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ

SPARC M10 システムでサポートされるXCP、Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチは、次のとおりです。

表 1-1　XCP／Oracle Solarisのサポート一覧

サーバ	XCP	Oracle Solaris
SPARC M10-1		
SPARC64 X+ 3.7 GHz	2250以降	「表 1-2　Oracle Solaris および必須SRU／パッチのサポート一覧」を参照してください。
SPARC64 X+ 3.2 GHz	2210以降	
SPARC64 X+ 2.8 GHz	2290以降	
SPARC64 X 2.8 GHz	2012以降	
SPARC M10-4		
SPARC64 X+ 3.7 GHz	2250以降	「表 1-2　Oracle Solaris および必須SRU／パッチのサポート一覧」を参照してください。
SPARC64 X+ 3.4 GHz	2210以降	
SPARC64 X 2.8 GHz	2012以降	
SPARC M10-4S（筐体間直結）		
SPARC64 X+ 3.7 GHz	2210以降	「表 1-2　Oracle Solaris および必須SRU／パッチのサポート一覧」を参照してください。
SPARC64 X 3.0 GHz	2031以降	
SPARC M10-4S（クロスバーボックス経由接続）		
SPARC64 X+ 3.7 GHz	2210以降	「表 1-2　Oracle Solaris および必須SRU／パッチのサポート一覧」を参照してください。
SPARC64 X 3.0 GHz	2043以降	

表 1-2　Oracle Solaris および必須SRU／パッチのサポート一覧

Oracle Solaris	必須パッケージ(*4) 必須製品(*5)	必須SRU (*4) 必須パッチ(*5)	動作可能な構成
Oracle Solaris 11.2以降	system/ldoms (*1) system/ldoms/ldomsmanager (*2)	なし	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成
Oracle Solaris 11.1	system/ldoms（*1） system/ldoms/ldomsmanager（*2）	SRU1.4以降 (*3)	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成
Oracle Solaris 10 1/13 (*6)(*7)	Oracle VM Server for SPARC 3.0以降 (*3)(*8)(*9)	150310-03以降	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成

表 1-2　Oracle Solaris および必須SRU／パッチのサポート一覧 (続き)

Oracle Solaris	必須パッケージ(*4) 必須製品(*5)	必須SRU (*4) 必須パッチ(*5)	動作可能な構成
Oracle Solaris 10 8/11 (*7)	-	Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドル または 富士通 PTF R15051 150310-03以降	ゲストドメイン(*10)(*11)
Oracle Solaris 10 9/10 (*7)	-	Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドル または 富士通 PTF R15051 150310-03以降	ゲストドメイン(*10)(*11)

*1: すべてのドメインに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。
*2: 制御ドメインおよび非仮想化構成に必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。
*3: 制御ドメインおよび非仮想化構成に必須です。
*4: Oracle Solaris 11の場合。
*5: Oracle Solaris 10の場合。
*6: 制御ドメインでOracle Solaris 10 1/13を動作させる場合、制御ドメインに割り当て可能なCPUはLSB番号が0から7までの論理システムボードに搭載されたCPUです。
*7: ゲストドメインに割り当て可能なCPUはLSB番号の制限はありませんが、ゲストドメインでOracle Solaris 10を動作させた場合、1つのゲストドメインに割り当て可能なCPU（vcpu）の数は1024までです。
*8: SPARC M10-4Sの場合は、「Oracle VM Server for SPARC 3.1以前を使用する場合の留意点」を参照してください。
*9: SPARC M10-4Sの場合は、「Oracle Solaris 10を使用する場合の留意点」を参照してください。
*10: Oracle Solaris 10 9/10、またはOracle Solaris 10 8/11をインストールする前に、追加の手順を実施する必要があります。詳細は、「ゲストドメインにOracle Solaris 10をインストールする場合の留意事項」の手順を参照してください。
*11: 仮想I/Oデバイスのみサポートします。

ゲストドメインにOracle Solaris 10をインストールする場合の留意事項

Oracle Solaris 10 9/10、またはOracle Solaris 10 8/11をSPARC M10のゲストドメインにインストールする際に、バグ7167998（「inter-cpu-latency」MDプロパティーによってSolarisゲストドメインがパニックする）が発生する場合があります。このバグを避けるためにネットワークインストールを使用し、以下の手順に従って、Oracle Solaris 10 9/10、またはOracle Solaris 10 8/11をインストールしてください。

注ーOracle Solaris 10 1/13 SPARCパッチバンドル、または富士通PTF R15051を適用するまでは、ゲストドメインの構成、およびOpenBoot PROM環境変数を変更しないでください。

---

1. **Oracle Solaris 10 9/10、またはOracle Solaris 10 8/11のboot_archiveをマウントします。**

```
# chmod -t
 install-server-path/install-dir-path/Solaris_10/Tools/Boot/
platform/sun4v/boot_archive

# lofiadm -a
install-server-path/install-dir-path/Solaris_10/Tools/Boot/platform/
sun4v/boot_archive
```

```
以下のようにデバイス名が出力されます。
/dev/lofi/1


# mount /dev/lofi/1 /mnt
```

2. **/mnt/etc/system**ファイルを編集し、以下の行を追加します。

```
set xc_tick_limit = 0x1
```

3. **boot_achive**をアンマウントします。

```
# umount /mnt

# lofiadm -d /dev/lofi/1

# chmod +t
install-server-path/install-dir-path/Solaris_10/Tools/Boot/platform/sun4v/boot_archive
```

4. **Oracle Solaris 10 9/10**、または**Oracle Solaris 10 8/11**をネットワークインストールでインストールします。
5. **Oracle Solaris 10 1/13 SPARC**パッチバンドル、または富士通**PTF R15051**をインストールしてから、パッチ**150310-03**以降を適用します。

Oracle Solaris 10を使用する場合の留意点

- [SPARC M10-4S]
  制御ドメインがOracle Solaris 10で3.1.0.1よりも古いバージョンのOracle VM Server for SPARCで動作している場合、XSCFファームウェアで物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能を有効に設定すると、ldoms/ldmdサービスの起動に失敗し、Oracle VM for SPARCが動作しません。

  工場出荷時にはPPAR DR機能が有効になっているため、論理ドメイン構成を設定する前にPPAR DR機能を無効にするか、Oracle VM Server for SPARCを3.1.0.1以降にアップデートしてください。

  PPAR DR機能の設定は、XSCFファームウェアのsetpparmode(8)コマンドで変更できます。setpparmode(8)コマンドの詳細は、『SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル』を参照してください。

  Oracle VM Server for SPARCを3.1.0.1 にアップデートする場合は、Oracle VM Server for SPARC 3.1をインストールしたあと、パッチ150817-01を適用してください。

- [SPARC M10-4S]
  制御ドメインがOracle Solaris 10で動作している場合、deleteboard(8)、addboard(8)コマンドによる物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能を実施するには、Oracle VM Server for SPARCを3.1.1以降にアップデートしてお

く必要があります。3.1.1にアップデートする場合は、Oracle VM Server for SPARC 3.1をインストールしたあと、パッチ150817-02を適用してください。

Oracle VM Server for SPARC 3.1以前を使用する場合の留意点

[SPARC M10-4S]
物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能を有効にした場合、3.1.0.1よりも古いバージョンのOracle VM Server for SPARCでは、ldoms/ldmdサービスの起動に失敗し、Oracle VM for SPARCが動作しません。
3.1.0.1よりも古いバージョンのOracle VM Server for SPARCを使用する場合は、論理ドメイン構成を設定する前にPPAR DR機能を無効にしてください。
PPAR DR機能の設定は、XSCFファームウェアのsetpparmode(8)コマンドで変更できます。setpparmode(8)コマンドの詳細は、『SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル』を参照してください。
なお、Oracle Solaris 11の場合は、SRU11.1.14.5.0にOracle VM Server for SPARC 3.1.0.1が含まれています。

物理パーティションの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ

物理パーティションの動的再構成を実施するために必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチは、次のとおりです。

表 1-3　物理パーティションの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ一覧

サーバ	XCP	Oracle Solaris	必須パッケージ 必須製品	必須SRU 必須パッチ	動作可能な構成
SPARC M10-4S	2220以降	Oracle Solaris 11.2以降	system/ldoms (*1) system/ldoms/ldomsmanager (*2)	なし	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成
		Oracle Solaris 11.1	system/ldoms (*1) system/ldoms/ldomsmanager (*2)	SRU11.1.14.5.0以降 (*3)	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成
		Oracle Solaris 10 1/13	Oracle VM for SPARC 3.1 (*4)	150817-02以降 (*4)(*5)	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成

表 1-3　物理パーティションの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ一覧 (続き)

サーバ	XCP	Oracle Solaris	必須パッケージ 必須製品	必須SRU 必須パッチ	動作可能な構成
		Oracle Solaris 10 9/10	-	Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドル または 富士通 PTF R15051 150310-03以降	ゲストドメイン (*6)(*7)
		Oracle Solaris 10 8/11	-	Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドル または 富士通 PTF R15051 150310-03以降	ゲストドメイン (*6)(*7)

*1:　制御ドメインおよびゲストドメインに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。
*2:　制御ドメインのみに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。
*3:　制御ドメインおよびゲストドメインに必須です。SRU11.1.14.5.0にOracle VM Server for SPARC 3.1.0.1が含まれていますが、物理パーティションの動的再構成機能を安定稼働させるためにはOracle Solaris 11.1の修正（CR:17709858）が必要になります。なお、この問題は、SRU11.1.15.4.0以降で修正されています。
*4:　制御ドメインのみに必須です。
*5:　150400-01から150400-06までのパッチを適用しないでください。
*6:　Oracle Solaris 10 9/10、またはOracle Solaris 10 8/11をインストールする前に、追加の手順を実施する必要があります。詳細は、「ゲストドメインにOracle Solaris 10をインストールする場合の留意事項」の手順を参照してください。
*7:　仮想I/Oデバイスのみサポートします。

PCIeエンドポイントデバイスの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ

PCIeエンドポイントデバイスの動的再構成を実施するために必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチは、次のとおりです。

表 1-4　PCIeエンドポイントデバイスの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ一覧

サーバ	XCP	Oracle Solaris	必須パッケージ 必須製品	必須SRU 必須パッチ
SPARC M10-1 SPARC M10-4 SPARC M10-4S	2230以降	Oracle Solaris 11.3	system/ldoms (*1) system/ldoms/ldomsmanager (*2)	なし
		Oracle Solaris 11.2	system/ldoms (*1) system/ldoms/ldomsmanager (*2)	SRU11.2.2.5.0以降
		Oracle Solaris 11.1 (*4)	system/ldoms (*1)	SRU11.1.17.5.0 以降 (*3)

表 1-4　PCIeエンドポイントデバイスの動的再構成に必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ一覧 (続き)

サーバ	XCP	Oracle Solaris	必須パッケージ 必須製品	必須SRU 必須パッチ
		Oracle Solaris 10 1/13	Oracle VM for SPARC 3.1 (*5)(*6)	150817-03以降 (*5)

*1: 制御ドメインおよび他のドメインに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。
*2: 制御ドメインのみに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。
*3: 制御ドメインおよび他のドメインに必須です。
*4: 制御ドメイン以外のドメインのみ使用できます。
*5: 制御ドメインのみに必須です。
*6: Oracle VM Server for SPARC パッチ以外に必要なパッチがあります。詳細は『Oracle VM Server for SPARC 3.1.1.1, 3.1.1, and 3.1 Release Notes』の「Required Oracle Solaris OS Versions for Oracle VM Server for SPARC 3.1.1.1」を参照してください。

Software on Chip対応ソフトウェア

SPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサの Software on Chipは、以下のソフトウェアから使用できます。

Oracle Databaseで使用する場合

表 1-5　Software on Chip対応ソフトウェア（Oracle Databaseで使用する場合）

機能	動作環境
10進浮動小数点演算 （Oracle Number）	Oracle Database 12c以降 Oracle Solaris 11.1以降
SIMD（インメモリ処理）	Oracle Database 12c Enterprise Edition Oracle Database In Memory Oracle Solaris 11.1以降
暗号処理	Oracle Database 12c Enterprise Edition Oracle Advanced Security Oracle Solaris 11.1以降

ユーザーアプリケーションで使用する場合

表 1-6　Software on Chip対応ソフトウェア（ユーザーアプリケーションで使用する場合）

機能	動作環境
10進浮動小数点演算 （IEEE754）	Oracle Solaris Studio 12.4以降 Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.4.6.0以降
SIMD	Oracle Solaris Studio 12.4以降 Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.4.6.0以降

XCPおよびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCの入手

最新のXCPファームウェア、およびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCは、以下の方法で入手してください。

- グローバルサイト
  最新ファイルの入手方法については、営業担当者にお問い合わせください。
- 国内サイト
  SupportDeskを契約されているお客さまは、SupportDesk-Webから入手が可能です。

ウェブブラウザ

XSCF Webの動作が確認されているウェブブラウザは、表 1-7のとおりです。その他のXSCF Webの情報については、「XSCF Webに関する留意点および制限事項」を参照してください。

表 1-7　動作確認済みのウェブブラウザのバージョン

ウェブブラウザ	バージョン
Microsoft Internet Explorer	8.0、9.0、10.0、および11.0
Mozilla Firefox 32bit版	10.0からESR 52まで

リモートストレージ対応ソフトウェア

リモートストレージを使用するために必要なXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチは、表 1-8のとおりです。

表 1-8　リモートストレージが動作するXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ

XCP	Oracle Solaris	必須SRU（*1） 必須パッチ（*2）
2260以降	Oracle Solaris 11.2以降	なし
	Oracle Solaris 11.1	SRU2.5以降 (*3)

表 1-8　リモートストレージが動作するXCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ (続き)

XCP	Oracle Solaris	必須SRU（*1） 必須パッチ（*2）
	Oracle Solaris 10 1/13	なし

*1:　Oracle Solaris 11の場合。
*2:　Oracle Solaris 10の場合。
*3:　リモートストレージを仮想ディスクとしてゲストドメインに割り当てる場合、サービスドメインに適用が必要。

表 1-9はリモートストレージがサポートされる、端末のWindows OSの動作環境です。

表 1-9　端末の動作環境

種類	動作環境
Windows OS	Windows Vista、Windows 7、Windows 8、Windows 8.1 Windows 10

また、XSCF Webで使用するブラウザに合わせて、Java Runtime Environmentを端末にインストールする必要があります。ブラウザとJava Runtime Environmentの組み合わせは、表 1-10のとおりです。

表 1-10　XSCF Webで使用するブラウザとJava Runtime Environmentの組み合わせ

ブラウザ	Java Runtime Environment
Microsoft Internet Explorer 8、9 32bit版	Java Runtime Environment 8 32bit版
Microsoft Internet Explorer 8、9 64bit版	Java Runtime Environment 8 64bit版
Microsoft Internet Explorer 10、11	Java Runtime Environment 8 32bit版
Mozilla Firefox 10.0からESR 52まで 32bit版	Java Runtime Environment 8 32bit版

これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報

SPARC M10システムでこれまでに公開されたXCPファームウェア版数と各版数でのおもなサポート更新情報は、次のとおりです。

表 1-11　これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報

XCP版数	おもなサポート情報	CMU版数
XCP 2350	物理パーティションの起動前における時刻確認機能のサポート	02.35.0000
XCP 2340	OpenBoot PROMのセキュリティモード有効時の改善	02.34.0000
XCP 2332	XCPファームウェア不具合の改善	02.33.0000

表 1-11　これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報 (続き)

XCP版数	おもなサポート情報	CMU版数
XCP 2330	SPARC M10-4SにおけるCPUコアの一時利用機能（Interim Permit）のサポート	02.33.0000
XCP 2322	XCPファームウェア不具合の改善	02.32.0002
XCP 2321	XCPファームウェア不具合の改善	02.32.0001
XCP 2320	■ CPUコアの一時利用機能（Interim Permit）のサポート ■ ネットワークブートのベリファイドブートのサポート ■ ファイルシステム異常時のログの改善	02.32.0000
XCP 2290	■ SPARC M10-1におけるSPARC64 X+プロセッサ（2.8 GHz）のサポート ■ 電源連動機能を使用する場合のIPMIサービス有効／無効設定のサポート ■ 遅延ダンプ機能のサポート	02.29.0000
XCP 2280	■ Oracle Solarisカーネルゾーンのライブマイグレーションのサポート ■ ゲストドメインのベリファイドブートのサポート	02.28.0000
XCP 2271	仮想SCSI Host Bus Adapter（vHBA）機能のサポート	02.27.0001
XCP 2260	■ リモートストレージのサポート ■ CPUコア アクティベーションの設定時の追加／削減指定のサポート ■ ファン騒音の低減化機能のサポート ■ Oracle VM Server for SPARC 3.2で提供されたパフォーマンスレジスタアクセス制御機能のサポート	02.26.0000
XCP 2250	■ SPARC M10-1/M10-4におけるSPARC64 X+プロセッサ（3.7 GHz）のサポート ■ ベリファイドブートのサポート	02.25.0000
XCP 2240	■ NTPサーバのホスト名に対するDNSラウンドロビンのサポート ■ ゲストドメインあたり1984個のLDCエンドポイントをサポート ■ Oracle VM Server for SPARC 3.2で提供されたDynamic PCIe bus assignmentのサポート	02.24.0000
XCP 2232	セキュリティの修正	02.23.0000
XCP 2231	セキュリティの修正	02.23.0000
XCP 2230	■ XSCF WebでのInternet Explorer10および11のサポート ■ Extensible Firmware Interface GUID Partition Table（EFI GPT）ラベルのサポート ■ Oracle VM Server for SPARC 3.1で提供された復旧モード（Recovery mode）のサポート ■ Oracle VM Server for SPARCとの組み合わせによる、PCIeエンドポイントデバイスの動的再構成機能のサポート ■ Oracle Solarisカーネルゾーンのサポート	02.23.0000
XCP 2221	XCPファームウェア不具合の改善	02.22.0000

表 1-11　これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報 (続き)

XCP版数	おもなサポート情報	CMU版数
XCP 2220	■ 物理パーティション（PPAR）内システムボードの動的再構成（Dynamic Reconfiguration:DR）機能のサポート ■ XSCFスタートアップモード機能のサポート（SPARC M10-1）	02.22.0000
XCP 2210	■ SPARC64 X+プロセッサのサポート ■ CPUの動作方法を指定する、CPU動作モードのサポート ■ 物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能の工場出荷時（デフォルト）有効化 ■ XSCFのユーザーアカウントに対する、LDAP、Active Directory、LDAP over SSL機能のサポート ■ Oracle VM Server for SPARCとの組み合わせによる、SR-IOV機能のサポート ■ 物理パーティション構成時のno-io機能のサポート	02.21.0000
XCP 2092	XCPファームウェア不具合の改善	02.09.0000
XCP 2091	XCPファームウェア不具合の改善	02.09.0000
XCP 2090	■ 64 GBメモリのサポート ■ SNMPエージェント機能におけるTrapホストに対して、ポートおよびコミュニティストリングの複数指定のサポート ■ 入力電源が切断状態で保守を実施した場合の、筐体間のXCPファームウェアの自動的な版数合わせのサポート	02.09.0000
XCP 2080	Auto Service Request（ASR）機能のサポート	02.08.0000
XCP 2070	XCPファームウェア不具合の改善	02.07.0000
XCP 2052	■ SNMPエージェント機能に対するAESアルゴリズムの暗号化機能のサポート ■ 筐体内での、メモリの混在化のサポート	02.05.0002
XCP 2051	XCPファームウェア不具合の改善	02.05.0001
XCP 2050	PCIボックスに対するダイレクトI/O機能のサポート（SPARC M10-4S）	02.05.0000
XCP 2044	PCIボックスに対するダイレクトI/O機能のサポート（SPARC M10-1/M10-4）	02.04.0004
XCP 2042	クロスバーボックスのサポート（最大16BB構成）	02.04.0001
XCP 2041	PCIボックスのサポート	02.04.0001
XCP 2032	Oracle VM Server for SPARCソフトウェアに関連する改善	02.03.0001
XCP 2031	SPARC M10-4Sのサポート（最大4BB構成）	02.03.0001
XCP 2013	XCPファームウェア不具合の改善	02.01.0003
XCP 2012	SPARC M10-1/M10-4のサポート	02.01.0002

注ーXCPにあるXSCFファームウェアとCMUファームウェアの個別の版数は、version -c xcp -vコマンドで確認できます。
CMUファームウェアの版数が更新されている場合、物理パーティションの電源を切断したあと再投入して、CMUファームウェアのアップデートを完了させてください。ファームウェアアップデートの詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「第16章　XCPのファームウェアをアップデートする」を参照してください。

注ーCMUファームウェア版数はXCP版数と異なる場合があります。
たとえばXCP 2042の場合、XSCF版数は02.04.0002ですが、CMU版数は02.04.0001です。

第2章

XCP 2350に関連する情報

ここでは、XCP 2350に関連する情報について説明します。

- XCP 2350の新着情報
- 留意点および制限事項
- XCP 2350の不具合と回避方法

XCP 2350の新着情報

ここでは、XCP 2350でのおもな変更内容を説明します。
今回は、XSCFファームウェア、およびCMUファームウェアが修正されています。

注ーファームウェアをアップデートしたあとは、物理パーティションの電源の切断／再投入が必要となることがあります。
ファームウェアアップデートの詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「第16章　XCPのファームウェアをアップデートする」を参照してください。

物理パーティション（PPAR）を起動する前に、XSCFと論理ドメインの日付、時刻を確認するためのshowdateinfo(8)コマンドが追加されました。これにより、PPARを起動する前に論理ドメインの日付、時刻が正しいかを確認できます。
詳細は、showdateinfo(8)コマンドのマニュアルページまたは『SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル』を参照してください。

留意点および制限事項

ここでは、本リリース時点でわかっている留意点および制限事項について説明します。

Secure Socket Layer（SSL）3.0の留意点

セキュリティ上の理由により、XCP 2240以降からSSL 3.0は利用できません。
Transport Layer Security（TLS）1.2、1.1、または1.0を使用してください。

タイムゾーンに関する留意点

- 最新のタイムゾーン情報に対応するために、XSCFがサポートするタイムゾーン（地域／地名）が変更されることがあります。
  以前に設定したタイムゾーンがシステムで使用できなくなった場合、XSCFは使用できなくなったタイムゾーンを協定世界時（UTC）に切り替えて動作するようになります。

  設定していたタイムゾーンがUTCで動作している場合は、settimezone -c settz -aコマンドを実行して、 設定可能なタイムゾーンを確認してください。タイムゾーンの一覧に設定していたタイムゾーンがない場合、タイムゾーンを設定しなおしてください。

- サマータイムを導入している環境において現在の時刻が夏時間の期間中の場合、setdate -sコマンドを実行して夏時間終了の直前1時間以内の時刻に変更すると、時刻が夏時間の期間外（冬時間）に設定されてしまいます。
  以下の例では、夏時間終了が10月31日AM 2:00のときに、夏時間中に時刻をローカルタイムで10月31日AM 1:40(JDT)に設定したため、冬時間の10月31日AM 1:47(JST)が設定されています。

```
XSCF> showdate
Fri Oct 31 01:20:00 JDT 2014
XSCF> setdate -y -s 103101402014.00
Fri Oct 31 01:40:00 JST 2014
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
 Thu Oct 30 16:40:00 UTC 2014
:
略（再起動が実施される）

XSCF> showdate
Fri Oct 31 01:47:16 JST 2014
```

夏時間の切り替わり前後の時間に時刻を設定する場合は、setdate -u コマンドを実行してUTC時刻で設定してください。

監査（Audit）に関する制限事項

- setaudit archiveコマンドまたはsetaudit disableコマンドで設定される監査ログのログファイル転送機能は、現時点ではサポートされていません。
- 監査レコードへの書き込みのポリシーを一時停止（「suspend」）に設定すると、エラーによる縮退が発生したり、XSCFがリセットされたりすることがあります。setaudit(8)コマンドによる監査トレールへの書き込みポリシーは、デフォルトである上書き（「count」）を指定してください。この不具合の詳細は、「RTIF2-141208-001」を参照してください。また、XCP 2250以降では「suspend」を指定すると「count」を指定したときと同じ動作になります。

物理パーティションの動的再構成に関する留意点

- 物理パーティションの動的再構成を使用してシステムボード（PSB）を追加または削除する場合、addboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドを実行する前に、showhardconf(8)コマンドを実行して、XBBOX#xxおよびBB#xxの [Status] が「Normal」であることを確認してください。
- SR-IOVを使用している環境で、物理パーティションの動的再構成を行うとき、物理パーティション内のいずれかのドメインに物理機能（PF）を割り当て、さらに割り当てた物理機能（PF）から作成した仮想機能（VF）を同一ドメインに割り当てた構成の場合、deleteboard(8)コマンドが失敗する可能性があります。
- 物理パーティションの動的再構成によってI/Oデバイスを追加する場合、addboard(8)コマンドを実行したあと、ドメインを停止するか遅延再構成機能を使用してI/Oデバイスを論理ドメインへ組み込む必要があります。また、物理パーティションの動的再構成によってI/Oデバイスを削除する場合、ドメインを停止するか遅延再構成機能を使用してI/Oデバイスを削除したあと、deleteboard(8)コマンドを実行してシステムボードを切り離す必要があります。それぞれの操作の詳細は、『SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド』を参照してください。
  なお、Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.8.4.0以降の場合は、論理ドメインの停止および遅延再構成をせずに、I/Oデバイスを追加したり、削除したりできます。
- Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.8.4.0以前の場合は、物理パーティションの動的再構成を実施すると、制御ドメインから実行するprtdiagコマンドの実行結果が、実際の物理構成と異なることがあります。svcadm restart piclを実行することで、最新の情報に更新することができます。
- 動的再構成機能を使用してaddboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドを実行し、システムボード（PSB）の追加または削除を行っている間に、rebootxscf -aコマンドやXSCF Webで、すべてのXSCFの再起動を実行しないでください。この操作を行うとDRの処理が異常終了するだけでなく、動作中の物理パーティションでOracle Solarisがハングしたりハードウェア故障が発生したりして物理パーティションが異常停止し、部品交換が必要になる場合があります。
- 物理パーティション内にOpenBoot PROM状態の論理ドメインが1つでも存在した状態で物理パーティションの動的再構成を実施すると、エラーで終了します。Oracle Solarisが起動された状態、bound状態、またはinactive状態の、いずれかの状態に変更してから物理パーティションの動的再構成を実施してください。

- Oracle VM Server for SPARCのバージョンが3.2よりも古い場合に物理パーティションの動的再構成を行うときは、deleteboard(8)コマンドの-mオプションで、unbind=resourceまたはunbind=shutdownを指定しないでください。論理ドメインがハングアップしたり、deleteboard(8)コマンドが失敗したりする可能性があります。
- 物理パーティションの動的再構成の対象となる筐体には、容量の異なるメモリ（DIMM）を混在して搭載することができません。物理パーティションの動的再構成の対象となるパーティションに組み込まれるすべての筐体において、搭載するメモリ（DIMM）の種類を統一してください。
  なお、メモリ（DIMM）の搭載枚数が筐体ごとに異なるのは問題ありません。
- Oracle Solaris 10に150400-01から150400-06までのパッチを適用しないでください。物理パーティションの動的再構成を行うとパニックする問題（CR 17510986）が発生します。

SPARC64 X+プロセッサとSPARC64 Xプロセッサの混在に関する留意点

SPARC64 X+プロセッサとSPARC64 Xプロセッサを混在させる場合は、システムボードの構成単位となる、SPARC M10システム筐体単位で実施してください。
SPARC M10システムの各筐体内では、SPARC64 X+プロセッサとSPARC64 Xプロセッサを混在させて搭載することはできません。SPARC M10-4/M10-4Sの中にはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）とCPUメモリユニット（上段）（CMUU）で構成されているシステムがありますが、これらのユニットは同じプロセッサで構成されている必要があります。

SR-IOV機能に関する留意点および制限事項

留意点

- SR-IOVを使用しているPCI Express（PCIe）カードを、物理パーティションの動的再構成（DR）、またはPCIホットプラグ（PHP）で保守する場合、事前に、以下の手順を実施してください。
  1. **ldm remove-ioコマンドを実行し、I/Oドメインに割り当てたすべての仮想機能（VF）を削除します。**
  2. **ldm destroy-vfコマンドを実行し、すべての仮想機能（VF）を破棄します。**

  DR、またはPHPでの保守手順は、『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』、または『SPARC M12/M10 PCIボックス サービスマニュアル』を参照してください。

  ldmコマンドの詳細は、お使いのバージョンの『Oracle VM Server for SPARC 管理ガイド』を参照してください。

  DR、またはPHPで保守したあと、必要に応じて、以下の手順を実施してください。

  3. **ldm create-vfコマンドを実行し、仮想機能（VF）を作成します。**
  4. **ldm add-ioコマンドを実行し、I/Oドメインに仮想機能（VF）を割り当てます。**

- SPARC M10システムのオンボードLANインターフェースはSR-IOV機能に対応しています。
- Oracle VM Server for SPARC 3.0以降では静的SR-IOVがサポートされます。
- Oracle VM Server for SPARC 3.1以降では動的SR-IOVがサポートされます。
- SR-IOV機能の詳細は、お使いのバージョンの『Oracle VM Server for SPARC管理ガイド』を参照してください。また、SR-IOV機能を使用する場合に必要な修正は、お使いのバージョンの『Oracle VM Server for SPARCリリースノート』を参照してください。
- SR-IOV機能に対応するPCIカードの一覧は、『SPARC M10システム PCIカード搭載ガイド』を参照してください。

OpenBoot PROMに関する留意点

- OpenBoot PROM環境変数のsecurity-modeをcommandまたはfullに設定し、かつsecurity-passwordに1〜8文字の表示可能な文字列を設定している場合、OpenBoot PROMのセキュリティモードが有効になり、コマンドや操作に対してパスワードが必要になります。
  詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「H.4　セキュリティモード有効時の動作」を参照してください。
- XCPファームウェアをXCP 2260以降にアップデートすると、OpenBoot PROMのデバイスエイリアスに、CD-ROMとリモートストレージ用の情報が追加されます。factory-default以外の論理ドメインの構成でシステムを運用している場合に、追加されたデバイスエイリアスを使用するときは、XCPファームウェアをXCP 2260以降にアップデートしたあと、制御ドメインで以下の手順を実施してください。
  1. **XSCFに保存された論理ドメインの構成情報を確認します。**

     以下の例は、現在使用中の論理ドメインの構成情報ldm-set1と、factory-defaultの、2つの構成情報が保存されていることを示しています。

```
# ldm list-spconfig
ldm-set1 [current]
factory-default
```

  2. **制御ドメインを含む、すべての論理ドメインに対して、以下のコマンドを実行します。**

     <ldom>には論理ドメイン名を指定します。

```
# ldm set-variable fix_foo=true <ldom>
# ldm remove-variable fix_foo <ldom>
```

  3. **変更した内容で論理ドメインの構成情報を保存しなおします。**

     保存されているldm-set1をいったん削除してから、保存しなおします。

```
# ldm rm-spconfig ldm-set1
# ldm add-spconfig ldm-set1
```

4. すべての論理ドメインを再起動します。

- OpenBoot PROMのバナーを表示したあと、OpenBoot PROMの起動が完了する前にsendbreak(8)コマンドを実行すると、以下のエラーメッセージが出力され、以降、bootコマンドが実行できなくなります。
  FATAL: OpenBoot initialization sequence prematurely terminated.

  この場合は、okプロンプトでOpenBoot PROM環境変数auto-boot?をfalseに設定したあと、reset-allコマンドを実行してください。OpenBoot PROMが再起動されたら、auto-boot?をtrueに設定し、bootコマンドを実行してください。

- XSCFファームウェアのsetpparparam(8)コマンドを使用して、nvramrcなどのOpenBoot PROM環境変数を設定する場合、設定できる最大文字数は254文字です。nvramrcなどのOpenBoot PROM環境変数に255文字以上の文字列を設定したい場合は、OpenBoot PROMまたはOracle Solarisの環境で設定してください。ただし、最大文字数は1024文字です。

- Oracle VM Server for SPARCのディスク、ネットワークが割り当てられていない論理ドメインは、OpenBoot PROMのデバイスエイリアス disk、netが作成されません。デバイスエイリアスdisk、netを指定してディスクブートまたはネットワークブートを実行する場合は、OpenBoot PROMのnvaliasコマンドを使用して、デバイスエイリアスdisk、netを設定してください。

- XCP 2210以降、OpenBoot PROM 起動中において、OpenBoot PROMのバナーを表示する前に以下のメッセージが表示されます。

```
NOTICE: Entering OpenBoot.
NOTICE: Fetching Guest MD from HV.
NOTICE: Starting additional cpus.
NOTICE: Initializing LDC services.
NOTICE: Probing PCI devices.
NOTICE: Finished PCI probing.
```

- OpenBoot PROMの環境変数multipath-boot?がtrueの場合、ルートプール内のブート可能なブート環境（BE）を表示するためのboot -Lコマンドを実行し、表示される対話型メニューからブート環境の番号を選択したあと、okプロンプトに戻らずにOpenBoot PROMが再起動してしまいます。
  再起動の回数はOpenBoot PROMの環境変数boot-deviceに依存します。設定されたデバイスの数だけ再起動したあと、「ERROR: All device paths in boot-device have failed.」のメッセージが出力され、okプロンプトに戻ります。

  この問題を回避するには、boot -Lコマンドの実行前にOpenBoot PROM環境変数のmultipath-boot?をfalseに設定するか、boot *device_path* -Lコマンドを実行してください。

- OpenBoot PROM環境変数「multipath-boot?」が「false」に設定された状態で、引数を省略してbootコマンドを実行しOpenBoot PROM環境変数「boot-device」に設定されたデバイスからの起動がすべて失敗した場合、ドメインコンソールへ出力されるメッセージは、XCP 2250から以下のように変更されます。
  - XCP 2250より前のメッセージ

```
{0} ok boot
Boot device: disk  File and args:

Can't open boot device

ERROR: boot-read fail

{0} ok
```

または

```
{0} ok boot
Boot device: disk  File and args:

Can't locate boot device

ERROR: boot-read fail

{0} ok
```

- XCP 2250以降のメッセージ

```
{0} ok boot
No viable default device found in boot-device variable.

{0} ok
```

CPUメモリユニット、マザーボードユニット、XSCFユニット、PSUバックプレーン、またはクロスバーバックプレーンユニットの保守に関する留意点

- 時刻の補正に関する留意点（その1）
  FRUとmicroSDカードを交換したあと、長期間システムを稼働してからXSCFを再起動し、PPARを起動するとOracle Solarisの時刻がずれることがあります。

  この問題は、以下のすべての条件に当てはまる場合に発生します。

  - FRU（CPUメモリユニット、マザーボードユニット、XSCFユニット、PSUバックプレーン、またはクロスバーバックプレーンユニット）とmicroSDカードを両方とも交換した
  - SPARC M10-1、SPARC M10-4、またはSPARC M10-4S（1台構成）
  - XSCFのNTPクライアント設定が有効
  - XCP 2240以降

この問題を回避するため、FRUとmicroSDカードを交換したあとには以下を必ず実施してください。

[回避方法]

1. **showlogs eventコマンドを実行し、XSCFとNTPサーバとの時刻同期が成功しているかを確認します。**
   イベントログが複数登録されている場合は、最新のイベントログを参照してください。

```
XSCF> showlogs event -rM
Date                        Message
Mar 25 11:45:31 JST 2017    NTP service found NTP server to synchronize.
```

   「NTP service found NTP server to synchronize.」が表示される場合は、時刻同期は正常に行われています。以降の手順は不要です。

2. **setntpコマンドを実行して、XSCF NTPクライアント機能をいったん無効にします。**

```
XSCF> setntp -s client -c disable
```

3. **XSCFを再起動します。**

```
XSCF> rebootxscf -a
```

4. **setdateコマンドを実行して、XSCFの時刻を現在の時刻に設定します。**
   次の例では、XSCFの時刻を「2017/3/25 12:00:00」に設定しています。

```
XSCF> setdate -s 032512002017.00
```

   時刻を設定するとXSCFが自動的に再起動されます。

5. **setntpコマンドを実行して、XSCF NTPクライアント機能を有効に戻します。**

```
XSCF> setntp -s client -c enable
```

6. **XSCFを再起動します。**

```
XSCF> rebootxscf -a
```

注ーXSCFとNTPサーバの時刻同期が失敗し、次のメッセージが表示されてもこの回避方法は完了しています。

```
XSCF> showlogs event -rM
Date                        Message
Mar 25 12:15:31 JST 2017    NTP service failed to reach appropriate NTP server.
```

- 時刻の補正に関する留意点（その2）
  RTIF2-140711-001およびRTIF2-141204-001の問題により、PPAR起動時にOracle Solarisの時刻がずれることがあります。

  この問題を回避するため、保守後に以下を必ず実施してください。

注ー「時刻の補正に関する留意点（その2）」を実施する前に「■時刻の補正に関する留意点（その1）」の条件に該当するか確認してください。該当する場合は、「■時刻の補正に関する留意点（その1）」を先に実施してください。

[回避方法]

1. **showdateinfo(8)コマンドを実行して、制御ドメインおよびゲストドメインの時刻を確認します。**
   - XCP 2350以降の場合
     制御ドメインおよびゲストドメインの時刻を確認します。
     時刻が正しい場合は以降の手順は不要です。
     時刻が正しくない場合は、手順2へ進んでください。
   - XCP 2340以前の場合
     showdateinfo(8)コマンドによる時刻の確認ができないため、手順2へ進んでください。

注ー制御ドメインの時刻、およびゲストドメインの時刻は、XSCFのタイムゾーンで表示されます。

例） 物理パーティションがPPAR#0の場合

```
XSCF> showdateinfo -p 0
  PPAR-ID     : 0
  config_name : 10guest_config
  XSCF information:
  -----------------
    XSCF
      Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017
  Logical domains information:
  ----------------------------
    primary
      Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017
    guest 0
      Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017
    guest 1
      Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017
    guest 2
      Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017
XSCF>
```

2. **OpenBoot PROM環境変数auto-boot?をfalseに指定して、setpparparam(8)コマンドを実行し、制御ドメインのオートブート機能を無効にします。また、setpparmode(8)コマンドを実行し、ゲストドメインの起動を無効にします。**
   例） 物理パーティションがPPAR#0の場合

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript "setenv auto-boot? false" -y
XSCF> setpparmode -p 0 -m guestboot=off
```

3. **poweron(8)**コマンドを実行し、対象物理パーティションの電源を投入します。

```
XSCF> poweron -p 0 -y
```

4. **showdomainstatus -p 0 -g primary**を実行し、**Status**に**"OpenBoot Running"**が表示されることを確認します。
5. **console(8)**コマンドを実行し、制御ドメインのコンソールに切り替えます。

```
XSCF> console -p 0 -y
:
略
{0} ok
```

6. **boot -s**コマンドを実行して、シングルユーザーモードで**Oracle Solaris**を起動します。

```
{0} ok boot -s
```

7. **Oracle Solaris**の**date**コマンドを実行し、制御ドメインの時刻を設定します。
例） 2017年3月25日12時20分00秒に設定する場合

```
primary# date 0325122017.00
```

注ーshowdate(8)コマンドを実行し、XSCFの時刻を表示させ、対象物理パーティションの制御ドメインの時刻がXSCFの時刻と同じであることを確認してください。

---

8. マルチユーザーモードに移行します。

```
primary# exit
```

9. 論理ドメイン構成の場合、ゲストドメインに正しい時刻を設定します。
論理ドメイン構成であるかを確認する方法については、[論理ドメイン構成／factory-default構成の確認方法]を参照してください。
すべてのゲストドメインで以下の手順を実施し、時刻を設定します。
   a. ゲストドメインの「CONS」の値を確認します。

```
primary# ldm list-domain
NAME             STATE      FLAGS   CONS  VCPU  MEMORY  UTIL  NORM  UPTIME
primary          active     -n-cv-  SP    8     3968M   0.2%  0.1%  18h 37m
guest            bound      ------  5000  8     2G
```

b. ゲストドメインのオートブート機能を無効にします。

```
primary# ldm set-variable auto-boot?=false guest
```

c. ゲストドメインを起動します。

```
primary# ldm start-domain guest
```

d. ゲストドメインのコンソールを開きます。

```
primary# telnet localhost 5000
:
{0} ok
```

e. boot -sコマンドを実行して、シングルユーザーモードでOracle Solarisを起動します。

```
{0} ok boot -s
```

f. Oracle Solarisのdateコマンドを実行し、ゲストドメインの時刻を設定します。
例) 2017年3月25日12時30分00秒に設定する場合

```
guest# date 0325123017.00
```

g. マルチユーザーモードに移行します。

```
guest# exit
```

h. ゲストドメインがNTPクライアントの場合は、ntpq -npのコマンドを実行して、NTPサーバと同期することを確認します。
以下の行頭の"*"は「remote」列のNTPサーバとゲストドメインが同期したことを示しています。

```
guest# while [ 1 ]; do ntpq -np; sleep 60; done
     remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*203.0.113.156   203.0.113.70     4 u   46   64    3    0.458    0.754   7.243
     remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*203.0.113.156   203.0.113.70     4 u   39   64    7    0.478    1.487   5.664
     remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*203.0.113.156   203.0.113.70     4 u   35   64   17    0.450    2.164   5.077
^C
guest#
```

i. 必要に応じて、ゲストドメインのオートブート機能を有効に戻します。

```
primary# ldm set-variable auto-boot?=true guest
```

10. **手順1で無効にした機能を、必要に応じて有効に戻します。**
    制御ドメインのオートブート機能はOpenBoot PROM環境変数auto-boot?をtrueに指定してsetpparparam(8)コマンドを実行して有効に戻します。ゲストドメインの起動はsetpparmode(8)コマンドを実行して有効に戻します。
    例) 物理パーティションがPPAR#0の場合

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript "setenv auto-boot? true" -y
XSCF> setpparmode -p 0 -m guestboot=on
```

11. **論理ドメイン構成の場合、論理ドメイン構成情報を保存します。**
    論理ドメイン構成であるかを確認する方法については、[論理ドメイン構成／factory-default構成の確認方法]を参照してください。
    例）論理ドメイン構成情報を"config_A"という名前で保存する場合

```
primary# ldm list-domain -l
略
primary# ldm list-spconfig
略
primary# ldm remove-spconfig config_A
primary# ldm add-spconfig config_A
```

[論理ドメイン構成／factory-default構成の確認方法]

論理ドメイン構成であるかどうかはshowdomainconfigコマンドを使用して確認できます。

(1) 論理ドメイン構成
以下の"^"で示した部分に、factory-default以外の値が設定されている場合は、論理ドメイン構成です。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID     :0
Booting config
 (Current)  :config_A
             ^^^^^^^^
 (Next)     :config_A
             ^^^^^^^^
--------------------------------------------------------------------------------
Index       :1
config_name :factory-default
domains     :1
date_created:-
--------------------------------------------------------------------------------
Index       :2
config_name :config_A
domains     :1
date_created:'2014-03-05 17:33:17'
```

(2) factory-default構成

以下の"^"で示した部分にfactory-defaultが設定されている場合は、論理ドメイン構成ではなく、factory-default構成です。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID     :0
Booting config
 (Current)  :factory-default
             ^^^^^^^^^^^^^^^
 (Next)     :factory-default
             ^^^^^^^^^^^^^^^
--------------------------------------------------------------------------------
Index       :1
config_name :factory-default
domains     :1
date_created:-
```

- [SPARC M10-1/SPARC M10-4/SPARC M10-4S]
  CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはマザーボードユニット（MBU）を交換した場合、CPUコア アクティベーション設定情報およびCPUコア アクティベーションキーが消去されてしまう可能性があります。CPUコア アクティベーション設定情報およびCPUコア アクティベーションキーを元に戻すには、dumpconfig(8)コマンドで退避しておいたCPUコア アクティベーション設定情報およびCPUコア アクティベーションキーをrestoreconfig(8)コマンドで復元する必要があります。

- [SPARC M10-4S]
  CPUメモリユニット（下段）（CMUL）の交換またはSPARC M10-4Sの増設を行う場合は、replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドを実行し、保守メニューに従って実施してください。

  クロスバーボックスがあるシステムまたは複数のSPARCM10-4Sで構成されるシステムで、ファームウェアがXCP 2044以降の場合、保守メニューを使用せずにCPUメモリユニット（下段）（CMUL）の交換またはSPARC M10-4Sの増設を実施すると、交換／増設した装置のXSCFが起動しない場合があります。

  この場合は、交換／増設したSPARC M10-4Sの入力電源を切断してください。その後、保守メニューを使用して、CPUメモリユニット下段（CMUL）を交換またはSPARC M10-4Sを増設しなおしてください。

- [SPARC M10-4S]
  XCP 2090以降、入力電源を切断した状態で、保守メニューを使わずにCPUメモリユニット（下段）（CMUL）の交換、XSCFユニットの交換、SPARC M10-4Sの増設、またはクロスバーボックスの増設を行った場合、筐体間のXCPファームウェアの版数合わせが自動的に行われます。

  部品を交換／増設後に入力電源を投入して、マスタXSCFにログインしたとき、「XSCF firmware update now in progress. BB#xx, please wait for XSCF firmware update complete.」のメッセージが出力された場合、XCPファームウェアの版数合わせが自動で行われていることを示しています。

  XCPファームウェアの自動的な版数合わせの状況を確認するには、showlogs monitor、showlogs event、またはshowmonitorlogコマンドを実行してください。XCPファームウェアの版数合わせが完了している場合は、「XCP firmware version synchronization completed」が出力されます。

ファームウェアアップデートが完了するまでは、以下の操作をしないでください。

- 入力電源の切断
- poweron(8)コマンドの実行
- testsb(8)コマンドの実行
- diagxbu(8)コマンドの実行
- getflashimage(8)およびflashupdate(8)の実行

- 以下の手順でCPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはマザーボードユニット（MBU）を停止交換すると、物理パーティション（PPAR）が起動できなくなります。

  1. restoredefaults -c factoryコマンドを実行する。
  2. XSCF停止後、システムの入力電源を切断（AC OFF）する。
  3. microSDカードを入れ替えずに、CMULまたはMBUを交換する。
  4. システムの入力電源を投入（AC ON）する。

  [回避方法]

  CMULまたはMBUの交換は以下の手順で実施してください。

  1. restoredefaults -c factoryコマンドを実行します。
  2. 手順1でXSCFは停止するため、システムの入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）し、XSCFが起動したことを確認します。
  3. CMULまたはMBUを交換します。

  [復旧方法]

  以下の手順で復旧してください。

  1. システムの入力電源を切断（AC OFF）します。
  2. restoredefaults -c factoryコマンドを実行したときのCMULまたはMBUに搭載されていたmicroSDカードを、交換後のユニットに一時的に搭載します。
  3. システムの入力電源を投入（AC ON）して、XSCFが起動したことを確認します。
  4. システムの入力電源を切断（AC OFF）します。
  5. 一時的に搭載していたmicroSDカードを抜き取り、元のmicroSDカードを搭載しなおします。
  6. システムの入力電源を投入（AC ON）します。

CPUコア アクティベーションに関する留意点

- XCP 2032以前では、restoredefaults(8)コマンドを実行してXSCFの設定情報を初期化すると、CPUコア アクティベーションキーの情報も初期化されます。restoredefaults(8)コマンドを実行する場合は、あらかじめCPUコア アクティベーションキーを保存してから復元するか、CPUコア アクティベーションキーを再登録してください。

  また、CPUメモリユニットやマザーボードを交換する場合、CPUコア アクティベー

ションキーが消去されてしまうことがあります。詳細は「CPUメモリユニット、マザーボードユニット、XSCFユニット、PSUバックプレーン、またはクロスバーバックプレーンユニットの保守に関する留意点」を参照してください。

- XCP 2041以降、restoredefaults -c xscfコマンドを実行すると、CPUコア アクティベーションキーの情報は、XSCFユニット側だけでなくXSCFのバックアップ情報側も消去されます。また、restoredefaults -c factoryコマンドを実行しても、CPUコア アクティベーションキーの情報は消去されません。
  CPUコア アクティベーションキーの情報も含めて出荷時の状態に初期化する場合、 -c factory -r activationオプションを使用してください。

- dumpconfig(8)コマンドで退避したXSCF設定情報には、CPUコア アクティベーション情報およびCPUコア アクティベーションキーが含まれます。
  dumpconfig(8)コマンドで退避しておいたCPUコア アクティベーション情報およびCPUコア アクティベーションキーをrestoreconfig(8)コマンドで復元できます。

  そのため、XSCFネットワークや物理パーティション（PPAR）の構築など、XSCFの設定とともに、CPUコア アクティベーションの設定およびCPUコア アクティベーションキーのインストールを行った場合は、dumpconfig(8)コマンドを使用して、CPUコア アクティベーション情報およびCPUコア アクティベーションキーを退避しておくことをお勧めします。CPUコア アクティベーションキーのみを退避する場合はdumpcodactivation(8)、復元する場合はrestorecodactivation(8)コマンドで実行できます。ただし、CPUコア アクティベーション情報の退避／復元はできません。showcod(8)およびsetcod(8)コマンドを使用して、CPUコア アクティベーションを設定しなおしてください。

XSCF Webに関する留意点および制限事項

留意点

(1) **ブラウザ共通**

- XSCF Webを使用し、XCPのインポートまたはファームウェアをアップデートする場合、ウェブブラウザ上に「Session is invalid」が表示されることがあります。

- XSCF Webを使用してXCPをインポートする場合、XSCFシェルのタイムアウト時間が短いと、XCPのインポートに失敗します。XSCFシェルのタイムアウト時間を30分以上に設定してください。
  [menu] タブを選択し、[XSCF] - [Settings] - [Autologout] メニューを選択し、[Time-out value] に、30分以上の値を設定してください。

- XSCF Webの [XSCF] - [Setting] - [CoD Reservation] メニューを選択し、[PPAR Usage and Reservation] テーブルの [Reserve CoD Resources] ボタンをクリックして設定値を変更する場合、現在の設定値より少ない値を設定すると設定値を間違えていないか確認するための、以下のワーニングメッセージダイアログが表示されます。

```
PROC Permits assigned is less than current setting. Continue?
```

そのまま設定を続けたい場合は [OK] ボタンを、設定をキャンセルしたい場合は

[Cancel] ボタンをクリックしてください。

(2) **Internet Explorer**
XCP 2221以前の版数のXSCF Webを、Internet Explorer 10または11で使用すると、表が乱れたり文字が重なったりなど、画面のレイアウトが乱れることがあります。上記の環境で、XSCF Webの画面のレイアウトが乱れる場合は、Firefoxを使用してください。
なお、この不具合はシステム動作には影響しません。

(3) **Firefox**
Firefox環境下でXSCF Webを使用する場合、XSCFログイン時に、ブラウザからログインID／パスワードの保存を要求されることがあります。このときログインID／パスワードを保存しないでください。ログインID／パスワードを保存すると、保存されたデータがLDAP、SMTP、およびREMCSのWebページに表示されてしまうことがあります。

注ーRemote Customer Support System（REMCS）は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10システムだけでサポートされます。

以下のどちらかを設定して、ブラウザのログインID／パスワード保存機能を無効にしてください。

- ブラウザ全体のログインID／パスワード保存機能を無効にする[ツール]-[オプション]-[セキュリティ]タブにある[パスワード]-「サイトのパスワードを保存する」のチェックを外します。
- ログインID／パスワード保存の例外サイトに指定する[ツール]-[オプション]-[セキュリティ]タブにある[パスワード]-[サイトのパスワードを保存する]をチェックしたあと、XSCFログイン時に出力されるID／パスワード保存のためのダイアログにある、[このサイトでは記憶しない]ボタンをクリックします。これにより、ID／パスワード保存の[例外サイ ト]リストにXSCFのアドレスが登録され、以降のXSCFへのログイン時に、ID／パスワード保存のためのダイアログが出力されなくなります。

制限事項

(1) **ブラウザ共通**
現時点で確認されている制限はありません。

(2) **Internet Explorer**
Windows 7環境下でInternet Explorer 8を使用した場合、ビルトインAdministratorアカウントを使用できません。

(3) **Firefox**
現時点で確認されている制限はありません。

ファームウェアアップデートに関する留意点

- [SPARC M10-4S]
flashupdate(8)コマンドまたはXSCF Webによるファームウェアアップデートは、システムを構成しているSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスの台数に応じ

て、処理時間がかかります。

- XSCFファームウェアをアップデートしたあとのマスタXSCFおよびスタンバイ状態のXSCFの関係は、アップデートするXCP版数によって異なります。
  XCP版数によるマスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFの関係、およびファームウェアアップデートの動作の例は以下の表のとおりです。

表 2-1　XCP 2050以降とXCP 2044以前のファームウェアアップデートの違い

XCP版数	マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFの関係	ファームウェアアップデート内での動作の例
XCP 2050以降	アップデート中に切り替わったマスタXSCFおよびスタンバイ状態のXSCFは、切り替わる前の状態に戻る。	**1. BB#00のマスタXSCFからflashupdate(8)コマンドを実行する。** → XSCFリセット直後、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFはスタンバイ状態になっている。 → アップデートが完了すると、XSCFの自動切り替え処理が実施される。 → XSCFの自動切り替え処理が終了すると、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFは元のマスタの状態に戻される。 **2. BB#00のマスタXSCFからアップデートの完了をログメッセージ「XCP update has been completed.」で確認する。**
XCP 2044以前	アップデート中に切り替わったマスタXSCFおよびスタンバイ状態のXSCFは、切り替わったままの状態となる。	**1. BB#00のマスタXSCFからflashupdate(8)コマンドを実行する。** → XSCFリセット直後、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFはスタンバイ状態になっている。 → アップデートが完了しても、XSCFの自動切り替え処理は実施されない。そのため、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFは、スタンバイ状態のままになっている。 **2. BB#01のマスタXSCFからアップデートの完了をログメッセージ「XCP update has been completed.」で確認する。** **3. マスタとスタンバイ状態のXSCFをアップデート前の状態に戻す場合、BB#01のマスタXSCFから、switchscf(8)コマンドを実行して、BB#00のXSCFをマスタに戻す。**

- ファームウェアアップデートを行う際、「XCPに関する不具合と回避方法」に記載されている不具合が発生することがあります。その場合は、回避方法に記載されている対処を行ったあと、再度アップデートを実施してください。

PCIボックスを接続した場合の留意点

- XCP 2260以降、ioxadm(8)コマンドの-c checkおよび-c updateは、platadm権限で

も使用できます。詳細は、ioxadm(8)コマンドのマニュアルページまたは『SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル』を参照してください。

- [SPARC M10-1]
  以下のどちらかの作業を実施した場合、次回制御ドメイン起動時に、物理パーティションの論理ドメイン構成はfactory-defaultの状態に戻ります。また、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数も初期化されることがあります。
  - PCIボックスが接続されたシステムで、XCP 2043以前のファームウェアからXCP 2044以降のファームウェアにアップデートする場合
  - XCP 2044以降のファームウェアが適用されたシステムにPCIボックスを増設／減設する場合

  事前にOracle Solarisから論理ドメイン構成情報をXMLファイルに保存してください。また、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数の設定情報を事前にメモに保存し、再設定してください。

  PCIボックスが接続されたシステムで、XCP 2043以前のファームウェアからXCP 2044以降のファームウェアにアップデートする際に、各情報の退避／復元が必要な場合は、表 2-2のとおりです。

表 2-2 XCP 2043以前のファームウェアからXCP 2044以降のファームウェアにアップデートする場合に必要な作業

PCIボックスの接続	現在のドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
なし	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
なし	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	不要	不要
あり	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
あり	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要

  XCP 2044以降のファームウェアが適用されたシステムにPCIボックスを増設／減設する際に、各情報の退避／復元が必要な場合は、表 2-3のとおりです。

表 2-3 XCP 2044以降のファームウェアが適用されたシステムにPCIボックスを増設／減設する場合に必要な作業

PCIボックスの接続	現在のドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
なし（増設する）	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
なし（増設する）	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要(*1)
あり（増設／減設する）	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要

表 2-3　XCP 2044以降のファームウェアが適用されたシステムにPCIボックスを増設／減設する場合に必要な作業 (続き)

PCIボックスの接続	現在のドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
あり（増設／減設する）	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要(*1)

*1:　XCP 2230以降では不要です。

注－XMLファイルへの保存はldm list-constraints -xコマンド、XMLファイルからの復元はldm init-system -iコマンドを実行します。OpenBoot PROM環境変数の表示方法はokプロンプト状態からprintenvコマンドを実行します。これらの詳細な手順は、『SPARC M12/M10 PCIボックス サービスマニュアル』の「1.7.3　論理ドメインの構成情報およびOpenBoot PROM環境変数の退避／復元方法」を参照してください。

- [SPARC M10-4/M10-4S]
  SPARC M10-4ではXCP 2044以降、SPARC M10-4SではXCP 2050以降のファームウェアを使用し、setpciboxdio(8)コマンドで以下のどちらかの作業を実施すると、次回制御ドメイン起動時に、物理パーティションの論理ドメイン構成はfactory-defaultの状態に戻ります。また、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数も初期化されることがあります。
  - PCIボックスのダイレクトI/O機能の、有効／無効の設定を変更する場合
  - PCIボックスのダイレクトI/O機能を有効にしたSPARC M10システム筐体のPCIスロットに対して、PCIボックスを増設／減設／交換する場合

  PCIボックスの有無に関わらず、setpciboxdio(8)コマンドは実行できます。事前に、Oracle Solarisから論理ドメイン構成情報をXMLファイルに保存してください。また、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数も設定情報を事前にメモに保存し、再設定してください。

  setpciboxdio(8)コマンドを実行してPCIボックスのダイレクトI/O機能の設定を有効／無効に変更する際に、各情報の退避／復元が必要な場合があります。表 2-4で確認してください。

表 2-4　ダイレクトI/O機能の有効／無効の設定を切り替える場合に必要な作業

PCIボックスの構成	現在のドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
なし	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
なし	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要(*1)
あり	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
あり	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要(*1)

*1:　XCP 2230以降では不要です。

setpciboxdio(8)コマンドを実行してPCIボックスのダイレクトI/O機能を有効にしたSPARC M10システム筐体のPCIスロットに対してPCIボックスの増設／減設／交換を実施する際に、各情報の退避／復元が必要な場合は、表 2-5のとおりです。

注－PCIホットプラグ（PHP）機能によりPCIボックスを保守する場合、ダイレクトI/O機能は無効なため、各情報の退避／復元は必要ありません。

表 2-5 ダイレクトI/O機能を有効にしたSPARC M10システム筐体のPCIスロットに対してPCIボックスを増設／減設／交換した場合に必要な作業

保守環境	現在のドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
PPARを停止して増設／減設した場合	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要(*2)
PPARを停止して故障したPCIボックス (*1) を交換した場合	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	要（XMLファイル）	要(*2)
PPARを停止して正常なPCIボックス (*1) を交換した場合	factory-default（制御ドメインのみ）	不要	不要
	制御ドメイン以外の論理ドメインあり	不要	不要

*1: リンクカード、リンクケーブル、マネジメントケーブル、リンクボードを交換した場合も含みます。
*2: XCP 2230以降では不要です。

注－XMLファイルへの保存はldm list-constraints -xコマンド、XMLファイルからの復元はldm init-system -iコマンドを実行します。OpenBoot PROM環境変数の表示方法はokプロンプト状態からprintenvコマンドを実行します。これらの詳細な手順は、『SPARC M12/M10 PCIボックス サービスマニュアル』の「1.7.3　論理ドメインの構成情報およびOpenBoot PROM環境変数の退避／復元方法」を参照してください。

二系統受電設定に関する留意点

SPARC M10システムの電源ユニットは、冗長構成です。setdualpowerfeed(8)コマンドにより二系統受電機能を有効／無効のどちらに設定しても、冗長構成のシステム挙動に影響はありません。
したがって、setdualpowerfeed(8)コマンドの設定に依存したshowdualpowerfeed(8)コマンドおよびshowhardconf(8)コマンドの表示結果が以下のいずれの場合においても、冗長構成のシステム挙動に影響はありません。

- showdualpowerfeed(8)コマンドで「Dual power feed is enabled.」のとき、showhardconf(8)コマンドで「Power_Supply_System: Dual ;」と表示される場合

- showdualpowerfeed(8)コマンドで、「Dual power feed is disabled.」のとき、showhardconf(8)コマンドで「Power_Supply_System: Single ;」と表示される場合

この設定機能は、二系統受電での構成かどうかの、システム管理者用のメモとして利用できます。

Active Directoryに関する留意点

- Active Directoryが有効の場合、telnetを使用してログインを試みると、2台目以降の代替サーバに対する問い合わせがタイムアウトして、ログインに失敗することがあります。
- setad(8)コマンドのtimeoutオペランドで設定した値が小さい場合、XSCFにログインすると、ユーザー権限が付与されないことがあります。このときは、timeoutの設定値を大きくして再度実行してください。

LDAP over SSLに関する留意点

setldapssl(8)コマンドのtimeoutオペランドで設定した値が小さい場合、XSCFにログインすると、ユーザー権限が付与されないことがあります。このときは、timeoutの設定値を大きくして再度実行してください。

論理ドメインの時刻に関する留意点

- 論理ドメインの時刻に関する留意点（その1）
  XCP 2232以前からXCP 2240以降へファームウェアをアップデートしたあと、長期間システムを稼働してからXSCFを再起動し、PPARを起動するとOracle Solarisの時刻がずれることがあります。

  この問題を回避するため、以下を必ず実施してください。

  [回避方法]

  - XSCFをNTPクライアントとする設定が無効な場合（デフォルト）
    setdateコマンドを実行して、XSCFの時刻を現在の時刻に設定します。
    次の例では、XSCFの時刻を「2017/3/25 12:00:00」に設定しています。

```
XSCF> setdate -s 032512002017.00
```

    時刻を設定するとXSCFが自動的に再起動されます。

  - XSCFをNTPクライアントとする設定が有効な場合

    1. **showlogs eventコマンドを実行し、XSCFとNTPサーバとの時刻同期が成功しているかを確認します。**
       イベントログが複数登録されている場合は、最新のイベントログを参照してください。

```
XSCF> showlogs event -rM
Date                        Message
Mar 25 11:45:31 JST 2017    NTP service found NTP server to synchronize.
```

「NTP service found NTP server to synchronize.」が表示される場合は、時刻同期は正常に行われています。以降の手順は不要です。

2. **setntpコマンドを実行して、XSCF NTPクライアント機能をいったん無効にします。**

```
XSCF> setntp -s client -c disable
```

3. **XSCFを再起動します。**

```
XSCF> rebootxscf -a
```

4. **setdateコマンドを実行して、XSCFの時刻を現在の時刻に設定します。**
次の例では、XSCFの時刻を「2017/3/25 12:00:00」に設定しています。

```
XSCF> setdate -s 032512002017.00
```

時刻を設定するとXSCFが自動的に再起動されます。

5. **setntpコマンドを実行して、XSCF NTPクライアント機能を有効に戻します。**

```
XSCF> setntp -s client -c enable
```

6. **XSCFを再起動します。**

```
XSCF> rebootxscf -a
```

注ーXSCFとNTPサーバの時刻同期が失敗し、次のメッセージが表示されてもこの回避方法は完了しています。

```
XSCF> showlogs event -rM
Date                        Message
Mar 25 12:15:31 JST 2017    NTP service failed to reach appropriate NTP server.
```

- 論理ドメインの時刻に関する留意点（その2）

注ーXCP 2232以前からXCP 2240以降へファームウェアをアップデートした場合は、「■論理ドメインの時刻に関する留意点（その1）」を先に実施してください。

RTIF2-140711-001およびRTIF2-141204-001の問題により、PPAR起動時にOracle Solarisの時刻がずれることがあります。
この問題を回避するために以下のいずれかを必ず実施してください。

注ーRTIF2-140711-001は、XCP 2240以降のXCP版数で修正されています。しかし、XCP 2232以前の版数からXCP 2240以降へファームウェアをアップデートした場合は、XCP 2232以前で発生した時刻ずれを解消する必要があります。「■XCP 2232以前の場合」の[回避方法]を実施してください。

■XCP 2240以降の場合

[回避方法]
PPARを停止する前、または再起動する前に論理ドメイン構成情報を保存します。
例）論理ドメイン構成情報を"config_A"という名前で保存する場合

```
primary# ldm list-domain -l
略
primary# ldm list-spconfig
略
primary# ldm remove-spconfig config_A
primary# ldm add-spconfig config_A
```

■XCP 2232以前の場合

[回避方法]

1. **OpenBoot PROM環境変数auto-boot?をfalseに指定して、setpparparam(8)コマンドを実行し、制御ドメインのオートブート機能を無効にします。また、setpparmode(8)コマンドを実行し、ゲストドメインの起動を無効にします。**
   例） 物理パーティションがPPAR#0の場合

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript "setenv auto-boot? false" -y
XSCF> setpparmode -p 0 -m guestboot=off
```

2. **poweron(8)コマンドを実行し、対象物理パーティションの電源を投入します。**

```
XSCF> poweron -p 0 -y
```

3. **showdomainstatus -p 0 -g primaryを実行し、Statusに"OpenBoot Running"が表示されることを確認します。**
4. **console(8)コマンドを実行し、制御ドメインのコンソールに切り替えます。**

```
XSCF> console -p 0 -y
:
略
{0} ok
```

5. **boot -sコマンドを実行して、シングルユーザーモードでOracle Solarisを起動します。**

```
{0} ok boot -s
```

6. **Oracle Solarisのdateコマンドを実行し、制御ドメインの時刻を設定します。**

例） 2017年3月25日12時20分00秒に設定する場合

```
primary# date 0325122017.00
```

注－showdate(8)コマンドを実行し、XSCFの時刻を表示させ、対象物理パーティションの制御ドメインの時刻がXSCFの時刻と同じであることを確認してください。

---

7. **マルチユーザーモードに移行します。**

```
primary# exit
```

8. **論理ドメイン構成の場合、ゲストドメインに正しい時刻を設定します。**
論理ドメイン構成であるかを確認する方法については、[論理ドメイン構成／factory-default構成の確認方法]を参照してください。
すべてのゲストドメインで以下の手順を実施し、時刻を設定します。

a. ゲストドメインの「CONS」の値を確認します。

```
primary# ldm list-domain
NAME             STATE      FLAGS   CONS  VCPU  MEMORY  UTIL  NORM  UPTIME
primary          active     -n-cv-  SP    8     3968M   0.2%  0.1%  18h 37m
guest            bound      ------  5000  8     2G
```

b. ゲストドメインのオートブート機能を無効にします。

```
primary# ldm set-variable auto-boot?=false guest
```

c. ゲストドメインを起動します。

```
primary# ldm start-domain guest
```

d. ゲストドメインのコンソールを開きます。

```
primary# telnet localhost 5000
:
{0} ok
```

e. boot -sコマンドを実行して、シングルユーザーモードでOracle Solarisを起動します。

```
{0} ok boot -s
```

f. Oracle Solarisのdateコマンドを実行し、ゲストドメインの時刻を設定します。
例）2017年3月25日12時30分00秒に設定する場合

```
guest# date 0325123017.00
```

g. マルチユーザーモードに移行します。

```
guest# exit
```

h. ゲストドメインがNTPクライアントの場合は、ntpq -npのコマンドを実行して、NTPサーバと同期することを確認します。
以下の行頭の"*"は「remote」列のNTPサーバとゲストドメインが同期したことを示しています。

```
guest# while [ 1 ]; do ntpq -np; sleep 60; done
     remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*203.0.113.156   203.0.113.70     4 u   46   64    3    0.458    0.754   7.243
     remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*203.0.113.156   203.0.113.70     4 u   39   64    7    0.478    1.487   5.664
     remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*203.0.113.156   203.0.113.70     4 u   35   64   17    0.450    2.164   5.077
^C
guest#
```

i. 必要に応じて、ゲストドメインのオートブート機能を有効に戻します。

```
primary# ldm set-variable auto-boot?=true guest
```

9. **手順1で無効にした機能を、必要に応じて有効に戻します。**
制御ドメインのオートブート機能はOpenBoot PROM環境変数auto-boot?をtrueに指定してsetpparparam(8)コマンドを実行して有効に戻します。ゲストドメインの起動はsetpparmode(8)コマンドを実行して有効に戻します。
例) 物理パーティションがPPAR#0の場合

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript "setenv auto-boot? true" -y
XSCF> setpparmode -p 0 -m guestboot=on
```

10. **論理ドメイン構成の場合、論理ドメイン構成情報を保存します。**
論理ドメイン構成であるかを確認する方法については、[論理ドメイン構成／factory-default構成の確認方法]を参照してください。
例）論理ドメイン構成情報を"config_A"という名前で保存する場合

```
primary# ldm ls -l
略
primary# ldm ls-config
略
primary# ldm remove-spconfig config_A
```

```
primary# ldm add-spconfig config_A
```

[論理ドメイン構成／factory-default構成の確認方法]

論理ドメイン構成であるかどうかはshowdomainconfigコマンドを使用して確認できます。

(1) 論理ドメイン構成
以下の"^"で示した部分にfactory-default以外の値が設定されている場合は、論理ドメイン構成です。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID     :0
Booting config
 (Current)  :config_A
             ^^^^^^^^
 (Next)     :config_A
             ^^^^^^^^
----------------------------------------------------------------------------
Index       :1
config_name :factory-default
domains     :1
date_created:-
----------------------------------------------------------------------------
Index       :2
config_name :config_A
domains     :1
date_created:'2014-03-05 17:33:17'
```

(2) factory-default構成
以下の"^"で示した部分にfactory-defaultが設定されている場合は、論理ドメイン構成ではなく、factory-default構成です。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID     :0
Booting config
 (Current)  :factory-default
             ^^^^^^^^^^^^^^^
 (Next)     :factory-default
             ^^^^^^^^^^^^^^^
----------------------------------------------------------------------------
Index       :1
config_name :factory-default
domains     :1
date_created:-
```

電源連動機能（RCIL）に関する留意点

- XCP 2290以降、電源連動機能を使用する場合、setpacketfilters -c ipmi_portコマン

ドを実行して、IPMIサービスを設定してください。
SPARC M10のIPMIサービスは、電源連動機能でのみ使用されます。

XCP 2290以降では、IPMIサービスはデフォルトで無効になっているため、電源連動機能を使用する場合、IPMIサービスを有効にしてください。

XCP 2280以前では、IPMIサービスは無効にできません。常に有効になっています。XCP 2280以前からXCP 2290以降へファームウェアアップデートを行った場合、IPMIサービスは有効として引き継がれます。このため、電源連動機能を使用しない場合、IPMIサービスを無効にしてください。電源連動を使用していた場合は、そのまま電源連動機能が使用できます。

IPMIサービスは、setpacketfilters -c ipmi_portコマンドで設定します。setpacketfilters(8)コマンドの詳細は、『SPARC M12/M10 XSCFリファレンスマニュアル』を参照してください。

- 複数の電源連動グループに、同じノードを登録しないでください。1つのノードを複数の電源連動グループに登録して電源連動を行うと意図しない動作となることがあります。
  なお、setremotepwrmgmt(8)コマンドでは、複数の電源連動グループにノードが登録されているかどうかを確認することはできません。電源連動グループ管理情報ファイルを作成、修正するときに重複しないように注意してください。
- I/Oノードを、複数の電源制御グループに登録しないでください。 複数の電動連動グループに同じI/Oノードを設定し以下の両方の条件を満たすと、I/Oノードの電源がオン／オフを交互に繰り返します。
  - setremotepwrmgmt -c enableを実行し、電源連動機能が有効である。
  - 1台以上のホストノードが電源オンである電源制御グループと、すべてのホストノードが電源オフである電源制御グループが存在する。

  I/Oノードを複数の電源制御グループに登録してしまった場合は、setremotepwrmgmt -c disableで電源連動を無効にしたあと、clearremotepwrmgmtで電源制御グループの設定を削除してください。削除後、複数のグループに登録されないように電源連動グループ管理情報ファイルを作成してから、setremotepwrmgmt -c configで再度登録してください。
- XCP 2080以前で、かつSPARC M10システムが1台構成で外部I/O装置を接続している場合は、電源連動機能は使用しないでください。XSCFがリセットされたときに外部I/O装置の電源が誤って切断されることがあります。
- 電源連動機能を設定するための管理ファイルでは、改行コードとして、CR+LFもしくはLFを使用してください。
- 電源連動機能を設定するための管理ファイルでは、NodeTypeに関わらずMACアドレスを必ず指定してください。MACアドレスを指定しなかった場合は、setremotepwrmgmt(8)コマンドで以下のエラーが発生します。
  [例]

```
XSCF> setremotepwrmgmt -c config -u guest ftp://xx.xx.xx.xx/rpmgroup.csv
Password:
Download successful: 213Byte at 2103.000KB/s
Checking file...
The definition of [MACAddress] in [ftp://xx.xx.xx.xx/rpmgroup.csv] is invalid.
XSCF>
```

『SPARC M12/M10 RCILユーザーズガイド』の「第3章　電源連動の設定例」には、MACアドレスの設定が省略され「空欄」になっているノードがありますが、I/Oノード、マスタホストノード、ホストノード、およびリモート電源制御ユニットのNodeTypeに関わらずMACアドレスを指定してください。

リモートストレージに関する留意点

- Java Runtime Environmentの版数がJava Runtime Environment 8 Update 45の場合、次のように、Javaのネットワーク設定または使用中のブラウザで自動プロキシ構成スクリプト（PACファイル）を使用していると、「このアプリケーションを起動できません。」や「証明書の確認に失敗しました。アプリケーションは実行されません。」などのメッセージが出力され、XSCF Remote Storage Serverが起動しないことがあります。
  - Javaのネットワーク設定で [ブラウザの設定を使用] が選択されている場合

    - Internet Explorerの場合

      [ツール] - [インターネットオプション] - [接続] - [LANの設定] で [自動構成スクリプトを使用する] にチェックがついている

    - Firefoxの場合

      [ツール] - [オプション] - [詳細] - [ネットワーク] - [接続設定] で [自動プロキシ設定スクリプトURL] が選択されている

  - Javaのネットワーク設定で [自動プロキシ構成スクリプトを使用] が選択されている

  この不具合を回避するためには、[Javaコントロールパネル] 画面の [一般] - [ネットワーク設定] で [プロキシ・サーバーを使用] を選択し、Javaのネットワーク設定を変更してください。

- 端末に複数のネットワーク接続が存在する場合にも、リモートストレージを接続できないことがあります。
  この場合、XSCF-LANとの接続に使用する以外の端末上のネットワークデバイスを無効にすることで、接続できます。

- VPNなどのアドレス変換がかかったネットワークを通してリモートストレージを接続すると、「iscsiadm: no records found!」のエラーメッセージが出力され接続できません。
  VPNなどのアドレス変換がかかったネットワークを通して、リモートストレージの接続をしないでください。

XSCFを再起動する場合の留意点

- rebootxscf(8)の実行時に、制御ドメインのコンソールに以下のワーニングメッセージが出力されることがあります。

```
PICL snmpplugin: cannot fetch object value (err=5, OID=<1.3.6.1.2.1.47.1.4.1>,
 row=0)
```

- rebootxscf(8)の実行時に、クラスタソフトを使用している場合、論理ドメインのコンソールに以下のワーニングメッセージが出力されることがあります。

```
SA SA_xscf***.so to test host *** failed
7240 Connection to the XSCF is refused. (node:*** ipadress:*** detail:***)
```

- リモートストレージを接続した状態でrebootxscf(8)コマンドを実行すると、メディアへのアクセスがエラーとなることがあります。

```
FRU: /BB#0/REMOTE_STORAGE
Msg: I/O device error detected

FRU: /BB#0/REMOTE_STORAGE
Msg: Boot process failed

FRU: /REMOTE_STORAGE
Msg: FCode informed error

FRU: /BB#1/REMOTE_STORAGE
Msg: A:sd1:sd:SCSI transport failed (DRIVE vendor=Fujitsu, product=Remote
Storage)
(compdev=c8t0d0)

FRU: /REMOTE_STORAGE
Msg: A:sd0:sd:Device Error(Media Error) (DRIVE vendor=Fujitsu, product=Remote
Storage)
(compdev=c5t0d0)

FRU: /BB#0/REMOTE_STORAGE
Msg: The Machine Administration detected a other hard disk failure.
```

FUJITSU Storage ETERNUSディスクストレージシステムをiSCSIターゲットとしてiSCSIブートする場合の留意点および制限事項

留意点

FUJITSU Storage ETERNUSディスクストレージシステムのファームウェア版数がV10L50の場合の留意点です。V10L60以降では本設定は不要です。
FUJITSU Storage ETERNUSディスクストレージシステムをiSCSIターゲットとしてiSCSIブートする場合は、XCP 2280以降のXCPファームウェアを適用するとともに、事前に以下の手順を実施してください。

1. **OpenBoot PROM環境変数nvramrcを以下の手順で変更します。**
   a. nveditを実行してnvramrcに以下の内容を記載します。

```
{0} ok nvedit
   0: set-random-tcp#
```

b. [Ctrl] + [C] キーを押して、nveditから抜けてokプロンプトに戻ります。

c. nvstoreを実行し、編集内容を保存します。

```
{0} ok nvstore
```

d. nvramrcが正しく書き込まれたか確認します。

```
{0} ok printenv nvramrc
nvramrc = set-random-tcp#
{0} ok
```

2. **OpenBoot環境変数use-nvramrc?をtrueに設定します。**

```
{0} ok setenv use-nvramrc? true
use-nvramrc? = true
```

3. **reset-allコマンドを実行し、OpenBoot PROMを再起動します。**

```
{0} ok reset-all
```

上記の設定を元に戻す場合は、以下の手順を実施してください。

4. **OpenBoot PROM環境変数nvramrcから設定した内容を削除します。**

a. nveditを実行し、nvramrcから「set-random-tcp#」を削除します。

```
{0} ok nvedit
0:
```

b. [Ctrl] + [C] キーを押して、nveditから抜けてokプロンプトに戻ります。

c. nvstoreを実行し、編集内容を保存します。

```
{0} ok nvstore
```

d. nvramrcの設定が正しく削除されたか確認します。

```
{0} ok printenv nvramrc
nvramrc =
{0} ok
```

5. **OpenBoot環境変数use-nvramrc?をfalseに設定します。**

手順2実行前からtrueに設定されていた場合、本手順は不要です。

```
{0} ok setenv use-nvramrc? false
use-nvramrc? = false
{0} ok
```

6. **reset-allコマンドを実行し、OpenBoot PROMを再起動します。**

```
{0} ok reset-all
```

遅延ダンプに関する制限事項

メモリ故障が発生した場合、以下のワーニングメッセージが出力され、パニックが発生し続け、遅延ダンプが行われないことがあります。

```
WARNING: Retained memory segment overlapped with degraded
memory.
```

[復旧方法]
この現象が続く場合、以下の手順を実施してください。

- 制御ドメインの場合
  1. **sendbreakコマンドを実行して、パニックを停止します。**

```
XSCF> sendbreak -y -p [ppar_id]
```

  2. **okプロンプトで停止したら、clear-retained-memoryコマンドを実行します。**

```
{0} ok clear-retained-memory
```

  3. **reset-allコマンドを実行し、OpenBoot PROMを再起動します。**

```
{0} ok reset-all
```

- ゲストドメインの場合

Oracle VM Server for SPARCのldm stop-domainコマンドを使用してゲストドメインを停止したあと、ldm start-domainコマンドを使用してゲストドメインを起動してください。

その他の留意点および制限事項

留意点

- サービスドメインが仮想ディスクサーバ（vds）または仮想スイッチ（vsw）を起

動するまでに時間がかかることがあります。このため、ゲストドメインのブート時には、仮想ディスク／仮想ネットワークからvdsまたはvswへの応答待ち時間が以下に設定されています。

- XCP 2221以前：最大5分
- XCP 2230以降：最大15分

この待ち時間を超えると、仮想ディスク／仮想ネットワークからのブートに失敗することがあります。

たとえばXCP 2230以降の場合、OpenBoot PROMの環境変数boot-deviceに複数のディスクが設定されているとき、仮想ディスクから次のディスクへのブートパス切り替えに最大15分かかったり、また、15分を超えるとブートに失敗したりすることがあります。

- オペレーションパネルのモードスイッチがServiceモードのときは、オペレーションパネルの電源スイッチを使用して電源を投入することはできません。オペレーションパネルの電源スイッチから電源を投入する場合は、オペレーションパネルのモードスイッチをLockedモードに切り替えてください。
- 64 GBメモリを増設する場合は、XCP 2090以降を適用してください。
- TelnetおよびSSHでXSCFへ同時に接続できる最大ユーザー数は、以下のとおりです。
  - SPARC M10-1: 20ユーザー
  - SPARC M10-4: 40ユーザー
  - SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）: 40ユーザー
  - SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）: 70ユーザー

  最大ユーザー数を超えた場合、アクセスは拒否されます。
- XSCF-LANはオートネゴシエーションに対応しています。XSCF-LANと全二重固定で設定されているネットワーク機器を接続した場合、IEEE802.3の規約によって、XSCF-LANは半二重モードで通信します。これにより、ネットワークの通信速度が遅くなったり、通信異常が発生したりする場合があります。XSCF-LANと接続するネットワーク機器は、必ずオートネゴシエーションに設定してください。
- setupfru(8)コマンドのメモリミラー設定は、対象のシステムボード（PSB）が属する物理パーティション（PPAR）の、電源が切断されている状態で行ってください。
- マニュアルページを表示する場合は、ターミナルソフトの設定をTERM=vt100としてください。
- 物理パーティション（PPAR）を構築する場合、システムに存在しないBB-IDをPPAR-IDに設定しないでください。
  たとえば、システムに存在するBB-IDが00と01の場合、設定できるPPAR-IDは00または01です。PPAR-IDに02を設定すると、PPAR-ID 02に設定されたPPARは起動できなくなります。
- showhardconf(8)コマンドを実行して表示される情報のうち、ゲストドメインのPCI Express（PCIe）カード情報は、該当するゲストドメインのOracle Solarisが起動したあとに反映されます。
- XCP 2032以降、setpparmode(8)コマンドで設定する省電力動作のデフォルト値は、「有効」から「無効」に変更されます。
- testsb(8)またはdiagxbu(8)コマンドを実行すると、エラーログの被疑箇所に「PPAR#30」と、存在しないPPAR-IDが表示されることがあります。これは、診

断時にシステムボード（PSB）の異常が検出されたことを示します。出力されたPPAR-IDは何も意味も持ちません。

- 制御ドメインコンソールに接続する場合は、XSCF-LANポート経由で接続することを推奨します。
  シリアルポート経由で制御ドメインコンソールに接続して大量のデータを出力させると、正しく表示されないことがあります。

- [SPARC M10-4S]
  showhardconf(8)コマンド、showboards(8)コマンド、showpparstatus(8)コマンドなど、システムの構成や状態を表示するコマンドは、システムを構成しているSPARC M10-4Sやクロスバーボックスの台数に応じて、処理時間がかかります。

- [SPARC M10-4S]
  複数の筐体で構成されているシステムの場合、BB#01またはXBBOX#81の筐体が、はじめにマスタXSCFになることもあります。

- [SPARC M10-4S]
  システム構成によっては、ハードウェア故障発生時に物理パーティションの再起動に時間がかかることがあります。

- XCP 2032をインストールしたSPARC M10-4SにSPARC M10-4Sを増設する場合は、事前に最新のファームウェアにアップデートしてください。

- setsnmpvacm(8)コマンドのオペランドにcreateviewを指定して実行すると、MIBのOIDマスクを使用したアクセスの制限ができません。setsnmpvacm(8)コマンドのオペランドにcreateviewを指定して実行する場合は、MIBのOIDマスクを使用しないでください。

- 引き継ぎIPアドレスを設定している場合は、SNMPv1のSNMP Trapの、UDPパケットの送信元IPアドレスとAgent Addressが異なります。UDPパケットの送信元IPアドレスには各XSCF-LANに割り当てたIPアドレス（物理IPアドレス）が、Agent Addressには引き継ぎIPアドレス（仮想IPアドレス）が格納されます。

- 2 CPUが搭載されたSPARC M10-4またはSPARC M10-4SでI/Oバス再構成を有効に設定しているとき、2 CPUを追加するためにCPUメモリユニット（上段）（CMUU）を増設すると、それまで使用していたI/Oデバイスのデバイスパスが変化します。
  setpparmode(8)コマンドの-m functionオプションで設定できるioreconfigureは、通常、デフォルトのfalseを指定し、I/Oバス再構成機能を無効にしてください。

  ioreconfigureにtrueを指定して、I/Oバス再構成機能を有効にすると、Oracle Solarisの再インストールが必要になることがあります。

- Oracle Solaris 11が動作している論理ドメインの場合、XCP 2050以降にアップデートすることにより、1つのルートコンプレックス（RC）に搭載できるPCIeカードの最大搭載枚数を増やすことができます。
  XCP 2050以降にアップデートしたあとPCIeカードを増設する場合は、制御ドメインで以下の作業を実施してください。

  ここでは現在使用中の構成情報ldm-set1と、factory-defaultの、2つの構成情報が保存されている例で説明します。

  1. **XSCFに保存された論理ドメインの構成情報を確認します。**

```
primary# ldm list-spconfig
ldm-set1  [current]
factory-default
```

2. **制御ドメインを含む、すべての論理ドメインに対して、以下のコマンドを実行します。**

   ldomには論理ドメイン名を指定します。

```
primary# ldm set-variable fix_atu=true ldom
primary# ldm remove-variable fix_atu ldom
```

3. **変更された内容で論理ドメインの構成情報を保存しなおします。**

   保存されているldm-set1をいったん削除してから、保存しなおします。

```
primary# ldm rm-spconfig ldm-set1
primary# ldm add-spconfig ldm-set1
```

4. **すべての論理ドメインを再起動します。**

- XSCFユーザーアカウント名とLDAPユーザー名に同じ名前を使用することはできません。また、XSCFユーザーアカウントのUIDとLDAP UIDに同じIDを使用することはできません。

- OpenBoot PROM起動時に、グラフィックカードGFX 550e（TechSource,PCI Express Graphics Board）の異常を検出しても、コンソールに何も出力されないことがあります。
  これは、showlogs errorコマンドを実行した結果、故障部品（被疑部品）に対して「UNSPECIFIED」が登録された、以下のエラーログで確認できます。

  [エラーメッセージ例]

```
XSCF> showlogs error
 Date: MMM DD hh:mm:ss JST 2014
 Code: 80000000-00ffff0000ff0000ff-0300000100000000000000
 Status: Alarm Occurred: MMM DD hh:mm:ss.sss JST 2014
 FRU: /UNSPECIFIED
 Msg: I/O device error detected
```

- [SPARC M10-4S]
  複数のSPARC M10-4Sとクロスバーボックスで構成されたシステムで停止交換を行うと、XSCFが起動しないことがあります。停止交換の対象となるコンポーネントによって、以下の作業を実施してください。

  - クロスバーボックス（XBBOX）を交換する場合

    以下の作業を実施してください。

    1. **XBBOXの入力電源を切断（AC OFF）します。**
    2. **XSCFユニット（XSCFU）を交換します。**

       このとき、事前に、古いXSCFユニットに差し込まれているmicroSDカードを

新しいXSCFユニットに差し替えてから、XSCFユニットを交換してください。

3. **XBBOXの入力電源を投入（AC ON）します。**

- クロスバーボックス（XBBOX）に搭載されている以下のコンポーネントを交換する場合

  microSDカードの入れ替えは不要です。保守手順は『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』を参照してください。

  - XSCFユニット（XSCFU）、クロスバーユニット（XBU）、XSCFインターフェースユニット（XSCFIFU）、クロスバーバックプレーンユニット（XBBP）、ファンバックプレーンユニット（FANBP）、オペレーションパネル（OPNL）、電源ユニット（PSU）、ファン（FAN）

- SPARC M10-4SまたはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換する場合

  replacefru(8)コマンドを実行し、保守メニューに従って交換してください。

- [SPARC M10-4S]
  replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドを使用した保守が完了したときは、「c」を入力してコマンドを終了させてください。コマンドを終了させずにflashupdate(8)コマンドを実行すると、複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムにおいては、ファームウェアのアップデートが完了したあと、マスタXSCFへ自動的に切り替わらないことがあります。

  [復旧方法]

  replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドを使用した保守が完了したら、「c」を入力してコマンドを終了させてください。ファームウェアのアップデートが完了したあと、マスタXSCFへ自動的に切り替わらない場合は、マスタXSCFでswitchscf(8)コマンドを実行し、マスタXSCFを切り替えてください。

- XSCFシェルまたはXSCF Webを使用して設定に関する操作をしているときにXSCFのリセットや切り替えが行われると、XSCFに設定が保存されないことがあります。XSCFのリセット完了後または切り替え完了後に、XSCFシェルまたはXSCF Webを使用して、設定が保存されているか確認してください。設定が保存されていない場合は、再度、設定操作を実施してください。

制限事項

- setpcl(8)コマンドの-sオプションで設定されるno-memは、現時点ではサポートされていません。
- XSCFとハイパーバイザ間のAlive監視機能はサポートされていません。XSCFとハイパーバイザ間のAlive監視機能は、setpparmode(8)コマンドを使用しても、有効／無効を設定できません。
- [SPARC M10-4S]
  2台以上で構成されたSPARC M10-4Sで、制御ドメインコンソール接続中にXSCFの切り替えが発生したあと、切り替わったマスタXSCFに制御ドメインコンソールを接続しなおそうとすると、すべてのSPARC M10-4Sの筐体が再起動するまで制御ドメインコンソールに接続できないことがあります。

  XSCFの故障が原因ですべてのXSCFが再起動できていない場合は、再度、制御ドメインコンソールに接続してください。制御ドメインコンソールに接続できない場合は、故障しているXSCFユニットまたはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換してください。

- [SPARC M10-4S]
  2台以上で構成されたSPARC M10-4Sで、あるXSCFの故障のためにすべてのXSCFが再起動できていない場合、poweroff(8)コマンドやreset(8)コマンドを実行しても、正常に動作しないことがあります。

  物理パーティション（PPAR）の電源を切断する場合は、PPARの制御ドメインにログインしてOracle Solarisのshutdownコマンドを実行して、その後、XSCFファームウェアのpoweroff -fコマンドを使用してPPARの電源を切断してください。この状態でreset(8)コマンドは使用できません。

- replacefru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの交換は、現時点ではサポートされていません。クロスバーボックスの交換方法は「第6章 SPARC M10-4Sハードウェアに関する情報」の「クロスバーボックスの交換に関する制限事項」を参照してください。

- addfru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの増設は、現時点ではサポートされていません。クロスバーボックスの増設方法は「第6章 SPARC M10-4Sハードウェアに関する情報」の「拡張接続用ラック2の増設に関する制限事項」を参照してください。

- [SPARC M10-4S]
  複数の物理パーティション（PPAR）で構成されたシステムに対して、poweron(8)コマンドですべてのPPARの電源を投入するとき、PPARを指定した電源投入は、-aを指定した一括電源投入よりも起動時間がかかります。

- [SPARC M10-4S]
  showhardconf -Mを実行した場合、以下の両方を満たす条件下で1画面ずつ表示できないことがあります。showhardconf -Mを実行しないでください。

  - 2BB以上で構成されたシステム
  - 1台以上のSPARC M10-4Sが、rebootxscf(8)コマンドによるXSCFリセット中のため、通信できない状態にある

- [SPARC M10-1]
  物理パーティション（PPAR）の電源が投入されている状態で、XCP 2070版以前のファームウェアにアップデートすると、論理ドメインが停止することがあります。

  必ず、物理パーティション（PPAR）の電源が切断されている状態で、ファームウェアをアップデートしてください。この不具合の詳細は、「XCP 2070で解決された不具合」の「RTIF2-131004-001」を参照してください。

- XCP 2271以前の版数を使用している場合、setldap(8)コマンドで指定したLDAPサーバ、またはXSCF Webの [XSCF] - [Settings] - [User Manager] - [LDAP] で指定したLDAPサーバで管理されているXSCFのユーザーアカウントのユーザー権限を、XSCF Webの [XSCF] - [Settings] - [User Manager] - [Account] で表示される画面上で設定できません。
  XSCFシェルにログインして、setprivileges(8)コマンドでユーザー権限を設定してください。

- SSH、Telnet、またはXSCF WebでXSCFにログインしているユーザーアカウントをdeleteuser(8)コマンドまたはXSCF Webの [Settings] - [User Manager] - [Account] メニューで削除しようとしても、エラーが発生し削除できません。ユーザーアカウントを削除する場合は、who(1)コマンドまたはXSCF Webの [Settings] - [User Manager] - [Account] メニューを使用して、対象のユーザーアカウントがXSCFにログインしていないことを確認してから削除してください。

また、setsnmp(8)、setsnmpusm(8)、setsnmpvacm(8)の各コマンド、またはXSCF Webの [SNMP] または [SNMP Security] メニューでSNMPの設定を行ったユーザーアカウントを、deleteuser(8)コマンドまたはXSCF Webの [Settings] - [User Manager] - [Account] メニューで削除しようとしても、エラーが発生し削除できません。rebootxscf -aコマンドを実行し、いったん、すべてのXSCFをリセットしてから削除してください。

XCP 2350の不具合と回避方法

XCP 2350で発生しうるXCPの不具合については、「XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法」を、XCP 2350で解決されたXCPの不具合については、「XCP 2350で解決された不具合」を参照してください。

第3章

ソフトウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10 システムのソフトウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
- XCPに関する不具合と回避方法
- Oracle Solarisに関する不具合と回避方法

留意点および制限事項

内蔵SASディスクドライブとOracle Solaris MPxIOの設定に関する留意点

SPARC M10システムの内蔵SASディスクは、Oracle Solaris MPxIOの設定を有効化して利用することを推奨します。

理由

内蔵SASコントローラーと内蔵SASディスク間の通信路が故障などで縮退した場合でもディスクへのアクセスが継続できるため、冗長性を高めることができます。
なお、Enhanced Support Facility 5.0以降では、同梱されたツールを操作してMPxIOの有効化を設定できます。

注－Enhanced Support Facility（ESF）は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10システムだけでサポートされます。

対象ドライブ

Oracle Solaris MPxIOの設定の要否は、SPARC M10システムに搭載される内蔵SASディスク、SSDのプロダクト名、およびOracle Solarisのバージョンにより異なります。表 3-1のとおりです。

表 3-1　内蔵SASディスクおよびSSDのMPxIO設定の要否

製品名	ベンダー名	MPxIO設定の要否		
富士通型名／Oracle型名	プロダクト名	Oracle Solaris 10 1/13	Oracle Solaris 11.1	Oracle Solaris 11.2以降
600GB SAS ディスクドライブ	TOSHIBA	必要	必要	不要 (*1)
SPME3A11*/ 7105508, 7106318(*3) 7105571, 7106322(*4)	MBF2600RC(*5) AL13SEB600(*5) AL13SEB600AL14SE			
900GB SAS ディスクドライブ	TOSHIBA	必要	必要	必要
SPME3B11*/ 7111257, 7111260(*3) 7111261, 7111262(*4)	AL13SEB900(*5) AL13SEB900AL14SE			
100GB SAS SSD	TOSHIBA	必要	必要	不要 (*1)
SPME3Y11*/ 7105509, 7106319(*3) 7105572, 7106323(*4)	MK1001GRZB(*5)			
200GB SAS SSD	TOSHIBA	必要	必要	不要 (*1)
SPME3Y21*/ 7105510, 7106320(*3) 7105573, 7106324(*4)	MK2001GRZB(*5)			
200GB SAS SSD	TOSHIBA	必要	必要	必要
SPME3Y22*/ 7107810, 7107814(*3) 7107811, 7107815(*4)	PX02SMF020(*5)			
400GB SAS SSD	TOSHIBA	必要	必要	必要
SPME3Y31*/ 7107812, 7107816(*3) 7107813, 7107817(*4)	PX02SMF040(*5)			
400GB SAS SSD	TOSHIBA	必要	必要	必要
SPME3Y32*/ 7115093, 7115094(*3) 7115095, 7115096(*4)	PX04SMB04FUJ400G(*5)			
800GB SAS SSD	TOSHIBA	必要	必要	必要

表 3-1　内蔵SASディスクおよびSSDのMPxIO設定の要否 (続き)

製品名 富士通型名／Oracle型名	ベンダー名 プロダクト名	MPxIO設定の要否 Oracle Solaris 10 1/13	Oracle Solaris 11.1	Oracle Solaris 11.2以降
SPME3Y41*/ 7119191, 7119192(*3) 7119187, 7119188(*4)	PX04SMB08FUJ800G (*5)			
内蔵ハードウェアRAID設定時		不要 (*2)	不要 (*2)	不要 (*2)

*1: Oracle Solarisのデフォルトで MPxIOが有効となっているため、設定は不要です。
*2: 内蔵ハードウェアRAIDはMPxIO設定対象外のため、設定は不要です。
*3: 工場搭載出荷用。
*4: フィールド増設用。
*5: scsi_vhci.confに設定するプロダクト名です。600GB SASディスクドライブは、2つとも設定してください。

内蔵SASディスクとSSDのプロダクト名、ベンダー名、MPxIO状態の確認

次の手順で、SPARC M10システムの内蔵SASディスクまたはSSDのプロダクト名、ベンダー名、デバイスパス名を確認したあと、表 3-1を参照してMPxIOの設定要否を判断してください。
すでにMPxIOが有効化されている場合、内蔵SASディスクまたはSSDのデバイスパス名に「scsi_vhci」の文字列が表示されています。

- **MPxIO設定が有効な場合**
  以下の例では、デバイスパス名に「scsi_vhci」が表示されているため、MPxIO設定が有効です。

```
# format
Searching for disks...done
AVAILABLE DISK SELECTIONS:
0. c0t50000394281b5310d0 <TOSHIBA-MBF2600RC-3706 cyl 64986 alt 2 hd 27 sec 668>
   論理デバイスパス名          ベンダー名   プロダクト名
  /scsi_vhci/disk@g50000394281b5310
  物理デバイスパス名
  /dev/chassis/FUJITSU-BBEXP. 500000e0e06d31bf/03N0_HDD00/disk
.....
```

- **MPxIO設定が無効な場合**
  以下の例では、デバイスパス名に「scsi_vhci」が表示されていないため、MPxIO設定が無効です。

```
# format
Searching for disks...done
AVAILABLE DISK SELECTIONS:
0. c2t50000394281B5312d0 <TOSHIBA-MBF2600RC-3706 cyl 64986 alt 2 hd 27 sec 668>
   論理デバイスパス名            ベンダー名   プロダクト名
  /pci@8800/pci@4/pci@0/pci@0/scsi@0/iport@f/disk@w50000394281b5312,0
  物理デバイスパス名
.....
```

MPxIOを有効に設定する方法

本設定は、管理者権限があるユーザーでログインしてから行ってください。

1. **無効となっている内蔵SASディスクまたはSSDの情報（ベンダー名、プロダクト名）を追加します。**

   - **Oracle Solaris 11以降の場合**

     /etc/driver/drvフォルダにあるscsi_vhci.confファイルに無効となっている内蔵SASディスクまたはSSDの情報（ベンダー名、プロダクト名）を追加します。

     /etc/driver/drvフォルダにscsi_vhci.confファイルがない場合は、/kernel/drv/scsi_vhci.confをコピーして使用してください。

     scsi_vhci.confファイルの設定方法の詳細は、オンラインマニュアルを参照してください。

```
scsi-vhci-failover-override ="TOSHIBA MBF2600RC", "f_sym",
                             ベンダー名 プロダクト名
                             "TOSHIBA AL13SEB600", "f_sym";
                             ベンダー名 プロダクト名
```

   - **Oracle Solaris 10の場合**

     /kernel/drv/scsi_vhci.confファイルへ、無効となっている内蔵SASディスクまたはSSDの情報（ベンダー名、プロダクト名）を追加します。

```
device-type-scsi-options-list ="TOSHIBA MBF2600RC", "sym-opt",
                               ベンダー名 プロダクト名
                               "TOSHIBA AL13SEB600", "sym-opt";
                               ベンダー名 プロダクト名

sym-opt = 0x1000000;
```

2. **stmsbootコマンドでMPxIOを有効化します。**
   stmsbootコマンドの詳細は、オンラインマニュアルを参照してください。

```
# stmsboot -D mpt_sas -e
```

   以下のようなメッセージが出力された場合は、続けて、stmsboot -uコマンドを実行します。

```
# stmsboot -D mpt_sas -e
STMS is already enabled. No changes or reboots needed
# stmsboot -u
```

stmsbootコマンドを実行すると、ドメインのシステムが再起動され、内蔵SASディスクまたはSSDのMPxIOが有効となります。再起動後、対象のデバイスパス名が変更されます。

アプリケーションなどでデバイスパス名を直接設定している場合は、変更する必要があります。

3. **MPxIOが有効となったことを確認します。**
   MPxIOが有効の場合、デバイスパス名に「scsi_vhci」の文字列が表示されます。

```
# format
Searching for disks...done
AVAILABLE DISK SELECTIONS:
0. c0t50000394281b5310d0 <TOSHIBA-MBF2600RC-...>
   論理デバイスパス名          ベンダー名    プロダクト名
  /scsi_vhci/disk@g50000394281b5310
  物理デバイスパス名
```

MPxIO化した内蔵SASディスクまたはSSDにZFSのシステムボリュームをインストールしている場合は、ボリューム状態が正常であることを確認します。

```
# /usr/sbin/zpool status
...
```

SPARC M10システムのOracle Solaris 11.2へのアップデートに関する留意点

MPxIO有効化に関する留意点

Oracle Solaris 11.1からOracle Solaris 11.2以降へアップデートする場合、内蔵SASディスクまたはSSDのデバイスパス名が変更されることがあります。デバイスパス名が変更されてもOracle Solarisの起動はできますが、アプリケーションやバックアップソフトなどで、内蔵SASディスクやSSDのデバイスパスを直接指定している場合、デバイスパス名の変更に伴って、デバイスパスが参照できなくなる不具合が発生することがあります。

原因

Oracle Solaris 11.1からOracle Solaris 11.2へアップデートすると、内蔵SASディスクまたはSSDの、MPxIOのデフォルトの設定が無効から有効に変更されることが原因です。対象ディスクは表 3-2を参照してください。また、デバイスパスの変更例は、表 3-3を参照してください。

表 3-2　内蔵SASディスクおよびSSDにおけるMPxIOデフォルト設定

製品名	ベンダー名	MPxIOデフォルト設定		
富士通型名／Oracle型名	プロダクト名	Oracle Solaris 10 1/13	Oracle Solaris 11.1	Oracle Solaris 11.2以降
600GB SAS ディスクドライブ	TOSHIBA	無効	無効	有効
SPME3A11*/ 7105508, 7106318(*2) 7105571, 7106322(*3)	MBF2600RC AL13SEB600 AL13SEB600AL14SE			
900GB SAS ディスクドライブ	TOSHIBA	無効	無効	無効
SPME3B11*/ 7111257, 7111260(*2) 7111261, 7111262(*3)	AL13SEB900 AL13SEB900AL14SE			
100GB SAS SSD	TOSHIBA	無効	無効	有効
SPME3Y11*/ 7105509, 7106319(*2) 7105572, 7106323(*3)	MK1001GRZB			
200GB SAS SSD	TOSHIBA	無効	無効	有効
SPME3Y21*/ 7105510, 7106320(*2) 7105573, 7106324(*3)	MK2001GRZB			
200GB SAS SSD	TOSHIBA	無効	無効	無効
SPME3Y22*/ 7107810, 7107814(*2) 7107811, 7107815(*3)	PX02SMF020			
400GB SAS SSD	TOSHIBA	無効	無効	無効
SPME3Y31*/ 7107812, 7107816(*2) 7107813, 7107817(*3)	PX02SMF040			
400GB SAS SSD	TOSHIBA	無効	無効	無効
SPME3Y32*/ 7115093, 7115094(*2) 7115095, 7115096(*3)	PX04SMB04FUJ400G			
800GB SAS SSD	TOSHIBA	無効	無効	無効
SPME3Y41*/ 7119191, 7119192(*2) 7119187, 7119188(*3)	PX04SMB08FUJ800G			

*1: 内蔵ハードウェアRAIDはMPxIO設定対象外のため、設定は不要です。
*2: 工場搭載出荷用。
*3: フィールド増設用。

表 3-3　MPxIO有効化前後のデバイスパス変更例

	MPxIO有効化前のデバイスパス名	MPxIO有効化後のデバイスパス名
物理デバイスパス名	/pci@8800/pci@4/pci@0/pci@0/scsi@0/iport@f/disk@w50000394281b5312,0	/scsi_vhci/disk@g50000394281b5310
論理デバイスパス名	/dev/rdsk/c2t50000394281B5312d0	/dev/rdsk/c0t50000394281b5310d0

なお、Oracle Solaris 11.2へアップデートする前に、SPARC M10システムの内蔵SASディスクまたはSSDのMPxIOを手動で有効化している場合、デバイスパス名は変更されません。

対処

Oracle Solaris 11.2にアップデート後、以下の対処を実施してください。

- **物理デバイスパス名を変更可能な場合**
  「デバイスパスの確認方法」で物理デバイスパス名を確認します。バックアップソフトやアプリケーションなどで、内蔵SASディスクまたはSSDのデバイスパス名を直接指定している箇所を、確認したデバイスパス名に変更します。
- **物理デバイスパス名を変更できない場合**
  以下のコマンドを実行し、内蔵SASディスクおよびSSDの、MPxIOの設定を強制的に無効にします。

```
# stmsboot -D mpt_sas -d
```

「デバイスパスの確認方法」

以下の手順で、SPARC M10システムの内蔵SASディスクまたはSSDのデバイスパス名、ベンダー名、プロダクト名、MPxIOの有効化／無効化の状態を確認できます。すでにMPxIOが有効化されている場合、内蔵SASディスクまたはSSDの物理デバイスパス名にscsi_vhciの文字列が表示されます。

- **内蔵ディスクのMPxIOが有効化されている場合の表示例**
  物理デバイスパス名に「scsi_vhci」の文字列が含まれるため、MPxIOは有効です。
  formatコマンドでは、論理デバイスパス名を一部省略して表示しています。実際の論理デバイスパス名は、「/dev/rdsk」付加したパス名となります。

```
# format
Searching for disks...done
AVAILABLE DISK SELECTIONS:
0. c0t50000394281b5310d0 <TOSHIBA-MBF2600RC- 3706 cyl 64986 alt 2 hd 27 sec 668>
   論理デバイスパス名          ベンダー名    プロダクト名
/scsi_vhci/disk@g50000394281b5310
物理デバイスパス名
/dev/chassis/FUJITSU-BBEXP. 500000e0e06d31bf/03N0_HDD00/disk
```

- **内蔵ディスクのMPxIOが有効化されていない場合の表示例**
  物理デバイスパス名に「scsi_vhci」の文字列が含まれないため、MPxIOは無効です。
  formatコマンドでは、論理デバイスパス名を一部省略して表示しています。実際の論理デバイスパス名は、「/dev/rdsk」を付加したパス名となります。

```
# format
Searching for disks...done
AVAILABLE DISK SELECTIONS:
0. c2t50000394281B5312d0 <TOSHIBA-MBF2600RC-3706 cyl 64986 alt 2 hd 27 sec 668>
   論理デバイスパス名          ベンダー名   プロダクト名
/pci@8800/pci@4/pci@0/pci@0/scsi@0/iport@f/disk@w50000394281b5312,0
物理デバイスパス名
/dev/chassis/FUJITSU-BBEXP. 500000e0e06d31bf/03N0_HDD00/disk
```

beadmによるブート切り替えの注意事項

内蔵SASディスクまたはSSDにOracle Solaris 11.1以降がインストールされた環境で、beadmコマンドによるブート環境の切り替えやpkgコマンドによるブート環境の切り替えが、エラーメッセージを表示して失敗することがあります。

- **メッセージ例1**

```
# beadm activate S11U1SRU20B04-z_stress-2.10-1
Error while accessing "/dev/rdsk/c2t500003942823F352d0s0":
No such file or directory
Unable to activate S11U1SRU20B04-z_stress-2.10-1.
Error installing boot files.
```

- **メッセージ例2**

```
# beadm activate S11U1SRU20B04-z_stress-2.10-1
....
Error while accessing "/dev/rdsk/c2t500003942823F352d0s0":
No such file or directory
Unable to activate S11U1SRU20B04-z_stress-2.10-1.
Error installing boot files.
....
```

原因

内蔵SASディスクまたはSSDをMPxIO化したときに、beadmおよびpkgに対して、MPxIOデバイスパスが正しく引き継がれなかったことが原因です。

対処

下記のコマンドを実行したあとで、ブート環境の切り替えコマンドを再度実行してください。

```
# /usr/sbin/zpool status
```

EFI（GPT）ラベル付きディスクのサポートに関する留意点

- Oracle Solarisインストール時のディスクラベルのデフォルトが VTOC（SMI）ラベルからEFI（GPT）ラベルに変更されました。VTOC（SMI）ラベル付きディスクが必要な場合は、Oracle Solarisのformat -eコマンドでVTOC（SMI）ラベルを適用してから、Oracle Solarisをインストールしてください。formatコマンドの詳細は、Oracle Solarisのリファレンスマニュアルを参照してください。
  また、VTOC（SMI）ラベル付きディスクとするために、Oracle Solarisインストールメニューの [Solaris スライス] 画面では、[ディスク上のスライスを使用する] を必ず選択してください。

```
---------------------------------------------------------------------------
                    Solaris スライス: 6.0GB unknown ﾌﾞｰﾄ

Oracle Solaris は、ディスク全体またはディスク上のスライスにインストールで
きます。

ディスク上に次のスライスが見つかりました。

スライス        #    ｻｲｽﾞ(GB) スライス        #    ｻｲｽﾞ(GB)
------------------------ ------------------------
Unused        0        0.1 Unused        5        0.0
Unused        1        0.1 rpool         6        5.7
Unused        3        0.0 Unused        7        0.0
Unused        4        0.0 backup        2        6.0

                          ディスク全体を使用する
                       ディスク上のスライスを使用する

Esc-2_継続 Esc-3_戻る Esc-6_ヘルプ Esc-9_終了
---------------------------------------------------------------------------
```

- EFI（GPT）ラベル付きディスクを使用する場合、仮想ディスクでは、2 TiB以上のディスクからのOracle Solarisの起動はサポートされていません。
- XCP 2330より前の版数でEFI（GPT）ラベル付きディスクを使用する場合、仮想ディスクでは、第2GPTヘッダーはサポートされていません。

Oracle VM Server for SPARCに関する留意点

- Oracle VM Server for SPARCで論理ドメインを再構成したあとやldm unbind-domain/ldm bind-domainコマンドを実行したあと、ldm add-spconfigコマンドを実行する前に、XSCFファームウェアのreset(8)コマンドでゲストドメインを操作すると、指定したゲストドメイン以外のゲストドメインがリセットされることがあります。または、指定したゲストドメインがリセットされません。ldm add-spconfigコマンドで論理ドメインの構成を保存してください。保存する前に

ゲストドメインをリセットする場合は、XSCFからではなく、制御ドメインから ldm stop-domainコマンドを実行してください。

- 次回起動時の論理ドメインの構成を指定する場合は、ldm add-spconfig -rではなく、ldm set-configコマンドを使用してください。
  ldm add-spconfig -rコマンドを使用して、次回起動時の論理ドメインの構成を指定した場合、XSCFファームウェアのreset(8)コマンドでゲストドメインを操作すると、指定したゲストドメイン以外のゲストドメインがリセットされることがあります。

- 制御ドメインのldmdサービス（svc:/ldoms/ldmd:default）は、必ず起動してください。

- XCP 2230以降が適用されたSPARC M10システム、およびSysFW 8.4またはSysFW 9.1以降が適用されたSPARC Tシリーズ／SPARC Mシリーズでは、EFI GPTディスクラベルが付いたブートディスクをサポートしています。しかし、XCP 2221以前が適用されたSPARC M10システムではEFI GPTディスクラベルが付いたブートディスクはサポートしていないため、XCP 2230以降が適用されたSPARC M10システム、およびSysFW 8.4またはSysFW 9.1以降が適用されたSPARC Tシリーズ／SPARC MシリーズからXCP 2221以前が適用されたSPARC M10システムへのマイグレーションは行わないでください。
  ブートディスクにEFI GPTディスクラベルが付いているかどうかは、ブートディスクのrawデバイスに対してOracle Solarisのdevinfoコマンドを実行することにより確認できます。

  - EFI GPT ディスクラベルが付いていない場合

```
# devinfo -i /dev/rdsk/c2d0s0
/dev/rdsk/c2d0s0        0       0       73728   512     2
```

  - EFI GPT ディスクラベルが付いている場合

```
# devinfo -i /dev/rdsk/c1d0s0
devinfo: /dev/rdsk/c1d0s0: This operation is not supported on EFI labeled
devices
```

- Oracle VM Server for SPARC 3.2の、ldm list-rsrc-groupコマンド、ldm remove-core -gコマンド、およびldm remove-memory -gコマンドは未サポートです。詳細は『Oracle VM Server for SPARC 3.2 管理ガイド』を参照してください。

- Oracle VM Server for SPARC3.2 以降、XSCFファームウェアで物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能を有効に設定した場合、論理ドメインへのメモリの割り当ては256MB単位で指定できます。いっぽう、PPAR DR機能を無効に設定した場合は4MB単位で指定できます。

- Oracle VM Server for SPARC 3.1以降、かつXCP 2230以降のシステムにおいて、物理パーティション（PPAR）（PPAR #A）のシステムディスクを、別のPPAR（PPAR #B）で使用していたシステムディスクに切り替えた場合、XSCFに保存されているPPAR #Aのドメイン構成情報がPPAR #Bのドメイン構成情報に上書きされてしまうことがあります。
  システムディスクを、別のPPARで使用していたシステムディスクに切り替えて起動する場合は、切り替え前のシステムディスクからOracle VM Server for SPARCをアンインストールしてください。切り替えが終わったら、システムディスクに

Oracle VM Server for SPARCを再度インストールしてください。

別の装置にシステムディスクを接続して使用する場合や、XSCFに保存されているドメイン構成情報をrestoreconfig(8)コマンドを使用して復元した場合も同様の対処が必要です。

- Oracle VM Server for SPARC 3.3以降のシステムでは、物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）でシステムボードの削除を実施した場合、各論理ドメインにdegraded状態のCPUソケット制約が追加されることがあります。これは、PPAR DR実施前のCPUソケット使用状況を保存するための動作であり、不具合ではありません。
  CPUソケット制約を設定していない論理ドメインに対してdegraded状態のCPUソケット制約が表示された場合には、無視してください。

  CPUソケット制約を使用している論理ドメインは、deleteboardコマンドでPPAR DRを実施することによってCPUソケット制約がdegraded状態になります。また、CPUソケット制約を指定していないリソースが、論理ドメインに割り当てられている可能性があります。

  故障などによりビルディングブロック（PSB）を交換する場合は、システムボードを追加したあと、ldm set-socket --restore-degradedコマンドを実行することでCPUソケット制約を復旧できます。システムボードの削除のみを実施する場合は、必要に応じてldm set-socketコマンドを実行し、CPUソケット制約を再設定してください。

  CPUソケット制約の詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「8.14　CPUソケットに関連付けられた論理ドメインのリソースを管理する」を参照してください。

  - システムボード削除前

```
# ldm list-socket
CONSTRAINTS
SOCKET
    TENANT  VCPUS CORES SOCKET_ID GROUP
    primary 8     4     4         /BB1
      :
```

  - システムボード削除後

```
# ldm list-socket
-------------------------------------------------------------------------------
Notice: the system is running a degraded configuration because some
required resources were removed by Physical DR.
-------------------------------------------------------------------------------
CONSTRAINTS
    DOMAIN              SOCKET_ID      STATE
    primary* (degraded) 4              active
    dom00* (degraded)   0, 3, 4, 5, 6  active
SOCKET
    TENANT  VCPUS CORES SOCKET_ID GROUP
    primary 8     4     4         /BB1
      :
-------------------------------------------------------------------------------
```

- Oracle VM Server for SPARC 3.3以降では、ldm init-systemコマンドで論理ドメイン構成を復元した場合に、CPUソケット制約を設定していなくても以下のようなメッセージが出力され、リソースのバインドに失敗することがあります。
  [例]

```
# ldm bind-domain XXXX
Not enough free memory in specified FJ sockets to meet the request.
Domain XXXX has FJ socket resource constraints for recovery.
Use 'ldm set-socket socket_id= XXXX' to clear.
```

  上記のメッセージが出力された場合は、メッセージに従って、ldm set-socketコマンドでCPUソケット制約をクリアしたあと、再度、リソースをバインドしてください。

  [例]

```
# ldm set-socket socket_id= XXXX
# ldm bind-domain XXXX
```

- 仮想SCSI Host Bus Adapter（vHBA）を割り当てられたゲストドメインは、オートブート機能を無効にして利用してください。その後、論理ドメインの構成情報も保存してください。
  [設定方法]

```
primary# ldm set-variable auto-boot¥?=false domain-name
primary# ldm add-spconfig config-name
```

Oracle VM Server for SPARCのライブマイグレーションに関する留意点

- Oracle VM Server for SPARCでldm migrate-domainコマンドを実行し、ライブマイグレーションを行った場合、XSCFで以下の問題が発生します。
  - showdomainstatus(8)コマンドを実行すると、移行先のゲストドメインのステータスが「Unknown」で表示されます。
    移行先の制御ドメインからldm add-spconfigコマンドを実行して構成情報を保存すると、showdomainstatus(8)コマンドでステータスが正常に表示されるようになります。
  - ライブマイグレーションを実行したあと、移行元でshowdomainstatus(8)を実行すると、移行済みで存在しないゲストドメインのステータスが「Host stopped」で表示されます。
  - poweroff(8)コマンドを使用して物理パーティション（PPAR）の電源を切断した場合、いずれかのゲストドメインが正しくシャットダウンされないことがあります。
  - reset(8)コマンドを使用してゲストドメインをリセットした場合、指定したゲストドメイン以外のゲストドメインがリセットされることがあります。ゲストド

メインをリセットする場合は、XSCFからではなくゲストドメインから実行してください。

- SNMP設定している場合、Trap通知されたゲストドメイン名が誤っていることがあります。

- ldm migrate-domainコマンドによるマイグレーションでは、移行元の論理ドメインがOpenBoot PROMの状態の場合はサポートされません。
  移行元の論理ドメインを以下のどちらかの状態にしたうえで、ldm migrate-domainコマンドによるマイグレーションを実施してください（CR 15858731）。
  - 停止状態（bound状態）
  - Oracle Solarisを起動した状態

- ライブマイグレーションの対象となる論理ドメインが存在する物理パーティションに、Oracle Solaris 11.3以降がインストールされている論理ドメイン（制御ドメインを除く）およびOracle Solarisカーネルゾーンがあるかどうかを、ライブマイグレーションを実施する前に確認してください。
  Oracle Solaris 11.3以降がインストールされている論理ドメインおよびOracle Solarisカーネルゾーンが存在する場合は、Oracle Solaris 11.3以降がインストールされているすべての論理ドメインおよびOracle Solarisカーネルゾーンに対して、ライブマイグレーションを実施する前に、以下の手順を実施してください。

  1. **/etc/systemファイルに以下の行を追加します。**

```
set uhrt_enable = 0x0
```

  2. **該当する論理ドメインおよびOracle Solarisカーネルゾーンを再起動します。**

- cpu-archプロパティーに設定可能なsparc64-class1は、Oracle VM Server for SPARC 3.1.1からサポートされます。cpu-archプロパティーおよびその設定値の詳細は、お使いのOracle VM Server for SPARCの『リファレンスマニュアル』を参照してください。

- 物理パーティションのCPU動作の種類およびOracle VM Server for SPARCのバージョンによって、ライブマイグレーションが可能なcpu-archプロパティーの設定値が異なります。以下の表を参照してください。なお、物理パーティションのCPU動作の種類の詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「7.2.1　物理パーティションに搭載されたCPUとCPU動作モード」を参照してください。

表 3-4　ライブマイグレーション可能なcpu-archプロパティー値（Oracle VM Server for SPARC 3.1.1以降の場合）

移行元 ＼ 移行先	SPARC64 X+で動作	SPARC64 X互換で動作 SPARC64 Xで動作
SPARC64 X+で動作	generic、native、sparc64-class1	generic、sparc64-class1
SPARC64 X互換で動作 SPARC64 Xで動作	generic、sparc64-class1	generic、native、sparc64-class1

表 3-5　ライブマイグレーション可能なcpu-archプロパティー値（Oracle VM Server for SPARC 3.1および3.1.0.1の場合）

移行元 ＼ 移行先	SPARC64 X+で動作	SPARC64 X互換で動作 SPARC64 Xで動作
SPARC64 X+で動作	generic、native	generic
SPARC64 X互換で動作 SPARC64 Xで動作	generic	generic、native

表 3-6　ライブマイグレーション可能なcpu-archプロパティー値（Oracle VM Server for SPARC 3.0の場合）

移行元 ＼ 移行先	SPARC64 X+で動作	SPARC64 X互換で動作 SPARC64 Xで動作
SPARC64 X+で動作	native	なし
SPARC64 X互換で動作 SPARC64 Xで動作	なし	generic、native

- SPARC M12とSPARC M10でのライブマイグレーションが可能なcpu-archプロパティーの設定値は、表 3-7を参照してください。

表 3-7　SPARC M12とSPARC M10でライブマイグレーション可能なcpu-archプロパティー値

移行元 ＼ 移行先	SPARC M12	SPARC M10
SPARC M12	generic sparc64-class1 native	generic sparc64-class1
SPARC M10	generic sparc64-class1	generic sparc64-class1 native(*1)

*1:　詳細は、表 3-4、表 3-5、および表 3-6を参照してください。

SPARC M12とSPARC M10の間で、cpu-arch=sparc64-class1を設定した論理ドメインのライブマイグレーションを実行する場合は、以下の対処を行ってください。

1. **論理ドメインの/etc/systemファイルに、以下の行を追加します。**

```
set enable_1ghz_stick = 1
set uhrt_enable=0x0
```

2. **上記を追加した論理ドメインを再起動します。**

注ー以下の2つの条件を両方とも満たす場合は、本対処は不要です。
- SPARC M10の制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.5以降が適用されている
- 論理ドメインにSRU11.3.23.5.0以降が適用されている

- XCP 2230以降が適用されたSPARC M10システムから、カーネルゾーンが動作しているドメインをライブマイグレーションした場合に、以下のようなメッセージが出力され、ライブマイグレーションに失敗します。

```
# ldm migrate-domain ldg1 root@target-name
Target Password:
Failure occurred while preparing domain ldg1 for suspend
operation
Live migration failed because Kernel Zones are active.
Stop Kernel Zones and retry.
Timeout waiting for domain ldg1 to suspend
Domain Migration of domain ldg1 failed, domain suspend failure.
Domain Migration of LDom ldg1 failed
```

カーネルゾーンが動作しているドメインのライブマイグレーションを実施する場合は、カーネルゾーンをあらかじめ停止してから実施してください。

- XCP 2210以降が適用されたSPARC M10システムから、XCP 2092以前が適用されたSPARC M10システムへのライブマイグレーションを行うと、以下のようなメッセージが出力され、ライブマイグレーションに失敗します。

```
primary# ldm migrate ldg1 root@target-name
Target Password:
Domain ldg1 is using features of the system firmware that are not supported in
 the version of the firmware running on the target machine.
Domain Migration of LDom ldg1 failed.
```

XCP 2210以降が適用されたSPARC M10システムからライブマイグレーションを行う場合は、移行先のSPARC M10システムをXCP 2210以降にアップデートしてください。

- ファームウェア版数によるライブマイグレーションの可否については、以下の表を参照してください。

表 3-8　ライブマイグレーション可能なファームウェア版数

移行先	SPARC M12	SPARC M10	SPARC M10	SPARC M10	SPARC Tシリーズ Mシリーズ	SPARC Tシリーズ Mシリーズ
移行元		XCP 2230以降	XCP 2210以降 XCP 2230より前	XCP 2092以前	SysFW 8.4 以降	SysFW 8.3 以前
SPARC M12	利用可	利用可(*2)	利用可(*2)	利用不可	利用可(*2)	利用不可
SPARC M10 (XCP 2230以降)	利用可(*2)	利用可	利用可(*3)	利用不可	利用可(*3)	利用不可
SPARC M10 (XCP 2210以降 XCP 2230より前)	利用可(*2)	利用可	利用可	利用不可	利用可(*3)	利用可(*3)
SPARC M10 (XCP 2092以前)	利用可(*2)	利用可	利用可	利用可	利用可(*3)	利用可(*3)

表 3-8　ライブマイグレーション可能なファームウェア版数 (続き)

移行先	SPARC M12	SPARC M10	SPARC M10	SPARC M10	SPARC Tシリーズ Mシリーズ	SPARC Tシリーズ Mシリーズ
移行元		XCP 2230以降	XCP 2210以降 XCP 2230より前	XCP 2092以前	SysFW 8.4 以降	SysFW 8.3 以前
SPARC Tシリーズ Mシリーズ(*1) (SysFW 8.4以降)	利用可(*2)	利用可(*3)	利用可(*3)	利用不可	利用可	利用不可
SPARC Tシリーズ Mシリーズ(*1) (SysFW 8.3以前)	利用可(*2)	利用可(*3)	利用可(*3)	利用不可	利用可	利用可

*1: SPARC M5/M6など、Oracle VM Server for SPARCに対応しているオラクル社のシステムです。
*2: 詳細は、『SPARC M12 プロダクトノート』の「Oracle VM Server for SPARCのライブマイグレーションに関する留意点」を参照してください。
*3: cpu-arch=genericの場合のみライブマイグレーション可能です。

- SPARC M12とSPARC M10の間でライブマイグレーションを実行する場合に、論理ドメインの稼働時間が正しく表示されない場合があります。

  [例]

  SPARC M12では論理ドメインのUPTIMEが6mと表示されます。

```
M12# ldm list-domain
NAME             STATE      FLAGS   CONS    VCPU  MEMORY   UTIL  NORM  UPTIME
primary          active     -n-cv-  UART    24    8G       0.8%  0.2%  21d 5h
22m
guest            active     -n----  5000    8     8G       0.6%  0.6%  6m
```

  ライブマイグレーションを実行すると、SPARC M10では論理ドメインのUPTIMEが1h11mと表示されます。

```
M10# ldm list-domain
NAME             STATE      FLAGS   CONS    VCPU  MEMORY   UTIL  NORM  UPTIME
primary          active     -n-cv-  UART    8     8G       0.1%  0.1%  4h 18m
guest            active     -n----  5000    8     8G       0.0%  0.0%  1h 11m
```

Oracle VM Server for SPARCの復旧モード（Recovery Mode）有効時の留意点

- 縮退構成でドメイン構成が復旧された状態で、物理パーティションの動的再構成を使用してシステムボードを追加した場合、追加されたリソースはどの論理ドメインにも自動的には割り当てられません。追加されたリソースを手動で割り当てるか、ldm set-spconfigコマンドで元のドメイン構成を選択したあと、poweron(8)

コマンドおよびpoweroff(8)コマンドを使用して物理パーティションを再起動してください。

- Oracle VM Server for SPARCのバージョンが3.2よりも古い場合、縮退構成でドメイン構成が復旧されたあと、deleteboard(8)コマンドを使用して動的にシステムボード（PSB）を削除すると、deleteboard(8)コマンドが失敗することがあります。縮退構成でドメイン構成が復旧されたあとは、物理パーティションの動的再構成を使用してシステムボードを削除しないでください。
- XCP 2230以降にファームウェアをアップデートし、Oracle VM Server for SPARC 3.1以降でサポートされた復旧モードを有効に設定したあと、XCP 2221以前で作成された論理ドメイン構成情報で物理パーティションを起動した場合、以下のメッセージが物理パーティションのコンソールに出力されることがあります。

```
warning: Configuration 'xxxx' could not be imported from the
system controller.
```

これは、XCP 2221以前で作成された論理ドメイン構成情報には復旧モードが有効に設定されていないためです。制御ドメイン上で、Oracle VM for SPARCのldm add-spconfigコマンドを実行し、論理ドメイン構成情報を保存してください。

SPARC M10における暗号化メソッドのアクセラレーションのサポート

SPARC M10システムでは、Oracle Solaris 11でサポートされている、いくつかの暗号化メソッドに対するアクセラレーションを実装しています。
SPARC M10システムでアクセラレーションがサポートされている暗号化メソッドを、以下の表に示します。

表 3-9　暗号化メソッドのアクセラレーションのサポート

暗号化メソッド	提供OS
RSA	Oracle Solaris 11.2（*1）
DSA	Oracle Solaris 11.2（*1）
DES	Oracle Solaris 11.1
3DES	Oracle Solaris 11.1
AES	Oracle Solaris 11.1
DH	Oracle Solaris 11.2（*1）
SHA1	Oracle Solaris 11.1
SHA256	Oracle Solaris 11.1
SHA384	Oracle Solaris 11.1
SHA512	Oracle Solaris 11.1
SHA224	Oracle Solaris 11.1

*1:　これらのメソッドはSPARC64 X+でさらに機能向上しています。

Openssl を使用する場合の留意点

Oracle SolarisはSPARC M10システム用の暗号化ライブラリを提供します。このライブラリは、OpenSSLのPKCS11エンジンを使うことで利用できます。詳細はopenssl(5)、engine(3openssl)、evp(3openssl)のマニュアルページを参照してください。

なお、以下の点にご注意ください。

- OpenSSLにおいてSPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサの暗号演算ユニットのアクセラレーション機能を動作させるためには、PKCS11エンジンが必要です。
- Oracle SolarisでOpenSSLのPKCS11エンジンを実行させるためには、エンジンでサポートされているダイジェストと暗号メソッドのEVPモデルを有効にしてください。
  - SPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサ用に最適化されたダイジェストメソッドは以下のとおりです。
    SHA1, SHA224, SHA256, SHA384, SHA512
  - SPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサ用に最適化された暗号化メソッドは以下のとおりです。
    DES-CBC, DES-EDE3-CBC, DES-ECB, DES-EDE3
    AES-128-CBC, AES-192-CBC, AES-256-CBC
    AES-128-ECB, AES-192-ECB, AES-256-ECB
    AES-128-CTR, AES-192-CTR, AES-256-CTR

  以下はSPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサで最適化されたAES-256-CBCメソッドを呼び出すコマンドの例です。

```
# openssl speed -engine pkcs11 -evp AES-256-CBC
```

  - Oracle Solaris 11.2から以下の公開鍵暗号化メソッドがSPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサ用に最適化されました。
    RSA512, RSA1024, RSA2048
    DSA512, DSA1024, DSA2048
    以下はSPARC64 X+/SPARC64 Xプロセッサで最適化されたRSA2048メソッドを呼び出すコマンドの例です。

```
# openssl speed -engine pkcs11 rsa2048
```

- OpenSSLライブラリ（libssl、libcrypto）を使用しているアプリケーションで、PKCS11エンジンの最適化されたダイジェストメソッドや暗号メソッドを使うためには、evp(3openssl)で説明されているEVPインターフェースを有効にしてください。

Oracle Solaris 11.3に関する留意点および制限事項

留意点

- Oracle VM Server for SPARCのライブマイグレーションに関する留意事項があります。「Oracle VM Server for SPARCのライブマイグレーションに関する留意点」を参照してください。
- 物理パーティションの動的再構成に関する留意事項があります。『SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド』の「2.5.2　運用時の留意点」を参照してください。
- ZOSS NFSを利用して構築されているOracle Solarisカーネルゾーンのライブマイグレーションを行うと、Oracle Solarisのバグ 20697332が発生する可能性があります。バグ 20697332の詳細は、『Oracle Solaris 11.3 ご使用にあたって』を参照してください。なお、この問題は、SRU11.3.7.5.0以降で修正されています。

制限事項

Boot Pools機能は、現時点ではサポートされていません。

リモート保守サービスに関する留意点

注ーEnhanced Support Facility（ESF）およびRemote Customer Support System（REMCS）は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10システムだけでサポートされます。

ここでは、リモート保守サービスを使用する場合の留意点について説明します。REMCSの設定方法および使用方法については、『Enhanced Support Facilityユーザーズガイド REMCS編』を参照してください。

リモート保守サービスの設定の前に

SPARC M10 システムでリモート保守サービスを使用するには、XSCF WebでREMCSエージェント機能に関する設定を行う必要があります。また、REMCSエージェントでは、XSCFのタイムゾーン情報を使用します。事前に、XSCFシェルで以下の設定を済ませておいてください。

- HTTPS設定を有効にするなど、XSCF Webを使用するために必要な設定
- XSCFのタイムゾーン設定

上記の設定が完了したら、XSCF WebでREMCSエージェント機能に関する設定を行ってください。
なお、XSCF Webの設定、タイムゾーン設定の詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

REMCSエージェント機能のタイムゾーンについて

REMCSエージェントでは、現在システムで設定されているタイムゾーンを使用します。 このため、XSCFでシステムのタイムゾーンを変更した場合、REMCSセンター

の情報を更新するために、定期接続スケジュールを設定しなおしてください。

SNMPに関する留意点

- SNMPv3エージェントを使用する場合、setsnmp(8)コマンドによる認証プロトコルと暗号化プロトコルの設定を行ったあとは、setsnmpusm(8)コマンドによるUser-based Security Model（USM）管理情報の設定、およびsetsnmpvacm(8)コマンドによるView-based Access Control Model（VACM）管理情報の設定も、必ず実施してください。SNMPv3の設定では、認証プロトコルおよび暗号化プロトコルの指定は必須となります。また、setsnmp(8)およびsetsnmpusm(8)コマンドを使用するときは、パスワードの入力が必要になります。
- SNMPマネージャが稼働していないサーバがSNMPv3のinformトラップホストとして登録されている状態で、setsnmp(8)、setsnmpusm(8)、setsnmpvacm(8)を実行した場合に、Agent restart failedというメッセージが表示されることがあります。このメッセージはSNMPエージェントの再起動で異常が発生したことを示すものですが、本メッセージが表示された場合でもSNMPエージェントは正常に稼働しているため、システムへの影響はありません。SNMPマネージャの稼働開始後にトラップホストを登録してください。
- addtraphostまたはaddv3traphostオペランドを指定してsetsnmp(8)コマンドを実行し、16文字以上のホスト名を指定してトラップホストを登録した場合、そのトラップホストに通知されるトラップのUDPアドレスが引き継ぎIPアドレス（仮想IPアドレス）ではなく、XSCF-LANに割り当てられているIPアドレス（物理IPアドレス）になってしまいます。 この問題は、引き継ぎIPアドレスを設定している場合に発生します。
  トラップホストのホスト名が16文字以上の場合は、ホスト名ではなくIPアドレスでトラップホストを登録してください。

  [回避方法]

  すでに16文字以上のホスト名を登録している場合は、remtraphostまたはremv3traphostオペランドを指定してsetsnmp(8)コマンドを実行し、対象のトラップホストを削除したあと、IPアドレスを使用して再登録してください。
- setsnmp(8)コマンドを実行してトラップホストを登録した場合、以下のメッセージが出力されるとがあります。

```
iptables v1.4.7: host/network 'example.com' not found
Try 'iptables -h' or 'iptables --help' for more information.
```

  このメッセージは、登録したトラップホストのホスト名が名前解決されていないことを示します。

  トラップホストは正常に登録されていますが、名前解決されていないため、そのトラップホストへトラップ通知されません。

  setnameserver(8)コマンドを実行し、ネームサーバを設定してから、対象ホスト名の名前解決を行ってください。

SPARC M12/M10 plug-in for Oracle Enterprise Manager Cloud Controlの使用に関する留意点

SPARC M12/M10 Plug-in for Oracle Enterprise Manager Cloud Controlは、Oracle Enterprise Manager Cloud Control 13.1版以降が必要です。
本Plug-in は、Oracle Enterprise Manager Cloud Controlの画面上に、SPARC M12/M10のハードウェアの監視機能を提供します。
SPARC M12/M10 plug-in for Oracle Enterprise Manager Cloud Control、およびインストール手順を含む情報は、以下のダウンロードサイトから入手できます。

- グローバルサイト
  https://updatesite.jp.fujitsu.com/unix/en/download/software/unix_soft/emcc_plug-in/download/index.html
- 国内サイト
  https://updatesite.jp.fujitsu.com/unix/jp/download/software/unix_soft/emcc_plug-in/download/index.html

XCPに関する不具合と回避方法

ここでは、XCPに関する不具合と回避方法をバージョンごとに記載します。

XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法

XCP 2350で発生しうる不具合とこれらの不具合に対する回避方法を、以下の表に示します。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法

RTI番号	**RTIF2-170424-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIカードが接続されたPCIeルートコンプレックスをldm add-ioコマンドで動的に論理ドメインに追加した場合、PCIカードでPCIeのlane degradeが発生することがあります。 lane degradeの発生を確認するには、Oracle Solarisのprtdiagコマンドを実行し、 "Cur Speed/Width" を確認してください
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 当該PCIカードが接続されている論理ドメインを再起動してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-170405-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	マスタXSCF切り替え完了後、rebootxscf -aコマンドまたはsetdateコマンドを実行し、すべてのXSCFの再起動を行うと、その後ハードウェアのエラーを検出できなくなる場合があります。
回避方法	マスタXSCFの切り替えが完了したあと20分待ってから、rebootxscfコマンドまたはsetdateコマンドを実行してください。 [復旧方法] rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-170405-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）が再起動中にpoweroff -fコマンドを実行すると、次回poweronコマンドを実行した際に、エラーが発生してPPARの電源が投入できないことがあります。 [例]PPARの電源が投入できない場合 XSCF> **poweron -p 0** PPAR-IDs to power on :00 Continue? [y|n] :**y** 00 : Not powering on : An internal error has occurred. Please contact your system administrator.
回避方法	poweroff -fコマンドを実行する前に、showpparprogressコマンドで対象PPARの状態を確認してください。 "PPAR reset"が表示されている間は、対象のPPARが再起動中です。 "The sequence of power control is completed."が表示されるまでPPARの再起動は完了していません。 それまでは、poweroff -fコマンドは実行しないでください。 "This PPAR is powered on." または"This PPAR is powered off."が表示されている場合は、PPARの再起動は行われていません。 [例]PPARの再起動が完了した場合 XSCF> **showpparprogress -p 0** PPAR reset　　PPAR#0 [1/13] : CPU Start　　PPAR#0 [13/13] The sequence of power control is completed. XSCF> [復旧方法] システムの入力電源を切断し、30秒あけてから再投入してください。 （AC OFF/ON）

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-170405-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCFのマスタ／スタンバイ切り替え中に[コマンド一覧]にあるコマンドを実行すると、以下の問題が発生します。 - コマンドを実行したXSCFが「BOARD ERROR」で停止します。 - さらに、この停止したXSCFのPSB(BB)を含む物理パーティションの電源を投入することができません。 XSCFのマスタ／スタンバイ切り替えの完了は、showhardconfコマンドでXBBOXまたはBBの[Status]が「Normal」となっていることで確認できます。 [コマンド一覧] restoreconfig(8) rebootxscf(8) flashupdate(8) setdate(8)
回避方法	上記の[コマンド一覧]のコマンドをXSCFのマスタ／スタンバイ切り替え中に実行しないでください。 [復旧方法] 以下の手順を実施してシステムを復旧させてください。 1. すべての論理ドメインのOracle Solarisをシャットダウンします。 2. poweroff -f コマンドですべてのPPARの電源を強制的に切断します。 3. すべてのSPARC M10の入力電源を切断（AC OFF）します。 4. すべてのSPARC M10の入力電源を投入（AC ON）します。
RTI番号	**RTIF2-170405-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XCPのファームウェアをアップデート中にスタンバイXSCFで「SCF process down detected」のエラーが発生した場合、マスタXSCFで「SCF panic detected」のエラーが発生する場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 すべてのXSCFの再起動が完了したら、-fオプションを指定してflashupdateコマンドを実行し、再度XCPのファームウェアをアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-170405-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	マスタXSCFでXSCFユニットの低電圧異常が発生した場合に、マスタ／スタンバイが自動で切り替わらない場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 マスタXSCFの応答がない場合は、スタンバイXSCFから-fオプションを指定してswitchscfコマンドを実行し、強制的にマスタ／スタンバイXSCFの切り替えを行ってください。 [例] XSCF> **switchscf -t Master -f** The XSCF unit switch between the Master and Standby states. Continue? [y|n]:**y** マスタ／スタンバイの切り替え後、応答がないXSCFユニットは交換してください。

RTI番号	**RTIF2-170405-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	1つのシステムボード（PSB）で構成されたPPARで、POST診断が行われている最中にconsoleコマンドを実行すると、コンソール画面が表示されないことがあります。
回避方法	PPARの起動前からconsoleコマンドを実行するか、POST診断完了後にconsoleコマンドを実行してください。 [復旧方法] PPARの電源を再起動、マスタ／スタンバイXSCFの切り替え、またはマスタXSCFの再起動を実行してください。
RTI番号	**RTIF2-170405-010**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	メモリの構成違反が発生すると、本来、そのCPU配下のメモリはすべて縮退するはずが、一部のメモリが縮退しません。このとき、PPARの電源を投入すると、縮退しなかったメモリでエラーログが登録されることがあります。 [例]メモリのMEM#02Bが搭載されていないが、MEM#xxAのメモリが縮退しなかった場合 XSCF> **showstatus** BB#00 Status:Normal; CMUL Status:Normal; * MEM#00B Status:Deconfigured; * MEM#01B Status:Deconfigured; * MEM#03B Status:Deconfigured; [例]エラーログの例 XSCF> **showlogs error** Date: Nov 22 10:57:37 JST 2016 Code: 40002000-004b830134110000ff-020014210000000000000000 Status: Warning Occurred: Nov 22 10:57:37.190 JST 2016 FRU: /BB#0/CMUL/MEM#03A,/BB#0/CMUL Msg: Failed to find write cycle adjustment value Diagnostic Code: 00000300 00000000 0000 00000001 00000000 0000
回避方法	PPARの電源を投入する前に、showhardconfコマンドを実行し、メモリの搭載ルールに従って、正しくメモリが搭載されていることを確認してください。 正しくない場合、メモリを搭載しなおしてください。 [復旧方法] メモリの搭載ルールに従って、正しくメモリを搭載しなおしてください。 オペレーションパネルのモードスイッチをServiceモードで、入力電源を投入（AC ON）すると、エラーが登録されたメモリの縮退が解除されます。 showstatusコマンドを実行し、メモリの縮退がないことを確認してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-161116-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）で使用可能なCPUコアリソースが割り当てられていない場合、CPUコアの一時利用機能の有効期限が切れたとき、PPARの電源を投入すると、電源投入処理が抑止されず、PPARがリセットを繰り返します。 このとき、以下のイベントログが繰り返し登録されます。 SCF:PPAR-ID x: Reset SCF:SP-Config falling back to factory-default (PPARID 0 factor:0x1010000) SCF:PPAR-ID x: Reset released
回避方法	CPUコアの一時利用機能の有効期限が切れたら、setinterimpermit disableコマンドを実行して、CPUコアの一時利用機能を無効に設定してください。 PPARの電源を投入する場合には、PPARで使用可能なCPUコアリソースを割り当ててください。 [復旧方法] 以下の手順を実施してください。 1. poweroff -fコマンドを実行し、リセットを繰り返しているPPARの電源を強制的に切断します。 2. poweroff（-fなし）コマンドを実行し、上記以外のすべてのPPARの電源を切断します。 3. すべてのSPARC M10の入力電源を切断／再投入（AC OFF/ON）します。 4. setinterimpermit disableコマンドを実行し、CPUコアの一時利用機能を無効に設定します。
RTI番号	**RTIF2-150730-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	setprivileges(8)コマンドを実行したとき、「Cannot communicate with BB#xx. Please check BB#xx's state.」のメッセージが出力されることがあります。 [例] XSCF> **setprivileges jsmith fieldeng platadm useradm auditadm** Cannot communicate with BB#01. Please check BB#01's state. XSCF>
回避方法	有効な回避方法はありません。 ユーザー権限の設定は正常に行われます。このメッセージはシステム動作に影響はありません。
RTI番号	**RTIF2-150728-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	工場出荷のあと、ioxadm(8)コマンドを実行して、初めてPCIボックスのファームウェアをアップデートすると、イベントログに「last version=0000」と誤ったファームウェア版数が表示されます。 [イベントログの例] May 28 11:27:40 Event: SCF:LINKCARD update is started (LINKCARD=0, bank=1, PCIBOX version=1200: last version=0000)
回避方法	有効な回避方法はありません。 このイベントログの版数は無視してください。システムの動作に影響はありません。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150629-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	「Africa/Casablanca」タイムゾーンを利用している場合にshowtimezone -c dst -m standardを実行すると、以下のメッセージが出力され、夏時間は表示されません。 An internal error has occurred. Please contact your system administrator. この不具合はコマンドの出力だけの問題です。以下のとおり、夏時間は年2回設定されています。 2015年3月29日開始、2015年6月13日終了 2015年7月18日開始、2015年10月25日終了
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-150629-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCPファームウェアのアップデート時、ファームウェアアップデートが成功したことを示すログ「Event: SCF:XCP update has been completed」が登録されていても、実際には、ファームウェアがアップデートされていないSPARC M10システム筐体またはクロスバーボックスが存在することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XCPファームウェアをアップデートしたときのログ（「SCF:XCP update is started (XCP version=xxxx:last version=yyyy)」から「SCF:XCP update has been completed (XCP version=xxxx:last version=yyyy)」までのログ）が以下のいずれかの場合は、再度、XCPファームウェアのアップデートを実施してください。 ■ SPARC M10システム筐体ごとに「SCF:XSCF update is started (BBID=x, bank=y)」のログが2つ存在しない ■ 接続されているSPARC M10システム筐体の異常を示す、以下のようなログが登録されている [例1] XSCF> **showlogs monitor -r** Alarm: /XBBOX#81/XSCFU:SCF:XSCF hang-up is detected [例2] XSCF> **showlogs monitor -r** Notice: /FIRMWARE,/BB#0/CMUL:SCF:SCF panic detected
RTI番号	**RTIF2-150226-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	マスタXSCFとスタンバイXSCFが切り替え処理中に、旧マスタXSCFのCHECK LEDが点滅します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 マスタXSCFとスタンバイXSCFが切り替え処理中の旧マスタXSCFのCHECK LED点滅は無視してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150218-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたシステムにおいて、物理パーティションの電源が投入されている状態で、以下のいずれかを実施すると、PCIボックスおよびリンクカードの追加に関するSNMP Trapが誤って送信されます。 ■ XSCFをリセットする ■ XSCFのマスタ／スタンバイを切り替える ■ SNMPエージェントを無効から有効にする ■ SNMPエージェントが有効の状態で、SNMPエージェントの管理情報を設定する この場合、以下のSNMP Trapが送信されます。 ■ PCIボックスの追加 scfPciBoxEvent scfTrapEventType=add(10) ■ リンクカードの追加 scfComponentEvent scfTrapEventType=add(10) 同様に、PCIeカードが接続されている場合でも、PCIeカードの追加に関する以下のSNMP Trapが誤って送信されます。 scfComponentEvent scfTrapEventType=add(10)
回避方法	有効な回避方法はありません。 このSNMP Trapの誤送信は、PCIボックスまたはPCIeカードの動作に影響ありません。
RTI番号	**RTIF2-141204-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	長い間ゲストドメインを稼働状態のままにしていた場合、物理パーティション（PPAR）の電源を切断／再投入したときに、ゲストドメインの時刻がずれてしまうことがあります。 この現象は以下の条件で発生します。 ■ ゲストドメインを構築（*1）、かつ ■ Oracle VM Server for SPARCにてldm add-spconfigコマンドを実行してから長い時間が経過した（*2）場合、かつ ■ 物理パーティションの電源を投入、またはリセットした場合 *1: 制御ドメインで時刻ずれは発生しません。 *2: 目安として1か月で約20秒の時刻のずれが発生します。
回避方法	物理パーティションの電源を切断、またはリセットする直前に、Oracle VM Server for SPARCでldm add-spconfigコマンドを実行し、最新のゲストドメイン構成情報をXSCFに保存してください。 [復旧方法] ゲストドメインの時刻がずれた場合、Oracle Solarisをシングルユーザーモードで立ち上げて、時刻を合わせてください。 [例] 2014年6月27日18時30分00秒に設定する場合 # **date 0627183014.00**

RTI番号	**RTIF2-140804-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	故障している部品がない状態でshowstatus(8)コマンドを実行しても、故障部品がないことを示すメッセージ「No failures found in System Initialization.」が表示されません。 [例] XSCF> **showstatus** XSCF>
回避方法	有効な回避方法はありません。 何もメッセージが表示されない場合、故障部品はありません。システムの運用を継続できます。
RTI番号	**RTIF2-140616-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	SPARC M10-1でshowhardconf(8)コマンドを実行すると、電源ユニット（PSU）の [Type] が表示されません。本来、PSUのタイプとして「Type: A」または「Type: B」が表示されます。 Typeの意味は以下のとおりです。 ■ Type: A: SPARC64 X用のPSU ■ Type: B: SPARC64 X+用のPSU
回避方法	showhardconf(8)コマンドを実行した場合、PSUの表示にある「FRU-Part-Number:CAXXXXX-XXXX-X/xxxxxxx ;」のうち、「CAXXXXX-XXXX-X」の値を確認することにより、PSUのタイプが判別できます。 ■ CAXXXXX-XXXX-Xの値が「CA01022-0750-M」の場合 Type: A: SPARC64 X用のPSU ■ CAXXXXX-XXXX-Xの値が「CA01022-0751-M」の場合 Type: B: SPARC64 X+用のPSU また、PSUのタイプを混在して搭載されている場合は、showlogs errorコマンドを実行したときのエラーログ、「Code: 80000000-XXXXXX0000ff0000ff-xxxxxxxxxx00000000000000」のうち、「XXXXXX」に出力される値によってPSUのタイプが判別できます。 ■ XXXXXXの値が「002400」の場合 Type: A: SPARC64 X用のPSU ■ XXXXXXの値が「002401」の場合 Type: B: SPARC64 X+用のPSU
RTI番号	**RTIF2-140616-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の手順で操作すると、prtfru(8)コマンド実行時に、「An internal error has occurred. Please contact your system administrator.」のエラーメッセージが表示され、コマンドが異常終了します。 1. 入力電源の投入、rebootxscf(8)、またはswitchscf(8)コマンドを実行し、XSCFを起動またはリセットします。 2. snapshot(8)コマンドを実行します。 3. prtfru(8)コマンドを実行します。
回避方法	XSCFが起動またはリセットされたあとは、snapshot(8)コマンドを実行する前に、prtfru(8)コマンドを実行してください。 [復旧方法] rebootxscf -aコマンドを実行して、すべてのXSCFをリセットしてください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140606-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	1つの物理パーティション（PPAR）内でPRIMECLUSTERソフトウェアのインストールされたゲストドメインが10以上（クラスタノードが10ノード以上）稼働しているSPARC M10システム同士がクラスタシステムを構築している場合、または同一のSPARC M10システム内にあるPPAR同士でクラスタシステムを構築している場合、1つのPPARでpoweroff -fコマンドを実行しPPARの電源を強制的に切断すると、XSCFがスローダウンしたあとパニックして、リセットされることがあります。
回避方法	SPARC M10-1、SPARC M10-4、およびSPARC M10-4Sにある1つのPPARに設定するクラスタノードは、10ノード未満になるようにしてください。 [復旧方法] XSCFがパニックしてリセットされたあと、poweroff(8)コマンドは継続して処理されるため、システムをそのまま使用できます。
RTI番号	**RTIF2-140606-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	addboard(8)コマンドおよびreset porコマンドを実行して、以下の両方の条件を満たした物理パーティション（PPAR）にシステムボード（PSB）を追加した場合、「No analytical target」のエラーメッセージが繰り返し出力されることがあります。また、このPPARで稼働中のOracle Solarisがハングアップすることがあります。 ■ ビルディングブロック構成のSPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合 ■ 1つのPSBで構成されたPPARの電源だけが投入されている場合
回避方法	上記の両方の条件を満たしているPPARにPSBを追加する場合は、以下のいずれかの方法で実施してください。 ■ PPARの電源を切断したあとaddboard(8)コマンドを実行して、PSBを追加します。 ■ addboard(8)コマンドを実行してPSBを追加したあと、PPARの電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してPPARを再構築します。 ■ DR機能を使用してaddboard(8)コマンドを実行し、PSBを追加します。 [復旧方法] ■ 「No analytical target」のエラーメッセージが出力されていない場合 poweroff(8)コマンドを実行してPPARの電源を切断したあと、poweron(8)コマンドを実行して、PPARの電源を投入してください。 ■ 「No analytical target」のエラーメッセージが出力されている場合 poweroff -fコマンドを実行してPPARの電源を強制的に切断したあと、poweron(8)コマンドを実行して、PPARの電源を投入してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140606-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の動的再構成を使用して、addboard -c configureコマンドによるシステムボード（PSB）の組み込み、またはdeleteboard -c unassignまたはdeleteboard -c disconnectによるPSBの切り離しを行う場合、以下の条件のいずれかに該当すると、XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えが発生します。 このとき、条件にある再起動中のXSCFがスタンバイXSCFの場合、切り替え後、スタンバイXSCFはマスタXSCFに切り替わりますが、旧マスタXSCFはリセットされて停止してしまいます。 [条件] ■ addboardの場合 　■ 組み込み対象のPSBのXSCFが再起動中の場合 　■ 組み込み先のPPARを構成するPSBのうち、いずれかのPSBのXSCFが再起動中の場合 ■ deleteboardの場合 　■ 切り離し対象のPSBが属するPPARを構成するPSBのうち、いずれかのPSBのXSCFが再起動中の場合
回避方法	上記のいずれかの条件に該当するスタンバイXSCFが存在する場合は、スタンバイXSCFの再起動が完了してからaddboard(8)、deleteboard(8)コマンドを実行してください。 XSCFの再起動が完了したかどうかは、showhardconf(8)コマンドを実行し、XSCFが搭載されるSPARC M10-4S筐体（BB#xx）の [Status]が「Normal」になっていることで確認できます。 [例] ■ BB#02のXSCFが稼働中の場合 XSCF> **showhardconf** SPARC M10-4S; --- 中略 --- BB#02 Status:Normal; Role:Slave; Ver:2220h; Serial:1234567890; ■ BB#02のXSCFが再起動中の場合 XSCF> **showhardconf** SPARC M10-4S; --- 中略 --- BB#02 Status:Cannot communicate; [復旧方法] XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えが発生した場合でも、addboard(8)、deleteboard(8)コマンドは正しく実行されるため、システムを継続して使用できます。 旧マスタXSCFが停止した場合は、以下の手順を実施してください。 1. poweroff -aコマンドを実行して、すべてのPPARの電源を切断します。 2. マスタXSCFおよびスタンバイXSCFに設定されているSPARC M10-4S筐体の入力電源を切断したあと再投入します。 3. マスタXSCFにログインしてshowhardconf(8)コマンドを実行し、スタンバイXSCFのSPARC M10-4S筐体の [Status] が「Normal」であることを確認します。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140605-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成された物理パーティション（PPAR）の電源を投入後、PPAR／ドメインのステータスが、自己診断テスト（POST）診断終了（Initialization Complete）からOpenBoot PROM起動完了（OpenBoot Running）までの間に、PPAR内のSPARC M10-4SのXSCFがリセットすると、制御ドメインコンソールへの切り替えができなくなることがあります。 この現象は、showlogs eventコマンドを実行して、POST診断終了とOpenBoot PROM起動完了の間にコンソールパス切り替えのイベントログが登録されていることで確認できます。 [例] PPAR_ID 0のときのイベントログのメッセージ POST Diag complete from PPAR (PPAR ID 0) --- 中略 --- PPAR ID 0: Console path is switched --- 中略 --- PPARID 0 GID 00000000 state change (OpenBoot Running)
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧手順] 以下のいずれかを実施してください。 ■ rebootxscf -aコマンドを実行します。 ■ XSCF WebからすべてのXSCFをリセットします。 ■ PPARの電源を切断したあと再投入します。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140605-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）を構成するシステムボード（PSB）が1つを除いて故障しているとき、DR機能を使用し、deleteboard(8)コマンドを実行して故障していないPSBを切り離そうとすると、deleteboard(8)コマンドがタイムアウトして異常終了します。また、これ以降、DR機能を使用し、deleteboard(8)コマンドを実行して、同じPPAR内のほかのPSBに対して切り離しを行っても、必ずタイムアウトするようになります。さらに、console(8)コマンドを実行して制御ドメインコンソールへ接続できなくなります。 [例] deleteboard(8)コマンドがタイムアウトする場合 XSCF> **deleteboard -c disconnect 00-0** PSB#00-0 will be unconfigured from PPAR immediately. Continue?[y|n] :**y** All domains are temporarily suspended, proceed?[y|n] :**y** Start unconfigure preparation of PSB. [1200sec] 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240.....¥ 270.....300.....330.....360.....390.....420.....450.....480.....510.....¥ 540.....570.....600.....630.....660.....690.....720.....750.....780.....¥ 810.....840.....870.....900.....930.....960.....990.....1020.....1050.....- 1080.....1110.....1140.....1170.....end Timeout detected during unconfiguration of PSB#00-0. XSCF>
回避方法	1つのPSBを除いたほかのすべてのPSBが故障している場合は、PPARの電源を切断してからdeleteboard(8)コマンドを実行し、PSBを切り離してください。 [復旧方法] 以下の手順を実施してください。 1. rebootxscf -aコマンドを実行し、XSCFをリセットします。 2. エラーログおよびメッセージを参照し、異常となった原因を特定します。 3. 異常となった原因を取り除きます。 4. 『SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド』の「6.3.1　システムボードの割り当てを解除する操作例」にある操作を実施するか、「6.3.3　システムボードの割り当て解除を予約する操作例」にある操作を実施します。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140605-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	OSパニックが発生したときに、XSCFにパニック通知が大量に送信されることがあります。このとき、XSCFは大量のパニック通知を処理しきれず、coddがプロセスダウンし、以下のOSパニック時のエラーログが大量に登録されます。 [例] OSパニックとプロセスダウンのエラーログ XSCF> **showlogs error -v** Date: Dec 20 14:44:26 JST 2013 Code: 40000000-00ffff0000ff0000ff-01b90006000000000000000 Status: Warning Occurred: Dec 20 14:44:26.513 JST 2013 FRU: /UNSPECIFIED Msg: XSCF command: System status change (OS panic) (PPARID#00, path: 00) Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000 Date: Dec 20 15:00:01 JST 2013 Code: 20000000-00fcff00b0000000ff-01040001000000000000000 Status: Notice Occurred: Dec 20 14:59:56.838 JST 2013 FRU: /FIRMWARE,/XBBOX#81/XSCFU Msg: SCF process down detected Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 51000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 636f6464 2e323537 382e627a 32000000 00000000 00000000 0000 coddは、[Diagnostic Code:] の4行目の先頭4バイトが「636f6464」となっていることで確認できます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] coddのプロセスダウンによりXSCFがリセットされると、システムは復旧します。

RTI番号	**RTIF2-140602-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスの入力電源が切断された場合（AC OFF）、エラーログは登録されますが、SNMPトラップによる通報やREMCSによる通報が行われません。PCIボックスの入力電源が切断されたこと は、showlogs errorコマンドを実行した結果、以下のログが出力されることで確認できます。 Date: May 29 20:03:05 JST 2014 Code: 10000400-00d4000000ff0000ff-1100002a0000000000000000 Status: Information　Occurred: May 29 20:03:00.905 JST 2014 FRU: /BB#0/PCI#8/PCIBOX#2003/PSU#0 Msg: AC FAIL Diagnostic Code: 00083230 30330000 0000 00080000 00000000 0000 00080000 00000000 0000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140507-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の動的再構成により、システムボードを追加または削除したあとにそのPPARの電源を切断した場合、showpparprogress(8)コマンドを実行して電源の切断処理の状況を表示すると、誤って電源の投入処理の状況が表示されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] イベントログに「PPAR-ID x: Reset」のメッセージが表示されたあとに、showpparprogress(8)コマンドを実行しなおすと正しく表示されます。
RTI番号	**RTIF2-140507-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	DC-DCコンバーター（DDC）の故障が検出されたあと、エラーログ「Power subsystem failure」が2件登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 2件目に登録されたエラーログは無視してください。また、故障したFRUは速やかに交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	部品の高温異常（超高温レベル）時のエラーログ「Critical ultrahigh temperature at XXX」が登録され、システムが強制的に停止した場合にshowlogs powerコマンドを実行すると、パワーログに表示される要因（Cause）が「-」となることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140507-007**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	DC-DCコンバーター（DDC）の故障が検出されたあと、エラーログで表示されるFRUを交換しないで、システムを継続して運用していると、入力電源を切断するたびに、以下のエラーが誤って検出されることがあります。 Msg: Power-off failure
回避方法	故障したFRUを交換してください。 また、このエラーメッセージは、システム動作に影響ありませんので無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	1つのファンユニット内に搭載された2つのファンに対して同時に回転異常が検出されたにも関わらず、1つのファンに対する回転異常のエラーログしか登録されず、システムがシャットダウンされないことがあります。その結果、CPUなどのコンポーネントの温度が上昇する可能性があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ファンの回転異常が検出されてもシステムがシャットダウンされない場合に、異常が検出されたファンを含むファンユニット内の、2つのファンについて以下のどちらかの現象が確認されたときは、速やかにファンユニットを交換してください。 ■ showenvironment Fanコマンドを実行し、ファンの回転数が低下していることを確認した ■ 2つのファンが同時に停止しているのを目視で確認した
RTI番号	**RTIF2-140507-014**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)、addfru(8)、またはrebootxscf(8)を実行したときに、スレーブXSCFで「XSCF hang-up is detected」のエラーが検出されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 コマンドは正常に終了しておりシステム動作に影響しないため、このエラーログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-016**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	setnetwork(8)コマンドを実行してXSCFネットワークを設定し、applynetwork(8)コマンドで設定を反映したあと、 rebootxscf(8)コマンドを実行せずにshownetwork(8)コマンドを実行すると、表示されたIPアドレスが現在システムで使用されて いるIPアドレスと一致しないことがあります。
回避方法	applynetwork(8)コマンドでXSCFネットワークの設定を反映したあとは、rebootxscf(8)コマンドを実行してXSCFをリセットしてください。

RTI番号	**RTIF2-140507-021**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	-pと-bオプションを指定してdiagxbu(8)コマンドを実行し、診断処理を実行している最中に、-pオプションで指定した物理パーティション （PPAR）に故障が発生すると、diagxbu(8)コマンドが異常終了するとともに-bオプションで指定したSPARC M10筐体の電源が投入されたままとなり、切断できないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下の手順を実施してください。 1. diagxbu(8)コマンド実行時に-bオプションで指定したSPARC M10筐体の入力電源を切断（AC OFF）します。 2. replacefru(8)コマンドを実行し、-bオプションで指定したSPARC M10筐体を選択します。 3. 保守メニューでSPARC M10筐体の交換を促すメッセージが表示されたら、SPARC M10筐体を交換せずに、SPARC M10筐体の入力電源を投入（AC ON）します。
RTI番号	**RTIF2-140507-022**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4S内のクロスバーユニット（XBU）にあるクロスバーケーブルが半抜けなどの接続不良を起こしている場合、showhardconf(8)コマンドを実行すると、クロスバーケーブルの部品情報が「#」で表示されます。 [例] クロスバーケーブルが半抜けの場合 + FRU-Part-Number:################; Ver:####h; + Type:#######; Length: #;
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下の手順を実施してください。 1. poweroff(8)コマンドを実行し、物理パーティション（PPAR）の電源を切断します。 2. クロスバーケーブルの部品情報が「#」で表示されたクロスバーケーブルの接続状態（半抜け、浮き、緩みがないこと）を確認します。 3. poweron(8)コマンドを実行し、PPARの電源を投入します。 4. showhardconf(8)コマンドを実行し、クロスバーケーブルの部品情報を確認します。 [例] クロスバーケーブルが正常に接続されている場合 + FRU-Part-Number:2123628-2 ; Ver:3920h; + Type:Optic; Length: 2;
RTI番号	**RTIF2-140410-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	restoreconfig(8)コマンドを実行中に、物理パーティション（PPAR）の電源の投入、切断、または、システムボードの診断を実施すると、実施した操作が途中で中断されてしまいます。
回避方法	restoreconfig(8)コマンドを実行中にPPARの電源投入、切断、システムボードの診断を実施しないでください。 [復旧方法] ■ PPARの電源投入が中断された場合 poweroff -fコマンドを実行し、PPARの電源を強制的に切断してください。 ■ PPARの電源切断、およびシステムボードの診断が中断された場合 すべてのSPARC M10システム筐体、またはクロスバーボックス筐体の入力電源を切断したあと再投入（AC-OFF/ON）してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140410-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	システムの入力電源を切断した状態で、保守メニューを使用せずに、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換、またはSPARC M10-4Sを増設した場合、XCPファームウェアの自動的な版数合わせが行われると、以下のエラーログが登録される場合があります。 Alarm: :SCF:Gaps between XBBOX-ID または、 Information: :SCF:Gaps between BB-ID
回避方法	有効な回避方法はありません。 このエラーログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140410-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF DUAL制御ケーブルが外れた、または故障した状態で入力電源を投入した場合、その後、XSCF DUAL制御ケーブルが復旧しても、マスタとスタンバイXSCF間のデータが同期されません。システム動作は継続できますが、マスタ／スタンバイXSCFの切り替え後、旧マスタXSCFの情報が新マスタXSCFに反映されず、その後のシステム動作が保証できなくなります。 XSCF DUAL制御ケーブルが外れた、または故障した状態は、以下のエラーログで確認できます。 ■XSCF DUAL制御ケーブルを外した状態 Msg: BB control cable detected unexpected ■XSCF DUAL制御ケーブルが故障した状態 Msg: Cannot communicate with the other XSCF
回避方法	入力電源を投入する前に、XSCF DUAL制御ケーブルが正しく挿入されていることを確認してください。 また、showlogs errorコマンドで「説明」に記載しているエラーログが登録されていないことを確認してください。 [復旧方法] XSCF DUAL制御ケーブルが外れていた場合は、XSCF DUAL制御ケーブルが正しく接続されていることを確認後、rebootxscf -aコマンドを実行して、すべてのXSCFの再起動を行ってください。 XSCF DUAL制御ケーブルが故障していた場合は、該当のケーブルを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140410-009**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	スタンバイまたはスレーブ筐体の入力電源を切断すると、「Board control error (MBC link error)」のエラーログが登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このエラーログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140409-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10システムに内蔵されているRealtime Clock（RTC）の異常が検出され、XSCFが起動されないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] システムの入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）してください。

RTI番号	**RTIF2-140407-005**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	DC-DCコンバーター（DDC）の故障しているCPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはCPUメモリユニット（上段）（CMUU）を交換しないで、システムを継続して運用していると、DDCの故障したCMULまたはCMUUに搭載されているCPUに異常が発生しても、CPUに関する故障が検出されずに、物理パーティション（PPAR）がハングアップすることがあります。 DDCの故障は、以下のいずれかのエラーログが登録されているかどうかで確認できます。 Msg: Critical low voltage error または Msg: Critical high voltage error または Msg: Power subsystem failure
回避方法	DDCの故障が発生しているCMUUまたはCMULは、速やかに交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140407-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCFが停止している、または入力電源が切断（AC OFF）状態のSPARC M10-4S筐体に対して、initbb -fコマンドを実行し、強制的にシステムから切り離そうとしても、筐体は物理パーティション（PPAR）に割り当てられた状態のままになってしまいま す。 この現象は、showboards(8)コマンドを実行すると、対象となるSPARC M10-4S筐体（PSB）のAssignmentが「Assigned」のままになっていることで確認できます。 XSCF> **showboards -av** PSB R PPAR-ID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault ---- - ---------- ---------- ---- ---- ---- ------- -------- 00-0 00(00) Assigned y y y Passed Normal 01-0 * 00(01) Assigned n n n Unmount Normal
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 切り離したSPARC M10-4S筐体に対して、以下の作業を実施してください。 1. replacefru(8)コマンドを実行し、筐体を交換します。 2. 交換した筐体の入力電源を投入（AC ON）します。 ■ XSCFまたはXSCFユニットのREADY LEDが点灯している場合 a. 保守メニューに従ってreplacefru(8)コマンドを完了させます。 b. initbb(8)コマンドを実行して筐体をシステムから切り離します。 ■ XSCFまたはXSCFユニットのREADY LEDが点灯しない場合 筐体を取り外し、故障が疑われるXSCFユニット、またはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換します。
RTI番号	**RTIF2-140407-008**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	poweroff(8)コマンドを実行しプロンプトが返ってくるまでの間に、マスタ筐体のXSCFがリセットされると、以降の電源投入／切断が操作できなくなります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 この現象が発生した場合は、すべての筐体の入力電源を切断したあと再投入してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140304-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	入力電源を切断し、再度投入したときに、ごくまれに、「SCF process down detected」のエラーログが登録され、XSCFが起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 本現象が発生したときは、保守作業員に連絡してください。
RTI番号	**RTIF2-140304-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	flashupdate(8)コマンド実行中に、「SCF process down detected」のエラーログが登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧の必要がない場合] 以下の両方を満たす場合は、復旧の必要はありません。ファームウェアアップデートは正常に終了しています。 ■ showlogs error -rvコマンドを実行した結果、flashupdate(8)コマンドを実行していた時間帯に、以下のDiagnostic Codeとともに「Msg: SCF process down detected」のエラーログが登録されている場合 [例] Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 666c6173 68757064 6174652e xxxxxxxx 00000000 00000000 0000 xxxxxxxxは不定 ■ showlogs eventコマンドを実行した結果、「XCP update has been completed」のイベントログが登録されている場合 [復旧方法] 再度flashupdate(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-140304-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SNMPv3において、setsnmp(8)コマンドを実行して、半角コロン（:）を含むトラップホスト名を登録した場合、そのトラップホストはshowsnmp(8)コマンドで正しく表示されません。 [例] test:example.comというトラップホストの場合、ホスト名が「test」、ポート番号が「0」と表示されます。
回避方法	SNMPv3において、setsnmp(8)コマンドを実行して半角コロン(:)を含むトラップホスト名を登録しないでください。 すでに半角コロンを含むSNMPv3トラップホスト名を登録している場合は、以下のコマンドを実行して、対象のエントリーを削除してください。 setsnmp remv3traphost -u ユーザー名 -p ポート番号 トラップホスト名 このとき、ポート番号は必ず指定してください。半角コロンを含むSNMPv3トラップホストを削除するときにポート番号を指定しない場合は、「Entry does not exist」のメッセージが表示され削除できません。削除するときに指定するトラップホスト名とポート番号は、showsnmp(8)コマンドで出力される誤ったものではなく、登録するときに指定したものを指定してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140304-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスに接続されたSPARC M10-4Sにおいて、物理パーティション（PPAR）の電源が投入された状態で、一部の筐体のXSCFに故障が発生したあと、以下の現象が発生することあります。 [現象1] poweroff(8)コマンドを実行すると、PPARの電源は切断されるがpoweroff(8)コマンドが20分ほど応答しない。 [現象2] PPARの電源を投入すると、投入処理中に「XB-XB interface fatal error」のエラーが発生し、電源投入処理が繰り返され、電源の投入が正常に終了しない。
回避方法	XSCFの故障が発生した場合は、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはXSCFユニットを交換してください。 [復旧方法] ■ 現象1の場合 20分経過するとpoweroff(8)コマンドが正常に終了し、PPARの電源も切断されます。 ■ 現象2の場合 poweroff -fコマンドを実行し、PPARの電源を強制的に切断してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140304-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4S（システムボード）で構成される物理パーティション（PPAR）で、故障によりシステムボードが縮退されたあとに、PPARの電源を切断しないで、縮退された筐体に接続されたPCIボックスに搭載されているPCIカードに対して、setpciboxdio(8)コマンドを実行し、ダイレクトI/O機能の有効／無効を変更しようとすると、次のエラーメッセージとともにコマンドが失敗します。 This operation cannot be done because the PPAR including a PSB of the target BB is powered on. この現象は、showhardconf(8)コマンドおよびshowboards(8)コマンドを実行したとき、システムボードの状態が次のようになっていると発生します。 [例] PSB#01-0（BB#01）が縮退した場合 XSCF> **showhardconf** ... * BB#01 Status:Deconfigured; ... XSCF> **showboards -a** PSB PPAR-ID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault --- ------------ ---------- ---- ---- ---- ------- -------- 01-0 00(01) Assigned n n n Passed Faulted
回避方法	deleteboard(8)コマンドを実行して、縮退されたシステムボードを物理パーティションから切り離してから、setpciboxdio(8)コマンドでダイレクトI/O機能の設定を変更してください。 [例] XSCF> **deleteboard -c unassign 01-0** ダイレクトI/O機能の設定を変更したあと、addboard(8)コマンドを実行して、システムボードをPPARに割り当ててから、保守手順に従ってシステムボードをPPARに組み込んでください。 [例] XSCF> **addboard -c assign -p 0 01-0** なお、XCP 2210以降の版数では、replacefru(8)コマンドを使用して、縮退された筐体を保守することで、この問題を解消できます。その場合は上記の手順は不要です。
RTI番号	**RTIF2-140304-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	電源ユニット（PSU）が以下のいずれかのエラーで故障した場合に、そのPSUをreplacefru(8)コマンドで活性交換、または活電交換したあと、同じ筐体内で、再びPSUに以下のいずれかの故障が検出されても、エラーログが登録されません。 ■ PSU shortage (power off started) ■ PSU shortage ■ Wrong PSU is installed
回避方法	[説明]にあるいずれかのエラーログが登録されたあと最初にPSUを交換する場合は、replacefru(8)コマンドで活性交換、または活電交換ではなく、停止交換で行ってください。

RTI番号	**RTIF2-140304-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	電源ユニット（PSU）をreplacefru(8)コマンドで交換するとき、交換部品を搭載したあと30秒以内にreplacefru(8)コマンドのメニューで[f]を押すと、交換したPSUに誤りがある場合でも誤りを検出できないことがあります。
回避方法	「RTIF2-140304-007の回避方法」を参照してください。
RTI番号	**RTIF2-140227-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはSPARC M10筐体を停止交換、または停止増設したときに、以下の条件を満たしていると、イベントログに「XCP firmware version synchronization failed」が登録され、保守、または増設に失敗します。 ■ 複数のCMULまたはSPARC M10筐体を停止交換または停止増設した場合 ■ マスタXSCFと保守部品のXCP版数が一致しない場合
回避方法	2台以上のCMULまたはSPARC M10筐体を停止交換、停止増設する場合は、replacefru(8)やaddfru(8)コマンドを実行し、1台ずつ作業を実施してください。 [復旧方法] 以下のどちらかの方法で実行してください。 ■ 方法1 1. システムの入力電源を切断したあと再投入します（AC-OFF/ON）。 2. XCP版数を指定して、flashupdate(8)コマンドを実行します。 XSCF> **flashupdate -c update -m xcp -s** *xxxx* **-f** *xxxx*はマスタXSCFのXCP版数 ■ 方法2 replacefru(8)コマンドを実行し、停止交換に失敗したCMULまたはSPARC M10筐体を、擬似的に交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140227-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setldap(8)コマンドで指定したLDAPサーバで、XSCFのユーザー権限が管理されているユーザーアカウントでXSCFにログインした場合、XSCFシェルでのコマンドの実行やXSCF Webでの操作に時間がかかることがあります。
回避方法	setldap(8)コマンドで指定したLDAPサーバの場合、有効な回避手段はありません。 setldapssl(8)コマンドでLDAPサーバを指定してください。
RTI番号	**RTIF2-140227-010**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	存在しないシステムボード（PSB）を指定して、addboard -c configureコマンドを実行すると、次の不適切なエラーメッセージを表示します。 PPAR is currently unavailable for DR, because XBU status has failed. または、 The current configuration does not support this operation.
回避方法	有効な回避方法はありません。 存在するPSBを指定して、addboard -c configureコマンドを実行してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140212-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	システムボード（PSB）の情報を更新しても、XSCF拡張MIB定義ファイルにあるscfPsbInfoのOIDの情報が更新されません。
回避方法	setsnmp(8)、setsnmpusm(8)、およびsetsnmpvacm(8)コマンドを実行してsnmpデーモン再起動するか、XSCFをリセットしてください。
RTI番号	**RTIF2-140212-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF拡張MIB定義ファイルにあるscfComponentStatusEventのOIDで、被疑箇所の部品のパス情報がトラップ通知されるとき、「unspecified」と通知されることがあります。 この現象は、OIDのFaultEventCode情報が、次のいずれかの場合に発生します。 05018113 05018123 05018133 05018211 05018221 05018231
回避方法	有効な回避方法はありません。 被疑箇所はshowlogs errorコマンドで確認してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsnmp(8)またはsetsnmpusm(8)コマンドで、パスワードの入力プロンプトを使用して256文字以上のパスワードを登録しようとしても、実際には、255文字までしか登録されません。
回避方法	256文字以上のパスワードを設定する場合は、パスワードの入力プロンプトを使用しないで、setsnmp(8)またはsetsnmpusm(8)コマンドのパスワードオプションを使用してください。 [復旧方法] 256文字以上のパスワードを入力プロンプトから設定した場合は、setsnmp remv3traphostコマンド、またはsetsnmpusm deleteコマンドを実行し、対象のユーザーのデータを削除したあと、再登録してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-011**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の稼働中にXSCFのマスタ／スタンバイの切り替えが発生すると、ごくまれにXSCFのプロセスダウンが発生し、XSCFがリセットされることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XSCFがリセットされることでシステムは復旧するため、継続してシステムを運用できます。
RTI番号	**RTIF2-140212-014**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	「CPU cache degraded (CPU#xx)」のエラーが検出されても、オペレーションパネルのCHECK LEDが点灯しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

RTI番号	**RTIF2-140212-016**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFをリセットした場合、XSCFのシリアル端末上にSNMPに関するエラーメッセージ、「snmpd[XXXXX] svrSP: error doAction ACTION_CONTROL_LED」が表示されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このメッセージは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-021**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)コマンドを実行中に、ハードウェアの故障が発生して、いずれかの物理パーティションがリセットされた場合、testsb(8)コマンドが異常終了することがあります。 以下はエラーとなった場合の例です。 [例] XSCF> **testsb** *PSB_NO* Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :**y** SB power on sequence started. 0.....30.....end Initial diagnosis started. [7200sec] 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240..... 270.....300.....330.. Hardware error occurred by initial diagnosis. SB power off sequence started. [1200sec] 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240..... 270.....300.....330.....360.....390.....420.....450.....480.....510..... 540.....570.....600.....630.....660.....690.....720.....750.....780..... 810.....840.....870.....900.....930.....960.....990.....1020.....1050..... 1080.....1110.....1140.....1170.....1200end Failed to power off. Please check the FRU. An internal error has occurred. Please contact your system administrator. done.
回避方法	有効は回避方法はありません。 [復旧方法] showlogs(8)コマンドを実行し、故障したハードウェアを確認したあと保守を実施してください。 その後、testsb(8)コマンドを実行しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-140121-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFが大量のデータを処理している最中に入力電源を切断すると、入力電源を再投入したときに、ごくまれに、XSCFが起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 本現象が発生したときは保守作業員に連絡してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131213-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	DR機能を使用してaddboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドを実行し、システムボード（PSB）の追加または削除を実行している間に、DR操作の対象ではないほかの物理パーティションで、ハードウェア故障による再起動が行われるかpoweroff(8)/poweron(8)/reset(8)コマンドが実行されると、実行中のaddboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドでタイムアウトが検出され、コマンドが異常終了する場合があります。
回避方法	addboard(8)またはdeleteboard(8)コマンド実行中には、poweroff(8)/poweron(8)/reset(8)コマンドを実行しないでください。DR操作中にハードウェア故障が発生した場合は、有効な回避方法はありません。 [復旧方法] showboards(8)コマンドを実行し、システムボード（PSB）のステータスを確認してください。その後、再度addboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ある物理パーティションでpoweroff(8)/poweron(8)/reset(8)コマンドを実行中に、ほかの物理パーティションでDR機能を使用してaddboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドを実行し、システムボード（PSB）を追加または削除すると、実行中のaddboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドでタイムアウトが検出され、コマンドが異常終了する場合があります。
回避方法	poweroff(8)/poweron(8)/reset(8)コマンド実行中には、addboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行しないでください。物理パーティションの電源の操作中にDR操作を実行した場合、有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下を実施してください。 1. showboards(8)コマンドを実行します。 2. システムボード（PSB）のPwr/Conn/Conf/Testステータスを参照し、以下の物理パーティションの電源操作の完了を確認します。 - 電源の投入／リセットの完了 Pwr/Conn/Conf/Testステータスがそれぞれy y y passedになっている - 電源の切断の完了 Pwr/Conn/Confステータスがそれぞれn n nになっている 3. 再度addboard(8)コマンドまたはdeleteboard(8)コマンドを実行します。

RTI番号	**RTIF2-131213-011**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	addfru(8)コマンドを実行してSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスを増設した際に、以下のメッセージが出力され、増設が失敗することがあります。 [Warning:036] Failed to find BB#x. The BB-ID setting and/or the cable connections of the BB#x will be wrong. Please confirm the BB-ID setting and the cable connections. Do you want to try to add BB#x again? [a:add|c:cancel] :
回避方法	addfru(8)コマンドを実行して以下の保守メニューのメッセージが表示されたあと、増設するSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスの入力電源の投入後20分経過してから、次の操作（ステップ2）を実施してください。 Please execute the following steps: 1) After the added device is connected with the system,please turn on the breaker of the BB#x. 2) Please select[f:finish] : [復旧方法] [a:add|c:cancel] :のメッセージに対して「a」を入力し、addfru(8)コマンドを再度実行してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-019**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	入力電源を投入後、XSCF起動中にWatchdogタイムアウトが発生し、XSCFが再起動する場合があります。このXSCFの再起動が完了したあと、showhardconf(8)コマンドを実行すると、システムに搭載されているコンポーネントの構成情報が認識されない場合があります。 また、構成に関する以下のエラーログが登録されることがあります。 Msg:Indispensable parts are not installed (PSU). Msg:Indispensable parts are not installed (FAN). Msg:Indispensable parts are not installed (OPNL). Msg:PSU shortage Msg:FAN shortage このとき、物理パーティションが起動できない場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 再度入力電源を切断し、投入しなおしてください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131213-022**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ファームウェアアップデート完了後、version(8)コマンドまたはXSCF WebでXCP版数を確認したとき、表示されるSPARC M10-1、SPARC M10-4、各クロスバーボックス(XBBOX)、およびSPARC M10-4S(BB)のXCP版数の表示がアップデートしたXCP版数になっていないことがあります。以下の例では、XCP 2042からXCP 2052へファームウェアアップデートした場合です。BB#00の" XCP0 (Reserve):" のXCP版数がアップデートされていません。 XSCF> **version -c xcp -v** XBBOX#80-XSCF#0 (Master) XCP0 (Reserve): 2052 XSCF : 02.05.0002 XCP1 (Current): 2052 XSCF : 02.05.0002 XBBOX#81-XSCF#0 (Standby) XCP0 (Current): 2052 XSCF : 02.05.0002 XCP1 (Reserve): 2052 XSCF : 02.05.0002 BB#00-XSCF#0 XCP0 (Reserve): 2042 ~~~~ CMU : 02.05.0002 POST : 1.43.0 OpenBoot PROM : 4.34.0+1.22.0 Hypervisor : 0.27.8 XSCF : 02.04.0000 XCP1 (Current): 2052 CMU : 02.05.0002 POST : 1.43.0 OpenBoot PROM : 4.34.0+1.22.0 Hypervisor : 0.27.8 XSCF : 02.05.0002
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] SPARC M10-1、SPARC M10-4、およびSPARC M10-4Sの1BB構成の場合は、rebootxscfコマンドを実行し、XSCFをリセットしてください。 ビルディングブロック構成の場合は、アップデートされていないXCP版数の対象クロスバーボックス(XBBOX)またはSPARC M10-4S(BB)のBB-IDを指定して、rebootxscf -b BB-IDコマンドを実行し、指定した筐体のXSCFをリセットしてください。
RTI番号	**RTIF2-131126-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスファームウェアのアップデートが失敗する場合があります。失敗した場合は、イベントログに「LINKCARD update is failed」が表示されます。 [例] SCF:LINKCARD update is failed (LINKCARD=1, bank=0, PCIBOX version=1130: last version=1120)
回避方法	有効な回避方法はありません。 ioxadm -c update コマンドを実行し、再度PCIボックスのファームウェアをアップデートしてください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131112-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	snapshot -tコマンドでSSHを使用してデータ送信を行った場合、USBデバイスやXSCF Webを使用して転送した場合と比較して、10分～30分程度遅延する場合があります。
回避方法	有効な回避手段はありません。 転送が遅延した場合も、採取したデータに問題はありません。
RTI番号	**RTIF2-131112-013**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	poweron -aコマンドにより複数の物理パーティション（PPAR）を同時に起動すると、OSコンソールに「Unable to connect to Domain Service providers」に続いて「Error storing configuration variable. LDC is not up Configuration variable setting will not persist after a reset or power cycle」のエラーメッセージが出力され、setpparparam(8)コマンドで設定したOpenBoot PROM環境変数が反映されずに、Oracle Solarisが起動される場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 エラーメッセージが出力された物理パーティション（PPAR）に対して、制御ドメインを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-131001-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の稼働中、またはPPARの電源を切断したときに、XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えが発生することがあります。 マスタ／スタンバイの切り替えが発生した場合、マスタXSCFのコンソールには、以下のメッセージが表示されます。 Kernel panic - not syncing: MBC Dual ifcut interrupt.
回避方法	有効な回避手段はありません。 この不具合によりマスタ／スタンバイの切り替えが発生しますが、システムに影響はありませんので、システムを継続して運用できます。
RTI番号	**RTIF2-130919-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムにおいて、一部のスレーブ筐体は起動したまま、それ以外のSPARC M10-4S筐体の入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）すると、物理パーティションが起動できないことがあります。
回避方法	入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）する場合は、システムを構成するすべての筐体の入力電源を切断してから再投入してください。 [復旧方法] システムを構成するすべての筐体の入力電源を切断してから再投入してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130710-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	switchscf(8)コマンドでXSCFの切り替えを実施すると、ごくまれにスタンバイ状態のXSCFが起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] すべてのSPARC M10-4Sの入力電源を切断／投入（AC OFF/ON）するか、replacefru(8)コマンドを実行して、起動しないSPARC M10-4Sを擬似的に交換（部品を交換せずに交換作業を実施）してください。
RTI番号	**RTIF2-130516-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を切断している最中に、XSCFの切り替えまたはXSCFの再起動が発生した場合、電源が切断できないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PPARの電源を切断している最中に、switchscf(8)コマンドによる切り替え、またはrebootxscf(8)コマンドによるXSCFの再起動を行わないでください。 [復旧方法] 入力電源を切断し、再投入してください。（AC-OFF/ON）
RTI番号	**RTIF2-130516-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	4BB以上の構成でハードウェア故障が発生した場合、クラスタの自動系切り替えに失敗することがあります。 また、1台のクラスタに16以上のゲストノードが組み込まれている場合、制御ドメインのコンソールに以下のワーニングメッセージが出力されることがあります。 SA SA_xscf????.so to test host ??? failed
回避方法	クラスタの自動系切り替えに失敗した場合は、クラスタソフトのマニュアルの手順に従い、手動で切り替えてください。
RTI番号	**RTIF2-130516-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数の物理パーティション（PPAR）の電源を同時に投入している最中に、XSCFの切り替えが発生した場合、電源の投入に通常より時間がかかることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PPARの電源を投入している最中に、switchscf(8)コマンドによるXSCFの切り替えを行わないでください。

RTI番号	**RTIF2-130410-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスが接続されているシステムで、保守対象FRUに属さない物理パーティション（PPAR）の電源を投入または切断している最中に、diagxbu(8)、またはtestsb(8)コマンドを実行してシステムボード（PSB）の電源切断処理中に、以下のメッセージが出力されて、PSBの診断に失敗することがあります。 [Warning:010] An internal error has occurred.
回避方法	有効な回避方法はありません。 showboards(8)コマンドを実行して該当するPSBの [Pwr] 欄が「n」になっていることを確認してください。 「y」の場合は、数分間隔でshowboards(8)コマンドを実行して、「n」になることを確認してください。
RTI番号	**RTIF2-130410-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源投入処理中にswitchscf(8)コマンドを実行してXSCFの切り替えを実施すると、XSCFの切り替えに失敗することがあります。
回避方法	PPARの電源投入処理中にswitchscf(8)コマンドを使用して、XSCFの切り替えを実施しないでください。
RTI番号	**RTIF2-130410-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	以下のすべての条件を満たしたシステムで、物理パーティション（PPAR）を電源を投入すると、ほかのPPARの電源も投入されることがあります。 ■ setremotepwrmgmt(8)コマンドで電源連動を有効にしている。 ■ 電源連動の管理項目にSubNodeIDを設定しないノードを作成している。 ■ 複数のPPARで構成されている。
回避方法	■ 電源連動が不要の場合 setremotepwrmgmt -c disableで電源連動を無効にしてから、clearremotepwrmgmt(8)コマンドで電源連動設定を削除してください。 ■ 電源連動が必要な場合 複数のPPARで構成されているシステムでは、電源連動の管理ファイルに、SubNodeIDとして、PPAR-IDを指定して作成したあと、setremotepwrmgmt -c configで電源連動の設定を登録してください。
RTI番号	**RTIF2-130329-005**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	SPARC M10-1で入力電源の投入時に、XSCFのREADY LEDが点滅したまま起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。 入力電源を切断後、再投入してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130305-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setpowercapping(8)コマンドを実行し、消費電力制限機能を「有効」、消費電力上限値を「powerlimit_p」（パーセンテージ）で設定、消費電力の上限値を超えた場合の猶予時間を「none」に設定し、入力電源を投入または物理パーティション（PPAR）の電源を切断すると、イベントログに「The limit of power have been exceeded」が登録されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このイベントログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUまたはメモリの故障を検出し、XSCFが制御ドメインへ故障情報を通知している最中にXSCFの切り替えが発生すると、その故障情報が制御ドメインへ再通知されないことがあります。そのため、showlogs errorコマンドで表示される故障情報が、fmdumpコマンドで出力されるFault Reportに表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 showlogs errorコマンドで表示されたFRUに従って、保守してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)コマンドまたはdiagxbu(8)コマンドを実行したとき、システムボード（PSB）の構成違反が検出されると、登録されたエラーログのFRUが「PPAR#30」で表示されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 該当するSPARC M10システム筐体のPSBを保守してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-013**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFが起動中、watchdogタイムアウトが発生し、XSCFがリセットすることがあります。
回避方法	以下の手順を実施してください。 1. Oracle Solarisが稼働している場合は、Oracle Solarisをシャットダウンします。 2. Oracle Solarisのシャットダウンを確認したら、システムの入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）します。 システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒以上待ってから投入してください。 システムの入力電源を切断後再投入しても、XSCFが起動されない場合は、CPUメモリユニット（下段）（CMU）またはマザーボードユニット（MBU）を交換してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-020**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCFのパニックやハングが発生したときに、「XSCF hang-up is detected」のエラーログが過剰に通知されることがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。 同じ時期に通知された同じ内容のログは、同一の原因として無視してください。

表 3-10　XCP 2350で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130305-022**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	「XSCF hang-up is detected」のエラーログが検出され、showboards(8)コマンドで「unknown」のシステムボード（PSB）があるとき、poweron(8)コマンドが以下のメッセージで失敗することがあります。XSCF Web、APCSや電源連動による電源投入指示でも同様です。 Not powering on : An internal error has occurred. Please contact your system administrator.
回避方法	有効な回避手段はありません。 showboards(8)コマンドで「unknown」となっている、PSBのXSCFを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-025**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	多数の物理パーティション（PPAR）を設定している状態でpoweroff(8)コマンドを実行すると、1 PPARずつ電源が切断されるため処理時間がかかります。システム構成によっては、1時間程度かかることがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。
RTI番号	**RTIF2-130219-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスに搭載されたクロスバーユニットで故障が発生した場合、エラーログに「failed to read/write interrupt mask register」が多数登録されることがあります。
回避方法	有効な回避策はありません。 物理パーティション（PPAR）の電源を切断し、クロスバーボックス内のクロスバーユニットを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-130219-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源投入中に、flashupdate(8)コマンドやrebootxscf(8)コマンドを使用してXSCFを再起動すると、POSTが診断を完了した状態（Initialization Complete）で停止することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] reset porコマンドを実行するか、poweroff -fコマンドでPPARの電源を切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130109-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたSPARC M10システム筐体のLSB番号を、setpcl(8)コマンドを使用して変更し、論理ドメイン構成でOracle Solarisを起動すると、showhardconf(8)コマンドを実行しても、PCIボックスの構成情報が表示されません。
回避方法	setdomainconfig(8)コマンドを使用して、論理ドメイン構成をfactory-defaultに設定し、物理パーティション（PPAR）の電源を投入してください。 その後、論理ドメインを設定しなおしてください。

RTIF2-140304-007の回避方法

PSUをreplacefru(8)コマンドで交換する場合、交換部品を搭載後、30秒以上待ってか

ら、replacefru(8)コマンドのメニューで[f]キーを押してください。

```
Do you want to continue?[r:replace|c:cancel] :r
Please execute the following steps:
1) Remove PSU#n.
2) Execute either the following:
  2-1) After installing the exchanged device, please select 'finish'.
  2-2) If you want to suspend the maintenance without exchanging device,
       please select 'cancel'.
[f:finish|c:cancel] :f
```

[復旧方法]
回避方法を実施しないで、両方のPSUがDeconfigured状態となった場合、replacefru(8)コマンドでPSUを活性交換できなくなります。

```
Maintenance/Replacement Menu
Please select a FRU to be replaced.
No.  FRU                Status
--- ------------------- --------------
1   /PSU#0              Deconfigured
2   /PSU#1              Deconfigured
------------------------------------------------------------------------------
Select [1,2|b:back] :2
[Warning:307]
PSU#1 cannot be replaced. Please verify the configuration.
Select [1,2|b:back] :2
[Warning:307]
PSU#1 cannot be replaced.
```

復旧するには、交換したPSUをreplacefru(8)コマンドを使用しないで取り外したあと、replacefru(8)コマンドを使用してPSUを交換してください。

XCP 2350で解決された不具合

XCP 2350で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-11　XCP 2350で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-171011-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XCP2250以前からXCP2260以降にファームウェアをアップデートすると、dumpconfig(8)コマンドが失敗することがあります。
回避方法	以下のXSCFコマンドのいずれかを実行してください。 - showremotestorage(8) - snapshot(8) - rebootxscf -a

表 3-11　XCP 2350で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-171011-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	showsnmpコマンドを実行中に、XSCFシェルの接続を強制的に切断した場合、ごくまれに、XSCFコマンドを実行しても応答しないことがあります。 このあと、何度もXSCFコマンドが応答しないと、XSCFがパニックし再起動します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFを再起動してください。 rebootxscf -aコマンドを実行してもXSCFを再起動できない場合は、XSCFのRESETスイッチを押すか、すべてのOracle Solaris パーティションをシャットダウン後に入力電源を切断（AC OFF）してください。
RTI番号	**RTIF2-171011-003**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	マザーボード（MBU）に搭載されたDC-DCコンバーター（DDC）が故障した場合、停電が誤って検出され、DDCの故障が検出されないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 MBUを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-171011-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	REMCSによる通報機能を利用している場合、長期間、XSCFが再起動されないと、ごくまれに、以下が発生することがあります。 - 物理パーティションの電源が投入されない - REMCSによる通報が行われない - REMCS定期接続タイムアウトが発生する - XSCFコマンド実行時、「An internal error has occurred.」のエラーが表示され、コマンドが失敗する
回避方法	rebootxscf -aコマンドを実行してXSCFを再起動してください。 このとき、物理パーティションの電源を切断する必要はありません。
RTI番号	**RTIF2-171011-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	マザーボードユニット（MBU）、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはXSCFUにあるmicroSDカードが故障した場合、PSUバックプレーン（PSUBP）にあるCPUコア アクティベーションキーのバックアップ情報も消去されることがあります。 これにより、CPUコア アクティベーションキーが再登録できない場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] CPUコア アクティベーションキーが再登録できない場合は、restoredefaults -c xscf コマンドを実行し、XSCFが停止したら入力電源を切断（AC OFF）してください。 その後、入力電源を再投入（AC ON）し、CPUコア アクティベーションキーを再登録してください。

表 3-11　XCP 2350で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-170626-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ホストノード（SPARC M10）のみが停電した場合、そのホストノードが復電したときにETERNUSの電源がいったん切断されます。このとき、物理パーティション（PPAR）の電源が投入されても、ETERNUSの電源は投入されません。 これは、ETERNUSを接続したSPARC M10システムで電源連動機能（RCIL）が有効な場合、発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ETERNUSの電源が入らなかった場合、PPARを再度OFF/ONして復旧してください。
RTI番号	**RTIF2-170428-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCPファームウェアをアップデートすると、アップデートは成功しますが、以下の場合、XCPファームウェアの版数がアップデート前の版数で表示されることがあります。 - XSCF Webの [VERSION] ボタンを選択する - Oracle Solaris上のprtdiag -vコマンドを実行する この状態でXSCFの再起動を行うと、XCPファームウェアの版数は正しい版数で表示されますが、XSCFにログインするたびに、以下のメッセージが表示されるようになります。 「XCP version of XSCF and Back-Panel mismatched!」
回避方法	有効な回避手段はありません。 [復旧方法] 再度、ファームウェアのアップデートを実施してください。 flashupdateコマンドでアップデートを行う場合は-fオプションを指定してください。
RTI番号	**RTIF2-170405-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF webからsnapshotを完全に採取し終わる前にブラウザを閉じ、新たにsnapshotコマンドを実行してXSCFシェルでsnapshotを採取すると、コマンドは正常終了しますが、snapshotにログが採取されていません。
回避方法	XSCF Webからsnapshotを採取中にブラウザを閉じたあとsnapshotを採取する場合は、再度XSCF Webから採取するか、ブラウザを閉じてから1時間待ってsnapshotコマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-161205-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスのファームウェアアップデートの際、アップデートの開始直後に 以下の「LINKCARD I2C error」のエラーログが誤って登録されることがあります。 Nov 27 19:28:26 M10-1 Event: SCF:LINKCARD update is started (LINKCARD=9, bank=1, PCIBOX version=1210: last version=1180) Nov 27 19:28:29 M10-1 Warning: /BB#0/PCI#9/LINK:SCF:LINKCARD I2C error
回避方法	有効な回避方法はありません。 アップデート開始直後の「LINKCARD I2C error」のエラーログは無視してください。 なお、PCIボックスのファームウェアアップデートは成功します。

表 3-11　XCP 2350で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150702-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	dumpconfig(8)コマンドを実行してXSCF設定情報を保存したあと、restoreconfig(8)コマンドを実行して同じ筐体、またはほかの筐体にXSCF設定情報を復元しようとすると、一部の設定が保存／復元されない、またはほかの筐体に過剰に復元されることがあります。 同じ筐体、またはほかの筐体に保存／復元されない設定は、以下のとおりです。 ■ setpowerschedule -c recoverコマンドで設定された復電時の電源動作の設定値 ■ setservicetag(8)コマンドで設定されたASR機能の有効／無効の設定値 ■ setremotepwrmgmt(8)コマンドで設定された電源連動グループの構築、設定変更、電源連動機能の有効／無効の設定値 同じ筐体、またはほかの筐体へ過剰に復元されてしまう設定は、以下のとおりです。 ■ XSCFと各物理パーティション（PPAR）のハイパーバイザとの時刻差分情報
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下の手順を実施してください。 1. dumpconfig(8)コマンドでXSCF設定情報を保存する前に、以下の設定を確認します。 ■ 復電時の電源動作の設定（recover mode） [例] 復電時、電源投入しない場合 XSCF> **showpowerschedule -a -m state** PPAR-ID schedule member recover mode ------- -------- ------ ------------ 0 enable 4 off ■ ASR機能（Service Tag）の有効／無効の設定 [例]有効の場合 XSCF> **showservicetag** Enabled ■ 電源連動グループの設定 - 構築、設定変更の退避 [例] 電源連動グループが1つ登録されている場合の、ftpサーバへの管理ファイルの退避 XSCF> **getremotepwrmgmt -G 1 ftp://server[:port]/path/file** - 電源連動機能の無効／有効の設定 [例] 有効の場合 XSCF> **showremotepwrmgmt** [Remote Power Management Group#01 Information] Remote Power Management Status :[Enable] --- 以下略 --- 2. dumpconfig(8)コマンドを実行し、XSCF設定情報を保存します。 3. restoreconfig(8)コマンドでXSCF設定情報を復元します。 4. restoreconfig(8)コマンドでXSCF設定情報を復元したあと、以下のコマンドを実行し、手順1で確認した値に設定しなおします。 ■ 復電時の電源動作の設定の復元 [例] 復電時、電源投入しない場合 XSCF> **setpowerschedule -a -c recover=off** ■ ASR機能（Service Tag）の有効／無効の設定の復元 [例] 有効にする場合 XSCF> **setservicetag -c enable** ■ 電源連動グループの構築、設定変更、電源連動機能の無効／有効の復元 [例] FTPサーバ上に退避した管理ファイルを元にした、設定情報の復元

表 3-11　XCP 2350で解決された不具合 (続き)

	(1) 電源連動グループに含まれている他ホストがある場合、他ホストの電源連動機能をいったん無効に設定します。 XSCF> **setremotepwrmgmt -c disable** (2) 電源連動グループの管理ファイルを復元します。 XSCF> **setremotepwrmgmt -c config "ftp://server[:port]/path/file"** (3) 電源連動機能を有効に設定します。無効に設定した他ホストがあれば、それら他ホストも有効に戻します。 XSCF> **setremotepwrmgmt -c enable** 5. 物理パーティションの電源投入を行い、Oracle Solarisの時刻をNTPサーバによる時刻同期、または、date(1)コマンドで時刻合わせを実施してください。

XCP 2340で解決された不具合

XCP 2340で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-12　XCP 2340で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-171013-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。 （CVE-2016-6304、CVE-2016-2182、CVE-2016-2183、CVE-2016-6302、CVE-2016-6306、CVE-2016-6515、CVE-2017-3731、CVE-2016-7431、CVE-2016-7429、CVE-2016-7433） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2340以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-170421-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	外付けDVDドライブからのブートに失敗することがあります。 [出力メッセージ例] {0} ok boot /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@2/pci@0/usb@4,1/cdrom@2/disk Boot device: /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@2/pci@0/usb@4,1/cdrom@2/disk File and args: Can't open boot device
回避方法	1. OpenBoot PROMをokプロンプトで停止します。 2. OpenBoot PROM環境変数nvramrcを以下の手順で変更します。 a. nveditコマンドを実行し、nvramrcに以下の内容を記載します。 {0} ok **nvedit** **0: : patch-zero 0 to my-adr0 0 ;** **1: ' patch-zero ' 0 ' new-instance d# 28 + token@ (patch** b. [Ctrl] + [C]キーを押して、nveditから抜けてokプロンプトに戻ります。 c. nvstoreを実行し、編集内容を保存します。 {0} ok **nvstore** d. nvramrcが正しく書き込まれたか確認します。 {0} ok **printenv nvramrc** nvramrc = **: patch-zero 0 to my-adr0 0 ;**

' patch-zero ' 0 ' new-instance d# 28 + token@ (patch
{0} ok
3. OpenBoot PROM環境変数use-nvramrc?をtrueにします。
{0} ok **setenv use-nvramrc? true**
use-nvramrc? = true
4. reset-allコマンドを実行し、OpenBoot PROMを再起動します。
{0} ok **reset-all**

reset-all後にokプロンプトで停止したら、DVDドライブからブートを実行してください。
例: 前面のUSBポートに接続したDVDドライブからブートを実行する場合
{0} ok **boot /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@2/pci@0/usb@4,1/cdrom@2/disk**

上記の[回避手順]の設定を元に戻す場合は、以下の手順を実施してください。
1. OpenBoot PROMをokプロンプトで停止します。
2. OpenBoot PROM環境変数nvramrcから設定した内容を削除します。
a. nveditを実行し、nvramrcから「: patch-zero 0 to my-adr0 0 ;」、
「' patch-zero ' 0 ' new-instance d# 28 + token@ (patch」を削除します。
行頭で[Ctrl] + [K] キーを2回押すことで行単位の削除ができます。
{0} ok **nvedit**
0:
b. [Ctrl] + [C] キーを押して、nveditから抜けてokプロンプトに戻ります。
c. nvstoreを実行し、編集内容を保存します。
{0} ok **nvstore**
d. nvramrcに設定が正しく削除されたか確認します。
{0} ok **printenv nvramrc**
nvramrc =
{0} ok
3. OpenBoot PROM環境変数use-nvramrc?をfalseに設定します。
回避手順の実行前からtrueに設定されていた場合、本手順は不要です。
{0} ok **setenv use-nvramrc? false**
use-nvramrc? = false
{0} ok
4. reset-allコマンドを実行し、OpenBoot PROMを再起動します。
{0} ok **reset-all**

表 3-12　XCP 2340で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-170407-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインからコンソールメッセージを連続して出力しているときに、rebootxscf(8)、switchscf(8)、flashupdate(8)コマンドによりXSCFをリブートすると、XSCF停止時にttydmプロセスがプロセスダウンし、以下のログが登録される場合があります。 [例] XSCF> **showlogs error -vr** Date: Mar 02 22:23:00 JST 2015 Code: 20000000-00fcff000e020000ff-01040001000000000000000 Status: Notice　　Occurred: Mar 02 22:22:54.396 JST 2015 FRU: /FIRMWARE,/MBU Msg: SCF process down detected Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 74747964 6d2e3237 36342e62 7a320000 00000000 00000000 0000 ttydmプロセスは、"Diagnostic Code"の4行目の先頭4バイトが"747479646d"であることで確認できます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ログが採取されますが、XSCFは再起動します。
RTI番号	**RTIF2-170406-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2230以降において、Oracle VM Server for SPARCのDynamic Resource Management（DRM）の使用時や、ldm remove-vcpuコマンドで仮想CPUを削除した場合、プロセスがコアダンプすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-170406-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの [XSCF] - [Logs] - [Console Log] メニューを選択し、ログ情報を表示すると、次のエラーがポップアップ画面に表示され、ログイン画面に戻ってしまいます。 Description Server Internal error or the page you visit does not exitst or has been deleted! Sorry for any inconvenience!
回避方法	有効な回避方法はありません。 コンソールログは、XSCFシェルのshowlogsコマンドを実行して確認してください。
RTI番号	**RTIF2-170405-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティキーを制御ドメインのOracle Solarisブートに使用している場合、以下の手順でドメイン構成情報を保存すると、次回のブートに失敗します。 1. 制御ドメインのOpenBoot PROMのokプロンプトで、set-security-keyコマンド、またはset-ascii-security-keyコマンドを実行し、セキュリティキーを設定する。 2. Oracle VM Server for SPARCのldm add-spconfigコマンドでドメイン構成情報をXSCFに保存する。 3. 制御ドメインのOracle Solarisをブートする。 なお、この問題は、ゲストドメインでは発生しません。

[例]セキュリティキーを設定後にOracle Solarisのブートに失敗した場合

```
SPARC M10-4S, No Keyboard
Copyright (c) 1998, 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
OpenBoot 4.38.5, 126.0000 GB memory available, Serial #********.
[ 2.21.0 ]
Ethernet address **:**:**:**:**:**, Host ID: *******.
--中略--
Boot device: /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@9/network@0 File and args:
100 Mbps full duplex Link up
100 Mbps full duplex Link up
100 Mbps full duplex Link up
SunOS Release 5.11 Version 11.3 64-bit
Copyright (c) 1983, 2015, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
NOTICE: Configuring iSCSI boot session...
Hostname: solaris

solaris console login: root
Password:
Last login: Wed Jan ** **:**:** 2017 on console
Jan ** **:**:** solaris login: ROOT LOGIN /dev/console^M
Oracle Corporation SunOS 5.11 11.3 September 2015
You have mail.
root@solaris:~# ldm ls-spconfig
factory-default [current]
root@solaris:~# ldm add-spconfig ldm-cfg1
root@solaris:~# ldm ls-spconfig
factory-default
ldm-cfg1 [current]
root@solaris:~# init 6
--中略--
SPARC M10-4S, No Keyboard
Copyright (c) 1998, 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
OpenBoot 4.38.5, 126.0000 GB memory available, Serial #********.
[ 2.21.0 ]
Ethernet address **:**:**:**:**:**, Host ID: *******.

100 Mbps full duplex Link up
Boot device: net File and args:
100 Mbps full duplex Link up
ERROR: /iscsi-hba: iSCSI login failed

ERROR: /packages/obp-tftp: Could not open /iscsi-hba/disk

Boot load failed

Evaluating:

{0} ok
```

回避方法

有効な回避方法はありません。

[復旧方法]

Oracle VM Server for SPARCでldm add-spconfigコマンドを実行し、ドメイン構成情報をXSCFに保存したあとで、OpenBoot PROMのokプロンプトからset-ascii-security-keyコマンドまたはset-security-keyコマンドでセキュリティキーを再設定してください。

表 3-12　XCP 2340で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-170405-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ビルディングブロック構成のシステムで、入力電源を投入（AC ON）した場合、または、rebootxscf -aコマンドを使用した場合に、以下のエラーログが登録されることがあります。 XSCF data synchronization failed このとき、物理パーティションの電源は投入できません。
回避方法	有効な回避法はありません。 rebootxscf -aコマンドを使用して、すべてのXSCFを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-170405-011**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	showinterimpermitコマンドをfieldeng権限で実行することができません。
回避方法	下記のいずれかのユーザー権限でコマンドを実行してください。 platadm、platop、pparadm、pparmgr、pparop
RTI番号	**RTIF2-170331-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC64 Xプロセッサが搭載されたSPARC M10システム上でゲストドメインをライブマイグレーションすると、ハイパーバイザがアボートすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-161215-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ゲストドメインのライブマイグレーションが失敗した場合、移行元の物理パーティション上の論理ドメインがパニックしたり、ハイパーバイザがアボートしたりすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ライブマイグレーションが失敗した場合、そのゲストドメインを速やかにリブートしてください。

表 3-12　XCP 2340で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-161117-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入してから、一定の時間が経過して、論理ドメインのブート／リブートを実施すると、ブート／リブートに失敗することがあります。 この問題は、内蔵LANからブート／リブートした場合に発生します。 発生する時間は以下のとおりです。 ■PPARの電源を投入してから、「24日と20時間16分23.648秒」が経過してからの15分間、および、その後、「49日17時間02分47.296秒」の倍数の時間が経過してからの15分間。 (25日め、および、75日め、125日め、175日め...の約50日間隔の15分間) [例] 24日と20時間16分23.648秒から31分23.648秒までの15分間 74日と13時間19分10.944秒から34分10.944秒までの15分間 [失敗例]SPARC M10-4で制御ドメインの内蔵LANからOracle Solarisをブートした場合 SPARC M10-4S, No Keyboard Copyright (c) 1998, 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved. OpenBoot 4.38.5, xx.xxxx GB memory available, Serial #xxxxxxxx. [2.19.0] Ethernet address xx:xx:xx:xx:xx:xx, Host ID: xxxxxxxx. 1000 Mbps full duplex Link up Boot device: net:dhcp File and args: 1000 Mbps full duplex Link up Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply : :
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] XSCFからsendbreakコマンドを実行し、okプロンプトで停止してから、15分後にbootコマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-150226-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	マスタXSCFとスタンバイXSCFが切り替え処理中に、旧マスタXSCFのCHECK LEDが点滅します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 マスタXSCFとスタンバイXSCFが切り替え処理中の旧マスタXSCFのCHECK LED点滅は無視してください。

表 3-12　XCP 2340で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-141008-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsnmpコマンドで設定を無効にしたあと、すぐに有効にすると、 "Agent enable failed"のメッセージが表示され、コマンドが失敗する場合があります。 これにより、以下の現象が発生することがあります。 1. 放置すると、「SCF panic detected」のエラーログが登録され、XSCFが再起動します。 2. 設定が反映されていないため、showsnmpコマンドを実行すると、「Agent Status」が「Enabled」、「Enabled MIB Modules」が「None」と表示されます。 3. showsnmpコマンドを実行すると、「Agent Status」が「Enabled」、「Enabled MIB Modules」が「SP MIB」と表示されますが、実際は設定が反映されていないため、XSCFを再起動すると、「Enabled MIB Modules」が「None」と表示されます。 4. 設定が反映されていないため、showsnmpコマンドの「Enabled MIB Modules」が「None」と表示される場合は、クラスタソフトウェアを使用しているシステムでは、「FJSVcluster: エラー: DEV: 7240: XSCFへの接続ができません。」のエラーが検出されます。 [例]setsnmpコマンド失敗後、設定が反映されていない場合 XSCF> **setsnmp disable** XSCF> **setsnmp enable** setsnmp: Agent enable failed XSCF> **showsnmp** Agent Status: Enabled Agent Port: 161 System Location: System-Location System Contact: System-Contact ： Status: Enabled Community String: public Enabled MIB Modules: None XSCF> この問題は、SNMP設定が有効の状態で、setsnmpusmコマンド、またはsetsnmpvacmコマンドを実行して設定を変更するときも、同様に発生します。
回避方法	設定を無効にしたあと、有効に変更する場合は、30秒以上の間隔をあけて行ってください。 setsnmpusmコマンド、またはsetsnmpvacmコマンドで設定を変更する場合には、SNMPの設定をいったんdisableにしてから、30秒以上の間隔をあけて行ってください。 [復旧方法] setsnmpコマンドで設定をいったん無効にしてから、30秒以上の間隔をあけて有効にしてください。その後、showsnmpコマンド、setsnmpusmコマンド、またはshowsnmpvacmコマンドを実行して設定が期待どおりになっているかを確認してください。

XCP 2332で解決された不具合

XCP 2332で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-13　XCP 2332で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-170130-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインのライブマイグレーションを行ったとき、ldm add-spconfigコマンドを実行して論理ドメイン構成情報を保存したにも関わらず、以下が正しく表示されない場合があります。 ■ XSCFのshowdomainstatusコマンドで表示される移動した論理ドメインの状態 ■ XSCF拡張MIB定義ファイルにあるscfDomainStatusの論理ドメインの状態 このとき、クラスタソフトウェアを使用している環境で、すべてのクラスタインタコネクトに障害が発生することにより、クラスタ切り替えとなった場合、ユーザーアプリケーションが二重に起動し、データの不整合を起こすことがあります。 [例]ほかのSPARC M10からguest01をライブマイグレーションで自SPARC M10に移動した場合に、showdomainstatusコマンドで guest01のStatusがSolaris runningと表示されるはずが、Host stoppedと表示される XSCF> **showdomainstatus -p 0 -y** Logical Domain Name　Status primary　Solaris running guest00　Solaris running guest01　Host stopped # **ldm list** NAME　STATE　FLAGS　CONS　VCPU　MEMORY　UTIL　UPTIME primary　active　-t-cv　4　1G　0.5%　3d 21h 7m guest00　active　-t---　5000　8　1G　23%　10h guest01　active　-t---　5001　8　1G　23%　20h
回避方法	ほかのSPARC M10からゲストドメインをライブマイグレーションで自SPARC M10に移動する前に、rebootxscf -aコマンドで自SPARC M10に接続されているすべてのXSCFを再起動してください。 XSCFの再起動は、PPARの電源を投入しなおすたびに必要です。 XSCFの再起動は、PPARの電源を切断してから、ライブマイグレーションを行うまでの間に実施してください。 PPARの電源を投入しなおす際に、入力電源を投入しなおした場合には、rebootxscf -aコマンドを実施する必要はありません。 【復旧方法】 rebootxscf -aコマンドでSPARC M10に接続されているすべてのXSCFを再起動したあと、状態が正しく表示されていないゲストドメインをライブマイグレーションで移動するか、またはゲストドメインを再起動してください。

XCP 2330で解決された不具合

XCP 2330で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-14　XCP 2330で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-161129-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2290以降において、Oracle Solaris 11.2以降が動作するゲストドメインをライブマイグレーションすると、ハイパーバイザがアボートすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ライブマイグレーションでゲストドメインが移動したあと、速やかにそのゲストドメインをリブートする、または、PPARを再起動（停止・起動）してください。
RTI番号	**RTIF2-161108-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入してから、一定の時間が経過して、論理ドメインのブート／リブートを実施すると、ブート／リブートに失敗しokプロンプトで停止します。 この問題は、内蔵ディスクとUSBデバイスからブート／リブートした場合は発生しません。 以下のデバイスからブート／リブートした場合に発生します。 ■ 仮想ディスク(*1)、仮想ネットワーク、仮想HBA、F160/F320カード *1: 内蔵ディスクを仮想ディスクとして使用した場合も該当する。 発生時間は以下のとおりです。 ■ PPARの電源を投入してから、「24日と20時間16分23.648秒」が経過してからの15分間、および、その後、「49日17時間02分47.296秒」の倍数の時間が経過してからの15分間。 (25日め、および、75日め、125日め、175日め...の約50日間隔の15分間) [例] 24日と20時間16分23.648秒から31分23.648秒までの15分間 74日と13時間19分10.944秒から34分10.944秒までの15分間 [失敗例] SPARC M10-1でゲストドメインの仮想ネットワークからOracle Solarisをブートした場合 SPARC M10-1, No Keyboard Copyright (c) 1998, 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved. OpenBoot 4.38.5, 14.0000 GB memory available, Serial #xxxxxxxx. [2.19.0] Ethernet address xx:xx:xx:xx:xx:xx, Host ID: xxxxxxxx. WARNING: /virtual-devices@100/channel-devices@200/network@0: Unable to connect to virtual switch No viable default device found in boot-device variable. Evaluating: {0} ok
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] okプロンプトで停止してから、15分後にbootコマンドを実行してください。

表 3-14　XCP 2330で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-161108-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスが2台あるシステム構成で、"XB detected fatal clock failure"、またはXB internal fatal error"のエラーが発生した場合、誤ったBB-IDでログが登録されることがあります。 [例]「Code:」のBB-IDは正しい値「01」を示しているが、「FRU:」のBB-IDは、誤って「0」を示している XSCF> **showlogs error** Date: May 16 08:49:52 JST 2016 Code: 80002100-0076110000ff0000ff-050067003013015f000000000 ^^ Status: Alarm Occurred: May 16 08:49:35.147 JST 2016 FRU: /BB#0/XBU#1 ^ Msg: XB detected fatal clock failure
回避方法	有効な回避方法はありません。 showlogs errorを実行したとき、「Code:」の被疑箇所の値により、故障部品を判別して、交換してください。
RTI番号	**RTIF2-161012-001**
対象モデル	**SPARC M10-1 、SPARC M10-4 、SPARC M10-4S**
説明	10 Gigabit Ethernetカードの仮想機能（VF）を割り当てたI/Oドメインを強制停止（ldm stop-domainの -f オプション等）した場合、VFが使用できなくなることがあります。
回避方法	VFを割り当てたI/Oドメインを停止する場合は、shutdownコマンドを使用してください。 [復旧方法] I/Oドメインに割り当てられているVFと、そのVFの物理機能（PF）を持つルートドメイン上で、該当するVFのFault Reportをfmadmコマンドでクリアしたあと、shutdownコマンドでI/Oドメインとルートドメインを停止、起動してください。
RTI番号	**RTIF2-161012-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	10 Gigabit Ethernet カードなどを割り当てたI/Oドメインにおいて、Oracle Solarisの起動中にOracle Solaris がハングアップすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-14　XCP 2330で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-160912-001**
対象モデル	**SPARC M10-4 、SPARC M10-4S**
説明	BB#00/CMUL以外のルートコンプレックス故障時に、XSCFのshowlogs errorコマンドで表示されるPCI access errorのFRUが正しく表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ルートコンプレックスの故障時には、以下のようにXSCFのshowstatus(8) コマンドの表示結果に従って、故障箇所の特定、および故障部品の交換を実施してください。 **注－**XSCFのshowlogs errorコマンドでの、PCI access errorのFRU、およびOracle Soalrisのfmdump/fmadmコマンドの出力結果で故障箇所を特定して保守しないでください。 [例] BB#01/CMUU/CPU#1 のルートコンプレックスが故障した場合 XSCF> **showstatus** BB#01 Status:Normal; * CMUU Status:Degraded; * CPU#1 Status:Degraded;
RTI番号	**RTIF2-160616-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	PCIボックスが2台接続されているシステムで、物理パーティション（PPAR）の電源を投入したあと、PCIボックスの接続が、物理パーティション上のOracle SolarisやOpenBoot PROMからは認識できるのに、XSCFからioxadm -v listコマンドを実行しても、認識できない場合があります。この場合、認識されない、LINKカード、PCIボックスの、ファンユニットまたは電源ユニットの活性交換ができません。 また、論理ドメイン構成で運用している場合に、factory-defaultとなり、論理ドメインが起動できない場合があります。 また、論理ドメイン構成で運用している場合に、factory-defaultとなり、論理ドメインが起動できない場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 物理パーティション（PPAR）の電源を切断し、再度投入してください。
RTI番号	**RTIF2-160606-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源が切断された状態でresetコマンドを実行すると、物理パーティション（PPAR）の電源を投入するときに、「no PSB available in PPAR」のエラーログが登録され、物理パーティション（PPAR）の電源の投入に失敗するようになります。
回避方法	物理パーティション（PPAR）の電源が切断された状態で、resetコマンドを実行しないでください。resetコマンドを実行したあと、「no PSB available in PPAR」のエラーログが登録されたときは、rebootxscfコマンドを実行してXSCFを再起動するか、いったんシステムの入力電源を切断してください。

XCP 2322で解決された不具合

XCP 2322で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-15　XCP 2322で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-161013-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF-LAN#0とXSCF-LAN#1の両方にIPアドレスを設定している場合、XSCF-LAN#1のIPアドレスが、SNMPv1のSNMP TrapのAgent Addressとして設定されることがあります。 このため、リソース管理ソフトウェア（ServerView Resource Orchestrator）がサーバの切り替えを試みると、失敗することがあります。 この問題は、SPARC M10-4Sにおいては、引き継ぎIPアドレスを設定していない場合に発生します。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-161004-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインをリブートしても、XSCF拡張MIB定義ファイルにあるscfPPARStatus（PPAR状態情報）のOIDの情報が更新されません。 このため、リソース管理ソフトウェア（ServerView Resource Orchestrator）がサーバの切り替えを試みると、失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-161004-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	IHV製品のグラフィックカードをIHV製品のPCI Express拡張ボックスに搭載し、SPARC M10に接続した場合、自己診断テスト（POST）中に「IOC register compare error」のエラーが検出されることがあります。
回避方法	POSTの診断レベルを「なし」に設定してください。 以下を実施します。 1. 物理パーティションの電源を切断します。 XSCF> **poweroff -p *x*** 2. POSTの診断レベルを「なし」にします。 XSCF> **setpparmode -p *x* -m diag=off**

XCP 2321で解決された不具合

XCP 2321で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-16　XCP 2321で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-160909-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solarisを起動したあとに、以下のエラーが検出されることがあります。 **XSCF> showlogs error -V** Date: xxx xx xx:xx:xx.xxx xxx xxxx Code: 40000000-00a20400480400a204-12bb00000000000000000000 Status: Warning　　Occurred: xxx xx xx:xx:xx.xxx xxx xxxx FRU: xxxxxxxxxxxxx Msg: PCI access error Diagnostic Code: 00000200 00000000 0000 00000100 00000000 0000 00000200 00000000 0000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000 Diagnostic Messages IO-FaultReport: TIME　　UUID xxx xx xx:xx:xx　　xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxx MSG-ID xxxxxxxxxxxxx 「FRU:」が以下のいずれかの場合、この不具合に該当します。 /BB#0/CMUL,/BB#0/CMUU /BB#0/CMUL /BB#0/CMUU /MBU 「MSG-ID」が以下のいずれかの場合、この不具合に該当します。 PCIEX-8000-YJ PCIEX-8000-KP PCIEX-8000-J5
回避方法	有効な回避方法はありません。 XCPファームウェアをXCP 2321以降にアップデートしてください。

XCP 2320で解決された不具合

XCP 2320で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-17　XCP 2320で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-161108-002**
対象モデル	**SPARC M10-4**
説明	SPARC M10-4のPCIスロット#9にPCIボックスが接続されている場合、PCIスロット#9にPCIボックスのリソースを使用している論理ドメインの再起動を実行すると、他の論理ドメインと比べて再起動に数分間余分に時間がかかる場合があります。
回避方法	有効な回避手段はありません。
RTI番号	**RTIF2-160613-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。 （JVNVU#90617353/CVE-2016-0800） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2320以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-160607-001**
対象モデル	**SPARC M10-4**
説明	SPARC M10-4のPCIスロット#9にPCIボックスが接続されている場合、PCIスロット#9に接続したPCIボックスに対して、ioxadmコマンドを実行して筐体LED（ロケーター）の点滅を指示したり、PCIボックスのファンユニットや電源ユニット（PSU）の活性交換を行ったりすることができません。
回避方法	有効な回避方法はありません。PCIスロット#9以外に接続したPCIボックスに対してioxadmコマンドを実行した場合は、再度ioxadmコマンドを実行してください。PCIスロット#9に接続したPCIボックスに対して、ファンユニットやPSUを交換する場合には、該当のPCIボックスを接続している物理パーティションの電源を切断して、交換を実施してください。
RTI番号	**RTIF2-160520-001**
対象モデル	**SPARC M10-4**
説明	SPARC M10-4のPCIスロット#9にPCIボックスが接続されている場合、PCIボックスファームウェアのアップデートを実行すると、以下のメッセージが表示され、アップデートが失敗する場合があります。 **注ー**PCIスロット#9以外に接続したPCIボックスに対するアップデートであっても、失敗します。 [出力メッセージ例] XSCF> **ioxadm -c update PCIBOX#8002 -s 1200** Firmware update is started. (version=1200) Operation was not successful. PCIスロット#9に接続したPCIボックスに対して、PCIボックスファームウェアのアップデートを実行した場合には、ioxadmコマンドがエラーで終了するまでに2時間以上かかる場合があります。なお、PCIボックスに対するファームウェアのアップデートが失敗しても、物理パーティションの動作には影響しません。
回避方法	有効な回避方法はありません。PCIスロット#9以外に接続したPCIボックスに対してioxadmコマンドを実行した場合は、再度ioxadmコマンドを実行してください。PCIスロット#9に接続したPCIボックスに対して、ファンユニットやPSUを交換する場合には、該当のPCIボックスを接続している物理パーティションの電源を切断して、交換を実施してください。

表 3-17　XCP 2320で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-160520-002**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入したあと、PCIボックスの接続が、物理パーティション上のOracle SolarisやOpenBoot PROMからは認識できるのに、XSCFからioxadm -v listコマンドを実行しても、認識できない場合があります。 この場合、XSCFの機能を使用して実行するLINKカードの活性交換や、PCIボックスのファンユニットや電源ユニットの活性交換ができません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 物理パーティションの電源を切断し、再度投入してください。
RTI番号	**RTIF2-160520-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	グラフィックスカード（SP0X7GR1F）を使用して、GNOME Display Manager（GDM）を起動した場合、ディスプレイ装置に何も表示されない場合があります。 なお、この問題は、Oracle Solarisがfactory-defaultの構成で発生します。
回避方法	以下の[回避方法1]または[回避方法2]のどちらかを実施してください。 [回避方法1] GNOMEが使用するデスクトップ環境情報のBusIDをコメント化してください。 なお、この操作によるシステム性能等への影響はありません。 以下を実施してください。 1. /etc/X11/xorg.conf内のBusIDをコメント行（行頭に"#"を付加）にするよう編集します。 [例] #First card start 行から # First card end 行の間に記載されているBusIDをコメント化する。 **# First card start** （略） **# BusID "PCI:8:0:0"** （略） **# First card end** 2. 変更したデスクトップ環境情報をGNOMEに反映します。 - GNOMEにログインしている場合、GNOMEをログオフして、ログインしなおしてください。 - GNOMEにログインしていない場合、GDMを再起動して、GNOMEにログインしてください。 [例] GNOMEにログインしていない場合、GDMを再起動する。 **# /usr/sbin/svcadm restart gdm** [回避方法2] 論理ドメイン構成情報を保存した状態で、システムを運用してください。 この問題により、グラフィックスカードが使用するPCI情報が誤って設定されている可能性があるため、GFX 550e Driver Softwareを再インストールする必要があります。また、これらの操作は、ハードウェア構成を変更した場合（CPUコア アクティベーションの設定変更を含む）には、再度実施する必要があります。 以下を実施してください。 1. 現在の構成（factory-default）のまま、Oracle Solarisを起動します。 2. ldm add-spconfigコマンドを実行し、現在の論理ドメイン構成情報を保存します。 [例] **# /usr/sbin/ldm add-spconfig <*config*>** 3. Oracle Solarisを停止します。 [例] **# /usr/sbin/shutdown -y -g0 -i5** 4. Oracle Solarisを起動し、GFX 550e Driver Softwareを再インストールします。 これ以降、手順2で保存した論理ドメイン構成情報でシステムを運用してください。

表 3-17　XCP 2320で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-160520-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインに対してresetコマンド実行中に、ほかの論理ドメインに対するresetコマンドを実行すると、あとから実行したresetコマンドが抑止されることがあります。クラスタソフトウェアがresetコマンドを実行してクラスタ切り替えを行う場合に、この抑止制御が原因で、クラスタ切り替えに失敗することがあります。 なお、クラスタソフトウェアは、順番に経路を変更してresetコマンドを実行し、クラスタ切り替えを行いますので、最終的にクラスタ切り替えは成功します。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-160512-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）を起動してから734日が経過すると、ldmdサービスが「maintenance」になることがあります。その結果、Oracle VM Server for SPARCのldmコマンド、論理ドメインの操作（起動／停止／構成変更／マイグレーション）、CPUコアの自動交替、CPU／メモリの動的縮退、および、ハイパーバイザと論理ドメイン間の監視（Host Watchdog）が使用できなくなります。また、PPARを起動してから1,101日が経過すると、制御ドメインがpanicしたり、ハイパーバイザが異常終了（Hypervisor Abort）することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。物理パーティション（PPAR）を起動してから734日が経過する前に、物理パーティション（PPAR）を再起動（停止／起動）してください。 [復旧方法] 物理パーティション（PPAR）を再起動（停止／起動）してください。
RTI番号	**RTIF2-150521-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ioxadm(8)コマンドを実行した場合、メッセージ「Operation was not successful.」が表示され、コマンドがエラーとなることがあります。 [例] XSCF> **ioxadm -c update PCIBOX#0000 -s 1234** Firmware update is started. (version=1234) Operation was not successful. また、prtfru(8)コマンドを実行した場合、「An internal error has occurred. Please contact your system administrator.」が表示され、コマンドがエラーとなることがあります。 [例] XSCF> **prtfru** An internal error has occurred. Please contact your system administrator.
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 再度、コマンドを実行してください。

XCP 2290で解決された不具合

XCP 2290で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-18　XCP 2290で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-160401-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。 （JVNVU#97236594/CVE-2015-7547） （JVNDB-2013-003252/CVE-2013-4786） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2290以降にアップデートしてください。 電源連動機能を使用する場合には、「電源連動機能（RCIL）に関する留意点」を参照してください。
RTI番号	**RTIF2-160203-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	OpenBoot PROM環境変数nvramrcに1017文字以上の文字列を設定した場合、以下のメッセージが表示され、okプロンプトの状態で停止することがあります。 FATAL: free-memory: bad address. ERROR: Last Trap: Memory Address not Aligned TL:　1 %TL:1 %TT:34 %TPC:f0209020 %TnPC:f0209024 %TSTATE:4420001600 %CWP:0 　%PSTATE:16 AG:0 IE:1 PRIV:1 AM:0 PEF:1 RED:0 MM:0 TLE:0 CLE:0 MG:0 IG:0 　%ASI:20　%CCR:44　XCC:nZvc　ICC:nZvc %TL:2 %TT:60 %TPC:f0246b54 %TnPC:f0200680 %TSTATE:14420001400 %CWP:0 　%PSTATE:14 AG:0 IE:0 PRIV:1 AM:0 PEF:1 RED:0 MM:0 TLE:0 CLE:0 MG:0 IG:0 　%ASI:20　%CCR:44　XCC:nZvc　ICC:nZvc 　略 {0} ok
回避方法	nvramrcに設定する文字数を1016文字以内にしてください。okプロンプトで以下を実施してください。 1. OpenBoot PROM環境変数auto-boot?がtrueの場合、falseに設定し、reset-allコマンドを実行して、OpenBoot PROMを再起動してください。 2. nveditコマンドを実行します。 3. nvramrcの内容が1016文字以内になるよう編集します。 4. nvstoreコマンドを実行し、nvramrcの内容を反映します。 5. OpenBoot PROM環境変数auto-boot?を 元の値に設定し、reset-allコマンドを実行して、OpenBoot PROMを再起動してください。

表 3-18　XCP 2290で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-160129-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	showstatusコマンドを実行して、故障部品のStatusが、「Faulted」または「Degraded」と表示されるハードウェア故障のエラーログが登録された場合、ごくまれに、誤って「Deconfigured」と表示される場合があります。 [例] Alarmレベルのメモリの故障が検出された場合、本来、Statusは「Faulted」のはずが、「Deconfigured」と表示される。 XSCF> **showlogs_error** Date: Jan 1 00:00:00 JST 2016 Code: 80002000-006e070069040000ff-0192041100000000000000000 Status: Alarm Occurred: Jan 1 00:00:00.000 UTC 2016 FRU: /BB#0/CMUL/MEM#00A,/BB#0/CMUL Msg: DIMM initialization serious error XSCF> **showstatus** BB#00 Status:Normal; CMUL Status:Normal; * MEM#00A Status:Deconfigured; * MEM#01A Status:Deconfigured; * MEM#02A Status:Deconfigured; * MEM#03A Status:Deconfigured;
回避方法	有効な回避方法はありません。 showstatusコマンドでのStatusは正しく表示されませんが、故障部品は縮退されていますので故障部品の保守を行ってください。
RTI番号	**RTIF2-160129-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドを使用して、ファンユニットの保守を行っている場合、誤ってファンの構成違反を示すエラーログが登録されることがあります。 また、このとき、showhardconfコマンドやshowstatusコマンドで保守対象のファンユニットを搭載するシステムまたは筐体が、実際には縮退していないにもかかわらず、縮退しているように表示されます。 [エラーメッセージ例] Msg: FAN shortage [例] BB#00のファンの保守を行った場合 XSCF> **showstatus** * BB#00 Status:Deconfigured;
回避方法	有効な回避方法はありません。 【復旧方法】 このエラーログは、保守作業には影響ありませんので、無視してください。 replacefruコマンドに従って、ファンユニットの保守が完了すれば、筐体の縮退状態の表示は解消されます。

表 3-18　XCP 2290で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-160129-004**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUメモリユニット（上段）（CMUU）を減設した場合、showcodusageコマンドの「Installed」、およびshowpparinfoコマンドの「CPU Cores」と「Cores」で表示されるCPUコアリソースの数が、CMUUが実装されているときの数で誤って表示されます。 [例] SPARC M10-4でCMUUを減設した場合、実装されているCPUコアリソースの数が実際には32個のはずが64個と表示される。 XSCF> **showcodusage** Resource In Use Installed CoD Permitted Status -------- ------ --------- ------------- ------ PROC 0 64 64 OK: 64 cores available ~~ PPAR-ID/Resource In Use Installed Assigned ---------- ------ --------- ---------- 0 - PROC 0 64 64 cores ~~ 1 - PROC 0 0 0 cores 2 - PROC 0 0 0 cores 3 - PROC 0 0 0 cores 4 - PROC 0 0 0 cores 5 - PROC 0 0 0 cores 6 - PROC 0 0 0 cores 7 - PROC 0 0 0 cores 8 - PROC 0 0 0 cores 9 - PROC 0 0 0 cores 10 - PROC 0 0 0 cores 11 - PROC 0 0 0 cores 12 - PROC 0 0 0 cores 13 - PROC 0 0 0 cores 14 - PROC 0 0 0 cores 15 - PROC 0 0 0 cores Unused - PROC 0 0 64 cores
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-151124-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の手順を実施すると、「Hypervisor Abort」が発生し、論理ドメインの起動に失敗する場合があります。このとき、再度PPARを起動すると、PPARがリブートを繰り返し、論理ドメインを起動できなくなります。また、論理ドメインの構成情報も復元できません。 1. dumpconfigコマンドを実行して、論理ドメインの構成情報を含むXSCF設定情報を保存します。 2. 論理ドメインの構成情報を変更します。 3. 変更前の構成情報名を指定してldm remove-spconfigコマンドとldm add-spconfigコマンドを実行し、現在の論理ドメインの構成情報を変更した構成に置き換え、XSCFに保存します。 4. restoreconfigコマンドを実行して、手順1で保存した論理ドメインの構成情報を含むXSCF設定情報を復元します。 5. 物理パーティション（PPAR）を起動します。
回避方法	論理ドメインの構成情報の復元は、[説明]の手順5を実施せず、手順4のあと以下を実施してください。 1. factory-default構成でPPARを起動します。 2. あらかじめ退避したXMLファイルから論理ドメインの構成情報を復元します。 3. ldm add-spconfigコマンドを実行し、論理ドメインの構成情報をXSCFに保存します。

表 3-18　XCP 2290で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150914-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	flashupdate(8)コマンドを実行してファームウェアをアップデートしているときに、以下のいずれかの操作により物理パーティション（PPAR）の電源を投入すると、「FMEM serious error」のエラーログが登録され、マザーボードユニット（MBU）またはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）が縮退するとともに、PPARの電源投入およびファームウェアのアップデートが失敗することがあります。 ■ オペレーションパネルの電源スイッチを使用した電源投入 ■ 電源連動機能（RCIL）による電源投入指示 ■ 自動電源制御（APCS）による電源投入指示
回避方法	flashupdate(8)コマンドを実行してファームウェアをアップデートしているときには、オペレーションパネルの電源スイッチやRCIL、APCSにより、PPARの電源を投入しないでください。これらの操作は、ファームウェアのアップデートが完了したあとに実施してください。 ファームウェアのアップデートが完了したかどうかはshowlogs eventコマンドで確認できます。アップデートが完了した場合は、以下のメッセージが出力されます。 "XCP update has been completed (XCP version=xxxx:last version=yyyy)" [復旧方法] マザーボードユニット（MBU）、またはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換してください。
RTI番号	**RTIF2-150521-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源が投入されている状態で、flashupdate(8)コマンドを使用してファームウェアをアップデートしたあと、物理パーティションの動的再構成によってシステムボード（PSB）を追加すると、以下のエラーログが登録され、PSBの追加に失敗することがあります。 Warning: /BB#x/CMUL:SCF:POST/OBP/HV data write error Notice: /UNSPECIFIED:HYPERVISOR:DR failed また、PSBの追加先であるPPARがリセットされます。
回避方法	version -c xcp -vを実行し、[CMU BACKUP] の行を確認してください。 [例] XSCF> **version -c xcp -v** BB#00-XSCF#0 (Master) XCP0 (Reserve): 2260 CMU : 02.25.0000 POST : 3.9.0 OpenBoot PROM : 4.36.1+2.10.0 Hypervisor : 1.4.1 XSCF : 02.26.0000 XCP1 (Current): 2260 CMU : 02.25.0000 POST : 3.9.0 OpenBoot PROM : 4.36.1+2.10.0 Hypervisor : 1.4.1 XSCF : 02.26.0000 BB#01-XSCF#0 (Standby) XCP0 (Reserve): 2260 CMU : 02.25.0000 POST : 3.9.0

表 3-18　XCP 2290で解決された不具合 (続き)

```
        OpenBoot PROM     : 4.36.1+2.10.0
        Hypervisor        : 1.4.1
XSCF              : 02.26.0000
XCP1 (Current): 2260
CMU                  : 02.25.0000
        POST                  : 3.9.0
        OpenBoot PROM     : 4.36.1+2.10.0
        Hypervisor        : 1.4.1
XSCF                : 02.26.0000
CMU BACKUP
#0: 02.26.0000
#1: ..
XSCF>
```

[CMU BACKUP] のCMUファームウェア版数（上記例では#0: 02.26.0000）と、PPARが稼働しているPSB（BB#xx）の、XCP0またはXCP1がCurrentである行の次の行に記載されているCMUファームウェア版数（上記例ではCMU : 02.25.0000）が一致しない場合は、PPARが稼働している状態で、XCPファームウェアを、Current行の次の行にあるCMファームウェア版数にアップデートしてください。
CMUファームウェア版数が一致している場合は、ファームウェアをアップデートする必要はありません。

CMUファームウェア版数が一致しているかどうかに関わらず、このあと、PPARが稼働している状態で、flashupdate(8)コマンドによりファームウェアをアップデートする場合は、事前に以下を実施してください。
1. switchscf(8)コマンドを実行し、マスタXSCFを切り替えます。
2. rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFをリセットします。
PPARが停止している状態でファームウェアをアップデートする場合は、上記1.および2.の手順は不要です。

XCP 2280で解決された不具合

XCP 2280で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-160909-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	電源ユニット（PSU）の故障をXSCFで検出できない場合があります。
回避方法	以下のいずれかの方法で、PSUの故障を判断してください。PSUの故障と判断した場合は、PSUを交換してください。 ■ 物理パーティション（PPAR）が稼働中、PSUのLEDが点灯（橙）、または点滅（緑）の状態になる ■ 物理パーティション（PPAR）の電源を切断後、再投入した際に、XSCFのログにPSUの故障が登録される

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-160613-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。 （JVNDB-2013-001910/CVE-2013-2566） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2280以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-151117-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	複数のiSCSIターゲットが存在する場合、okプロンプトでshow-iscsiコマンドを実行したときにログインできないiSCSIターゲットが検出されると、「login failed」のエラーが表示されコマンドが終了します。このとき、ログインを試みていないほかのiSCSIターゲットの情報が出力されません。 [例] 2番目のiSCSIターゲットがログインに失敗した場合 {0} ok **show-iscsi /pci@8100/pci@4/pci@0/pci@0/network@0** 1000 Mbps full duplex Link up Target: iqn.1986-03.com.sun:02:27f6951c-a432-4a86-b6c4-de72743cd25a Lun 0-0-0-0 Disk SUN COMSTAR 1.0 71669440 Blocks, 36 GB Lun 1-0-0-0 Disk SUN COMSTAR 1.0 71669440 Blocks, 36 GB Target: iqn.1986-03.com.sun:02:c5662c3b-a6d9-4a69-b0d0-c6445a23383b Evaluating: login failed {0} ok
回避方法	show-iscsiコマンドの出力に目的のiSCSIターゲットが表示されていない場合は、iSCSIターゲット側からターゲット情報を確認してください。iSCSIターゲット側からの確認方法は各ターゲットのマニュアルを参照してください。
RTI番号	**RTIF2-151105-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。 （JVNDB-2015-002764/CVE-2015-4000） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2280以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-151105-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの [PPAR Operation] - [Verified Boot] メニューで、ベリファイドブートで使用されるユーザー用のX.509公開鍵証明書を登録する場合、コピーしたX.509公開鍵証明書を登録しようとすると、「Space is not allowed.」と表示され、登録できません。
回避方法	コピーしたX.509公開鍵証明書を登録する場合は、addvbootcerts(8)コマンドを使用してください。XSCF Webは、USB媒体またはhttp/httpsサーバを指定してX.509公開鍵証明書を登録する場合に使用してください。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-151105-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ファンの故障が発生した場合、物理パーティション（PPAR）の電源を切断する必要がないときでも、切断されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 故障したファンユニットを交換してください。 その後、PPARの電源を投入しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-151105-004**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	電源ユニット（PSU）の故障により、「PSU input power failure / PSU input power recover」のイベントログが多数登録される場合、XSCFパニックが繰り返され、XSCFが停止することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PSUのイベントログが多数登録される場合は、故障したPSUを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-151105-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4S筐体の交換や増設、またはXSCFユニット（XSCFU）の交換において保守部品が故障している場合、保守メニューの表示では45分でタイムアウトするはずが、90分でタイムアウトすることがあります。 [例] 保守部品のXSCFUが故障している場合 Waiting for XBBOX#81/XSCFU to enter ready state. [This operation may take up to 45 minute(s)] (progress scale reported in seconds) 0..... 30..... 60..... 90..... 120..... 150..... 180..... 210..... 240..... 270..... 300..... 330..... 360..... 390..... 420..... 450..... 480..... 510..... 540..... 570..... 600..... 630..... 660..... 690..... --- 中略 --- 2400.....2430.....2460.....2490.....2520.....2550.....2580.....2610.... 2640.....2670.....2700.....略
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 別の保守部品を使用してください。
RTI番号	**RTIF2-151105-006**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	XSCF Webの [PPAR Operation] - [PSB Configuration] メニューで、システムボードのCPUに対するメモリミラーモードを設定しようとすると、「System error: unknown error.」と表示され、設定できません。
回避方法	SPARC M10-1に対してメモリミラーモードを設定する場合は、setupfru(8)コマンドを使用してください。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-151020-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	3BB以上またはクロスバーボックスのあるシステム構成でファームウェア版数がXCP 2250以降の場合、XSCFのマスタ／スタンバイが切り替わったあと、Oracle Solarisを長い間稼働状態にしておくと、物理パーティション（PPAR）の電源を切断／再投入したときに、Oracle Solarisの時間がずれることがあります。 また、同様のシステム構成とファームウェア版数で、XSCFのマスタ／スタンバイが切り替わったあと、10日おきにXSCFで以下のエラーログが登録されます。 Date: Sep 15 11:42:38 JST 2015 Code: 20000000-00560300fcff0000ff-01e40001000000000000000 Status: Notice Occurred: Sep 15 11:43:08.531 JST 2015 FRU: /BB#2/CMUL,/FIRMWARE Msg: XSCF self diagnosis warning detection
回避方法	XSCFのマスタとスタンバイが切り替わったあと、速やかに以下のいずれかの操作を行ってください。 ■ rebootxscf(8)コマンドを実行し、すべてのXSCFをリセットする ■ rebootxscf(8)コマンドを実行し、マスタとスタンバイ以外のXSCFをリセットする ■ すべてのPPARを停止したあとすべての入力電源をいったん切断し、30秒以上あけてから入力電源を投入しなおす [復旧方法] 以下の手順を実行し、シングルユーザーモードでOracle Solarisを起動したあと時刻を設定しなおしてください。 1. poweroff(8)コマンドを実行し、PPARの電源を切断します。 2. showpparstatus(8)コマンドを実行し、Statusが「Powered off」となり、PPARの電源が切断されたことを確認します。 3. OpenBoot PROM環境変数auto-boot?を「false」に設定します。 XSCF> **setpparparam -p** *ppar_id* **-s bootscript "setenv auto-boot? false"** 4. poweron(8)コマンドを実行し、PPARの電源を投入します。 5. console(8)コマンドを実行し、制御ドメインコンソールに接続し、okプロンプトの状態にします。 6. Oracle Solarisをシングルユーザーモードで起動します。 {0} ok **boot -s** 7. date(1)コマンドを実行し、Oracle Solarisの時刻を設定します。 [例] 2015年10月20日18時30分00秒に設定する場合 # **date 1020183015.00**

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150818-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCFが再起動中のシステムボード（PSB）に対して、DR機能を使用してdeleteboard(8)コマンドで切り離しを行うと、「SCF process down detected」のエラーが検出され、deleteboard(8)コマンドが異常終了することがあります。対象のシステムボードがスタンバイXSCFの場合は、このあと、マスタXSCFが停止したまま無応答状態となります。対象のシステムボードがスレーブXSCFの場合は、マスタXSCFが再起動しスタンバイXSCFとの切り替えが発生します。 いっぽう、addboard(8)コマンドで組み込みを行うと、コマンドのタイムアウトが検出され、addboard(8)コマンドが異常終了することがあります。このとき、マスタXSCFとスタンバイXSCFの切り替えは発生しません。 以下は、deleteboard(8)コマンドが内部異常で終了した場合の例です。 [例] XSCF> **deleteboard -c disconnect -m unbind=resource 00-0** PSB#00-0 will be unconfigured from PPAR immediately. Continue?[y|n] :**y** All domains are temporarily suspended, proceed?[y|n] :**y** Start unconfigure preparation of PSB. [1200sec] 0|/end An internal error has occurred. Please contact your system administrator. XSCF>
回避方法	showhardconf(8)コマンドを実行し、すべてのクロスバーボックスおよびSPARC M10-4Sの[Status] が「Normal」であることを確認したあと、deleteboard(8)コマンドまたはaddboard(8)コマンドを実行してください。 なお、deleteboard(8)コマンド、またはaddboard(8)コマンド実行中は、rebootxscf -aコマンドやswitchscf(8)コマンドによる、XSCFの再起動を伴うすべてのコマンドは実行しないでください。 [復旧方法] ■ 対象のシステムボードがスタンバイXSCFの場合 すべてのSPARC M10システム筐体、またはクロスバーボックス筐体の入力電源を切断したあと再投入（AC-OFF/ON）してください。 ■ 対象のシステムボードがスレーブXSCFの場合 回避方法に従って、DR機能によるシステムボードの切り離し、または組み込みを実施しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-150729-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の自己診断テスト（POST）でDIMM異常が検出された場合、DIMMを交換しても部品の故障マークがクリアされません。以下の例のように、交換後、部品に故障マークがつき、部品状態が「Deconfigured」となります。 [例] XSCF> **showstatus** * MBU Status:Deconfigured; * CPU#0 Status:Deconfigured; * MEM#00A Status:Deconfigured; * MEM#01A Status:Deconfigured; * MEM#02A Status:Deconfigured; * MEM#03A Status:Deconfigured;
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] XCP 2250以降にファームウェアをアップデートしてください。オペレーションパネルのモードスイッチをServiceモードに切り替えたあと、入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してください。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150708-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	マザーボードユニット（MBU）、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはCPUメモリユニット（上段）（CMUU）とmicroSDカードを同時に交換した場合、物理パーティション（PPAR）の自己診断テスト（POST）で検出された部品の故障マークがクリアされません。以下の例のように、交換後、部品に故障マークがつき、部品状態が「Deconfigured」となります。 [例] XSCF> **showstatus** * MBU Status:Deconfigured; * CPU#0 Status:Deconfigured; * MEM#00A Status:Deconfigured; * MEM#01A Status:Deconfigured; * MEM#02A Status:Deconfigured; * MEM#03A Status:Deconfigured;
回避方法	マザーボードユニット（MBU）、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはCPUメモリユニット（上段）（CMUL）とmicroSDカードを交換する場合は、同時に交換せず、1部品ずつ交換してください。 [復旧方法] XCP 2250以降にファームウェアをアップデートしてください。オペレーションパネルのモードスイッチをServiceモードに切り替えたあと、入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してください。
RTI番号	**RTIF2-150626-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの [PPAR Operation] - [Verified Boot] メニューで、ベリファイドブートで使用されるユーザー用のX.509公開鍵証明書をPPAR#0以外を指定して詳細表示させた場合、誤ってPPAR#0のX.509公開鍵証明書を表示してしまいます。
回避方法	PPAR#0以外の公開鍵証明書を確認したい場合は、showvbootcerts(8)コマンドを使用してください。
RTI番号	**RTIF2-140808-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	部品の故障が発生したあとに、物理パーティション（PPAR）の電源が切断できないことがあります。 この現象は、以下の手順により発生します。 1. 部品の故障によるPPARの再起動処理中に、poweroff(8)コマンドを-fオプションなしで実行します。 2. 部品の故障によるPPARの再起動が失敗しPPARの電源が切断されたあと、poweron(8)コマンドを実行しPPARの電源を投入します。 3. poweroff(8)コマンドを-fオプションなしで実行します。
回避方法	部品の故障によるPPARの再起動処理中に、poweroff(8)コマンドを実行しないでください。 [復旧方法] Oracle Solaris上からshutdownコマンドを実行して、PPARの電源を切断してください。 [例] # **shutdown -y -g0 -i5**

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140616-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を切断中にマスタXSCFの入力電源を切断したあと再投入すると、マスタXSCFが一時的に不在となったことが原因でエラー処理に失敗するとともに、そのPPARが異常のままとなり、再度、PPARの電源を投入できなくなることがあります。 この現象は、showboards(8)コマンドを実行すると、マスタXSCFのPSBの状態である「Pwr Conn Conf」が、「n y n」となっていることで確認できます。 [例] マスタXSCFがBB#00の場合 XSCF> **showboards -a** PSB PPAR-ID Assignment Pwr Conn Conf Test Fault --- ------- ---------- ---- ---- ---- ------- -------- 00-0 00(00) Assigned n y n Passed Normal 01-0 01(00) Assigned y y n Passed Normal
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] システムを構成するすべてのSPARC M10-4S筐体の入力電源を、切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-010**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	3BB以上、またはクロスバーボックスを含むシステム構成で、XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えを256回連続して発生させると、スレーブXSCFで「SCF process down detected」のエラーが検出され、XSCFのcoremgrdがプロセスダウンすることがあります。
回避方法	XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えを、連続して何度も行わないでください。 [復旧方法] XSCFをリセットしてください。システムは使用できる状態になります。
RTI番号	**RTIF2-140507-012**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムにおいて、すべての筐体の入力電源を切断してクロスバーボックスまたはクロスバーボックスのXSCFユニットを交換したあと入力電源を投入すると、以下のエラーログが登録されることがあります。 Indispensable parts are not installed (OPNL). Indispensable parts are not installed (FAN). Indispensable parts are not installed (PSU).
回避方法	クロスバーボックスを交換する場合は、交換対象となるクロスバーボックスの入力電源だけを切断して交換してください。 クロスバーボックスのXSCFユニットを交換する場合は、replacefru(8)コマンドを実行して交換してください。 クロスバーボックスまたはクロスバーボックス内のXSCFユニットの交換は、『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』を参照し、手順に従って実施してください。 [復旧方法] 交換したクロスバーボックスの入力電源を切断したあと再投入（AC Off/ON）してください。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140410-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を切断または再起動した直後にハードウェアの異常が検出されると、PPARの電源の切断、または再起動の処理が停止し、そのまま処理が完了しないことがあります。 この現象は、PPARの電源の切断、または再起動を実施したあと、showpparprogress(8)コマンドを実行して、1分以上経過しても、PPARの電源が投入状態であり、切断が完了していないことで確認できます。 ［切断失敗例］ XSCF> **showpparprogress -p 0** This PPAR is powered on. 本来、PPARの電源の切断が完了するときは、切断のシーケンスとPPARの状態は以下のようになります。 [切断成功例] XSCF> **showpparprogress -p 0** PPAR Power Off　PPAR#0 [1/3] CPU Stop　PPAR#0 [2/3] PSU Off　PPAR#0 [3/3] The sequence of power control is completed.
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] showpparprogress(8)コマンドを実行したあと30分経過してもPPARの電源が投入状態の場合は、すべての筐体で入力電源を切断したあと再投入（AC-OFF/ON）をしてください。
RTI番号	**RTIF2-140409-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	snapshot(8)コマンドを実行してUSBメモリに情報を採取している間にUSBメモリを抜き差しすると、以下のハードウェア異常が検出されることがあります。 Msg: DMA timeout error Hard detected このとき、論理ドメインは継続して運用されますが、ハードウェアにアクセスする機能（電源投入／切断、監視機能など）が動作しなくなります。
回避方法	snapshot(8)コマンドを実行して、情報を採取している間は、USBメモリを抜き差ししないでください。 [復旧方法] システムの入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）してください。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140409-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の場合、誤ってハードウェア要因のエラーログが登録されます。 ■ ソフトウェア要因によるwatchdogタイムアウトが発生した場合 ■ XSCF RESETスイッチを押した場合 ■ ファーム起因によるXSCFのパニックが発生した場合 [例] ■ 誤 Status: Alarm FRU: /FIRMWARE,/MBU Msg: SCF panic detected ■ 正 Status: Notice FRU: /FIRMWARE,/MBU Msg: SCF panic detected
回避方法	有効な回避方法はありません。 Statusの「Alarm」を「Notice」に読み替えてください。
RTI番号	**RTIF2-140402-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Web上の [Settings] - [Service] - [SMTP]、[Settings] - [Email Reporting]、[Settings] - [Audit]、および[Settings] - [CoD Activation] メニューにあるメールアドレス入力フィールドに、下記の特殊文字が含まれたメールアドレスを設定できません。 「!」「#」「$」「%」「&」「'」「*」「+」「/」「=」「?」「^」「'」「{」「|」「}」「~」
回避方法	XSCFシェルのsetemailreport(8)コマンドを使用してください。
RTI番号	**RTIF2-140402-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Internet ExplorerでXSCF Webを使用した場合、[XSCF] - [Settings] - [Service] - [SNMP Security] メニューにあるVACMの [Groups] と [View Access] の、2番目以降のUser/Groupを削除しようとするとエラーメッセージが出力され削除できません。
回避方法	FirefoxでXSCF Webを使用するか、XSCFシェルのsetsnmpvacm(8)コマンドを使用して削除してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-008**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源投入中、または物理パーティションの再起動中に、部品故障などにより処理が中断されると、オペレーションパネルのPOWER LEDが点滅したままになります。なお、システム運用中には、本問題は発生しません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 物理パーティション（PPAR）の電源投入／再起動処理が中断された状態から、物理パーティション（PPAR）の電源を投入しなおすと、オペレーションパネルのPOWER LEDの点滅状態は解除されます。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140212-012**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	3BB以上、またはクロスバーボックスを含むシステム構成で、XSCFのマスタ／スタンバイが約60回以上切り替わると、スレーブXSCFでプロセスダウンが発生し、スレーブXSCFがリセットされることがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。 スレーブXSCFがリセットされることでシステムは復旧するため、継続してシステムを運用できます。
RTI番号	**RTIF2-131213-012**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドによるSPARC M10の交換後の診断処理が正常終了しないことがあります。 [例]BB#2の交換 Diagnostic tests for BB#2 have started. Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y PSB#02-0 power on sequence started. 0.....30.....end Initial diagnosis started. [7200sec] 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240..... 270.....300.....330.....360.....390.....420.....450.....480.....510..... 540.....570.....600.....630.....660.....690.....720.....750.....780..... 810.....840.....870.....900..end Initial diagnosis has completed. PSB power off sequence started. [1200sec] 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240..... 270.....300.....330.....360.....390.....420.....450.....480.....510..... 540.....570.....600.....630.....660.....690.....720.....750.....780..... 810.....840.....870.....900.....930.....960.....990.....1020.....1050..... 1080.....1110.....1140.....1170.....1200end Failed to power off. Please check the FRU. An internal error has occurred. Please contact your system administrator. done [Warning:030] testsb failed.[c:cancel] :
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] replacefru(8)コマンドを再度実行してください。
RTI番号	**RTIF2-130802-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドでクロスバーボックスのXSCFユニットを交換したとき、コマンドは正常に終了しますが、以下のエラーログが登録されることがあります。このエラーログで示される被疑箇所は正しくありません SCF:Board control error (link failed)
回避方法	再度、replacefru(8)コマンドで同じクロスバーボックスのXSCFユニットを交換してください。 交換作業時に入力電源を切断（AC OFF）した場合は、すべてのXSCF BB制御ケーブルを抜き差ししなおしてください。

表 3-19　XCP 2280で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130711-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスのXSCFユニットの活性交換が完了する前に、replacefru(8)コマンドが正常終了します。
回避方法	replacefru(8)コマンドを使用してXSCFユニットを交換する場合に、XSCFユニットを交換後以下のメッセージが出力されたときは、そのまま10分待機したあと「f」を入力してください。 The replacement of XBBOX#xx/XSCFU has completed normally.[f:finish] :
RTI番号	**RTIF2-130305-023**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーユニットのDC-DCコンバーターに故障が発生した場合は、本来「LSI detected errors with power subsystem failure.」のエラーログが登録されるが、誤って「XB-XB interface link-up error.」が登録されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 「XB-XB interface link-up error」のエラーログが登録された場合、電源の故障が発生していないか確認してください。 電源の故障が発生している場合は、「XB-XB interface link-up error」のエラーログは無視してください。

XCP 2271で解決された不具合

XCP 2271で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-20　XCP 2271で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-150929-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ビルディングブロック構成のシステムで、SPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスの、筐体間の接続に故障がある場合に入力電源を投入すると、それらの筐体のXSCFが起動されず、その後、故障のXSCF、またはそのXSCFに接続されるXSCF BB制御ケーブルが被疑箇所として表示できないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 起動しなかったXSCFのCPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはXSCFユニット、およびそれらに接続されるXSCF BB制御ケーブルを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-150929-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ビルディングブロック構成のシステムで、すべての筐体の入力電源を投入した場合、マスタXSCFがリセットし、マスタXSCFが切り替わることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 switchscf(8)コマンドでマスタXSCFを切り替えてください。

表 3-20　XCP 2271で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150729-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	2BB構成以上4BB構成以下のSPARC M10-4Sが筐体間直結で接続されたシステムで、deleteboard(8)コマンドを実行し、物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）でシステムボードを削除すると、その後のPPAR DR操作が失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] poweroff(8)およびpoweron(8)コマンドを実行して、PPARの電源を切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-150710-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	故障していないファンに対して、回転数超過異常を表すエラーログ「FAN speed too high」が誤って登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] replacefru(8)コマンドを実行して、エラーログが登録されたファンを選択します。ファンはそのまま使用して、保守メニューでファン交換操作を行ってください。

表 3-20　XCP 2271で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150629-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されるシステムで、各SPARC M10-4S筐体に搭載されたPCIeカードまたはリンクカードの合計が29枚以上の場合、testsb -aコマンドを実行すると、各カードとXSCFとの通信処理に時間がかかり、コマンドが異常終了します。たとえば、8BB構成のシステムでは、コマンド実行後、約30分してコマンドが異常終了します。 また、物理パーティション（PPAR）が複数のSPARC M10-4S筐体で構成されている場合、各SPARC M10-4S筐体に搭載されたPCIeカードまたはリンクカードの合計が29枚以上のとき、poweron(8)コマンドを実行すると、XSCFのリトライ処理が繰り返され、PPARの電源が投入できません。このとき、「Event: SCF:Reset retry」のイベントログが登録されます。 [testsbコマンドの例] XSCF> **testsb -v -p -s -a -y** Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :**y** PSB power on sequence started. Hardware error occurred by initial diagnosis. PSB power off sequence started. [1200sec] 0....end PSB powered off. PSB　Test　　Fault ---- ------- -------- 00-0 Failed　Faulted 01-0 Failed　Faulted 02-0 Failed　Faulted 03-0 Failed　Faulted 04-0 Failed　Faulted 05-0 Failed　Faulted 06-0 Failed　Faulted 07-0 Failed　Faulted A hardware error occurred. Please check the error log for details.
回避方法	有効な回避方法はありません。 XCPファームウェアをXCP 2271以降にアップデートしてください。 [復旧方法] すべてのSPARC M10-4S筐体の入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）してください。
RTI番号	**RTIF2-150522-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	電源コードを抜いても停電のイベントログが登録されず、showhardconf(8)コマンドで電源ユニット（PSU）のPower_Statusが 「ON」 のまま変化しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 電源コードを挿しなおしてください。

XCP 2270で解決された不具合

XCP 2270で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-21　XCP 2270で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-160129-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	1つの物理パーティション（PPAR）に、PCIカードまたはリンクカードが、47枚以上搭載されている状態で、そのPPARの電源を投入すると、1つまたは複数のシステムボード（PSB）で、「Msg: SB deconfigured (not running)」のエラーログが登録され、PSBが縮退された状態でPPARの電源が投入されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 以下の手順を実施してください。 1. マスタ筐体のオペレーションパネル（OPNL）のモードスイッチをServiceにします。 2. システムの入力電源を切断したあと、再投入（AC-OFF/ON）します。 3. マスタ筐体のOPNLのモードスイッチを元に戻します。 4. PPARの電源投入を行います。

XCP 2260で解決された不具合

XCP 2260で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-22　XCP 2260で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-150710-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。 (JVNDB-2014-007551/CVE-2014-3570)、 (JVNDB-2014-007552/CVE-2014-3571)、 (JVNDB-2014-007553/CVE-2014-3572)、 (JVNDB-2014-007554/CVE-2014-8275)、 (JVNDB-2015-001009/CVE-2015-0204)、 (JVNVU#99234709 /CVE-2015-0235) 詳細は以下サイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities/
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2260以降にアップデートしてください。

表 3-22　XCP 2260で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150622-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入中に、以下の現象が発生することがあります。 1. ファンの低回転数異常を検出し、エラーログが登録されることがあります。このエラーを複数検出した場合は、ドメインの電源投入が失敗します。 2. ファンの回転レベルがレベル5になり、ファンがフル回転して騒音になることがあります。このとき、ファンのエラーログが1つ登録されるか、またはファンのエラーログが登録されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下のどちらかを実施してください。 ■ 復旧方法1 replacefru(8)コマンドを実行して、すべてのファンを擬似的に活性交換（ファンをいったん取り外し、再度同じファンを取り付ける）してください。 ■ 復旧方法2 PPARの電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してください。システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒待ってから投入してください。 なお、いずれの復旧方法を実施しても、再びファンがフル回転し、騒音が軽減されないことがあります。
RTI番号	**RTIF2-150611-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの電源が切断状態にも関わらず、ファンの回転数が高くなる場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-150514-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10システム筐体のPCIスロット#0にPCIボックスを接続して、prtfru(8)コマンドまたはsnapshot(8)コマンドを実行すると、プロセスダウンが発生しXSCFがリセットされることがあります。 また、SPARC M10システム筐体のPCIスロットに2枚以上のリンクカードを接続した状態で、物理パーティション（PPAR）を稼働していると、プロセスダウンが発生しXSCFがリセットされることがあります。
回避方法	■ prtfru(8)コマンドを実行する場合は、PCIボックスをPCIスロット#0以外へ接続してください。 ■ snapshot(8)コマンドを実行する場合は、以下のどちらかを実施してください。 - PCIボックスをPCIスロット#0以外へ接続する - Fullログセット（-L F）オプションを指定しないでsnapshot(8)コマンドを実行する [復旧方法] XSCFをリセットすることでシステムが復旧するため、継続してシステムを運用できます。
RTI番号	**RTIF2-150514-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	dumpconfig(8)コマンド実行時のXCP版数とrestoreconfig(8)コマンド実行時のXCP版数が異なる場合、不具合が発生することがあります。 詳細は、「RTIF2-150514-002に関する不具合」を参照してください。
回避方法	「RTIF2-150514-002の回避方法と復旧方法」を参照してください。

表 3-22　XCP 2260で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150514-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)コマンド実行中に、物理パーティションの電源投入や、diagxbu(8)コマンドを実行すると、testsb(8)コマンドが異常終了することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 testsb(8)コマンドが異常終了した場合は、再度、testsb(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-150507-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-1またはクロスバーボックスの、冗長構成の電源ユニット（PSU）のうち、PSU#0の電源コードを接続し（AC ON）、PSU#1の電源コードを接続せずに（AC OFF）、XSCFを起動してXSCFのREADY LEDが点灯の状態になると、その後、切断状態のPSU#1の電源コードを接続しても、PSU#1の入力電源の接続が認識されません。このとき、showhardconf(8)コマンドを実行するとPSU#1のPower_Statusは「Input fail; AC: - ;」と表示されています。
回避方法	PSUの電源コードを接続する場合は、すべてのPSUの電源コードを同時に接続してください。 SPARC M10-1の場合、XSCFスタートアップモード機能の起動モードが、通常（normal）モードでは、5分以内、高速（fast）モードでは、2分30秒以内に接続してください。 [復旧方法] 以下のどちらかの操作を実施してください。 ■ オペレーションパネルのモードスイッチをLockedまたはServiceに切り替える。 ■ replacefru(8)コマンドでPSU#1を選択し、擬似的に交換する。
RTI番号	**RTIF2-150331-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webを使用してPCIボックスのファームウェアファイルをシステムにインポートしたあと、ファームウェアアップデートを行うと、「Operation was not successful.」のエラーが検出され、失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PCIボックスのファームウェアファイルは、getflashimage(8)コマンドを使用して、システムにインポートしてください。その後、ioxadm -c updateコマンドでファームウェアアップデートを行ってください。
RTI番号	**RTIF2-150331-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ioxadm -v listコマンドの出力結果に、マスタ筐体以外に接続されたリンクカードのシリアル番号および部品番号が表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 接続したリンクカードのシリアル番号および部品番号を確認する場合は、直接リンクカードを確認してください。
RTI番号	**RTIF2-150331-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFがリセットしている間、ドメイン上のある1つのCPUのCPU使用率（システム時間:sys）が100%になることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XSCFのリセット完了後、CPU使用率は正常な状態に戻るため、対処は不要です。

表 3-22　XCP 2260で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150313-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源が投入されている状態で、flashupdate(8)コマンドによりファームウェアをアップデートしたあと、PPARの再起動によるCMUファームウェアのアップデートを行わずにPPARの動的再構成（DR）を実施すると、以下のエラーログが登録されることがあります。 Warning: /BB#x/CMUL:SCF:POST/OBP/HV data write error
回避方法	PPARの電源が投入されている状態で、flashupdate(8)コマンドを実行しファームウェアをアップデートした場合は、PPARを再起動してからPPARの動的再構成（DR）を実施してください。 また、不具合が発生した場合のこのエラーメッセージは、システム動作に影響ありませんので無視してください。
RTI番号	**RTIF2-150305-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下のいずれかのドメインでOracle Solarisカーネルゾーンを作成または起動した場合、そのゲストドメインやカーネルゾーンがパニックします。 ■ ライブマイグレーションしたゲストドメイン ■ 物理パーティション（PPAR）の動的再構成（DR）でシステムボードを削除したPPAR上のゲストドメイン また、一時停止（suspend）したカーネルゾーンを再開（resume）した場合も、同様の現象が発生します。
回避方法	■ カーネルゾーンを作成または起動する前に、そのゲストドメインを再起動してください。 ■ Oracle Solarisカーネルゾーンを一時停止（suspend）した場合は、カーネルゾーンを再開（resume）しないで、-Rオプションを指定してカーネルゾーンを起動してください。 [例] guest# **zoneadm -z kz000 boot -R** [復旧方法] ゲストドメインの属するPPAR、およびカーネルゾーンを再開（resume）したPPARを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-141031-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	HTTPSサービスで使用される自己認証の証明書の有効期限が10年ではなく1年で切れてしまいます。
回避方法	証明書の有効期限が切れていたとしても、XSCF Webにアクセスできます。そのまま証明書を使用するか、sethttps(8)コマンドで証明書を作成またはインポートしてください。
RTI番号	**RTIF2-140616-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	switchscf(8)コマンドを実行すると、XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えに時間のかかることがあります。 その結果、以下のエラーが発生することがあります。 Master switch synchronization timeout.
回避方法	有効な回避方法はありません。 現在のマスタXSCFが意図どおりでない場合は、switchscf(8)コマンドを再度実行してください。

表 3-22　XCP 2260で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140407-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XCP 2210からXCP 2250が適用されたSPARC M10-4Sで、setpparmode -p ppar_id -m ppar_drコマンドで設定されたPPAR DR機能の設定値が、dumpconfig(8)/restoreconfig(8)コマンドで保存／復元できないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XCP 2260以降にファームウェアをアップデートしてください。PPAR DR機能の設定値を保存および復元する場合は、いずれもXCP 2260以降で実施してください。 [復旧方法] 以下を実施してください。 1. showpparmode(8)コマンドを実行し、PPAR DR機能の有効／無効を確認します。 2. setpparmode(8)コマンドを実行し、PPAR DR機能の有効／無効を設定しなおします。 [例] PPAR#0のPPAR DR機能の設定値を有効に設定する場合 XSCF> **setpparmode -p 0 -m ppar_dr=on** [例] PPAR#0のPPAR DR機能の設定値を無効に設定する場合 XSCF> **setpparmode -p 0 -m ppar_dr=off**
RTI番号	**RTIF2-131213-010**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ioxadm -c updateコマンドを実行し、PCIボックスのファームウェアアップデートを実施した場合、XSCFファームウェアでプロセスダウンが発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ioxadm -c updateコマンドを再度実行して、PCIボックスファームウェアのアップデートを実施してください。
RTI番号	**RTIF2-130702-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4/M10-4Sにおいて、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）のみで運用していた構成にCPUメモリユニット（上段）（CMUU）を増設し、かつ物理パーティション（PPAR）のIOreconfigure設定がfalseとなっている場合、PPARの電源投入時および制御ドメインのリブート時に、「I/O devices error detected」が検出されます。
回避方法	増設後の電源投入時に検出されるエラーを回避する方法はありません。 以下の設定を行うと、PPARの電源投入や制御ドメインのリブートのたびに、エラーが検出されることを回避できます。 1. Oracle Solaris起動後、ldm rm-ioコマンドを使用して、増設したCMUUのPCIeルートコンプレックスを制御ドメインの構成から削除します。 2. ldm add-spconfigを使用して、構築した論理ドメイン構成をXSCFへ保存します。

RTIF2-150514-002に関する不具合

dumpconfig(8)コマンド実行時のXCP版数とrestoreconfig(8)コマンド実行時のXCP版数が異なる場合、表 3-23の不具合が発生することがあります。

表 3-23　dumpconfig(8)およびrestoreconfig(8)を実行するXCP版数の組み合わせと不具合

	dumpconfig(8)コマンドを実行したXCP版数	restoreconfig(8)コマンドを実行したXCP版数	発生する不具合
(1)	2092以前	2210から2221	(a)
(2)	2092以前	2230から2250	(a) または (b)
(3)	2210から2221	2230から2250	(b)
(4)	2210から2221	2092以前	(c)
(5)	2230から2240	2092以前	(c)
(6)	2250	2240以前	(c)
(7)	2260	2250以前	(c)

- **不具合（a）**
  物理パーティションの起動に失敗し、その後、XSCFが停止することがあります。
- **不具合（b）**
  Oracle VM Server for SPARC 3.1以降でサポートされた復旧モード（Recovery mode）が有効に設定されているときにXCP 2221以前で保存されたXSCF設定情報を使用してXSCFを復元した場合、XCP 2221以前で作成された論理ドメイン構成情報で物理パーティションが起動されるため、論理ドメイン構成情報の復旧に失敗し、ドメイン構成がfactory-defaultに切り替わったままになることがあります。

  これは、XCP 2221以前で作成された論理ドメイン構成情報には復旧モードが有効に設定されていないためです。 また、このあとにXCP 2230以降で論理ドメイン構成情報を作成しなおしても、論理ドメイン構成情報の復旧に失敗し、ドメイン構成がfactory-defaultに切り替わったままになることがあります。
- **不具合（c）**
  以下のエラーが発生します。

  [例]

```
XSCF> restoreconfig -u user https://...
--- 中略 ---
restoreconfig: could not verifying backup file.(...)
```

RTIF2-150514-002の回避方法と復旧方法

RTIF2-150514-002の回避方法は以下のとおりです。

- **表 3-23の（1）から（3）の場合**
  以下の手順を実施してください。
  1. **version(8)コマンドを実行し、XCP版数を確認します。**
  2. **flashupdate(8)コマンドを実行し、以前、dumpconfig(8)コマンドによりXSCF設定情報を保存したときのXCP版数へファームウェアをアップデートします。**
  3. **restoreconfig(8)コマンドを実行し、XSCF設定情報を復元します。**
  4. **flashupdate(8)コマンドを実行し、手順1で確認した、元のXCP版数へファーム**

ウェアをアップデートしなおします。

- **表 3-23の（4）から（7）の場合**
  有効な回避方法はありません。

RTIF2-150514-002の復旧方法は以下のとおりです。

- **表 3-23の（1）から（3）の場合**
  以下の手順を実施してください。
  1. **version(8)**コマンドを実行し、**XCP**版数を確認します。
  2. **flashupdate(8)**コマンドを実行し、以前、**dumpconfig(8)**コマンドにより**XSCF**設定情報を保存したときの**XCP**版数へファームウェアをアップデートします。
  3. 複数の**SPARC M10-4S**で構成されたシステムの場合、**initbb(8)**コマンドを実行し、すべてのスレーブ筐体をシステムから切り離します。
  4. **restoredefaults -c factory**コマンドを実行し、システムを工場出荷状態に戻します。
  5. すべての**SPARC M10**システム筐体またはクロスバーボックスの入力電源を切断したあと再投入（**AC OFF/ON**）し、**XSCF**または**XSCF**ユニットの**READY LED**が点灯していることを確認します。
  6. **restoreconfig(8)**コマンドを実行し、**XSCF**設定情報を復元します。
  7. **flashupdate(8)**コマンドを実行し、手順**1**で確認した、元の**XCP**版数へファームウェアをアップデートしなおします。

- **表 3-23の（4）から（7）の場合**
  以下の手順を実施してください。
  1. **version(8)**コマンドを実行し、**XCP**版数を確認します。
  2. **flashupdate(8)**コマンドを実行し、以前、**dumpconfig(8)**コマンドにより**XSCF**設定情報を保存したときの**XCP**版数へファームウェアをアップデートします。
  3. **restoreconfig(8)**コマンドを実行し、**XSCF**設定情報を復元します。
  4. **flashupdate(8)**コマンドを実行し、手順**1**で確認した、元の**XCP**版数へファームウェアをアップデートしなおします。

XCP 2250で解決された不具合

XCP 2250で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-24 XCP 2250で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-150514-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	rebootxscf(8)コマンドを実行してXSCFをリセットした場合、「SCF panic detected」が検出され、XSCFが停止することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] システムの入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）してください。

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150507-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10システム筐体またはクロスバーボックス内の部品の温度が上昇した場合、警告レベルに達していないにも関わらず、まれに、部品の高温警告が登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 高温警告が登録された場合、自動的にシステムは復旧します。また、この問題はシステムの動作に影響はありません。
RTI番号	**RTIF2-150507-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスのファームウェアアップデートの最中に、「LINKCARD I2C error」のエラーログが誤って登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このエラーログは無視してください。なお、PCIボックスのファームウェアアップデートは正常に終了します。
RTI番号	**RTIF2-150227-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	冗長構成の電源ユニット（PSU）のうち、1台のPSUの電源コードを抜去したあとすぐに接続しなおすと、停電／復電のイベントログが登録されないことがあります。また、1台のPSUの電源コードを抜去したあとすぐに接続しなおす動作を繰り返していると、電源コードを接続していても、showhardconf(8)コマンドでPSUのPower_Statusが「Input fail; AC: - ;」と表示されることがあります。
回避方法	電源コードの接続は、抜いてから10秒以上あけて実施してください。 [復旧方法] 電源コードを接続していても、showhardconf(8)コマンドでPSUのPower_Statusが「Input fail; AC: - ;」と表示される場合は、電源コードを抜いたあと、10秒以上あけてから接続しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-150226-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARCM10-4Sで構成されるシステムで電源連動機能（RCIL）を使用する場合、setremotepwrmgmt(8)コマンドで電源連動グループを設定後、マスタXSCFからswitchscfコマンドを実行してマスタ／スタンバイを切り替えると、その後の電源操作時に、電源連動に失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] rebootxscf(8)コマンドを実行してスタンバイXSCFをリセットしてください。

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150220-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）動作中に以下のいずれかによりXSCFがリセットされると、PPARの制御ドメインにブレーク信号が送られることがあります。 ■ rebootxscf(8)コマンドを実行した場合 ■ ファームウェア要因によるwatchdogタイムアウトを検出した場合 ■ ファームウェア要因によるパニックが発生した場合 ■ XSCFのRESETスイッチが押された場合 この問題は、setpparmode(8)コマンドでブレーク信号抑止に設定しても発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-150218-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF-LANポートにXSCF-LANケーブルが接続されていない状態でXSCF-LANのネットワークを設定すると、XSCF-LANが「RUNNING」の動作状態に見えることがあります。 [例] XSCF-LAN#1にケーブルが接続されていない場合 XSCF> **shownetwork -a** bb#00-lan#0 Link encap:Ethernet HWaddr 00:00:00:12:34:56 inet addr: 192.168.11.10 Bcast: 192.168.11.255 Mask:255.255.255.0 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1 （略） bb#00-lan#1 Link encap:Ethernet HWaddr 00:00:00:12:34:57 inet addr:192.168.10.10 Bcast: 192.168.10.255 Mask:255.255.255.0 UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1 （略）
回避方法	この状態はシステム動作に影響ありません。そのまま使用してください。

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-150129-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	[1] 入力電圧が低下すると、通常、停電通知が行われて、物理パーティションの電源が切断されますが、SPARC M10-1で入力電圧が瞬間的に低下した場合、停電通知が行われずに物理パーティションの電源が切断されます。 [2] [1]の不具合が発生して物理パーティションの電源が切断されている間に、console(8)コマンドを実行して制御ドメインコンソールに切り替え、文字を入力したりキーを入力したりすると、以下のエラーログが検出され、マザーボードユニット（MBU）の交換が必要になる場合があります。 MBC-CPU interface fatal error [1]の不具合は、以下の5つの条件をすべて満たしていることで確認できます。 ・下記のいずれかのエラーログが登録されている - MBU:SCF:failed to read/write interrupt mask register - MBU:SCF:failed to read/write active status register - Voltage out of range error ・Oracle Solarisにネットワークでアクセスできない ・停電通知がない (*1) ・showpparstatus(8)コマンドで確認できる物理パーティションの状態表示が更新されず、動作中（statusが「Powered Off」以外）である ・XSCFにアクセス可能だが、showlogs powerコマンドの実行結果に、XSCFがリセットされたことを表す「SCF Reset」がない *1: 停電通知があると、通常、showlogs eventコマンドで下記のログが登録されます。 PSU input power failure(/PSU#0) PSU input power failure(/PSU#1) また、多くの場合、[1]の不具合が発生していると、以下のエラーログが検出されています。 failed to read/write extended active status register
回避方法	有効な回避方法はありません。 「MBC-CPU interface fatal error」が検出された場合は、MBUを交換してください。 「MBC-CPU interface fatal error」が検出されていない場合、入力電源を切断したあと再投入してください。

RTI番号	**RTIF2-150126-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	電源連動機能が有効の場合、システム稼働中にXSCFをリセットすると、誤って外部I/O装置の電源が切断されてしまうことがあります。
回避方法	物理パーティション（PPAR）の電源を投入したあとは、毎回、RCILによる電源連動機能をいったん無効にして再度有効に設定してください。 停電や復電、自動電源制御（APCS）、RCILなどにより、PPARの電源が自動的に投入される場合も同様です。 [例] XSCF> setremotepwrmgmt -c disable XSCF> setremotepwrmgmt -c enable なお、システム運用上、この回避方法が実施できない場合は、以下の手順を実施してください。 ■ 電源連動グループに複数のSPARC M10システムが登録されている場合XSCFをリセットするときに、ほかのSPARC M10システムのXSCFリセットを同時に行わないでください。 ■ 電源連動グループに1台だけSPARC M10システムが登録されている場合以下の(1)、(2)のどちらかを実施してください。 (1)電源連動機能の電源切断だけを無効にする 1. setremotepwrmgmt -c disableで電源連動を無効にします。 2. 電源連動の管理ファイルのLinkageの値を「0x01」に指定します。 [例] 1,1,0x01,00000000000000000000000000000011,0x01,0x00,,,10.20.300.40,0x20,aa:bb:cc:dd:ee:f0,,,,,,,,, 1,2,0x10,00000000000000000000000000000022,0x01,0x00,,,10.20.300.41,0x20,aa:bb:cc:dd:ee:f1,,,,,,,,, 3. setremotepwrmgmt -c config [ファイル名]で、管理ファイルを適用します。 4. setremotepwrmgmt -c enableで電源連動を有効にします。 (2) 電源連動機能を無効にする 1. setremotepwrmgmt -c disableで電源連動を無効にします。 2. 外部I/O装置がETERNUSの場合、ETERNUSをLOCALモードに設定して運用します。
RTI番号	**RTIF2-150119-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	OSコンソール上に、「WARNING: Time of Day clock error: reason [Reversed by YYYY]」、または「WARNING: Time of Day clock error: reason [Jumped by YYYY]」のメッセージが表示されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] NTPクライアントを設定していない場合で、正確な時刻が必要なときは、ハードウェア時刻を参照させるために、Oracle Solarisを再起動して、再起動後の時刻が正しいことを確認してください。
RTI番号	**RTIF2-141226-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	マスタ／スタンバイXSCFの切り替え中にマスタXSCFがNTPサーバとの時刻同期に失敗した場合、XSCFの時刻がずれて、ntpdが起動しないことがあります。ntpdが起動していない場合はshowntp -lコマンドを実行すると、「NTP is unavailable.」のメッセージが出力されます。 なお、この問題は、XSCFのNTPクライアントの設定およびNTPサーバの設定が無効の場合は発生しません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] XSCFのNTPクライアントの設定またはNTPサーバの設定が有効の場合でntpdが起動していないときは、rebootxscf(8)コマンドを実行して、XSCFをリセットしてください。

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-141208-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	監査トレールが全容量に達した場合に、監査レコードへの書き込みを一時停止させるように監査システムを設定しているとき、XSCFシェルやXSCF Webの操作を契機に、「Hardware access error.」のエラーが誤って検出されたり、「SCF panic detected」のエラーが誤って検出されてXSCFがリセットされたりすることがあります。 この問題は、PRIMECLUSTERソフトウェアを使用して、論理ドメインの状態を監視するため定期的なXSCFシェルの自動実行を行っている場合にも発生します。 showaudit(8)コマンドを使用すると、現在設定されている監査システムの内容が確認できます。以下の例では、[Policy on full trail] が「suspend」、および [Audit space free] が「0」になっており、監査レコードへの書き込みを一時停止させる設定になっていて、かつ監査トレールが全容量に達していることを示しています。 [例] XSCF> **showaudit all** Auditing: enabled Audit space used: 4194304 (bytes) Audit space free: 0 (bytes) Records dropped: 0 Policy on full trail: suspend ---略---
回避方法	setaudit -p countコマンドを実行し、監査トレールが全容量に達した場合に、新しい監査レコードは削除されるように設定してください。（デフォルト） [復旧方法] 以下を実施してください。 1. defaultのユーザーアカウントでログイン認証します。 2. restoredefaults xscfコマンドを実行します。 監査ログが消去され、setauditコマンドを実行できるようになります。 3. setaudit -p countコマンドを実行し、監査トレールが全容量に達した場合に、新しい監査レコードは削除されるように設定します。（デフォルト）

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-141111-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-1/M10-4、または1台構成のSPARC M10-4Sの場合、以下の手順のように、PSUバックプレーン（PSUBP）とmicroSDカード、またはPSUバックプレーンユニット（PSUBPU）とmicroSDカードを同時に交換しなくても、自動的に電源を投入／切断するためのスケジュール運転の設定内容が失われ、自動的に電源を投入／切断できなくなります。 1. 入力電源を切断し（AC OFF）、PSUBPまたはPSUBPUを交換する。 2. 入力電源を投入し（AC ON）、XSCFを起動する。 3. 入力電源を切断（AC OFF）し、マザーボードユニット（MBU）、またはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）のmicroSDカードを交換する。 なお、この問題は、microSDカードを先に交換しても発生します。
回避方法	交換したFRUにスケジュール運転の設定内容を引き継ぐため、1つ目のFRUを交換したあと、スケジュール運転を、いったん無効にしたあと有効に設定しなおしてください。以下の手順を実施します。 1. 1つ目のFRUを交換します。（[説明]の手順1） 2. スケジュール運転を無効にします。 XSCF> **setpowerschedule -a -c control=disable** 3. 再度、スケジュール運転を有効にします。 XSCF> **setpowerschedule -a -c control=enable** 4. [説明]の手順2以降を実施します。 [復旧方法] ■ dumpconfig(8)コマンドによりXSCF設定情報を保存している場合は、restoreconfig(8)コマンドを実行して、XSCF設定情報を復元してください。 ■ XSCF設定情報を保存していない場合は、setpowerschedule(8)コマンドを実行して、スケジュール運転を設定しなおしてください。

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-141111-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下のいずれかの事象が発生してXSCFがリセットされたときに、誤ったエラーログが登録されることがあります。さらに、エラー発生時刻以降の、XSCFの時刻が1970年1月1日に初期化されることがあります。 ■ XSCFパニック ■ watchdogタイムアウト ■ 背面パネルのRESETスイッチが押された 以下の2つは、誤ったエラーログが登録され、さらに、エラー発生時刻も初期化されてしまった例です。 [例1] Date: Jan 01 09:05:40 JST 1970 Code: 80002008-000e010000ff0000ff-018b00010000000000000000 Status: Alarm Occurred: Jan 01 09:04:56.276 JST 1970 FRU: /MBU Msg: Hardware access error. Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000 [例2] Date: Jan 01 09:05:51 JST 1970 Code: 10000000-000e010000ff0000ff-0102400200000000000000000 Status: Information Occurred: Jan 01 09:05:35.008 JST 1970 FRU: /MBU Msg: TWI access error Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000
回避方法	有効な回避方法はありません。 緊急かつ必要でない限り、RESETスイッチは押さないでください。 [復旧方法] 物理パーティション（PPAR）の電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してください。再投入によりXSCFの時刻は自動的に復旧されます。
RTI番号	**RTIF2-140929-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solarisカーネルゾーンで構築されたシステムでOracle Solarisを起動すると、「NOTICE: Unable to get TX queue state!」のメッセージが誤って表示されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このメッセージは無視してください。

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140929-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-1、SPARC M10-4、またはSPARC M10-4Sが1台構成のシステムにおいて、マザーボートユニット（MBU）またはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）に固定されている、microSDカードを交換すると、電源連動機能（RCIL）の設定が消失します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 『SPARC M12/M10 RCILユーザーズガイド』を参照し、RCILを設定しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-140808-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	入力電源を切断したあと再投入し、showhardconf(8)コマンドを実行すると、システムに搭載されているコンポーネントの構成情報が認識されないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFをリセットしてください。
RTI番号	**RTIF2-140407-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	OpenBoot PROM起動後、okプロンプトが表示された状態で [Ctrl] + [t] キーを入力すると、論理ドメインのドメインコンソールにトラップに関する以下のエラーメッセージが出力されます。 {0} ok ERROR: Last Trap: Fast Instruction Access MMU Miss TL: 1 %TL:1 %TT:64 %TPC:1056e6f20 %TnPC:1056e6f24 %TSTATE:4420001600 %CWP:0 %PSTATE:16 AG:0 IE:1 PRIV:1 AM:0 PEF:1 RED:0 MM:0 TLE:0 CLE:0 MG:0 IG:0 %ASI:20 %CCR:44 XCC:nZvc ICC:nZvc %TL:2 %TT:183 %TPC:f0248e68 %TnPC:f0200c80 %TSTATE:14420001400 %CWP:0 %PSTATE:14 AG:0 IE:0 PRIV:1 AM:0 PEF:1 RED:0 MM:0 TLE:0 CLE:0 MG:0 IG:0 %ASI:20 %CCR:44 XCC:nZvc ICC:nZvc --- 中略 --- ?? Called from (f0227228) at f0227240 0 (emit Called from (lf at f020c3c8 (lf Called from lf at f020c404 lf Called from crlf at f020c424 pop-base Called from (f0225fe0) at f0226024 pop-base Called from (f0225fe0) at f0226024 (f0225fe0) Called from (f0248350) at f024838c 7ffffffffffff98 80000000fecdaff8 (f02081dc) Called from (f0248350) at f024837c {0} ok
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] okプロンプトからreset-allコマンドを実行して、OpenBoot PROMを再起動してください。 {0} ok **reset-all**

表 3-24　XCP 2250で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140403-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFのシリアル端末上でconsole(8)コマンドを実行し制御ドメインコンソールに接続したあと、制御ドメインコンソールにメッセージが出力され ているときに以下のいずれかを実施すると、「SCF process down detected」のエラーが発生し、XSCFがリセットされることがあります。 ■ 「#」を入力して制御ドメインコンソールを切断する。 ■ ほかの端末から-fオプションを指定してconsole(8)コマンドを実行し、物理パーティション（PPAR）の制御ドメインコンソールに強制的に接続する。 ■ switchscf(8)コマンドを実行しマスタXSCFを切り替える。 ■ rebootxscf(8)コマンドを実行しXSCFをリセットする。
回避方法	telnetまたはssh経由でXSCFに接続したあとconsole(8)コマンドを実行するか、PPARの電源を切断したあとconsole(8)コマンドを終了してください。
RTI番号	**RTIF2-140227-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインからcfgadmコマンドを実行して、システムからリンクカードを、 PCIホットプラグ（PHP）によって切り離し、リンクカードへの電力の供給を停止させると、「LINKCARD I2C error」のエラーログが誤って登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このエラーログは無視してください。リンクカードへの電力の供給は確実に停止されているため、継続してシステムを運用できます。
RTI番号	**RTIF2-140212-013**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	DIMMの故障が起因となり、物理パーティション（PPAR）の電源投入時に、マザーボードユニット（MBU）、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、またはCPUメモリユニット（上段）（CMUU）を被疑箇所とする「CPU internal fatal error」のエラーログが登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 MBU、CMULまたはCMUUを交換したあと、再度、同じエラーログが登録された場合は、交換したMBU、CMULまたはCMUUに実装されているDIMMをすべて交換してください。

XCP 2240で解決された不具合

XCP 2240で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-141208-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	「CPU fatal error」が発生したあとの物理パーティション（PPAR）の再起動に所要される時間が、通常より6～30分長くかかることがあります。再起動の所要時間はPCIeカードの搭載枚数によって異なります。 また、PCIeカードが多数搭載されていると、誤って、以下のエラーが検出されることがあります。 ■ SPARC M10-4Sの2BB構成以上のシステムの場合 SRAM data error ■ SPARC M10-1/M10-4の場合 Timeout of Reset Watch. PPARID 0
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ■ 「SRAM data error」が検出された場合 エラーログで示される被疑箇所の部品を交換してください。その後、XCPファームウェアをXCP 2240以降にアップデートしてください。 ■ 「Timeout of Reset Watch. PPARID 0」が検出された場合 XCPファームウェアをXCP 2240以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-141203-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	まれに「CPU Internal Serious error」が発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-141113-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。（JVNVU#98283300/CVE-2014-3566） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2240以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-141110-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	150個以上の論理ドメインが存在する環境において、Oracle VM Server for SPARCのldmコマンドが正しいCPU使用率を表示しないことがあります。また、動的なリソース管理（DRM）が正しく動作しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-141106-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	温度異常に関する以下のどちらかのエラーログが、誤って登録されることがあります。 ■ Temperature out of range error ■ High temperature at SW これらのエラーログでは、[Code:] の第2フィールドの先頭2バイトが「0013」の値になっています。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このメッセージはシステム動作に影響ありませんので無視してください。

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-141031-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）によりシステムボードを削除した場合、I/Oドメイン上のI/Oデバイスが使用できなくなる、または、ルートドメインやI/Oドメインがパニックすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] システムボードを削除したあとにI/Oドメインがパニックしなかった場合は、I/Oドメインを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-141031-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメイン上のすべてのコアが縮退した場合、ハイパーバイザがアボートすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-141020-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ASR機能を使用していて、かつ、PCIボックスあるいはSPARC M10システム筐体のファンユニットの異常が発生した場合、以下のように、ASR Managerに誤ったfault telemetryが送信されてしまいます。 ■ PCIボックスのファンユニットの異常が、SPARC M10システム筐体のファンユニットの異常として送信される ■ SPARC M10システム筐体のファンユニットの異常が、PCIボックスのファンユニットの異常として送信される [例]SPARC M10システム筐体のファンユニットの異常の場合 ■ 誤 message ID: device.fan.toofast_pcibox ■ 正 message ID: device.fan.tooslow この問題は、showlogs errorコマンドを実行したときの[Code:]の第3フィールドの先頭から4バイトが以下の場合に発生します。 01911026、01911027、01911028、01911029、0191102a、0191102b [例]PCIボックスのファンユニットの異常の場合 ■ 誤 message ID: device.fan.tooslow ■ 正 message ID: device.fan.toofast_pcibox この問題は、showlogs errorコマンドを実行したときの[Code:]の第3フィールドの先頭から4バイトが以下の場合に発生します。 1100002E、1100002F
回避方法	有効な回避方法はありません。 showlogs errorコマンドを実行した場合、[Code:] の第3フィールドの先頭から4バイトが [説明] の [例] に該当するときは、メッセージを正しいものに読み替えて対処してください。

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-141016-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	冗長構成の電源ユニット（PSU）のうち1台のPSUがAC入力異常を発生し、その後停電／復電を短い間に繰り返すと、PSUのAC入力電圧が100 Vと200 Vで混在していると誤って判定されることがあります。その結果、本来、復電するとシステム運用を継続できるはずが、2台のPSUが縮退となり「PSU shortage (power off started)」のエラーメッセージが出力されて、システムが停止してしまうことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 復電／停電を検出したPSUを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140715-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	SPARC M10-1において、冗長構成となっている電源ユニット（PSU）のうち片方のPSUに接続された電源ケーブルを引き抜くと、PSUの故障が誤って検出され、SPARC M10-1筐体のCHECK LED（橙）が点灯することがあります。このとき、showlogs errorコマンドを実行すると、「Msg: PSU failed」のログが出力されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下のどちらかの手順を実施してください。 ■ 復旧方法1 SPARC M10-1上の物理パーティション（PPAR）が稼働している場合はPPARを停止させてから、SPARC M10-1の両方の電源ケーブルを引き抜いて（AC OFF）ください。その後、30秒待ってから両方の電源ケーブルを挿し込んで（AC ON）ください。 ■ 復旧方法2 故障が誤検出されたPSUを擬似的に活性交換（対象のPSUをいったん取り外し、再度同じPSUを取り付ける）してください。PSUを擬似的に活性交換する場合は、replacefru(8)コマンドを使用します。なお、replacefru(8)コマンドを実行するにはfieldeng権限が必要です。

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140711-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solarisを長い間稼働状態のままにしていた場合、物理パーティション（PPAR）の電源を切断したあと再投入したときに、Oracle Solarisの時間がずれてしまうことがあります。 この現象は、以下のどちらかの場合に発生します。 ■ XSCFのNTPクライアント設定を有効にしていて、かつOracle SolarisがNTPサーバを使用していない場合 ■ XSCFのNTPクライアント設定を有効にしていて、かつOracle SolarisがNTPサーバを使用しているとき、Oracle Solaris起動時にntpdateコマンドを実行していない、またはntpdateコマンドが失敗して時間を補正できていない場合
回避方法	有効な回避方法はありません。 **注ー**XCP 2232以前の版数からこの不具合が解決されるXCP 2040以降にファームウェアをアップデートする場合には「RTIF2-140711-001の追加情報」を参照してください。 [復旧方法] 以下の手順で、Oracle Solarisをシングルユーザーモードで起動し、時刻を設定してください。 1. poweroff(8)コマンドを実行し、PPARの電源を切断します。 2. showpparstatus(8)コマンドを実行し、Statusが「Powered off」となり、PPARが切断されたことを確認します。 3. OpenBoot PROM環境変数auto-boot?を「false」に設定します。 XSCF> **setpparparam -p PPAR-ID -s bootscript "setenv auto-boot? false"** 4. poweron(8)コマンドを実行し、PPARの電源を投入します。 5. console(8)コマンドを実行し、制御ドメインコンソールに接続し、okプロンプトの状態にします。 6. Oracle Solarisをシングルユーザーモードで起動します。 {0} ok **boot -s** 7. dateコマンドを実行し、Oracle Solarisの時刻を設定します。 [例] 2014年6月27日18時30分00秒に設定する場合 # **date 0627183014.00**
RTI番号	**RTIF2-140710-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	マザーボードまたはCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換したあとのXCPファームウェアの版数が交換前と一致していないにも関わらず、XSCFログイン時に表示されるはずの「XCP version of XSCF and Back-Panel mismatched!」のメッセージが表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 部品の交換作業時は、以下を実施してください。 1. 交換前にversion(8)コマンドを実行し、XCP版数を確認します。 [例] XSCF> **version -c xcp** BB#00-XSCF#0 (Master) XCP0 (Current): 2051 XCP1 (Reserve): 2051 2. 交換後、version(8)コマンドを実行し、XCP版数を再確認します。 3. XCP版数が交換前後で一致していない場合は、flashupdate(8)コマンドを実行し、ファームウェアをアップデートしてください。 [例] XCP 2052にアップデートする場合 XSCF> **flashupdate -c update -m xcp -s 2052**

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140616-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFまたはXSCFユニット上にあるmicroSDカードが故障した場合、復元されたXSCF内部のデータにアクセスできないことがあります。これにより、以下のコマンドを実行したとき、「An internal error has occurred. Please contact your system administrator.」のエラーメッセージが出力され、コマンドが異常終了します。 initbb(8) resetdateoffset(8) setpciboxdio(8) setpowercapping(8) setpparmode(8) setpparparam(8) setservicetag(8) また、以下のコマンドを実行したとき、コマンドは正常終了となりますが、設定情報がシステムに反映されません。 addboard(8) deleteboard(8) setpcl(8) setupfru(8) この問題は、XSCF Webで設定を実施した場合でも発生します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下を交換してください。 ■ SPARC M10-1 PSUバックプレーン（PSUBP） ■ SPARC M10-4/M10-4S PSUバックプレーンユニット（PSUBP） ■ SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり） XSCFインターフェースユニット（XSCFIFU）
RTI番号	**RTIF2-140523-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	11 ms以上の瞬間的な停電が発生した場合、復電したあとにオペレーションパネルのCHECK LEDが点灯した状態となり、XSCFが起動しないことがあります。 このため、復電後にシステムが自動的に起動するよう設定されていても、システムが自動的に起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 入力電源を切断したあと、約10秒待ってから入力電源を再投入してください。

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140515-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	XSCFスタートアップモード機能を設定するためにxscfstartupmode(8)コマンドで起動モードを変更した、またはオペレーションパネルのモードスイッチをLockedまたはServiceに切り替えてからrebootxscf(8)コマンドでXSCFをリセットすると、起動モードが誤って反映されてしまいます。本来、起動モードの設定はrebootxscf(8)コマンドでXSCFをリセットしても反映されず、システムの入力電源を切断／再投入（AC OFF/ON）することで反映されます。 この状態は、xscfstartupmode -dコマンドを実行したとき、以下のようになることで確認できます。 [例] オペレーションパネルのモードスイッチをLockedにしてから、高速モードに設定した場合 XSCF> **xscfstartupmode -d** Setting Mode: normal Current Mode: normal XSCF> **xscfstartupmode -m fast** XSCF> **rebootxscf -a** XSCF> **xscfstartupmode -d** Setting Mode: fast[need AC OFF/ON] Current Mode: fast 正しくは以下の表示になり、現在のシステムは高速モードで動作せず、通常モードのままです。 XSCF> **xscfstartupmode -d** Setting Mode: fast [need AC OFF/ON] Current Mode: normal
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140507-013**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setroute(8)コマンドを実行して、デフォルトゲートウェイを2つ設定しても、ほかのネットワークからはXSCF-LAN#0またはXSCF-LAN#1の一方のゲートウェイにしか接続できません。
回避方法	XSCF-LAN#0とXSCF-LAN#1のうち、接続できるゲートウェイのIPアドレスを使用してください。
RTI番号	**RTIF2-140314-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	XCP 2210が適用されたSPARC M10-1において、Type Bのマザーボードユニット（MBU）内で部品の故障が発生した場合、MBU内の部品の故障が検出されず、以下のエラーログが多数登録されることがあります。 ■ MBU内の電圧異常 FRU: /MBU Msg: Critical low voltage error および ■ FANの回転異常 FRU: /FAN#x,/MBU Msg: FAN speed too low
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] MBUを交換してください。

表 3-25　XCP 2240で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140227-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	初めて、クロスバーボックスの入力電源を投入したとき（AC ON）に、XSCFが起動されると、「SCF panic detected」および「XSCF hang-up is detected」のエラーログが登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下の操作を実施してください。 1. showhardconf(8)コマンドを実行し、すべてのクロスバーボックス、およびSPARC M10-4Sが表示されていることを確認します。 2. すべてのクロスバーボックス、およびSPARC M10-4Sの入力電源を切断したあと投入しなおします（AC OFF/ON）。 3. showbbstatus(8)コマンドを実行し、マスタXSCFを確認します。XBBOX#81がマスタXSCFに切り替わっていた場合は、switchscfコマンドを実行し、マスタをXBBOX#80に戻します。
RTI番号	**RTIF2-130305-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	入力電源ケーブルを抜去したあとすぐに接続しなおすと、入力電源の構成異常を表す以下のエラーログが登録されることがあります。 ■ XCP 2041以降の場合 Wrong PSU is installed ■ XCP 2032以前の場合 PSUs detect 100V and 200V at AC inputs
回避方法	有効な回避方法はありません。 このエラーログは無視してください。

RTIF2-140711-001の追加情報

この不具合（RTIF2-140711-001）はXCP 2240以降のXCP版数で解決されていますが、XCP 2232以前の版数からXCP 2240以降へファームウェアをアップデートした直後に物理パーティションを再起動した場合、Oracle Solarisの時刻がずれることがあります。
時刻のずれを修正する場合には、「論理ドメインの時刻に関する留意点」を参照してください。

XCP 2232で解決された不具合

XCP 2232で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-26　XCP 2232で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-141031-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。（JVNDB-2013-003250/CVE-2013-4784） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2232以降にアップデートしてください。

XCP 2231で解決された不具合

XCP 2231で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-27　XCP 2231で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-161011-001**
対象モデル	**SPARC M10-1 、SPARC M10-4 、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメイン（制御ドメイン含む）に対して、CPU の追加や削除を動的に実施するとI/Oがハングアップすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-141003-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2230においてライブマイグレーションを実施後、ソースマシン上で論理ドメインにCPUを追加した場合、または新規の論理ドメインを作成した場合、論理ドメインがハングアップすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ライブマイグレーション後、ソースマシンである物理パーティション（PPAR）の電源を切断してから再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-140930-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。（JVNVU#97219505/CVE-2014-7169） 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2231以降にアップデートしてください。

XCP 2230で解決された不具合

XCP 2230で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-28　XCP 2230で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140910-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris 11.2以降の環境において、動的再構成（Dynamic Reconfiguration:DR）によりシステムボードを削除した場合、ハイパーバイザがアボートすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140819-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFを再起動したり、入力電源を再投入したりすると、まれにntpdが起動せず、XSCFの時刻に対してNTPサーバによる時刻同期ができないことがあります。ntpdが停止しているかどうかはshowntp -lコマンドを実行したとき、「NTP is unavailable.」のメッセージが表示されることで確認できます。 この問題は、XSCFのNTPクライアント設定およびNTPサーバ設定が無効の場合は発生しません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] XSCFのNTPクライアント設定またはNTPサーバ設定が有効の場合でntpdが起動していないときは、rebootxscf(8)コマンドを実行してXSCFを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-140815-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成（Dynamic Reconfiguration:DR）を使用してシステムボードを削除した場合、論理ドメインの Host Watchdog監視が停止することがあります。
回避方法	システムボードを削除したあとHost Watchdog監視を再開する場合は、物理パーティション（PPAR）内のいずれかの論理ドメインを再起動してください。

表 3-28　XCP 2230で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140813-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10システム筐体とインストールサーバとのネットワークの速度が1 Gbpsを超える場合、または複数台のSPARC M10-4Sで構成されたシステムの場合、vnet経由でOracle Solarisをインストールしようすると、インストールメニューの起動に1時間以上かかることがあります。 [例] SPARC M10-4Sでvnetによるネットワークインストールを実行した場合 {0} ok **boot net:dhcp - install** Boot device: /virtual-devices@100/channel-devices@200/network@0:dhcp File and args: - install <time unavailable> wanboot info: WAN boot messages->console <time unavailable> wanboot info: configuring /virtual-devices@100/channel-devices@200/network@0:dhcp <time unavailable> wanboot info: Starting DHCP configuration <time unavailable> wanboot info: DHCP configuration succeeded <time unavailable> wanboot progress: wanbootfs: Read 368 of 368 kB (100%) <time unavailable> wanboot info: wanbootfs: Download complete Wed Aug 13 06:24:51 wanboot progress: miniroot: Read 4864 of 243471 kB (1%) (*1) *1: ここで時間がかかる
回避方法	ISOイメージで作成されたvdiskまたはDVD-ROMを用いて、Oracle Solarisをインストールしてください。
RTI番号	**RTIF2-140808-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10システムに無停電電源装置（UPS）を接続している場合、Oracle Solarisが停止または物理パーティション（PPAR）の電源が切断している状態で停電が発生すると、復電したあと、本来PPARの電源は切断されたままのはずが、誤って起動することがあります。 **注ー**UPSを接続している場合、Oracle Solaris稼働中に停電が発生したときは、復電後、自動的にOracle Solarisが起動します。 この現象は、以下の操作を行ったあと、再び停電し復電すると発生します。 ■ Oracle Solaris稼働中に停電が発生し、復電後、自動的にOracle Solarisが起動したあと、Oracle Solaris上でshutdownコマンドを実行し、Oracle Solarisを停止（okプロンプトの状態）させる [例] # **shutdown -y -g0 -i0** ■ Oracle Solaris稼働中に停電が発生し、復電後、自動的にOracle Solarisが起動したあとOracle Solaris上でshutdownコマンドを実行し、PPARの電源を切断する [例] # **shutdown -y -g0 -i5**
回避方法	Oracle Solarisを停止させる場合、有効な回避方法はありません。PPARの電源を切断する場合、XSCF上でpoweroff(8)コマンドを実行してください。 [復旧方法] XSCF上でpoweroff(8)コマンドを実行し、PPARの電源を切断してください。
RTI番号	**RTIF2-140808-004**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	IHV製品のPCI Express拡張ボックス（PCI Express Gen1接続）をSPARC M10-1に接続した場合、PCI Expressコレクタブルエラーが発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-28　XCP 2230で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140805-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	1. 物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）を使用してビルディングブロック（PSB）を削除した場合、論理ドメイン上のプロセスがSIGILL（Illegal Instruction）でコアダンプすることがあります（SPARC M10-4Sのみ）。 2. PRIMECLUSTER GDまたはPRIMECLUSTER GDSが適用された Oracle Solaris 11.1、または Oracle Solaris 11.2のゲストドメインをライブマイグレーションしたあとに、ゲストドメイン上のlibcryptライブラリを使用するコマンド（ssh、pkg、zonenameなど）のプロセスがSIGILL（Illegal Instruction）でコアダンプすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140731-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインが停止している場合、showlogs eventコマンドやshowmonitorlog(8)コマンドによるイベントログ（Host Stopped）が表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140623-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsmtp(8)コマンドを実行して、認証方法に「pop」を指定した場合、setemailreport(8)コマンドを実行してメール通報を有効にしても、メールが送信されないことがあります。
回避方法	setsmtp(8)コマンドを実行して認証方法を設定する場合、「pop」ではなく、「smtp-auth」または「none」を指定してください。
RTI番号	**RTIF2-140623-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	入力電源を投入（AC ON）した直後、オペレーションパネルのXSCF STANDBY LEDが点滅しているときにオペレーションパネルの電源スイッチを押すと、その後、以下の状態で物理パーティション（PPAR）の電源が投入／切断できなくなります。 ■ オペレーションパネルの電源スイッチが操作されたとき ■ poweron(8)またはpoweroff(8)コマンドが実行されたとき ■ XSCF Web上でPPARの電源操作がされたとき ■ RCILによる電源連動が実行されたとき ■ 自動電源制御（APCS）による電源の投入／切断が指示されたとき
回避方法	入力電源を投入した直後にオペレーションパネルの電源スイッチを操作する場合は、XSCF STANDBY LEDが点滅から点灯に変わったあと、30秒以上待ってから実施してください。
RTI番号	**RTIF2-140606-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	監査の「AEV_AUTHENTICATE」イベントが有効に設定されていても、XSCF Webへのログイン失敗のイベントが監査ログに登録されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-28　XCP 2230で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140606-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの操作に関する監査ログを、viewaudit(8)コマンドを使用して参照しようとすると、XSCF Webにアクセスしたときのポート番号とIPアドレスがそれぞれ「0」、「0000」と表示され、正しい値が表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140606-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの [PPAR Operation] - [PPAR Configuration] 画面で、論理システムボード（LSB）にシステムボード（PSB）を設定する場合、すでに別の物理パーティション（PPAR）に設定されたPSBは指定できません。
回避方法	XSCFシェルのsetpcl(8)コマンドを使用して設定してください。

表 3-28　XCP 2230で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140606-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sが複数の物理パーティション（PPAR）で構成されているシステムで、入力電源を投入後、またはXSCFの再起動後、初めて同時に複数のPPARの電源を投入すると、PPAR IDに関するエラーが登録され、一部のPPARの自己診断テスト（POST）処理が完了せず、PPARが起動しないことがあります。 この現象は、showpparstatusコマンドで確認できます。 [例] PPAR#4だけがInitialization Phaseと表示され、POST処理が完了しない場合 XSCF> **poweron -a** XSCF> **showpparstatus -a** PPAR-ID PPAR Status 00 Initialization Complete 01 - 02 - 03 - 04 Initialization Phase 05 - 06 Initialization Complete 07 - 08 - 09 - 10 - 11 Initialization Complete 12 - 13 - 14 - 15 - XSCF>
回避方法	同時に複数のPPARの電源を投入する場合は、poweron -aコマンドを使用しないでください。 poweron -pコマンドを使用してPPARの電源を1つずつ投入してください。 [復旧方法] 以下の手順でPPARの電源を切断したあと再投入してください。 1. poweroff -fコマンドを実行し、起動に失敗したPPARの電源を強制的に切断します。 XSCF> **poweroff -y -f -p** *ppar_id* 2. 1.で指定したPPARの状態が「Powered Off」になっていることを確認します。 XSCF> **showpparstatus -p** *ppar_id* --- 中略 --- 04 Powered Off --- 中略 --- 3. PPARの電源を投入します。 XSCF> **poweron -y -p** *ppar_id*

表 3-28　XCP 2230で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140527-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムで、以下のいずれかの状態のXSCFに対して、rebootxscf(8)コマンドによるXSCFのリセットや入力電源の切断が行われずに、10日間ほど継続してシステムが運用されると、「XSCF self diagnosis warning detection」のエラーログが登録されることがあります。 ■ 10日間ほどマスタ／スタンバイの切り替えが行われていないスタンバイXSCF ■ スレーブXSCF
回避方法	有効な回避方法はありません。 このエラーログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	L2ループによりXSCFネットワークに大量のパケットが送信されるなど、XSCFに高い負荷がかかっている場合、エラー「RTC read data error」、または電源ユニット（PSU）に対するエラー「Hardware access error.」が誤って検出されます。また、エラーの誤検出とともに、PSUに故障マークがつくことがあります。
回避方法	L2ループが原因の場合は、ネットワークの接続を見なおすなど、XSCFに高い負荷をかけている要因を取り除いてください。 [復旧方法] PSUの故障マークをクリアするために、オペレーションパネルのモードスイッチをServiceモードにして、入力電源を切断したあと再投入してください。再投入後、モードスイッチを元の状態に戻してください。

XCP 2221で解決された不具合

XCP 2221で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-29　XCP 2221で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140617-002**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4/M10-4Sで、RCILによる電源連動ができません。 また、以下のRCIL関連のコマンドを実行すると、「Controller response timeout」のエラーメッセージが表示され、コマンドが異常終了します。 setremotepwrmgmt(8) showremotepwrmgmt(8) getremotepwrmgmt(8) clearremotepwrmgmt(8)
回避方法	有効な回避方法はありません。 対象となるSPARC M10システム、およびI/O装置の電源は手動で操作してください。

表 3-29　XCP 2221で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140611-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	セキュリティ修正を行いました。(JVN#61247051/CVE-2014-0224) 詳細は以下のウェブサイトを参照してください。 http://software.fujitsu.com/jp/security/vulnerabilities
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2221以降にアップデートしてください。

XCP 2220で解決された不具合

XCP 2220で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-141106-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2210以前の場合、温度異常に関する以下のいずれかのエラーログが登録されたあと、物理パーティション（PPAR）の電源を切断／投入すると、「PCI Express link up failed」のエラーが誤って登録され、オンボードI/OデバイスまたはPCIスロットが縮退されることがあります。 ■ Temperature out of range error ■ High temperature at SW ■ Hardware access error.(thermal sensor) これらのエラーログでは、[Code:] の第2フィールドの先頭2バイトが「0013」の値になっています。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] システムの入力電源を切断したあと再投入してください（AC-OFF/ON）。
RTI番号	**RTIF2-140804-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	吸気温度が変化してファンの回転数が切り替わるときに、故障していないファンに対して、回転数異常を表すエラーログが誤って登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] replacefru(8)コマンドを実行して、エラーログが登録されたファンを選択します。ファンの交換は行わず、保守メニューの交換の指示に従ってください。
RTI番号	**RTIF2-140606-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)コマンドを実行してシステムボード（PSB）を診断中に、SPARC M10システム筐体またはクロスバーボックス筐体の電源の投入と切断処理を行う間に以下のいずれかの異常が検出されると、該当の筐体の電源が投入状態のまま、testsb(8)コマンドが終了してしまいます。 ■ 筐体内のDC-DCコンバーター（DDC）が故障している。 エラーログ: Msg: Power-on failure ■ 筐体内の冷却用の部品を監視する回路が異常状態である。 エラーログ: Msg: LLC protection circuit test error ■ 筐体内のクロスバーユニット（XBU）に不正な組み合わせのクロスバーケーブルが接続されている。 エラーログ: Msg: XB CABLE configuration error この現象は、showboards(8)コマンドを実行したときに、[Pwr] が「y」、[Test] が「Failed」と表示されるとともに、上記のエラーログで確認できます。 [例] SPARC M10-4S筐体の電源が投入状態で、システムボードの診断が異常状態の場合 XSCF> **showboards -a** PSB PPAR-ID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault ---- ---------- ---------- ---- ---- ---- ------- -------- 00-0 00(00) Assigned y n n Failed Faulted
回避方法	有効な回避方法はありません。 エラーログを確認し、部品の保守を行ってください。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140605-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2041以降で、電源ユニット（PSU）の構成異常のエラーログが登録された場合、AC入力電圧が100 Vと200 Vで混在していることを示す場合のメッセージが登録されるはずが、PSUの種別の組み合わせ異常を表すメッセージが登録されてしまいます。 [例] AC入力電圧が100 Vと200 Vで混在しているとき、「Msg:」の内容が誤って登録されている場合 Code: 80000000-0001020000ff0000ff-018af0220000000000000000 Status: Alarm Occurred: May 27 11:22:00.0000 JST 2014 FRU: /MBU Msg: Wrong PSU is installed AC入力電圧の混在を表す正しいメッセージは以下のとおりです。 Msg: PSUs detected 100V and 200V at AC inputs
回避方法	有効な回避方法はありません。 showlogs errorコマンドを実行した場合、[Code:] の第3フィールドの3-4バイト目が以下のときは、メッセージを正しいものに読み替えて対処してください。 ■ 「f022」の場合 PSUのAC入力電圧が100 Vと200 Vで混在しています。PSUのAC入力の接続状態を確認してください。 ■ 「f022」以外の場合 PSUの種別の組み合わせが間違っています。保守作業員に連絡してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2043以降が適用されたSPARC M10システムにおいて、ハードウェアRAID（RAID1またはRAID1E）を構成するディスクを抜去したりディスクに故障が検出されたりした状態で、電源の投入／切断、Oracle Solarisの再起動やshutdown -i0コマンドなどを実行した結果、物理パーティション（PPAR）に対するOpenBoot PROMの状態が遷移すると、当該ディスクの復旧後も、元のRAIDボリュームには組み込まれず、意図しない別RAIDボリュームとして認識されてしまいます。また、元のRAIDボリュームは縮退されたまま（Degraded）となります。
回避方法	状況に応じて、以下のいずれかの作業を実施してください。 ■ システム稼働中にRAIDボリュームを構成しているディスクが故障した場合 Oracle Solarisを再起動しないで、システム稼働中のままディスクを交換してください。 ■ システム稼働中にRAIDボリュームを構成しているディスクを抜去した場合 Oracle Solarisを再起動しないで、システム稼働中のまま抜去したディスクを搭載しなおしてください。 ■ PPARの電源が切断された状態でRAIDボリュームに組み込まれたディスクを抜去した場合 PPARの電源が切断された状態のまま、抜去したディスクを搭載しなおしてください。 [復旧方法] この不具合が発生した場合は、以下の手順を実施してください。 1. 新たに作成されたRAIDボリュームを削除します。 2. 対象のディスクをホットスペアに設定します。 ホットスペア機能を有効に設定すると、ディスクは元のRAIDボリュームに自動的に組み込まれます。 なお、ボリュームの削除、ホットスペアの設定については『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「F.5　ハードウェアRAIDボリュームのホットスペアを作成する」および「F.6　ハードウェアRAIDボリュームのホットスペアを削除する」を参照してください。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140507-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成（Dynamic Reconfiguration:DR）を使用してシステムボードを削除した場合、Oracle Solarisがパニックしたり、ハイパーバイザがアボートしたりすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140507-015**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	3BB以上またはクロスバーボックスのあるシステム構成で、showhardconf(8)コマンドを実行すると、クロスバーケーブルのFRU-Part-Numberに正しくない情報が表示される場合があります。 [例] クロスバーケーブルR0番の場合 誤： CBL#R0 Status:Normal; + FRU-Part-Number:@@@D00Q@; Ver:0020h; + Type:Optic; Length: 2; 正： CBL#R0 Status:Normal; + FRU-Part-Number: ALLT03FQPE; Ver:0020h; + Type:Optic; Length: 2;
回避方法	有効な回避手段はありません。 この誤表示は、システム動作に影響ありません。
RTI番号	**RTIF2-140507-017**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	rebootxscf(8)コマンドを実行してXSCFをリセットした場合、XSCFの故障により、XSCFが停止することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] システムの入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-018**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	システムの初期設定時、入力電源を投入してもXSCFが起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、XSCFユニット（XSCFU）、またはマザーボードユニット（MBU）を交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140418-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle VM Server for SPARCのDynamic Resource Management（DRM）が動作しません。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140407-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたシステム構成において、物理パーティション（PPAR）の電源が投入されている状態でXCPファームウェアをアップデートした り、XSCFをリセットしたりすると、ioxadm(8)コマンドまたはshowhardconf(8)コマンドの実行結果にPCIボックスの情報が出力 されません。また、ioxadm(8)コマンドでPCIボックスを制御できなくなります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下のいずれかを実施してください。 ■ PPARの電源を切断したあと再投入する。 ■ PCIホットプラグ（PHP）により、リンクカードをシステムから切り離したあと再度組み込む。
RTI番号	**RTIF2-140407-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setaudit -aコマンドを実行しユーザーの監査ポリシーを設定したあとXSCFをリセットすると、登録したユーザーの監査ポリシーがユーザーアカウント 「default」の監査ポリシーに置き換わり、登録したユーザーの監査ポリシーが削除されてしまうことがあります。これは、ユーザーアカウント 「default」の監査ポリシーが設定されていない場合に発生します。 [例] yyyyyユーザーに監査ポリシーを設定した場合 XSCF> **setaudit -a yyyyy=disable** XSCF> **showaudit all** --- 中略 --- User policy: yyyyy disabled Events: AEV_AUDIT_START enabled XSCF> **rebootxscf -a** XSCF> **showaudit all** --- 中略 --- User policy: default disabled Events: AEV_AUDIT_START enabled
回避方法	showaudit allコマンドの出力結果の [User Policy:] にユーザーアカウント「default」が表示されない場合は、setaudit -a コマンドを実行して、ユーザーアカウント「default」の監査ポリシーを設定してください。 [例] ユーザーアカウント「default」の監査ポリシーを設定します。 XSCF> **setaudit -a default=enable** [復旧方法] 以下の手順を実施してください。 1. setaudit -aコマンドを実行し、ユーザーアカウント「default」に置き換わってしまったユーザーの監査ポリシーを、再度設定します。 2. rebootxscf(8)コマンドを実行し、XSCFをリセットします。 3. showaudit allコマンドを実行し、[User Policy:] に、設定したユーザーの監査ポリシーが表示されていることを確認します。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140402-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの [XSCF] - [Logs] メニューにある各ログの検索機能において、[Search] ボタンをクリックし、 [Start] と [End]の両方の時刻を指定して検索すると、指定した期間に誤りがある旨のメッセージが出力され検索できないことがあります。
回避方法	XSCFシェルのshowlogs(8)コマンドを使用してください。
RTI番号	**RTIF2-140314-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックス（XBBOX）に接続されたSPARC M10-4SにXCP 2210が適用されている場合、異常のためクロスバーケーブルが縮退していると、システム運用中に以下の現象が発生することがあります。 ■ XBBOXのクロスバーユニット（XBU）に故障が発生すると、XBUの故障が検出されずに、物理パーティション（PPAR）がハングアップする クロスバーケーブルの異常は、以下のいずれかのエラーログで確認できます。 FRU: /BB#n/XBU#x/CBL#y,/BB#n/XBU#x,/XBBOX#m/XBU#x Msg: XB-XB interface fatal bus protocol error または、 FRU: /BB#n/XBU#x/CBL#y,/BB#n/XBU#x,/XBBOX#m/XBU#x Msg: XB-XB interface timeout error または、 FRU: /BB#n/XBU#x/CBL#y,/BB#n/XBU#x,/XBBOX#m/XBU#x Msg: XB-XB interface link-up error
回避方法	クロスバーケーブルの異常が発生している場合は、速やかにすべてのPPARを停止させて、クロスバーケーブルを交換してください。 [復旧方法] 1. すべてのPPARを停止させます。停止できない場合は強制的に停止させてください。 2. 縮退されているクロスバーケーブルを交換します。 3. testsb -aコマンドを実行してハードウェア診断を行い、XBBOXのXBUに故障が発生していないか確認します。 4. XBUに故障が発生している場合はXBUを交換します。
RTI番号	**RTIF2-140312-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webの[SNMP]および[SNMP Security]メニューからSNMP設定を行うと、設定に失敗します。
回避方法	SNMPの設定はXSCF Webからではなく以下のXSCFシェルコマンドを使用して実施してください。 ■ setsnmp(8) ■ setsnmpusm(8) ■ setsnmpvacm(8)
RTI番号	**RTIF2-140310-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setldap -cコマンドを実行して、サーバ証明書をインポートすると、コマンドがエラーで終了しインポートできません。
回避方法	setldap(8)コマンドで指定した場合、有効な回避方法はありません。 setldapssl(8)コマンドで、暗号化されたLDAP機能（LDAP over SSL）を使用してください。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140227-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10筐体の縮退が検出されたあと、物理パーティションに対して、再起動や、電源の投入または切断が行われると、「PSU shortage」のエラーログが誤って登録されることがあります。また、エラーの誤検出とともに、PSUに故障マークがつくことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下の手順を実行してください。 ■ 電源ユニット（PSU）のStatusが「Faulted」になっていない場合 1. SPARC M10筐体の縮退の原因を取り除いてください。 2. PSUの故障マークがついていた場合、故障マークをクリアするために、入力電源を切断したあと再投入してください。 ■ 電源ユニット（PSU）のStatusが「Faulted」になっている場合 1. PSUを交換してください。 2. PSUの故障マークをクリアするために、入力電源を切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-140227-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下のいずれかのコマンドの実行中に[Ctrl]+[C]を押すと、ごくまれにコマンドが終了せず、さらに、ほかのログインユーザーが実行中のコマンドも含めて終了しなくなることがあります。 ping(8)、setservicetag(8)、shownetwork(8)、showntp(8)、showpacketfilters(8)、showservicetag(8)、traceroute(8)
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 入力電源を切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-140227-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	setsscp(8)コマンドを実行し、未搭載のSPARC M10-4S筐体に対するSSCPのIPアドレスを設定しても、showsscp(8)コマンドでは「Not installed」と表示され、設定したIPアドレスを確認できません。そのため、addfru(8)コマンドを実行してSPARC M10-4S筐体またはクロスバーボックスを増設する前に、showsscp(8)コマンドで増設する筐体のSSCPのIPアドレスを確認できません。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140227-008**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setloginlockout(8)コマンドでユーザーアカウントのロックアウト機能を有効にしている場合、同じユーザーアカウントでXSCF Webに3回ログインすると、設定されたロックアウト時間が過ぎるまでログインできなくなります。
回避方法	ユーザーアカウントのロックアウト機能を無効に設定してください。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140221-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	DR機能を使用してaddboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行した場合、「Failed to evacuate board resources」のメッセージが出力され、DR機能によるシステムボードの追加または削除に失敗することがあります。
回避方法	再度、addboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行してください。 それでも失敗する場合は、制御ドメインだけを再起動するか、rebootxscf -aコマンドを実行してXSCFをリセットしてください。 その後、再度、DR機能を使用してaddboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4S内のクロスバーユニット（XBU）にあるクロスバーケーブルに故障が発生した場合にshowstatus(8)コマンドを実行すると、クロス バーケーブルの部品名が誤って表示されます。部品名のうち、部品番号の数字とアルファベットが逆転して表示されます。 [例] クロスバーケーブル0L番の場合 誤：CBL#L0 Status:Deconfigured; 正：CBL#0L Status:Deconfigured;
回避方法	有効な回避方法はありません。 部品番号を読み替えてください。
RTI番号	**RTIF2-140212-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF拡張MIB定義ファイルにあるscfPPAROsMachineのOID情報を取得すると、「sun4v」が取得されるべきところが、「02090000」のようなCMUファームウェアの版数情報が取得されてしまいます。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140212-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SNMPv1またはSNMPv2において、setsnmp(8)コマンドを実行し、XSCFのホスト名を含むトラップホスト名を登録した場合、そのトラップホストはshowsnmp(8)コマンドを実行しても表示されません。 [showsnmp(8)コマンドで表示されない例] XSCFのホスト名: example.com トラップホストのホスト名: test.example.com
回避方法	トラップホストはXSCFのホスト名を含まないホスト名を設定するか、トラップホストにIPアドレスを設定してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-022**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsnmp addtraphostコマンドを-t informをつけて実行し、トラップホストを登録すると、そのトラップホストに通知されるトラップのUDPアドレスが引き継ぎIPアドレス（仮想IPア ドレス）ではなく、XSCF-LANに割り当てられているIPアドレス（物理IPアドレス）になってしまいます。この問題は、引き継ぎIPアドレスを設定 している場合に発生します。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-30　XCP 2220で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130806-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4S**
説明	XSCFをNTPクライアントに設定し、上位NTPサーバと時刻を同期させるようにしている場合に、各モデルの以下のFRUを交換したあと物理パーティション（PPAR）の電源を投入すると、Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日になることがあります。 [SPARC M10-1] ■ マザーボードユニット（MBU） ■ PSUバックプレーン（PSUBP） [SPARC M10-4S] ■ クロスバーバックプレーンユニット（XBBPU） ■ XSCFユニット（XSCFU） この問題は、showdateoffset(8)コマンドで表示される [Domain Date Offset] の値が、膨大な値（4億秒以上）になっていることで確認できます。 [例] XSCF> **showdateoffset -a** PPAR-ID Domain Date Offset 00　　424915200 sec 01　　424915200 sec 02　　424915200 sec 03　　424915200 sec --- 中略 --- 15　　424915200 sec
回避方法	説明にあるFRUを交換する場合は、以下の手順で実施してください。 ■ XSCFをNTPクライアントとする設定が無効の場合 本問題は発生しません。通常の交換作業を実施してください。 ■ XSCFをNTPクライアントとする設定が有効の場合 1. XSCF-LANポートからLANケーブルを抜いて、交換作業を実施します。 2. XSCFが起動されたらシリアルポートにシリアルケーブルを接続します。このとき、LANケーブルはまだ接続しないでください。 3. XSCFをNTPクライアントとする設定を無効にします。設定を反映するには、XSCFの再起動が必要です。 4. setdate(8)コマンドを実行してXSCFの時刻を設定します。設定後、XSCFは再起動されます。 5. XSCF-LANポートにLANケーブルを接続します。 6. XSCFをNTPクライアントとする設定を有効にします。設定を反映するには、XSCFの再起動が必要です。 [復旧方法] 説明にあるFRUを交換後、以下を実施してください。 物理パーティションの電源を投入するとOracle Solarisの時刻が2001年1月1日になります。 Oracle Solarisをシングルユーザーモードで立ち上げ、時刻を設定してください。

XCP 2210で解決された不具合

XCP 2210で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140605-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下のどちらかの場合に、ttydmプロセスがダウンし、XSCFがリセットされることがあります。 ■ ドメインコンソール上で画面出力を大量に行っていたあと、または、複数のSPARC M10-4SでXSCFがリセットされたタイミングでconsole(8)コマンドを終了したあとに、console(8)コマンドを実行して制御ドメインコンソールに接続した場合 ■ console(8)コマンドを実行して制御ドメインコンソールに強制的に接続した場合 ttydmプロセスがダウンした場合は、以下のエラーログが登録されます。 [例] XSCF> **showlogs error -v** Date: Dec 01 22:08:13 JST 2013 Code: 20000000-00fcff00b0000000ff-01040001000000000000000 Status: Notice Occurred: Dec 01 22:08:04.886 JST 2013 FRU: /FIRMWARE,/XBBOX#80/XSCFU Msg: SCF process down detected Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 50000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 74747964 6d2e3239 37302e62 7a320000 00000000 00000000 0000 [Diagnostic Code:] の4行目の先頭5バイトが「747479646d」のとき、ttydmプロセスがダウンしたことを示しています。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ■ 複数のSPARCM10-4Sで構成されるシステムの場合 XSCFのリセットによりマスタ／スタンバイXSCFが切り替わったあとconsole(8)コマンドを実行すると、制御ドメインコンソールに接続できるようになります。 ■ SPARC M10-1、SPARC M10-4、および1台構成のSPARC M10-4Sの場合 XSCFリセット後にconsole(8)コマンドを実行すると、制御ドメインコンソールに接続できるようになります。
RTI番号	**RTIF2-140507-019**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2210より前の版数のXSCFファームウェアで、XSCF WebをFirefox 26で使用する場合、ポップアップ画面の枠が太い黒線で表示されます。
回避方法	画面枠の太い黒線は無視してください。
RTI番号	**RTIF2-140507-020**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	poweroff -f -p n（nはパーティション番号）を実行した直後にマスタXSCFがスタンバイ状態に切り替わると、showlogs errorコマンドで表示されるエラーログに、以下のメッセージが登録されることがあります。 Msg: SCF process down detected
回避方法	有効な回避方法はありません。 この現象によるシステム運用への影響はありません。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140410-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFのNTPサーバ機能は、DDoS攻撃の踏み台として使用される可能性（CVE-2013-5211）があります。
回避方法	XCPファームウェアをXCP 2210以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-140410-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCFネットワークに引き継ぎIPアドレス（仮想IPアドレス）を設定する場合、XSCF-LANのIPアドレス（物理IPアドレス）が、マスタ／スタンバイXSCFの両方に設定されていないと、設定の適用およびXSCFのリセット後、引き継ぎIPアドレスの設定が反映されないことがあります。
回避方法	マスタ／スタンバイXSCFのXSCF-LANのIPアドレス（物理IPアドレス）を両方とも設定してから、引き継ぎIPアドレスを設定してください。
RTI番号	**RTIF2-140407-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	以下のすべての条件を満たす場合、縮退されたシステムボードをreplacefru(8)コマンドで交換したあと、replacefru(8)コマンドのメニューまたはtestsb(8)コマンドを使用して交換したシステムボードを診断すると、診断に失敗します。 ■ 物理パーティション（PPAR）が、複数のシステムボードで構成され、かつPPARの電源が投入されている ■ PPAR内の一部のシステムボードが縮退により停止している
回避方法	下のいずれかの手順で、システムボードの交換および診断を実施してください。 1. システムボードを交換する前にdeleteboard(8)コマンドを実行して、システムボードの状態をシステムボードプール（SP）に変更します。 2. システムボードの交換および診断が完了したあとにaddboard(8)コマンドを実行して、システムボードをPPARに割り当てなおします。 または、 1. PPARの電源を切断したあと、システムボードの交換および診断を実施します。 [復旧方法] deleteboard(8)コマンドを実行して、システムボードの状態をシステムボードプール（SP）に変更したあと、または、PPARの電源を切断したあとに、システムボードを診断しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-140303-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	入力電源を切断したあと再投入した場合（AC-OFF/ON）、ごくまれにXSCFが起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 本現象が発生した場合は、保守作業員に連絡してください。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140221-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインの起動中に、XSCFのイベントログに「LDC Protocol info from PPAR (PPAR ID X : Domain Service Data Send Failed)」が登録され、制御ドメインコンソールに「ds: WARNING: ds@x: ds_handle_recv: invalid message length, received xxx bytes, expected xxx」のメッセージが出力されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 rebootxscf -aコマンドを実行し、XSCFをリセットしてください。その後、制御ドメイン上でsvcsコマンドを実行し、piclサービス、fmdサービス、およびldmdサービスを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4S（システムボード）で構成される物理パーティションで、故障によりシステムボードが縮退されたあと、replacefru(8)コマンドで縮 退されたシステムボードを交換しようすると、次のエラーメッセージとともにそのシステムボードが稼働中と認識され、交換できません。 [Warning:028] BB#XX cannot be replaced because the PSB in the BB that you indicated is running. 同様に、initbb(8)コマンドを実行して、縮退されたシステムボードを初期化しようとすると、次のエラーメッセージが出力され、初期化できません。 Hardware error occurred by initial diagnosis. この現象は、showhardconf(8)およびshowboards(8)コマンドを実行したとき、システムボードの状態が次のようになっている場合に発生します。 [例] PSB#01-0（BB#01）が縮退された場合 XSCF> **showhardconf** ... * BB#01 Status:Deconfigured; ... XSCF> **showboards -a** PSB PPAR-ID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault --- ---------- ---------- ---- ---- ---- ------- -------- 01-0 00(01) Assigned n n n Passed Faulted
回避方法	deleteboard(8)コマンドを実行し、物理パーティションから縮退されたシステムボードを切り離してから、replacefru(8)またはinitbb(8)コマンドを実行し、システムボードを交換または減設してください。 [例] XSCF> **deleteboard -c unassign 01-0** システムボードを交換したあとaddboard(8)コマンドを実行し、システムボードを物理パーティションへ割り当ててから、保守手順に従って物理パーティションに組み込んでください。 [例] XSCF> **addboard -c assign -p 0 01-0**

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140212-010**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsnmp(8)、setsnmpusm(8)、およびsetsnmpvacm(8)コマンドの実行中に、[Ctrl]+[C]キーを押して終了させ ると、以降、setsnmp(8)、setsnmpusm(8)、およびsetsnmpvacm(8)コマンドを実行してSNMPの設定が行えなくなるこ とがあります。このとき、エラーメッセージとして、「configuration being changed by another user」が表示されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140212-015**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUメモリユニット（下段）（CMUL）、XSCFユニット（XSCFU）、またはマザーボードユニット（MBU）を交換したあと、version(8)コマンドを実行すると、CurrentバンクとReserveバンクの状態が間違って表示されることがあります。 [例] ■ CMUL交換前 XSCF> **version -c xcp** BB#00-XSCF#0 (Master) XCP0 (Reserve): 2210 XCP1 (Current): 2210 ■ （誤）CMUL交換後 XSCF> **version -c xcp** BB#00-XSCF#0 (Master) XCP0 (Reserve): 2210 XCP1 (Current): 2210 ■ （正）CMUL交換後 XSCF> **version -c xcp** BB#00-XSCF#0 (Master) XCP0 (Current): 2210 XCP1 (Reserve): 2210
回避方法	有効な回避方法はありません。 表示の間違いだけのため、システム動作に影響しません。 [復旧方法] flashupdate(8)コマンドを実行しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-140212-017**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	initbb(8)またはreplacefru(8)コマンドでSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックス（XBBOX）を減設してから、XSCFネットワーク（ホストおよびドメイン名、SSCP、IPアドレス、ルーティング、ネームサーバ）を設定し、applynetwork(8)コマンドを実行すると、「An internal error has occurred. Please contact your system administrator.」のエラーメッセージが出力され、XSCFネットワークの設定が反映できません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ［復旧方法］ 減設したSPARC M10-4SまたはXBBOXを接続しなおす、または交換しなおしたあとに、XSCFネットワークを設定しなおしてください。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140212-018**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	REMCSのお客様情報の入力画面で、全角入力フィールドへ以下のいずれかに該当する全角文字を入力すると、入力エラーのメッセージが出力されることがあります。 ■ 文字列の先頭にEUCコードのA1xxに該当する文字 ■ 文字列の末尾にEUCコードのxxA1に該当する文字 このとき、以下のエラーメッセージが表示されます。xxxの部分は、使用できない文字を入力した入力フィールド名が入ります。 「RMG0068:お客様情報の【xxx】に使用できない文字が含まれています。」
回避方法	文字列の先頭と末尾にこのエラーが発生する全角文字を入力しないでください。文字列の末尾にこのエラーに該当する全角文字を入力する必要がある場合は、「様」をつけるなどして、エラーを回避してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-019**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	入力電源を投入したときに、電源ユニット（PSU）の電圧の読み出しに失敗し、PSUのエラー「Hardware access error.」が誤って検出され、PSUが縮退します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] このエラーログは無視してください。PSUの縮退状態を解除するために、入力電源を切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-020**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ファンを活性交換する場合、ファンを取り外したあとすぐに取り付けると、活性交換に失敗することがあります。
回避方法	ファンを交換する場合は、取り外してから取り付けるまでの間隔を、10秒以上あけてください。
RTI番号	**RTIF2-140212-023**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUメモリユニット（下段）（CMUL）とCPUメモリユニット（上段）（CMUU）が搭載されているSPARC M10-4/M10-4Sで、次のようなCPU故障が発生すると、物理パーティション（PPAR）起動時に、「Hypervisor Abort」のエラーが発生し、PPARが使用できなくなることがあります。 ■ SPARC M10-4の場合 CMUL側に搭載されたすべてのCPUが縮退する ■ SPARC M10-4Sの場合 PPARを構成するすべての筐体内の、CMUL側に搭載されたすべてのCPUが縮退する
回避方法	有効な回避方法はありません。 故障したCPUが搭載されたCMULを交換してください。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140212-024**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris上からldm add-spconfigコマンドまたはldm set-spconfigコマンドを実行したあとに、OpenBoot PROM環境変数auto-boot?の値を変更すると、XSCFのshowpparparam(8)コマンドを実行しても設定した値が表示されません。ldm add-spconfigコマンドまたはldm set-spconfigコマンドを実行する前の値が表示されてしまいます。 この事象は以下の順序により発生します。 1. 物理パーティション（PPAR）を起動します。 2. 起動されたPPAR上の制御ドメインからldm add-spconfigコマンドを実行し、論理ドメインの構成情報を保存します。または、起動されたPPAR上の制御ドメインからldm set-spconfigコマンドを実行し、次回PPAR起動時に使用する論理ドメインの構成情報名（config-name）を指定します。 3. 制御ドメインのOracle Solarisからeeprom auto-boot?=xxxxを実行し、OpenBoot PROM環境変数を変更します。または制御ドメインのOpenBoot PROMからOpenBoot PROM環境変数を変更します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ただし、設定された値自体は反映されています。次回PPAR起動時に使用されるOpenBoot PROM環境変数auto-boot?の値は、XSCF上ではなく、制御ドメインのOracle Solaris上またはOpenBoot PROMプロンプト上で確認してください。
RTI番号	**RTIF2-140212-025**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4/M10-4Sにおいて、物理パーティション（PPAR）を構成する筐体内の、CPUメモリユニット（下側）（CMUL）上のすべてのI/Oが使用できなくなった場合、 また、SPARC M10-1において、マザーボードユニット（MBU）上のすべてのI/Oが使用できなくなった場合に、部品を交換しないでPPARの電源を投入すると、 ハイパーバイザ起動時にアボートする、またはOracle Solaris起動後、Oracle VM Server for SPARCの状態がメンテナンスモードになります。 すべてのI/Oが使用できない場合は、以下のいずれかが発生しています。 ■ I/O関連の電源が故障した ■ すべてのPCI Expressルートコンプレックスが故障した ■ すべてのPCIスイッチが故障した
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] SPARC M10-4S/M10-4の場合は、I/Oの故障が発生したCMULを交換してください。 SPARC M10-1の場合は、I/Oの故障が発生したMBUを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-140122-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	LSB番号が01（LSB#01）以上の論理システムボードにPCIボックスが接続されている場合に、そのPCIボックスに対してダイレクトI/O機能を有効にすると、そのPCIボックスが論理ドメインに認識されないことがあります。
回避方法	PCIボックスが認識されない場合は、論理ドメインを再起動してください。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131218-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solarisが稼働中に、OSコンソールに「Hypervisor Abort」が出力され、物理パーティションがリセットされた場合、次回の物理パーティションの再起動時にOracle VM Server for SPARCの状態がメンテナンスモードになることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 制御ドメインだけを再起動してください。 Oracle VM Server for SPARCの状態がonlineにならない場合は、rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFをリセットしてからOracle VM Server for SPARCの状態を再確認してください。それでもonlineの状態にならないときは、もう一度制御ドメインだけを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	3BB以上またはクロスバーボックスのあるシステム構成で、マスタXSCFで異常が発生してXSCFのマスタ／スタンバイ切り替えが行われるときに、切り替えに失敗し、スタンバイ状態に切り替わるべき旧マスタXSCFが再度マスタXSCFとして起動されてしまうことがあります。その結果、システムに2つのマスタXSCFが存在することになります。マスタXSCFが2つある状態ではシステム動作は保障できません。 この状態は、背面パネルのMASTER LEDが点灯している筐体が2つあることで確認できます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] しばらく待って、自動的にシステムのマスタXSCFが1つだけの状態になれば、システムを運用できます。 15分間待ってもシステムのマスタXSCFが1つの状態にならない場合は、すべてのSPARC M10システムおよびクロスバーボックスの背面パネルにあるRESETスイッチを押してください。その後、システムを運用できます。
RTI番号	**RTIF2-131213-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webで [PPAR Operation] - [PPAR Mode Configuration] メニューから「PPAR DR(Current)」または「PPAR DR(Next)」を選択して、[Configure] ボタンをクリックし、PPAR DR機能の有効／無効を表示または設定する場合、正しくないダイアログが表示され、PPAR DR機能の有効／無効を変更できません。
回避方法	XSCFコマンドのsetpparmode(8)コマンドを実行して、PPAR DR機能の有効／無効を設定してください。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131213-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	3BB以上またはクロスバーボックスのあるシステム構成でaddboard -c configureコマンドを実行中に、マスタXSCFで異常が発生してXSCFのマスタ／スタンバイ切り替えが行われ、その後マスタに切り替わったXSCFでdeleteboard(8)コマンドを実行した場合、実行したコマンドが応答しないことがあります。この現象は、XSCFのマスタ／スタンバイ切り替え後にマスタXSCFが2つ存在する状態になったときに発生します。（参考:RTIF2-131213-001） この状態は、背面パネルにあるMASTER LEDが点灯している筐体が2つあることで確認できます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] しばらく待って、自動的にシステムのマスタXSCFが1つだけの状態になったら、再度deleteboard(8)コマンドを実行してください。 15分間待ってもシステムのマスタXSCFが1つの状態にならない場合は、すべてのSPARC M10システムおよびクロスバーボックスの背面パネルにあるRESETスイッチを押してください。その後、再度deleteboard(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-009**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	DR機能を使用してaddboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行した場合、 "Failed to evacuate board resources"のメッセージが出力され、DR機能によるシステムボードの追加または削除が失敗する場合があります。
回避方法	再度、addboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行してください。 それでも失敗する場合は、制御ドメインだけを再起動するか、またはrebootxscf -aコマンドを実行してXSCFを再起動してください。その後、再度DR機能を使用してaddboard(8)またはdeleteboard(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-021**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	DR機能を使用してdeleteboard(8)コマンドを実行し、システムボード（PSB）の削除を行っているとき、"Timeout detected during unconfiguration of PSB#xx-x." のタイムアウトのエラーログが登録され、異常終了することがあります。この状態でshowboards(8)コマンドを実行すると、システムボード （PSB）のPwr/Conn/Confステータスがすべて "y" になっています。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-131212-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	LSB番号を01以上に設定した物理パーティション（PPAR）が存在する場合、I/Oデバイスの異常が発生しても「I/O device error detected」のログがshowlogs errorコマンドで表示されない、または「I/O device error detected」の対象となるFRUが誤って表示されることがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。

表 3-31　XCP 2210で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131126-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webでマストヘッドフレームの [Refresh] ボタンをクリックしても、メニューフレームに表示中のPhysicalまたはLogicalのツリーが更新されません。
回避方法	メニューフレームのPhysicalまたはLogicalのタブをクリックして、ツリーを再表示してください。
RTI番号	**RTIF2-130801-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4**
説明	DIMMが故障すると構成違反が誤検出され、以下のイベントログが登録されます。 SCF:DIMM configuration error on PSB#xx-0
回避方法	有効な回避手段はありません。 構成違反のイベントログは無視してください。 DIMM故障時の保守手順に従い、故障したDIMMが搭載されたSPARC M10システム筐体の入力電源を切断し故障したDIMMを交換したあと、電源を投入しなおすことで構成違反および故障が解消されます。

XCP 2092で解決された不具合

XCP 2092で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-32　XCP 2092で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140115-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスで故障が発生した場合、PCIボックスが接続されている物理パーティション（PPAR）内のすべてのドメインがシャットダウンされることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140110-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）の構成で、入力電源が切断されたことを通知する以下のイベントログが登録されません。 BB#xx was stopped by power failure. Power failure date is yyyy/mm/dd hh:mm:ss
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-140110-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	flashupdate(8)コマンドを実行した場合に、ごくまれに、XSCFが起動しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 本現象が発生したときは保守作業員に連絡してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-015**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	以下の3つの条件をすべて満たす物理パーティション上で、"Msg: XB-XB interface fatal error" のクロスバーユニット（XBU）のエラーが検出される場合があります。 [条件1] 複数のSPARC M10-4Sで物理パーティションが構成されている。 [条件2] SPARC M10-4S筐体間に接続されているXSCF BB制御ケーブルが故障している、または抜けているため、"Msg: BB control cable detected unexpected" のエラーログが登録される。 [条件3] ハードウェア故障により物理パーティションが再起動された、あるいはpoweron(8)コマンドまたはreset(8)コマンドを実行した。 さらに、この現象が発生した場合、故障の復旧のために、XSCFが物理パーティションの再起動、poweron(8)コマンドまたはreset(8)コマンドのリトライ処理を実行する場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XSCF BB制御ケーブルが抜けている状態で、poweron(8)コマンドまたはreset(8)コマンドを実行しないでください。 [復旧方法] ハードウェア故障が発生した場合、物理パーティションの電源をいったん切断し、投入しなおしてください。 XSCFがリトライ処理を行っている場合は、poweroff -f -p ppar-idコマンドを実行し、物理パーティションの電源を強制的に切断してください。その後、電源を投入しなおしてください。

XCP 2091で解決された不具合

XCP 2091で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-33　XCP 2091で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140117-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsnmp(8)、setsnmpusm(8)、setsnmpvacm(8)コマンド、またはXSCF Webの [XSCF] - [Settings] - [Service] - [SNMP]、[XSCF] - [Settings] - [Service] - [SNMP Security] のいずれかを実行すると、「exclusive control file open error」のエラーメッセージが表示され、SNMPに関する各設定に失敗します。この不具合は、XCP 2090でだけ発生します。
回避方法	XCP 2080以前、またはXCP 2091以降の版数で、ファームウェアをアップデートしてください。

XCP 2090で解決された不具合

XCP 2090で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140617-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたシステムで、showhardconf -uコマンドを実行すると、PCIボックスに搭載されているPCIカード数が、誤って最大搭載可能数である「11」と表示されてしまいます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PCIボックスに搭載されているPCIカードの情報は、showhardconf(8)コマンドをオプションなしで実行して確認してください。
RTI番号	**RTIF2-140605-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）内の1つのSPARC M10-4S筐体でXSCFが故障し、XSCFのCHECK LEDが点灯、READY LEDが消灯しているときにこのPPARの電源を投入した場合、このPPARを構成するすべてのSPARC M10-4S筐体にエラーが発生していると誤って判定され、PPARの電源を投入できなくなります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XSCF故障時の保守手順に従い、故障したSPARC M10-4S筐体のCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換してください。

RTI番号	**RTIF2-140605-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	BB#00、BB#01のどちらかのSPARC M10-4S、またはXBBOX#80、XBBOX#81のどちらかのクロスバーボックスを増設または交換した場合、増設または交換した筐体に対して、自動電源投入／切断のための電源制御スケジュールの設定データが同期されません。 この状態で、マスタ／スタンバイXSCFが切り替わると、電源制御スケジュールの設定データが失われたままとなり、自動電源投入／切断が行われません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 以下の手順で、自動電源投入／切断の電源制御スケジュールの設定データを、マスタ／スタンバイXSCFで同期させてください。 1. showpowerschedule -m listコマンドを実行して、電源制御スケジュールが登録されていることを確認します。 電源制御スケジュールが登録されていない場合は、addpowerschedule(8)コマンド、およびsetpowerschedule(8)コマンドを使用して再登録します。 2. setpowerschedule -c controlコマンドを実行して、電源制御スケジュールを有効または無効に設定します。
RTI番号	**RTIF2-140410-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入時にCPUの故障がある場合、間違ったエラーログが登録されることがあります。この現象は、showlogs error -vコマンドで確認できます。 showlogs error -vコマンドの実行結果が「Msg: SP Internal Error Occurred」で、かつ[Diagnostic Code] の5行目の先頭4バイトが「01920212」の値となっている場合は、この不具合に該当します。 ［例］ XSCF> **showlogs error -v** Date: Nov 11 18:29:04 JST 2013 Code: 40000000-00fcff0000ff0000ff-0186ffff0000000000000000 Status: Warning Occurred: Nov 11 18:29:04.871 JST 2013 FRU: /FIRMWARE Msg: SP Internal Error Occurred Diagnostic Code: 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 00000000 00000000 0000 0007000b 02040002 00000000 00000000 01920212 00620000 0000
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] showstatus(8)コマンドを実行し、故障している部品がないか確認してください。[Status] が「Deconfigured」となっているCPUは故障しています。保守手順に従って、故障したCPUの搭載されたFRUを交換してください。 [例] 「Deconfigured」のCPUがある場合 XSCF> **showstatus** BB#11 Status:Normal; CMUU Status:Normal; * CPU#0 Status:Deconfigured;

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140410-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solarisが起動された直後、またはldmdサービスが起動された直後にreset xirコマンドを実行すると、イベントログに「LDC Protocol info from PPAR (PPAR ID 0 : Domain Service Data Send Failed)」が登録されるとともに、XSCFがプロセスダウンしリセットすることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XSCFがリセットされたあとにshowlogs eventコマンドを実行して、イベントログを確認してください。また、showpparstaus(8)コマンドを実行して、物理パーティション（PPAR）がリセットされたことを確認してください。物理パーティションがリセットされていない場合は、再度、reset xirコマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-140303-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webを使用していると、応答が遅くなることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-131216-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	flashupdate -c checkコマンドを実行すると、「XCP update is started.」のメッセージが誤って表示されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 このメッセージは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-131213-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインの起動中に、"LDC Protocol info from PPAR (PPAR ID X : Domain Service Data Send Failed)" のイベントログが登録され、論理ドメインのシャットダウンが正常に動作しない場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 制御ドメインだけを再起動するか、またはrebootxscf -aコマンドを実行して、XSCFを再起動してください。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131213-017**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFの起動中に以下のいずれかの現象が発生することがあります。 [現象1] プロセスダウンが発生し、XSCFがリセットされる。 [現象2] MIB情報の取得に関するコマンド（getコマンドなど）の応答が遅れる。 [現象3] showhardconf(8)コマンドなどの実行に時間がかかる。または、showhardconf(8)コマンドを実行すると「Cannot communicate with the other XSCF. Check the other XSCF' stat」 のメッセージが出力され、異常終了する。 [現象4] 「SCF panic detected.」のエラーが発生し、XSCFがリセットされる。 [現象5] XSCF Webへのログインに失敗する。ただしXSCFシェルへのログインは可能。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ■ 現象1、2、4の場合 XSCFのリセットでシステムは復旧するため、継続してシステムを運用できます。 ■ 現象3、5の場合 rebootxscf(8)コマンドを実行して、XSCFをリセットしてください。
RTI番号	**RTIF2-131213-018**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFがNTPクライアントの設定を無効にしている場合、XSCFと各物理パーティション（PPAR）のハイパーバイザとの時刻差分が誤って更新され、PPARが再起動されたあと、論理ドメインの時刻がずれることがあります。
回避方法	setntp -s client -c enableコマンドを実行し、XSCFのNTPクライアントの設定を有効にし、XSCFを上位NTPサーバと同期させてください。 または、以下の処理を実施してください。 1. PPARの電源を投入または再起動する前にshowdateoffset(8)コマンドを実行し、表示されるXSCFとハイパーバイザとの時刻差分を確認する。 2. 時刻差分が大きい場合、PPARが停止している状態でresetdateoffset(8)コマンドを実行し、時刻差分をリセットする。 3. PPARの電源を投入したあと、Oracle Solarisの時刻を設定しなおす。
RTI番号	**RTIF2-131213-020**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFのリトライ制御により復旧可能なPSUバックプレーン（PSUBP）内にあるバックアップメモリの異常が3回以上発生すると、XSCFが固定故障と誤って認識し、XSCFの起動を抑止することがあります。この場合、"REBOOT: COUNTER ERROR" のエラーメッセージが表示されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 入力電源をいったん切断し、再度投入してください。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131129-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	showhardconf(8)コマンドによって表示されるメモリ情報のCodeの、末尾の数字8ケタのうち、上位の2ケタが「00」であるメモリが搭載されている場合（例1）、以下のいずれかを実施すると、メモリ情報が正しく認識できず、メモリのCodeおよびサイズ容量がゼロになってしまうことがあります（例2）。 ■ restoredefaults factoryコマンドの実行 ■ initbb(8)コマンドの実行 ■ メモリの実装位置の変更 [例1] XSCF>**showhardconf** : MEM#10B Status:Normal; + Code:ce8001M393B2 G70QH0-YK0 0000 -00511571; + Type:07; Size:16 GB; [例2] XSCF>**showhardconf** : * MEM#10B Status:Deconfigured; + Code:000000 0000-00000000; + Type: ; Size:0 GB;
回避方法	最新版数のXCPを適用し、入力電源を切断したあと再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-131126-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	[条件]に記載したいずれかの条件に該当するシステムで電源連動機能の設定を行い、Oracle Solarisが稼働している状態で[事象]に記載したいずれかの事象が発生した場合、外部I/O装置の電源が誤って切断されてしまうことがあります。 [条件] ■ 電源連動グループに登録されているSPARC M10システムが複数台構成で、XSCFをリセットするSPARC M10システム以外の物理パーティションの電源が切断されている。 [事象] ■ flashupdate(8)コマンドおよびXSCF Webからのファームウェアアップデートを実行してXSCFがリセットされた。 ■ rebootxscf(8)コマンドおよびXSCF WebからのXSCFの再起動を実行してXSCFがリセットされた。 ■ 故障が原因でXSCFがリセットされた。
回避方法	以下のいずれかの方法を実行してください。 ■ ファームウェアアップデートやXSCFの再起動を実施する前に、setremotepwrmgmt -c disableコマンドを実行して電源連動機能を無効にする。その後ファームウェアアップデートやXSCFの再起動を実施し、XSCFが起動したらsetremotepwrmgmt -c enableコマンドを実行して電源連動機能を有効にする。 ■ setremotepwrmgmt -c disableコマンドで電源連動機能を無効にし、外部I/O装置の電源は手動で投入する運用にする。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131126-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	BB#0/BB#01/XBBOX#80/XBBOX#81のいずれかを増設または交換した場合、マスタ／スタンバイXSCFにあるCPUコア アクティベーションキーの同期処理が失敗します。その後、マスタ／スタンバイ切り替えが行われると、CPUコア アクティベーションキーが消失する場合があります。これにより、以下の現象が発生します。 ■ PPARの電源が投入されている場合 CPUコア アクティベーション違反により、PPARの電源が切断される。 ■ PPARの電源が切断されている場合 CPUコア アクティベーション数不足により、PPARの投入に失敗する。
回避方法	増設／交換完了後、以下を実行することで、CPUコア アクティベーションキーの同期処理が正常に行われます。 ■ マスタ／スタンバイXSCFの切り替えが行われていない場合 増設／交換を指示したマスタXSCFから、rebootxscf -aコマンドまたはaddcodactivation(8)コマンドを実行してください。 ■ マスタ／スタンバイXSCFの切り替えが行われた場合 switchscf(8)コマンドを実行して、マスタXSCFを増設／交換前の状態に戻してください。その後、rebootxscf -aコマンドまたはaddcodactivation(8)コマンドを実行してください。 **注－**switchscf(8)コマンドを実行してマスタXSCFを元に戻す前に、以下の操作を行わないでください。これらの操作を行うと、CPUコア アクティベーションキーの再登録が必要になる場合があります。 ■ rebootxscf -a ■ addcodactivation(8) ■ deletecodactivation(8) ■ 入力電源の切断／投入
RTI番号	**RTIF2-131126-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスおよびリンクカードのファームウェアアップデートの完了時に、PCIボックスファームウェアの版数がイベントログに誤って表示されます。具体的には、イベントログの [PCIBOX version] にアップデート前の版数が、[last version] にアップデート後の版数が表示されます。 [例] 1120から1130へアップデートした場合の版数表示 ■ 誤 LINKCARD=1, bank=1, PCIBOX version=1120: last version=1130 ■ 正 LINKCARD=1, bank=1, PCIBOX version=1130: last version=1120
回避方法	有効な回避方法はありません。版数の番号を読み替えてください。 また、XCPファームウェアをXCP 2090以降にアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-131112-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスを使用し、2BB以上で構成された物理パーティション（PPAR）が2つ以上存在するシステムにおいて、すべてのPPARに影響するハードウェア故障が発生すると、故障部品が縮退されたあとのPPARの再起動処理が失敗し、すべてのPPARの電源が切断されたままになる場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 故障部品は縮退されています。 PPARの電源を投入しなおしてください。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131112-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	flashupdate(8)コマンドを実行中にtestsb(8)コマンド、diagxbu(8)コマンド、またはflashupdate -c syncコマンドを実行すると、"FMEM serious error"のエラーログが登録され、testsb(8)コマンド、diagxbu(8)コマンド、またはflashupdate -c syncコマンドが失敗することがあります。
回避方法	flashupdate(8)コマンドを実行中にtestsb(8)コマンド、diagxbu(8)コマンド、またはflashupdate -c syncコマンドを実行しないでください。 flashupdate(8)コマンドの完了を確認するには、showlogs eventコマンドを実行し、以下のメッセージを確認してください。 XCP update has been completed (XCP version=xxxx:last version=yyyy)
RTI番号	**RTIF2-131112-008**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	「SCF Diagnosis error on System backup memory」のPSUバックプレーン（PSUBP）またはXSCFインターフェースユニット（XSCFIFU）に関するエラーログが登録された場合、その直後に登録されたエラーログのFRUが正しくない場合があります。 この場合は以下のいずれかのメッセージが表示され、FRUのPSUBPまたはXSCFIFUが正しくありません。 Msg: SCF Diagnosis initialize RTC FRU: PSUBP またはXSCFIFU または Msg: SCF Diagnosis error on XXXX FRU: PSUBP または XSCFIFU XXXXに示されるFRUは次のいずれかです。 CPU、L2 cache、SDRAM、RTC、SPI FMEM、NAND
回避方法	有効な回避方法はありません。 FRUは以下のとおり読み替えてください。 SPARC M10-1の場合;　FRU: /MBU SPARC M10-4の場合；FRU: /BB#00/CMUL SPARC M10-4Sの場合; FRU: /BB#xx/CMUL またはFRU: /XBBOX#xx/XSCFU
RTI番号	**RTIF2-131112-011**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入したあと、電源投入処理が完了する前にioxadm(8)コマンドを実行すると、"SCF process down detected"のエラーログが登録され、ioxadm(8)コマンドが失敗する場合があります。
回避方法	PPARの電源投入処理が完了するまでは、ioxadm(8)コマンドを実行しないでください。 PPARの電源投入処理の進行状況はshowpparstatus(8)コマンドで確認できます。showpparstatus(8)コマンドを実行した結果"Running"のメッセージが表示されれば、PPARの電源投入処理は完了しています。 PPARの電源投入処理が完了したあとで、再度ioxadm(8)コマンドを実行してください。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131112-012**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ファンの回転数超過異常のエラーログ「FAN speed too high」が登録されたあとでファンの回転レベルが変更される事象が発生すると、適切なファンの回転レベルに切り替わらず、常にレベル5（フル回転）に切り替わります。 ファンの回転レベルが変更される事象が発生すると以下のイベントログが登録されますが、表示されているファンの回転レベルは正しくありません。実際のファンの回転レベルはレベル5で、フル回転しています。 ・Low temperature was detected at air inlet. FANs are changed to speed (level-1) mode ・Low temperature was detected at air inlet. FANs are changed to speed (level-2) mode ・Middle temperature was detected at air inlet. FANs are changed to speed (level-3) mode ・High temperature was detected at air inlet. FANs are changed to speed (level-4) mode ・Air outlet temperature recovered from warning state
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 回転数超過異常を検出したファンを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-131112-014**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下のメールサーバを使用している場合、REMCSレジストレーションまたはREMCS環境設定を実行すると、メールサーバとの通信タイムアウトを検出して処理が失敗します。 - Windows ExchangeServer - E-PORT - qmail
回避方法	使用するメールサーバをsendmailやpostfixへ変更してから、REMCSレジストレーションまたはREMCS環境設定を実行してください。メールサーバの変更が困難な場合は、XCP 2090以降のファームウェアにアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-131112-015**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	initbb(8)コマンドまたはreplacefru(8)コマンドを実行すると、"Change Master Failed"のイベントログが登録される場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 イベントログを無視してください。
RTI番号	**RTIF2-131107-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF BB制御ケーブルの故障や抜け、またはXSCFの故障が発生していると、複数のSPARC M10-4Sで構成される物理パーティション（PPAR）の、電源の切断やリセットに数時間かかることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131023-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF拡張MIB定義ファイルに、scfDomainInfoGroupのOIDが重複して定義されているため、サーバの管理ソフトウェア（例：日立社製ソフトウェア、統合システム運用管理 JP1）へXSCF拡張MIB定義ファイルをインストールしようとすると、失敗することがあります。
回避方法	XSCF拡張MIB定義ファイルの重複したOIDのテキスト行を削除し、再度、XSCF拡張MIB定義ファイルのインストールを試みてください。 削除の対象となるテキスト行は、「::= { scfMIBObjectGroups 14 }」のあるscfDomainInfoGroupが定義された行です。 [例] XSCF拡張MIB定義ファイル(XSCF-SP-MIB_2050.mib)の場合 以下の3558～3566行を削除します。 ---------- 3558: scfDomainInfoGroup OBJECT-GROUP 3559: OBJECTS { 3560: scfDomainNumber, scfPPARId, scfDomainName, 3561: scfDomainStatus 3562: } 3563: STATUS current 3564: DESCRIPTION 3565: "A collection of objects providing PPAR information." 3566: ::= { scfMIBObjectGroups 14 } ----------
RTI番号	**RTIF2-130305-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsnmp addtraphostコマンドまたはsetsnmp addv3traphostコマンドによってトラップホストのIPアドレスを129エントリー以上登録した状態でshowsnmp(8)コマンドを実行すると、SNMPv1トラップホスト、SNMPv2トラップホスト、SNMPv2-informトラップホスト、SNMPv3トラップホストはそれぞれ128エントリーまでしか表示されません。 同様にsetsnmpusm createコマンド、setsnmpvacm creategroupコマンド、setsnmpvacm createviewコマンド、またはsetsnmpvacm createaccessコマンドによって129エントリー以上登録した状態で、showsnmpusmコマンドまたはshowsnmpvacmコマンドを実行すると、ユーザー、ビュー、グループ、アクセスはそれぞれ128エントリーまでしか表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 setsnmp(8)コマンド、setsnmpusm(8)コマンド、またはsetsnmpvacm(8)コマンドによって各種のデータを129エントリー以上登録した場合、異常終了しなければ、正しく登録されています。
RTI番号	**RTIF2-130219-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	initbb(8)コマンドでSPARC M10-4S減設時にXSCF BB制御ケーブルを取り外したり、replacefru(8)コマンドでSPARC M10-4SまたはXSCFユニットを交換したりすると、以下のエラーログが登録されます。 Msg: Board control error (MBC link error) Msg: BB control cable detected unexpected Msg: XSCF hang-up is detected
回避方法	有効な回避方法はありません。 エラーログを無視してください。

表 3-34　XCP 2090で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130219-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ビルディングブロック構成のシステムで、クロスバーボックスやSPARC M10-4Sの入力電源を切断したあと再投入すると、エラーログに「Board control error （MBC link error)」が登録されていることがあります。さらに、存在しないクロスバーボックスやSPARC M10-4Sを故障ユニットとして表示することがあります。
回避方法	このエラーログは入力電源を切断したときに登録されます。このエラーログは無視してください。

XCP 2080で解決された不具合

XCP 2080で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-35　XCP 2080で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140507-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)コマンドを実行した場合、「STICK Stop Register error (does not stop)」および「STICK does not stop (CPU)」のエラーが検出され、testsb(8)コマンドが失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] snapshot(8)コマンドを実行して診断情報を取得してください。取得できたら、すべてのSPARCM10システム筐体の入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）してください。その後、保守作業員に連絡してください。

表 3-35　XCP 2080で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131126-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	入力電源を切断／投入したあと、またはXSCFをリセットしたあと、最初にCPUコア アクティベーションに関する操作を行うとき、XSCFシェル上ではなくXSCF Web上で操作すると、失敗する場合があります。失敗する手順は以下のいずれかです。 1. XSCF Web上で以下のいずれかを実施する。 ■ [Settings] - [CoD Activation] メニューで、CPUコア アクティベーションキーを追加する。 ■ [Maintenance] - [Configuration Management] メニューで、XSCF設定情報を退避する。 ■ [Maintenance] - [Configuration Management] メニューで、CPUコア アクティベーションキーを退避／復元する。 2. XSCFシェル上でdeletecodactivation(8)またはsetcod(8)コマンドを実行する。 または、XSCF Web上で CPUコア アクティベーションキーを削除する。 または、XSCF Web上で CPUコア アクティベーションの割り当てを変更する。 または、 1. XSCF Web上で以下のいずれかを実施する。 ■ [Settings] - [CoD Activation] メニューで、CPUコア アクティベーションキーを削除する。 ■ [Settings] - [CoD Reservation] メニューで、CPUコア アクティベーションの割り当てを解除する。 2. XSCFシェルまたはXSCF Web上に別のユーザーアカウントでログインする。 3. XSCFシェル上でdeletecodactivation(8)またはsetcod(8)コマンドを実行する。 または、XSCF Web上で CPUコア アクティベーションキーを削除する。 または、XSCF Web上で CPUコア アクティベーションの割り当てを変更する。
回避方法	入力電源を切断／投入したあと、またはXSCFをリセットしたあと、最初にCPUコア アクティベーションに関する操作を行うときは、XSCFシェル上で実施してください。 [復旧方法] rebootxscf(8)コマンドを実行しXSCFをリセットしてから、XSCFシェル上でdeletecodactivation(8)またはsetcod(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-131112-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入すると、「LDC Protocol info from PPAR (PPAR ID 0 :Domain Service Data Send Failed)」のイベントログが出力され、さらにOracle Solaris起動後のOSコンソールに「ldoms/ldmd:default failed: transitioned to maintenance」が出力され、Oracle VM Server for SPARCがメンテナンスモードになる場合があります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] rebootxscf -aコマンドを実行し、すべてのXSCFをリセットしてから制御ドメインを再起動してください。復旧に失敗する場合は、XSCF上でpoweroff(8)およびpoweron(8)コマンドを実行し、物理パーティション（PPAR）の電源を切断／投入してください。
RTI番号	**RTIF2-131108-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	/var/adm/messagesに「WARNING: invalid vector intr: number 0x10001, pil 0x11000」のワーニングメッセージが出力されることがあります。
回避方法	このメッセージは無視してください。

表 3-35　XCP 2080で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131023-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインの起動中や停止中に、rebootxscf(8)コマンドやswitchscf(8)コマンドなどを実行してXSCFをリセットさせると、以下の問題が発生することがあります。 ■ showdomainstatus(8)コマンドを実行すると、論理ドメインの状態が正しく表示されない。 ■ showlogs eventコマンドを実行すると、論理ドメインの状態通知のためのログが表示されない。 ■ 論理ドメインの、状態通知のためのSNMP Trapが送信されない。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 論理ドメインの状態を正しく表示するには、論理ドメインを再起動するなどして、論理ドメインの状態を更新してください。
RTI番号	**RTIF2-131023-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	論理ドメインでI/O異常が検出されても、XSCFにエラーが通知されないことがあります。このため、論理ドメインでOracle SolarisのfmdumpコマンドをFault Reportにあるを実行して表示されるI/Oの故障情報が、showlogs errorコマンドを実行しても表示されません。 また、XSCFでCPUまたはメモリの故障が検出されても、論理ドメインへこのエラーが通知されないことがあります。このため、showlogs errorコマンドを実行して表示されるCPUまたはメモリの故障情報が、fmdumpコマンドを実行してもFault Report上に表示されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 論理ドメインでI/O異常が検出された場合は、fmdumpコマンドを実行して表示されるFault Reportから故障箇所を特定し、故障部品を保守してください。XSCFでCPUまたはメモリの故障が検出された場合は、showlogs errorコマンドで表示されたFRUに従って、保守してください。
RTI番号	**RTIF2-131001-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	initbb(8)コマンドでSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスを切り離したあと、XSCF BB制御ケーブルの接続状態はそのままにして、すべての筐体の入力電源を切断して再投入した場合、initbb(8)コマンドで切り離した筐体がマスタ筐 体となり、XSCFの設定が工場出荷時に初期化されてしまいます。
回避方法	SPARC M10-4Sおよびクロスバーボックスは、必ず以下の手順で切り離してください。 1. initbb(8)コマンドを実行し、対象の筐体を停止させます。 2. 停止させた筐体の入力電源を切断したあと、XSCF BB制御ケーブルを取り外します。
RTI番号	**RTIF2-130307-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	diagxbu(8)コマンドで指定したSPARC M10-4Sのいずれかが未実装の場合、未実装のSPARC M10-4Sを示すPSB番号がメッセージ「PSB#xx-0 is not installed.」として出力されるはずが、誤って、実装されているSPARC M10-4SのPSB番号が出力されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 showhardconf(8)コマンドを実行して、該当のPSB番号が割り当てられているSPARC M10-4Sの実装状態を確認してください。 未実装のSPARC M10-4Sはshowhardconf(8)コマンドでは表示されません。 該当するSPARC M10-4Sが表示されている場合は、メッセージ「PSB#xx-0 is not installed.」のPSB番号は、コマンド実行時に指定した未実装のSPARC M10-4SのPSB番号と読み替えてください。

表 3-35　XCP 2080で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130305-018**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドで「BB」選択時の「Diagnostic tests」、またはtestsb(8)コマンド実行時に、internal errorが発生することがあります。このとき、エラーログを確認すると、internal errorの発生時刻に「PPAR#30」で「no PSB available in PPAR」が登録されています。
回避方法	該当するSPARC M10-4Sで故障が発生し、システムボード（PSB）が使用できない状態になっています。エラーログを確認のうえ、SPARC M10-4Sを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-019**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)コマンドで異常が発生しても診断を継続してしまい、2時間待たされたあとタイムアウトします。
回避方法	testsb(8)コマンド実行中に別セションでshowboards(8)コマンドを実行して、診断対象のPSBの状態を確認してください。「Test」が「Testing」以外で、かつ「Pwr」が「n」になっている場合は、正しく動作していないため、testsb(8)コマンドを[Ctrl]+[C]で中断ください。
RTI番号	**RTIF2-121219-011**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	poweroff(8)コマンドによる物理パーティション（PPAR）の電源の切断処理中に、そのPPARに属するシステムボードに対してdeleteboard -c unassignを実行すると、そのPPARの電源が切断できなくなることがあります。
回避方法	poweroff(8)コマンドを実行したあと、showpcl(8)コマンドで当該PPARのstatus欄がPowered Offとなっていることを確認してから、deleteboard(8)コマンドを実行してください。

XCP 2070で解決された不具合

XCP 2070で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140623-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	snapshot(8)コマンドを実行してもNTPに関する統計情報のログデータが採取されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 この問題によるシステム動作への影響はありません。
RTI番号	**RTIF2-131213-014**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	settimezone(8)コマンドを実行してXSCFのタイムゾーンを変更した場合、その後に起動する物理パーティション上のOracle Solarisの時刻が、XSCFのタイムゾーンを変更する前と変更したあとの時差の分ずれてしまうことがあります。 [例] 設定前のタイムゾーンがUTCで設定後のタイムゾーンがJSTの場合、Oracle Solarisの時刻のずれは9時間
回避方法	有効な回避方法は特にありません。 resetdateoffset(8)コマンドを実行したあと、Oracle Solarisを起動させて、Oracle Solaris上で正しい時刻に設定しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-131112-010**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の順序でXSCFコマンドを実行すると、setntp(8)またはsettelnet(8)コマンドでの設定情報が反映されず、元に戻ってしまう場合があります。 1. sethostname(8)、setnameserver(8)、setnetwork(8)、setroute(8)、またはsetsscp(8)コマンドのいずれかを実行する。 2. setntp(8)またはsettelnet(8)コマンドのいずれかを実行する。 3. applynetwork(8)コマンドを実行する。
回避方法	sethostname(8)、setnameserver(8)、setnetwork(8)、setroute(8)、setsscp(8)コマンドのいずれかを実行してから、applynetwork(8)コマンドを実行して設定を反映するまでの間に、setntp(8)またはsettelnet(8)コマンドを実行しないでください。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131112-016**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SSHのユーザー公開鍵が登録されていたユーザーアカウントをdeleteuser(8)コマンドで削除した場合、ユーザーアカウントは削除されますが、ユーザー公開鍵は削除されません。 このためユーザー公開鍵が増え続け、新規ユーザーアカウントに対してユーザー公開鍵を登録できなくなる場合があります。 また、同名のユーザーアカウントを再度登録すると、過去に登録したSSHのユーザー公開鍵が設定されてしまいます。
回避方法	deleteuser(8)コマンドでユーザーアカウントを削除する前に、setssh -c delpubkey -a -u を実行して、削除するユーザーアカウントに対して登録されたSSHのユーザー公開鍵を削除してください。 [復旧方法] 以下を実施してください。 1. adduser(8)コマンドを実行して、削除したユーザーアカウントを再度登録する。 2. rebootxscf -aコマンドを実行してXSCFをリセットするか、または入力電源の切断／投入を行う。 3. setssh -c delpubkey -a -u を実行して、SSHのユーザー公開鍵を削除する。 4. deleteuser(8)コマンドを実行して、ユーザーアカウントを削除する。
RTI番号	**RTIF2-131108-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	「SCF Diagnosis initialize RTC」のエラーが発生した場合、または、SPARC M10-1でマザーボードユニット（MBU）を、SPARC M10-4/M10-4SでCPUメモリユニット（下段）（CMUL）を交換した場合、以下の現象が発生することがあります。 [現象1] XSCFの時刻が2001年1月1日に戻ることがあります。 [現象2] XSCFとすべての物理パーティション（PPAR）との時刻の差分が、4億秒以上の膨大な値になることがあります。この現象は、showdateoffset(8)コマンドを実行すると、すべてのPPARとXSCFの時刻の差分が「400000000 sec」以上の値で表示されることで確認できます。 XSCF> **showdateoffset -a** PPAR-ID Domain Date Offset 00 400000100 sec 01 400000100 sec : : 15 400000100 sec [現象3] PPARをリセットしたり、PPARの電源を切断後再投入したりすると、Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日に戻ることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XCP 2221以降のファームウェアにアップデートしてください。 [復旧方法] 「「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの復旧方法（RTIF2-131108-001）」を参照してください。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131004-001**
対象モデル	**SPARC M10-1**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源が投入されている状態で、ファームウェアアップデートを行うと、「CPU-MBC interface fatal error」というマザーボードユニット（MBU）のエラーが誤検出され、エラーログに登録されることがあります。この誤検出により論理ドメインが停止する場合があります。
回避方法	物理パーティション（PPAR）の電源が切断している状態で、ファームウェアアップデートを実施してください。
RTI番号	**RTIF2-131004-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	3BB以上で構成されたシステムで、マスタXSCFとスタンバイXSCFの、筐体の入力電源を切断したあと再投入すると、マスタXSCFが存在しない状態になります。また、XSCF DUAL制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態でマスタXSCFを停止させると、XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えが抑止され、スタンバイXSCFがマスタXSCFに切り替わりません。
回避方法	有効な回避手方法はありません。 XCP 2070以降のファームウェアにアップデートしてください。
RTI番号	**RTIF2-131004-003**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF DUAL制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態でXSCFのマスタ／スタンバイの切り替えが発生すると、マスタ／スタンバイ間の通信が保障されていないにも関わらず切り替え処理が行われることがあります。 XSCF DUAL制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態で、XSCFを設定したあとXSCFのマスタ/スタンバイの切り替え処理が行われると、XSCFに設定した情報が消えてしまいます。
回避方法	有効な回避手段はありません。 XSCF DUAL制御ケーブルが正常に接続されている状態で、XSCFのマスタ／スタンバイの切り替えを行ってください。 XSCF DUAL制御ケーブルが正常に接続されている状態は、以下の手順で確認できます。 1. showsscp -aコマンドを実行します。 2. 1.の出力結果で、SSCPリンクネットワークのID（network_id）が2または4のAddressに「Cannot communicate.」が表示されていないことを確認します。 [例]クロスバーボックスなしの場合は、SSCPリンクネットワークのID（network_id）2のAddressを確認します。 XSCF> **showsscp -a -N 2** : : Location　　Address ---------- ---------- bb#00-if#2　169.254.1.17 bb#01-if#2　169.254.1.18 同様に、クロスバーボックスありの場合は、SSCPリンクネットワークのID（network_id）4のAddressを確認します。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130930-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFにタイムゾーンを設定し、かつ、サマータイムを導入している環境において、物理パーティション（PPAR）を再起動するか、PPARの電源を切断したあと再投入すると、論理ドメインの起動時刻が3600秒以上進む、または、遅れることがあります。 これは、showdateoffset(8)コマンドを実行することで確認できます。 以下の実行例のように、PPARとXSCFとの時刻の差分が+/-3600秒以上の値になっている場合は、この不具合に相当します。 [例] XSCF> **showdateoffset -a** PPAR-ID Domain Date Offset 00 -7205 sec 01 -7205 sec 02 -7205 sec 03 -7205 sec 04 -7205 sec 05 -7205 sec 06 -7205 sec 07 -7205 sec 08 -7205 sec 09 -7205 sec 10 -7205 sec 11 -7205 sec 12 -7205 sec 13 -7205 sec 14 -7205 sec 15 -7205 sec
回避方法	有効な回避方法はありません。 システム内のすべての論理ドメインで、NTPサーバと時刻が同期できるように設定し、論理ドメインの起動時刻がずれた場合は、NTPで時刻を補正してください。
RTI番号	**RTIF2-130903-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されているシステムで、物理パーティション（PPAR）の電源を投入してからPower-On Self test（POST）が開始するまで、通常より時間がかかることがあります。 たとえば、2BB構成では通常10分程度でPOSTが開始するところ20分以上かかることがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。 この不具合が発生した場合は、rebootxscf -aコマンドを実行してすべてのXSCFをリセットし、システムを復旧してください。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130903-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムで、複数の物理パーティション（PPAR）が存在する場合、一部のSPARC M10-4Sの入力電源を切断したあと再投入すると、「SRAM Serious Error」が発生し、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）の交換が必要となることがあります。また、showpparstatus(8)コマンドやshowdomainstatus(8)コマンドで状態を表示したときに、PPARの状態が正しく表示されないことがあります。
回避方法	有効な回避手段はありません。 PPARが稼働している状態でSPARC M10-4Sの入力電源を切断しないでください。poweroff(8)コマンド等でPPARを停止させてから、入力電源を切断してください。
RTI番号	**RTIF2-130903-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PowerOn状態の物理パーティション（PPAR）に対してsetcod(8)コマンドを繰り返し実行すると、プロセス内部で使用可能なリソースを使い果たし、coddがプロセスダウンすることがあります。
回避方法	PPARがPowerOff状態のときにsetcod(8)コマンドを実行することで回避できます。 [復旧方法] coddを再起動してください。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130903-008**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	OpenBoot PROMのselectコマンドで任意のデバイスを指定したあと、unselect-devコマンドを実行しなかった場合、続けてbootコマンドを使用してネットワークデバイスからOracle Solarisを起動すると、以下の不具合が発生します。 論理ドメインのコンソールに「seek failed」と「Can't mount root」のメッセージが表示され、Oracle Solarisの起動に失敗します。その後、「I/O device error detected」のメッセージがエラーログに登録され、論理ドメインがリセットされます。論理ドメインのリセット後、selectコマンドで指定したデバイスが縮退されます。 リセット後の論理ドメインは、OpenBoot PROM環境変数である「auto-boot?」の設定によって以下の状態となります。 ■ auto-boot?がtrueの場合 boot-deviceに設定されているデバイスからOracle Solarisが起動されます。ただし、上記selectコマンドで指定したデバイスがboot-deviceに設定されているブートデバイスと同じ場合は、このデバイスが縮退されているため、Oracle Solarisは起動されず、okプロンプトの状態となります。 ■ auto-boot?がfalseの場合 通常の運用と同様、okプロンプトの状態となります。
回避方法	デバイスを指定してselectコマンドを実行したあとは、必ずunselect-devコマンドを実行してからbootコマンドを実行してください。 [例] {0} ok **select /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@1/network@0** {0} ok **unselect-dev** {0} ok **boot net** [復旧方法] ■ 不具合発生後、論理ドメインがokプロンプトの状態である場合 以下のコマンドを実行して、論理ドメインをリセットしてください。 {0} ok **reset-all** ■ 不具合発生後、論理ドメインのOracle Solarisが起動している場合 shutdownコマンドによりokプロンプトの状態にしてから、環境変数auto-boot?をfalseに設定し、reset-allコマンドによりOpenBoot PROMを再起動してください。 [例] # **shutdown -y -g0 -i0** {0} ok **setenv auto-boot? false** {0} ok **reset-all** 復旧したあとは、この不具合によって縮退されたデバイスは正常に認識されるようになります。不具合発生時にエラーログに登録されたメッセージは無視してください。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130902-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されているシステムで、論理ドメインの稼働中にファームウェアをアップデートすると、マスタXSCFがスタンバイ状態のXSCFに切り替わらず、ファームウェアのアップデートが失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 以下の手順でシステムを復旧させてください。 1. いずれかのスタンバイ状態のXSCFにログインし、以下のコマンドを実行します。 XSCF> **rebootxscf -s** 2. 10秒後、もう片方のスタンバイ状態のXSCFにログインし、以下のコマンドを実行します。 XSCF> **rebootxscf -a** 3. 20分待ってからマスタXSCFにログインし、flashupdate(8)コマンドを再度実行します。
RTI番号	**RTIF2-130826-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	スタンバイXSCFが、保守中または入力電源切断状態のどちらかの場合に、マスタXSCFからXSCF Webにログインすると、「Cannot communicate with BB#xxx: ...」で始まる、改行のないコミュニケーションエラーを示すダイアログが出力されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ダイアログ内のメッセージは、表示の不具合が原因のためそのまま運用できます。このコミュニケーションエラーに関するダイアログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130802-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	getflashimage(8)コマンドでUSBメモリを指定した場合に、下記のメッセージが出力され、コマンドの実行が失敗することがあります。 Error: Unable to mount USB device.
回避方法	USBメモリを抜き差ししなおしてから、再度getflashimage(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-130802-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris稼働状態のときに、setsnmp(8)コマンドを使用してSNMPの設定を変更すると、以下の現象が発生することがあります。 1. prtpicl -v、prtdiag -vコマンドの結果で、XCP版数など、一部のデータが出力されない。 2. Oracle Solarisの/var/adm/messagesに、以下のワーニングメッセージが出力される。 PICL snmpplugin: cannot fetch object value
回避方法	有効な回避方法はありません。 ■ 1.が発生した場合 以下の手順で復旧します。 1) prtdiagコマンドを[Ctrl]+[C]で終了します。 2) 約30分放置して、XSCFでSNMPのタイムアウトを発生させます。 3) 論理ドメイン上でsvcadmコマンドを実行し、piclサービスを再起動させます。 ■ 2.が発生した場合 一時的なワーニングメッセージのため、システムの運用を継続できます。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130801-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	switchscf(8)コマンドを実行してもXSCFが切り替わらないことがあります。このとき、マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFが通信できない状態になっており、XSCFの冗長性が保持されない状態となっています。
回避方法	有効な回避手段はありません。 switchscf(8)コマンドを実行してもXSCFが切り替わらない場合には、スタンバイ状態となっている筐体のXSCFユニットをreplacefru(8)コマンドで活性交換してください。また、XSCFユニットを切り離したときに、XSCF BB制御ケーブルを抜き差ししてください。
RTI番号	**RTIF2-130716-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ioxadm(8)コマンドを実行して、PCIボックスファームウェアをアップデートすると、「LINKCARD I2C error」のエラーが発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ただし、以下の両方が確認できた場合は、PCIボックスファームウェアのアップデートは正常に終了しています。この場合、「LINKCARD I2C error」のエラーメッセージを無視して、運用を継続してください。 ■ ioxadm(8)コマンドによるPCIボックスファームウェアのアップデートが正常終了している。 ■ ioxadm -v listコマンドを実行すると、PCIボックスファームウェアの版数がアップデートしたときに指定した版数になっている。
RTI番号	**RTIF2-130711-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドを実行してSPARC M10-4Sを保守する場合、「FMEM serious error」のエラーログが登録され、replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドが失敗することがあります。 また、flashupdate(8)コマンド実行中に物理パーティション（PPAR）の電源を投入した場合も、同様に、「FMEM serious error」のエラーログが登録され、flashupdate(8)コマンドが失敗することがあります。
回避方法	詳細は「SPARC M10-4Sの「FMEM serious error」への対応（RTIF2-130711-001）」を参照してください。

表 3-36　XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130709-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源が投入されている状態で、マスタXSCFの切り替えが発生すると、スタンバイ状態のXSCFがマスタXSCFに切り替わるまでに時間がかかることがあります。その結果、以下のエラーが発生することがあります。 Master switch synchronization timeout
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ■ PPARの電源が投入されている状態でflashupdate(8)コマンド実行時にエラーが発生した場合：PPARの電源を切断して、flashupdate(8)コマンドを再度実行してください。 ■ PPARの電源が投入されている状態でswitchscf(8)コマンド実行時にエラーが発生した場合、またはPPARの電源が投入されている状態でXSCFの故障（プロセスダウンなど）によりエラーが発生した場合： 「XSCF hang-up is detected」のエラーログが登録されたSPARC M10-4Sの筐体を、以下のどちらかの方法で復旧してください。 ・CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはXSCFユニット（XSCFU）をreplacefru(8)コマンドで交換する。 ・CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはXSCFユニット（XSCFU）の入力電源を切断したあと再投入する。
RTI番号	**RTIF2-130516-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ETERNUSと電源連動を設定しているシステム構成で、SRARC M10システムのオペレーションパネルにある電源スイッチから電源を投入しても、ETERNUSの電源が投入されません。
回避方法	下記のいずれかの方法で電源を投入してください。 ■ XSCFコマンドのpoweron(8)コマンド ■ XSCF Webページのメニュー ■ スケジュール設定による電源の自動投入
RTI番号	**RTIF2-130228-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris起動中にpoweroff -fコマンドで物理パーティション（PPAR）の電源を強制的に切断したあと、PPARの電源を再投入すると、OSコンソールに「 Unable to connect to Domain Service providers」が出力され、Oracle Solarisが起動できないことがあります。
回避方法	poweroff(8)コマンドでPPARの電源を切断したあと、poweron(8)コマンドでPPARの電源を再投入してください。それでも、Oracle Solarisが起動しない場合は、PPARの電源を切断したあとにXSCFをリセットしてから、PPARの電源を投入しなおしてください。

SPARC M10-4Sの「FMEM serious error」への対応（RTIF2-130711-001）

■ SPARC M10-4Sを交換する場合
replacefru(8)コマンド実行して出力される保守メニューに従ってSPARC M10-4S交換する場合、手順3を実行して、対象のSPARC M10-4S（BB#x）の入力電源を投入したあと50分待機してから、手順4で「f」を入力して実行してください。

```
Please execute the following steps:
1) Remove (Delete) the BB#x from a system.
2) Turn off the breaker of the BB#x.
3) After the exchanged device is connected with the system, turn on
   the breaker of the BB#x.
4) Please select[f:finish] :
```

- SPARC M10-4Sを追加する場合
  addfru(8)コマンドを実行して出力される保守メニューに従ってSPARC M10-4Sを追加する場合、手順1を実行して、対象のSPARC M10-4S（BB#x）の入力電源を投入したあと50分待機してから、手順2で「f」を入力して実行してください。

```
Please execute the following steps:
1) After the added device is connected with the system, please turn on
   the breaker of the BB#x.
2) Please select[f:finish] :
```

- flashupdate(8)コマンドを実行する場合
  flashupdate(8)コマンドを実行中に物理パーティション（PPAR）の電源を投入しないでください。flashupdate(8)コマンドを実行中にPPARの電源を投入してしまった場合、コマンドが完了したあと、PPARの電源を投入しなおしてください。
  flashupdate(8)コマンドの完了は、showlogs eventコマンドを実行し、以下のメッセージを確認してください。

```
XCP update has been completed (XCP version=xxxx:last version=yyyy)
```

「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの復旧方法（RTIF2-131108-001）

[復旧方法]

- 現象1が発生した場合
  - ケース1

    Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻を再設定するため、setdate(8)コマンドを実行してください。このとき、XSCFが再起動されます。その後、PPARの電源を切断後再投入してください。

  - ケース2

    Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日ではないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。

  - ケース3

    PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のケース1またはケース2を実施してください。

- 現象2が発生した場合
  - ケース1

    Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻とすべてのPPARのハイパーバイザ間で生じている不正な時刻の差分を初期化する必要があります。すべてのPPARを停止し、resetdateoffset -aコマンドを実行して、時刻の差分をクリアしてください。

  - ケース2

    Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日でないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。

  - ケース3

    PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のケース1またはケース2を実施してください。

- 現象3が発生した場合
  現象1または現象2も発生している場合、まず、それらの[復旧方法]を実施してください。

  Oracle Solarisの時刻を設定しなおしてください。

XCP 2052で解決された不具合

XCP 2052で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-37　XCP 2052で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-131004-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF BB制御ケーブルが故障した状態、または接続されていない状態でスタンバイXSCFを再起動すると、マスタXSCFとして起動されてしまい、システムにマスタXSCFが2つ存在してしまいます。 マスタXSCFが2つある状態では、システム動作は保障できません。 この状態は、背面パネルにあるMASTER LEDの点灯している筐体が2つあることで確認できます。
回避方法	有効な回避手段はありません。 マスタ／スタンバイ間のXSCF BB制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態で、XSCFをリセットしないでください。 [復旧方法] マスタXSCFが2つある状態になった場合は、すべての筐体の入力電源を切断したあと再投入してください。

表 3-37　XCP 2052で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130903-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF BB制御ケーブルまたはXSCF DUAL制御ケーブルが正しく接続されていない状態で、XSCFのマスタ／スタンバイ切り替えが発生した場合、マスタXSCFの設定を引き継げず、正しい設定で動作できないことがあります。
回避方法	有効な回避方はありません。 XSCF BB制御ケーブルとXSCF DUAL制御ケーブルの両方が正しく接続されているか確認してください。 この不具合が発生した場合は、各ケーブルの接続を確認したあと、マスタXSCFで行ったすべての設定が反映されているか確認してください。設定が反映されていない場合は、XSCFを設定しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-130827-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF-LANのハードウェア設定の不具合により、XSCFのパケット受信が遅延し応答が遅れることで、通信相手側でタイムアウトや接続失敗を検出することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

XCP 2051で解決された不具合

XCP 2051で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-38　XCP 2051で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-130717-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PSUバックプレーン（PSUBP）またはクロスバーボックスのXSCFインターフェースユニット（XSCFIFU）上にあるUSB-SSDで異常が発生した場合、エラーログ「System backup memory access error」が登録され、poweron(8)コマンドが実行できない、またはsnapshot(8)コマンドでデータが採取できないなどの不具合が発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 この不具合が発生した場合は、入力電源を切断／投入（AC OFF/ON）してください。

XCP 2050で解決された不具合

XCP 2050で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-39　XCP 2050で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-131107-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	システムの入力電源を投入したり、XSCFのリセットやXCPファームウェアをアップデートしたりすると、「SCF Diagnosis initialize RTC」のエラーが誤って検出され、以下の現象が発生することがあります。 [現象1] XSCFの時刻が1970年1月1日に戻ることがあります。 [現象2] XSCFとすべての物理パーティション（PPAR）との時刻の差分が、13億秒以上の膨大な値になることがあります。この現象は、showdateoffset(8)コマンドを実行すると、すべてのPPARとXSCFとの時刻の差分が 「1300000000 sec」以上の値で表示されることで確認できます。 XSCF> **showdateoffset -a** PPAR-ID Domain Date Offset 00 1300000100 sec 01 1300000100 sec : : 15 1300000100 sec [現象3] PPARをリセットしたり、PPARの電源を切断後再投入したりすると、Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日に戻ることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 XCP 2050以降のファームウェアにアップデートしてください。 [復旧方法] 「「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの誤検出に対する復旧方法（RTIF2-131107-002）」を参照してください。
RTI番号	**RTIF2-131023-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webのメニューで[Physical]バーを選択すると、PCI（リンクカードは除く）が異状状態(⚠)に見えます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PCI（リンクカードを除く）が異状状態（⚠）で表示されても無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130903-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFのメール通報機能において、setsmtp(8)コマンドで設定できる返信先メールアドレスのローカル部およびドメイン部に、以下の文字を含めることはできません。 「!」「#」「$」「%」「&」「'」「*」「+」「/」「=」「?」「^」「_」「`」「{」「|」「}」「~」
回避方法	[説明]で示された文字を含まない返信先メールアドレスを使用してください。

表 3-39　XCP 2050で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130528-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIホットプラグ（PHP）機能を使用して、Quad Gigabit Ethernetカード（SE1X7GQ2F）を、PCIボックス内のPCI Expressスロットに増設することはできません。
回避方法	これは、XCP 2050とSRU11.1.6.4.0で修正されます。 XCPおよびSRUが適用されていない場合は、増設対象の論理ドメインを停止してから、PCIカードを増設する必要があります。 [留意点] 論理ドメインの構成情報を保存し、factory-default以外で運用している場合にこの不具合を解決するには、XCPファームウェアのアップデート後に、論理ドメインの構成を再構築する必要があります。詳細は「論理ドメインの構成を再構築する（RTIF2-130528-001）」を参照してください。
RTI番号	**RTIF2-130516-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFの負荷が高い場合、電源ユニット（PSU）を被疑箇所とする以下のワーニングメッセージが出力されることがあります。 Insufficient FAN rotation speed PSU voltage out of range error PSU output current too high PSU over temperature warning
回避方法	回避方法はありません。 ワーニングメッセージのためそのまま運用できます。メッセージは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130329-004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ビルディングブロック構成のシステムで、物理パーティション（PPAR）の電源投入中に以下の操作が行われると、制御ドメインコンソールに接続できないことがあります。 1. PPARを構成するSPARC M10-4Sのいずれかの XSCFがリセットされる。 2. マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFが切り替えが発生する。 3. 1.でリセットされたSPARC M10-4SのXSCFが再度リセットされる。
回避方法	有効な回避手段はありません。 switchscf(8)コマンドを使用し、マスタXSCFをリセットしてください。
RTI番号	**RTIF2-130329-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFが同時に再起動しているときに、パニックやwatchdogタイムアウトなどにより、稼働中の物理パーティション（PPAR）に属しているSPARC M10-4SのXSCFがリセットされると、制御ドメインコンソールに接続ができないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 poweroff -fコマンドを使用してPPARの電源を切断後、再投入してください。

表 3-39　XCP 2050で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130319-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4Sで、物理パーティション（PPAR）の電源切断処理が完了する前に、SPARC M10-4Sやクロスバーボックスの入力電源を切断後再投入し、再度PPARの電源を投入すると、以降にswitchscf(8)コマンド、ファームウェアアップデート、または故障によるマスタXSCFの切り替えが発生した場合に、稼働中のPPARの電源が切断されることがあります。
回避方法	SPARC M10-4Sやクロスバーボックスの入力電源を切断する前にPPARの電源を切断する場合は、対象となるPPARおよびSPARC M10-4Sの電源の切断が完了していることを、showboards(8)コマンドとshowlogs powerコマンドを使用して確認してください。そのあと、SPARC M10-4Sやクロスバーボックスの入力電源を切断してください。
RTI番号	**RTIF2-130319-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	poweroff(8)コマンドで物理パーティション（PPAR）の電源切断処理中に、制御ドメインでshutdown -i5コマンドを実行したり、okプロンプトでpower-offコマンドを実行したりして、PPARの電源の切断を競合させた場合、イベントログに「SCF:PPAR issued power-off request (PPARID X)」が多数登録されることがあります。
回避方法	PPARの電源は正常に切断されているため、登録されたイベントログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-016**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	flashupdate -c syncコマンドでSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスの XCPファームウェアの版数合わせを行うと、タイムアウトすることがあります。
回避方法	-fオプションを指定してflashupdate(8)コマンドを実行し、すべてのSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスに対して、XCPファームウェアをアップデートしなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-130219-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	スレーブXSCFのSPARC M10-4Sを保守する場合、スタンバイ状態のXSCFとスレーブXSCF間のXSCF接続ケーブルを誤接続すると、異常を検知せずに、正常に終了したとみなされてしまいます。
回避方法	switchscf(8)コマンドを使用して、マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFを切り替えたあと、対象のスレーブXSCFに対してtestsb(8)コマンドを実行してください。XSCF接続ケーブルの誤接続を検知してエラーログが発行されます。

論理ドメインの構成を再構築する（RTIF2-130528-001）

論理ドメインの構成情報を保存し、factory-default以外で運用している場合にこの不具合を解決するには、XCPファームウェアのアップデート後に、以下の手順で、論理ドメインの構成を再構築する必要があります。

1. **XSCFに保存された現在の論理ドメインの構成情報を確認します。**
   ここでは、config1という論理ドメイン構成情報名が保存されている例で説明します。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
20xx-yy-zz hh:mm:ss
PPAR-ID     :0
Booting config
(Current)  :config1
(Next)     :config1
----------------------------------------------------------------
Index       :1
config_name :factory-default
domains     :1
date_created:-
----------------------------------------------------------------
Index       :2
config_name :config1
domains     :2
date_created:'20xx-yy-zz hh:mm:ss'
```

2. **すべての論理ドメインにダミー変数を設定し、クリアします。**
   すべての論理ドメインに対して、以下のコマンドを実行します。

```
primary# ldm set-variable fix-php=true ldom
primary# ldm remove-variable fix-php ldom
```

3. **変更した構成をXSCFに保存し、現在の構成情報を置き換えます。**
   ここでは、現在の構成情報名「config1」を置き換える場合を例に説明します。

```
primary# ldm remove-spconfig config1
primary# ldm add-spconfig config1
```

4. **すべての論理ドメインを再起動します。**

「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの誤検出に対する復旧方法（RTIF2-131107-002）

[復旧方法]

- 現象1が発生した場合
  - ケース1

    Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻を再設定するため、setdate(8)コマンドを実行してください。このとき、XSCFが再起動されます。その後、PPARの電源を切断後再投入してください。

  - ケース2

    Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日ではないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。

  - ケース3

PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のケース1またはケース2を実施してください。

- 現象2が発生した場合
  - ケース1

    Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻とすべてのPPARのハイパーバイザ間で生じている不正な時刻の差分を初期化する必要があります。すべてのPPARを停止し、resetdateoffset -aコマンドを実行して、時刻の差分をクリアしてください。

  - ケース2

    Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日でないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。

  - ケース3

    PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のケース1またはケース2を実施してください。

- 現象3が発生した場合
  現象1または現象2も発生している場合、まず、それらの [復旧方法] を実施してください。

  Oracle Solarisの時刻を設定しなおしてください。

XCP 2050より前の版数で解決された不具合

XCP 2050より前の版数で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-130612-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XCPファームウェアの版数がXCP 2041、XCP 2042、またはXCP 2043の場合、複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムでは、replacefru(8)コマンドによるSPARC M10-4Sの交換ができません。
回避方法	停止交換（入力電源を切断して交換）を実施するか、XCPファームウェア版数をXCP 2044以降にアップデートしてから交換してください。
RTI番号	**RTIF2-130516-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	restoreconfig(8)、restorecodactivation(8)コマンドでデータをリストア中に showcodactivation (8)コマンドを実行すると、実行結果が表示できないことがあります。このとき、showcodactivation(8)コマンドが「codd internal error」でエラーとなります。
回避方法	restoreconfig(8)やrestorecodactivation(8)コマンドの実行が完了してから、showcodactivation (8)コマンドを実行すると、実行結果が表示できるようになります。

RTI番号	**RTIF2-130515-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	システム稼働中の状態で、以下の現象が発生することがあります。 1. Oracle Solaris のprtpiclコマンドが応答しなくなる。 2. prtpicl -v、prtdiag -vの表示データ（XCP版数など）が期待どおりに出力されない。 3. /var/adm/messagesに、「PICL snmpplugin: cannot fetch object value」のワーニングメッセージが出力される。 4. XSCFのCMDDプロセスダウンが発生し、XSCFがリセットを繰り返して使用できなくなる。このときシステムの運用は継続できます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] ■ 現象1が発生した場合 以下の手順で復旧します。 1. prtdiagコマンドを[Ctrl-C]で終了します。 2. 約30分放置して、XSCFでSNMPのタイムアウトを発生させます。 3. 制御ドメイン上でsvcadmコマンドを実行して、piclサービスを再起動させます。 ■ 現象2が発生した場合 再度コマンドを実行して、結果が表示された場合はシステムを継続して運用できます。結果が期待どおりに表示されない状態が続く場合は、XSCFが動作しているか確認します。 - XSCFが動作している場合は、rebootxscf(8)コマンドでXSCFをリセットします。 - XSCFが動作していない場合は、システムの入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）して復旧します。 ■ 現象3が発生した場合 一時的なワーニングメッセージであるため、システムを継続して運用できます。 ■ 現象4が発生した場合 システムの入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）して復旧します。
RTI番号	**RTIF2-130507-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ハードウェアRAID機能を使用中に停電が発生した場合、復電後にRAIDボリュームが認識できないことがあります。
回避方法	okプロンプトでactivate-volumeコマンドを実行し、ハードウェアRAIDボリュームを有効化してください。 手順の詳細は『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「14.2.11　ハードウェアRAIDボリュームを再有効化する」を参照してください。
RTI番号	**RTIF2-130417-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスに搭載されているXSCFがパニックした場合、マスタXSCFとマスタ以外のXSCFとの通信ができなくなることがあります。
回避方法	有効な回避策はありません。 [復旧方法] 事象が発生した場合、15分以上間をあけてから、rebootxscf -sでマスタXSCFをリセットしてください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130416-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	I/OドメインのPCIデバイスを削除（ldm rm-io）または追加（ldm add-io）した場合、I/Oドメイン起動時にハイパーバイザアボートが発生することがあります。
回避方法	I/OドメインのPCIデバイスを削除する場合は、削除対象のPCIデバイスと同一のルートコンプレックス配下（/pci@xxxxのxxxxが同じ）の全デバイスをいったん削除してから、必要なデバイスを追加しなおしてください。 または、同一ルートコンプレックス配下の複数のデバイスを、1つのI/Oドメインに割り当てないようにしてください。
RTI番号	**RTIF2-130415-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4/M10-4Sにおいて、ファームウェア版数がXCP 2031またはXCP 2032の場合、下記のOpenBoot PROM環境変数の初期値が、デフォルトと異なる値となっています。 XSCFシェルのsetpparparam(8)コマンドやOpenBoot PROMプロンプトからsetenvコマンドを使用して設定値を変更しても、値が元に戻ってしまいます。 auto-boot? false diag-switch? true fcode-debug? true local-mac-address? false
回避方法	有効な回避手段はありません。 XCP 2041版以上の版数にファームウェアアップデートしてから、OpenBoot PROM環境変数の値を設定しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-130410-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	オペレーションパネルから電源の投入／切断ができないことがあります。
回避方法	XSCFシェルから、電源を投入する場合はpoweron(8)コマンド、切断する場合はpoweroff(8)コマンドを実行してください。 [復旧方法] 事象が発生した場合は、poweroff -fコマンドを使用して、物理パーティション（PPAR）の電源を切断してください。
RTI番号	**RTIF2-130410-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数の物理パーティション（PPAR）で構成されているシステムで、1つ以上のPPARの電源が投入されている場合、または1つ以上のPPARが故障している場合に、poweron -aコマンドを実行すると、電源の投入に失敗します。
回避方法	-pオプションを指定してpoweron(8)コマンドを実行し、PPARごとに電源を投入してください。 [復旧方法] 事象が発生した場合は、電源の投入が途中で止まってしまったPPARに対して、poweroff -fコマンドを実行し、強制的に電源を切断してください。そのあと、poweron -pコマンドを実行し、PPARの電源を投入してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130410-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	以下のすべての条件を満たしたシステムでクロスバーボックスが故障した場合、クロスバーボックスが縮退し、動作が継続できないことがあります。 ■ クロスバーボックスが2台以上で構成されている。 ■ 複数のPPARで構成されている。 ■ 各物理パーティション（PPAR）が複数のCPUメモリユニット（CMUU/CMUL）で構成されている。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] poweron -pコマンドを実行して、クロスバーボックスの故障によって電源が切断されたPPARの電源を再度投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130410-007**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	電源を投入した直後の物理パーティション（PPAR）の電源を、poweroff -fコマンドを使用して強制的に切断すると、以降の電源の投入／切断ができなくなることがあります。
回避方法	PPARの電源を投入したあとは、okプロンプトが表示されるまで、poweroff -fコマンドを実行しないでください。 [復旧方法] PPARの電源の強制切断に失敗した場合は、入力電源を切断後、再投入（AC OFF/ON）してください。
RTI番号	**RTIF2-130329-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4Sでのファームウェアアップデート中に、マスタ筐体のALARM LEDが突然点灯して停止したままの状態となり、ファームウェアアップデートが完了しないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-130329-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックス2台以上の構成で、かつ、クロスバーボックスを使用しない物理パーティション（PPAR）構成の場合、オペレーションパネルから電源が切断できません。
回避方法	poweroff(8)コマンドを使用して電源を切断してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130329-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）のステータスがPowerOn（Oracle Solaris起動後、PowerOffが完了するまでの間）状態で入力電源を切断すると、次回入力電源を投入するときに、PPAR内のいずれかのSPARC M10-4Sで「SRAM serious error」が発生し、入力電源が投入できなくなります。
回避方法	入力電源を切断するときは事前にPPARの電源を切断して、切断が完了したことを確認してから実施してください。 [復旧方法] 不具合が発生してしまった場合は、以下の手段で復旧してください。 1. dumpconfig(8)コマンドで設定を保存します。 2. restoredefaults -c factoryコマンドでシステムを工場出荷状態に戻します。 3. 入力電源を切断したあと再投入（AC OFF/ON）し、XSCFまたはXSCFユニットのREADY LEDが点灯していることを確認します。 4. CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはマザーボードユニットを交換します。 5. restoreconfig(8)コマンドで設定を復元します。
RTI番号	**RTIF2-130319-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10-4/M10-4Sの入力電源を投入した直後に、まれに「DMA timeout error Hard detected」が検出されることがあります。「DMA timeout error Hard detected」が検出された状態で論理ドメインを起動するとCPUメモリユニット（下段）（CMUL）が縮退します。
回避方法	有効な回避方法はありません。 論理ドメインを起動する前に、入力電源を切断後、再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-005**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムで、物理パーティション（PPAR）の電源投入後のPOSTによる診断の処理中に、あるSPARC M10-4SでXSCFパニックが発生すると、PPARの電源投入処理が継続されずに電源が切断されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 各SPARC M10-4SのXSCFが再起動されているかどうかを確認してください。再起動されている場合は、PPARの電源を投入しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-130305-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sとクロスバーボックスで構成されたシステムで、すべての物理パーティション（PPAR）がそれぞれ1つのシステムボード（PSB）で構成されているとき、あるPPARの電源を投入すると、クロスバーボックスのクロスバーユニットの電源が投入抑止されず、クロスバーボックスの電源も投入されてしまいます。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130305-010**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	4台以上のSPARC M10-4Sが複数の物理パーティション（PPAR）で構成されているシステムで、poweron -aコマンドを使用して、すべてのPPARの電源を投入すると、ハイパーバイザアボートまたはOSパニックが発生することがあります。
回避方法	poweron -aコマンドを使用して、すべてのPPARの電源を同時に投入しないでください。-pオプションを使用して、PPAR単位で電源を投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-021**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCF起動直後、システムボード（PSB）が「Unmount」として認識されてしまい、addboard(8)コマンドやpoweron(8)コマンドに失敗することがあります。
回避方法	XSCF起動直後は30秒ほど待機するとともに、showboards(8)コマンドで対象のPSBが搭載されていることを確認してから、addboard(8)やpoweron(8)コマンドを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-130305-024**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	クロスバーボックスを含むシステムにおいて、物理パーティション（PPAR）の電源が投入された状態でクロスバーボックスの入力電源を切断後再投入すると、制御ドメインコンソールに以下のメッセージが出力され、PPARの電源処理が完了しないことがあります。 WARNING: Unable to connect to Domain Service providers
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] PPARの電源処理が中断した場合は、poweroff -fコマンドを使用して、PPARの電源を強制的に切断してください。 その後、rebootxscf -aコマンドを使用して、すべてのXSCFをリセットするか、すべてのSPARC M10-4S筐体の入力電源を切断したあと、再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130227-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	snapshotを採取する場合、-aオプションを指定すると、マスタXSCFの負荷が上昇して、「XSCF Kernel Panic」が発生することがあります。
回避方法	システム全体のsnapshotを採取する場合は、-aオプションではなく、-bオプションでSPARC M10-4SのBB-IDを指定して、1台ずつ採取してください。この作業をすべてのSPARC M10-4Sに対して実行してください。
RTI番号	**RTIF2-130219-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	電源連動グループの管理ファイルで設定できる「IPAddress」と「SlaveAddress」の値に、XSCFの引き継ぎIPアドレスを指定することできません。
回避方法	「IPAddress」と「SlaveAddress」の値には、マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFの、XSCF-LAN#0またはXSCF-LAN#1のIPアドレスをそれぞれ指定してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130219-005**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）内の部品で故障が発生すると、SNMP MIBのPPARの状態が更新されません。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-130219-008**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数の物理パーティション（PPAR）で構成されたシステムで、PPARの電源を投入しているときに、あるSPARC M10-4Sの入力電源を投入すると、入力電源の投入されたSPARC M10-4Sがマスタ XSCFで認識されないことがあります。
回避方法	PPARの電源を投入する前に、構成するすべてのクロスバーボックスやSPARC M10-4Sの入力電源を投入してから、PPARの電源を投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130215-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	ハードウェア初期診断で以下のエラーログによるシステムボード（PSB）異常が検出されたあと、PSBが縮退されずに物理パーティション（PPAR）のリセットを繰り返すことがあります。 Code: 40002000-003cff0000ff0000ff-02000e000000000000000000 FRU: /BB#x Msg: SB deconfigured (SB-SB access error) Code: 40002000-003cff0000ff0000ff-02000e010000000000000000 FRU: /BB#x Msg: SB deconfigured (not running)
回避方法	deleteboard(8)コマンドを使用して、異常が検出されたPSBをPPAR構成から切り離してください。
RTI番号	**RTIF2-130215-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setpcl(8)コマンドでpolicyをpsbに設定しても、異常発生時の縮退範囲がシステムボード単位とならずに、部品（FRU）単位となることがあります。
回避方法	deleteboard(8)コマンドを使用して、異常が検出されたPSBをPPAR構成から切り離してください。
RTI番号	**RTIF2-130212-001**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	setpparmode(8)コマンドで設定する省電力動作が「有効」の場合、 以下の問題が発生することがあります。 ■ 論理ドメインのハングアップ（ハートビート機能）を検出できないことがある ■ システム起動中（物理パーティション（PPAR）動作中）に、CPUコアリソースを削減した場合、PPARの電源が切断されることがある。
回避方法	setpparmode(8)コマンドで省電力動作を「無効」に設定してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130212-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solarisからldm add-spconfigコマンドを実行したあと、XSCFからshowdomainstatus(8)コマンドでドメインの状態を確認すると、制御ドメインを含めたすべてのドメインが「Host stopped」と表示されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 Oracle Solarisからldm list-domainコマンドを使用してドメイン状態を確認してください。
RTI番号	**RTIF2-130212-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	testsb(8)またはdiagxbu(8)コマンドで診断中のシステムボード（PSB）に対して、別セションでtestsb(8)コマンドを実行すると、診断対象のPSBが異常状態となり、PSBが使用できなくなることがあります。
回避方法	testsb(8)コマンドを実行する前に、showboards(8)コマンドを使用して、診断対象となるPSBのPWRが「n」であることと、Testが「Testing」でないことを確認してください。 PSBが使用できなくなってしまった場合は、システム全体の電源を切断後、再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-130130-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUメモリユニット（上段）（CMUU）が搭載されていないシステム構成でAC ONすると、CMUUに対する「Hardware access error」のエラーログが発生します。SPARC M10-4Sの増設や交換時も、同様の現象が発生します。
回避方法	CMUUが搭載されていないことにより登録されたエラーログのため、無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130109-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のシステムボード（PSB）で物理パーティション（PPAR）が構成されたシステムで、イベントログに「Console path is switched」が登録された場合、PPAR-IDに不当な値が表示されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-130109-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドを使用して、電源ユニット（PSU）を交換すると、エラーログに「Indispensable parts are not installed (PSU)」が登録されることがあります。
回避方法	このエラーログは、PSUが抜去されたことにより登録されたログです。無視してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130109-006**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	スタンバイ状態のXSCFが故障中または起動中に、電源連動機能の設定情報を変更した場合、スタンバイ状態のXSCFの起動が完了しても、変更した設定情報はスタンバイ状態のXSCFに反映されていないことがあります。 この状態でXSCFの切り替えが発生すると、切り替え後のマスタXSCFから、変更後の設定情報で電源連動ができないことがあります。
回避方法	電源連動機能を無効にしたあと、以下の手順で、電源連動機能を設定しなおしてください。 1. setremotepwrmgmt -c disableコマンドを実行し、電源連動機能を無効にします。 2. 管理ファイルを退避したあと、clearremotepwrmgmt(8)コマンドを使用して、設定情報を初期化します。 ■ スタンバイ状態のXSCFが起動中の場合は、起動が完了してからclearremotepwrmgmt(8)コマンドを実行します。 ■ スタンバイ状態のXSCFが故障中の場合は、replacefru(8)コマンドを使用して対象FRUを交換してから、clearremotepwrmgmt(8)コマンドを実行します。 3. スタンバイ状態のXSCFの起動が完了したら、退避した管理ファイルを元に設定情報を復元するために、setremotepwrmgmt -c configコマンドを実行します。 4. setremotepwrmgmt -c enableコマンドにより電源連動機能を有効にします。
RTI番号	**RTIF2-130109-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	すべての物理パーティション（PPAR）が停止している状態からPPARの電源を投入した場合、エラーログが登録されず、PPARの電源が投入できないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 すべてのSPARC M10システムの筐体で、入力電源を切断後、再投入してから、PPARの電源を投入しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-121219-002**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムの電源ケーブルを接続するとき、すべての電源ケーブルを4分以内で接続しないと、一部の筐体が認識されないことがあります。
回避方法	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムの場合は、すべての電源ケーブルを接続し終えるのに4分を超えないようにしてください。 認識されないSPARC M10-4Sの筐体がある場合は、再度、すべての筐体の電源ケーブルを抜き挿ししてください。
RTI番号	**RTIF2-121219-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	電源連動グループの電源投入／切断中は、showremotepwrmgmt(8)コマンドが以下のメッセージで異常終了することがあります。 Controller response timeout.
回避方法	再度、showremotepwrmgmt(8)コマンドを実行してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121219-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	部品の高温異常（High temperature）または吸気低温異常（Low temperature at air inlet）が登録されたとき、FRUで表示される2番目の故障部品（第二被疑部品）の情報が正しくないことがあります。
回避方法	表示される2番目の故障部品（第二被疑部品）の情報は無視してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドを使用した電源ユニット（PSU）の交換が、「Warning:005」で失敗することがあります。
回避方法	再度replacefru(8)コマンドを実行して、PSUを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	「Power-on failure」または「Power-off failure」のファン故障を表すエラーログが登録されたとき、故障対象のFRUとして誤った部品が表示されることがあります。
回避方法	「Power-on failure」または「Power-off failure」で、故障部品がファンのときは、以下の部品を交換してください。 ■ SPARC M10-1の場合 マザーボードユニット(MBU) ■ SPARC M10-4/M10-4Sの場合 PSUバックプレーンユニット
RTI番号	**RTIF2-121219-010**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	switchscf(8)コマンドを実行したとき、「XSCF hang-up is detected」のエラーログが登録されることがあります。
回避方法	このエラーログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-012**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドを使用して、SPARC M10-4Sの筐体を交換したとき、「internal error」が表示されて筐体の交換に失敗することがあります。
回避方法	replacefru(8)コマンドによりSPARC M10-4Sの筐体を交換する場合は、以下の手順で作業を実施してください。 1. replacefru(8)コマンド実行後に表示される 「Do you want to continue?[r:replace|c:cancel]」に対して、交換のため「r」 を入力します。 2. SPARC M10-4Sの筐体を交換し、筐体の入力電源を投入後、約15分間待ちます。 3. showlogs eventコマンドを実行し、イベントログを表示します。 4. 以下のどちらかの方法で交換作業を続けます。 ■ イベントログに「XSCF update is started」と表示された場合 「XCP update has been completed」のログが登録されるまで待ちます。「XCP update has been completed」が表示されたら、「Please select[f:finish]」に「f」を入力し、画面に従って交換作業を続けます。 ■ イベントログに「XSCF update is started」と表示されない場合 「Please select[f:finish]」 に 「f」 を入力し、画面に従って交換作業を続けます。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121219-013**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	XSCFが起動できない故障が発生した場合、エラーとなったSPARC M10-4Sの筐体に対するエラーログだけではなく、存在しない筐体に対してケーブル接続の異常に関するエラーログが登録されることがあります。
回避方法	存在しないSPARC M10-4Sの筐体に対して登録された、ケーブル接続の異常に関するエラーログは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-014**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	BB#00の故障で停止交換（入力電源を切断して交換）を実施すると、XSCFの設定情報が消去されてしまいます。
回避方法	BB#00の故障でSPARC M10-4Sの筐体を交換する場合は、replacefru(8)コマンドを実行して交換してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-015**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	initbb(8)コマンドでSPARC M10-4Sの筐体を減設した場合、減設した筐体の情報が完全に消去されずに残ってしまいます。
回避方法	SPARC M10-4Sを減設する場合は、停止減設（入力電源を切断して減設）を実施してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-016**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）の電源を投入中、電源を切断中、またはリセット中に、prtfru(8)コマンドを実行すると、「internal error」となることがあります。
回避方法	PPARの電源投入や電源切断、リセットが完了するのを待ってから、prtfru(8)コマンドを再度実行してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-017**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	BB#00またはBB#01でメモリ故障が発生してエラーログが登録されたあとに、SPARC M10-4Sの筐体の電源を切断すると、再度同じエラーログが登録されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121219-018**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	2台以上のSPARC M10-4Sが、複数の物理パーティション（PPAR）で構成されているシステムにおいて、以下のいずれかの事象によりマスタXSCFの切り替えが行われたあと、PPARの電源を投入すると、 「STICK does not start (CPU)」、 「STICK does not start (MBC)」、 または 「STICK count up error」のエラーログが登録され、CPUメモリユニット（CMUU/CMUL）が縮退される場合があります。 ■ ファームウェアアップデート実施 ■ XSCFの故障検出 ■ switchscf(8)コマンドの実行
回避方法	有効な回避方法はありません。 マスタXSCFの切り替えが行われたあと、PPARの電源を投入しないで、すべてのSPARC M10-4Sの入力電源を切断し、再投入してください。
RTI番号	**RTIF2-121219-019**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスに搭載されたPCIカードを挿入または抜去したとき、対象のPCIカードの番号（PCI#）とは異なる番号がログに表示されてしまいます。また、PCIボックスのPCIeスロットやPCIカードの故障で、「PCICARD failed」のエラーログが登録されたとき、対象のPCIカードの番号（PCI#）とは異なる番号がエラーログに表示されてしまいます。
回避方法	ログに表示されるPCI番号(PCI#)に、1を引いた番号で読み替えてください。
RTI番号	**RTIF2-121206-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ドメイン起動時に以下のエラーメッセージが出力されることがあります。 Msg: PCI Express link not active
回避方法	showhardconf(8)コマンドでPCI Express（PCIe）カードが認識できている場合は、このメッセージは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-121204-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ダイナミックリソース管理ソフトウェア（ServerView Resource Orchestrator）で監視対象サーバの登録に失敗することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 ダイナミックリソース管理ソフトウェアで監視対象サーバを登録しなおしてください。
RTI番号	**RTIF2-121204-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PRIMECLUSTERでノードが停止したときに、自動的にノードを切り替えることができません。
回避方法	有効な回避方法はありません。 PRIMECLUSTERに対して、ノードを手動で切り替えてください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121204-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	OpenBoot PROMのsetenvやnvramrc、Oracle Solarisのeepromコマンドやldm set-varコマンドで設定または変更したOpenBoot PROM環境変数は、システムの電源を再投入すると保持されないことがあります。
回避方法	OpenBoot PROM環境変数を更新したあとは、ldm add-configコマンドを実行して、ドメイン構成情報をXSCFに保存してください。
RTI番号	**RTIF2-121204-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFのsetpparmode(8)コマンドを使用してゲストドメインのオートブート機能を有効にしたあと、制御ドメインとゲストドメインを同時に起動すると、ゲストドメイン上で以下のエラーログが登録され、ゲストドメインのOracle Solarisが起動できないことがあります。 Code: 20000000-00ffff0000ff0000ff-0300000200000000000000000 Status: Notice Occurred: Nov 16 16:55:25.518 JST 2012 FRU: /UNSPECIFIED Msg: Boot process failed
回避方法	XSCFのsetpparmode(8)コマンドを使用してゲストドメインのオートブート機能を無効にしたあと、制御ドメインのOracle Solarisを起動してから、Oracle VM Server for SPARCのldm start-domainコマンドを使用してゲストドメインを起動してください。 [復旧方法] Oracle VM Server for SPARCのldm stop-domainコマンドを使用してゲストドメインを停止したあと、ldm start-domainコマンドを使用してゲストドメインを起動してください。
RTI番号	**RTIF2-121130-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	RCILによる電源連動設定を有効から無効に設定後、さらに有効に設定した場合、ETERNUS DX80/DX90/DX410/DX440/DX8100/DX8700 S2の電源連動が働かない場合があります。
回避方法	RCILによる電源連動設定を有効から無効に設定したあと、XSCFを再起動してください。

RTI番号	**RTIF2-121129-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFファームウェア動作中に、「System backup memory access error」というPSUバックプレーン（PSUBP）のエラーが誤検出され、エラーログに登録されることがあります。この誤検出が物理パーティション（PPAR）起動処理中に発生すると、PPARの起動に失敗する場合があります。また、ログ情報の採取中に発生すると、ログ情報の採取に失敗します。さらに、エラーの誤検出とともにPSUBPに故障マークがつく場合があります。 PSUBPに故障マークがつくと、PPARの起動に必要な資源が足りないため、PPARの起動が要求されたときに、PPARの起動に失敗したことを表すログがパワーログに登録されます。パワーログはshowlogs powerコマンドで表示できます。
回避方法	「説明」に記載したログを発見したら、showstatus(8)またはshowhardconf(8)コマンドを実行し、PSUBPに故障マークがついているかどうか確認します。 ■ PSUBPに故障マークがついていない場合 ハードウェアに問題は発生していないため、エラーログを無視して、そのまま運用を継続してください。 ■ PSUBPに故障マークがついている場合 以下の手順で故障マークをクリアしてください。 1. オペレーションパネルのモードスイッチをServiceモードに切り替えます。 2. 対象となるSPARC M10システムの筐体の電源を切断したあと再接続して、XSCFを再起動します。SPARC M10-4Sの場合はすべてのSPARC M10-4S筐体の電源を切断したあと再接続します。 3. XSCFが再起動したら、オペレーションパネルのモードスイッチは元の位置に戻します。 XSCFを再起動しても同じエラーが発生する場合は、誤検出ではなく、PSUBPのハードウェア故障である可能性があります。この場合は、保守作業員に依頼し、PSUBPを交換してください。
RTI番号	**RTIF2-121129-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはマザーボードユニット（MBU）を交換した場合、XSCFのユーザーアカウント情報が消去されることがあります。 XSCFユーザーアカウント情報を元に戻すには、dumpconfig(8)コマンドで退避しておいた設定情報を、restoreconfig(8)コマンドで復元する必要があります。
回避方法	交換実施後、dumpconfig(8)で退避しておいた設定情報をrestoreconfig(8)コマンドで復元するか、または、XSCFのユーザーアカウント情報を再設定してください。
RTI番号	**RTIF2-121129-004**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	restoredefaults(8)コマンドは以下の情報を初期化できません。設定情報がそのまま残ってしまいます。 ■ XSCFのタイムゾーン ■ HTTPSのサーバ証明
回避方法	有効な回避方法はありません。 settimezone(8)コマンド、sethttps(8)コマンド、setssh(8)コマンドで再設定してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121113-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setsmtp(8)コマンドでユーザー名に無効な値を設定したあと、テストメールを送信するためにsetemailreport(8)コマンドを実行すると、返信アドレス（Reply address）にメールが正しく送信されたように表示されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 テストメールが正しく送信されたように表示されますが、メールは送信されません。
RTI番号	**RTIF2-121113-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	setaudit deleteコマンドを実行し、viewaudit(8)コマンドで監査ログを表示すると、一部の監査ログが削除されていないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-121113-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF Webメニューを使わずに別画面や別タブにXSCF Web画面を表示すると、正常に表示されないことがあります。
回避方法	XSCF Webの画面表示操作はメニューツリーを使用してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFが起動中、プロセスダウン、パニックまたはwatchdogタイムアウトが発生し、XSCFがリセットする場合があります。
回避方法	XSCFが起動されていることを確認してください。 起動されていない場合は、物理パーティション（PPAR）の電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してください。 システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒以上待ってから投入してください。 システムの入力電源を切断後再投入しても、XSCFが起動されない場合は、CPUメモリユニット（下段）（CMU）またはマザーボードユニット（MBU）を交換してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFが動作中、プロセスダウン、パニックまたはwatchdogタイムアウトが発生し、XSCFがリセットしても再起動されないことがあります。
回避方法	XSCFが起動されていることを確認してください。 起動されていない場合は、物理パーティション（PPAR）の電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入（AC OFF/ON）してください。 システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒以上待ってから投入してください。 システムの入力電源を切断後再投入しても、XSCFが起動されない場合は、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）またはマザーボードユニット（MBU）を交換してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121113-011**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	showsnmp(8)コマンドを実行すると、以下のメッセージが表示され、snmpデーモンが終了していることがあります。 Agent Status: Disabled
回避方法	再度、showsnmp(8)コマンドを実行し、snmpデーモンが再起動されているか確認してください。「Agent Status: Disabled」のままであれば、setsnmp enableコマンドを実行し、snmpデーモンを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-014**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCF起動中に、「/etc/redhat-release not found」のエラーメッセージが表示されます。
回避方法	このメッセージは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-018**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	replacefru(8)コマンドでFRUを交換したとき、構成変更を表すメッセージ「configuration changed（...）」が複数回、イベントログに登録されることがあります。
回避方法	2回目以降のメッセージは無視してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-019**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	電源スケジュールにより物理パーティション（PPAR）の電源を切断したとき、パワーログに表示される要因（Cause）が「-」と表示されることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-121113-021**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XSCFボードにある時計の故障で、時刻が正しく読めなかった場合、時計の故障を表すエラーがエラーログに記録されないことがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 poweron(8)コマンドを実行し、以下のメッセージが表示された場合、XSCFボードの時計が故障しています。XSCFボードを交換してください。 Poweron canceled due to invalid system date and time.
RTI番号	**RTIF2-121113-022**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	オペレーションパネルが故障または接続されていない場合、XSCFを起動できません。
回避方法	オペレーションパネルを接続してください。故障している場合は交換してください。

表 3-40　XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-121113-023** **RTIF2-121113-028**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ハイパーバイザ動作中にCPUの故障が発生した場合、物理パーティション（PPAR）のリセットが複数回行われ、PPARの再起動に時間がかかることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-121113-025**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	CPUの故障が発生したとき、Oracle Solaris上で、縮退やオフラインを表すエラーメッセージがSyslogに出力されないことがあります。
回避方法	showlogs(8)コマンドを使用し、XSCF上で故障状態を確認してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-027**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ファームウェアアップデート後、XSCFを再起動しない状態で、XSCF WebによりXCPをアップロードすると、XCPのアップロードが失敗し、XSCF Webがセションタイムアウトします。
回避方法	ファームウェアアップデート後、続けてXSCF WebでXCPをアップロードする場合は、XSCFを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-121113-031**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle VM Server for SPARCでPCIカードを割り当てたI/Oドメインを作成後、I/Oドメインの電源を投入し、okプロンプトの状態で停止させた場合、XSCFのshowhardconf(8)コマンドでPCIカードの構成情報が表示されないことがあります。
回避方法	Oracle VM Server for SPARCでPCIカードを割り当てた論理ドメインのOracle Solarisを起動してください。

Oracle Solarisに関する不具合と回避方法

ここでは、Oracle Solarisに関する不具合と回避方法をバージョンごとに記載します。

すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法

サポートされているすべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 3-41　すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法

Bug	**25028104**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成によりルートコンプレックスが動的に追加／削除された場合、追加／削除したルートコンプレックス配下のPCIeエンドポイントデバイスが、XSCFのshowpparinfo(8)コマンドで表示されるPCIeエンドポイントデバイス構成情報に反映されないことがあります。
回避方法	回避方法はありません。 [復旧方法] 制御ドメインでsvcadmコマンドを実行し、ldoms/ldmdサービスを再起動してください。 # svcadm restart ldoms/ldmd
Bug	**24718083**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインが稼働中にXSCFを再起動した場合、power capping機能が動作しなくなります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] svcadm コマンドを実行し、ldoms/ldmdサービスを再起動してください。 # svcadm restart ldmd

表 3-41　すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**23025823**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	addboardコマンドがdeleteboardコマンドで縮退されたI/Oデバイスを元に戻せません。 この現象は以下のすべての条件に当てはまる場合に発生します。 - 2つ以上のルートコンプレックスを所有しているルートドメインが存在する。 - deleteboardコマンドがルートドメインからルートコンプレックスを削除する。 - 削除されたルートコンプレックスのうち少なくとも1つのエンドポイントが別のドメインに割り当てられている、またはどのドメインにも割り当てられていない。 - addboard コマンドがルートコンプレックスを復元する。 [エラーメッセージの例] ---------- XSCF> **addboard -v -y -c configure -m bind=resource -p 0 00-0** PSB#00-0 will be configured into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :**y** Start connecting PSB to PPAR. [3600sec] 0./ (Omitted) Processing of the incoming DR request by the LDoms Manager is pending Incoming DR request is being processed by the LDoms ManagerDR sequence started (sequence#=2, message#=6) ...../ Restoring primary failed, it failed in the allocation of PCIE0 60../ Restoring primary failed, it failed in the allocation of PCIE1 .- Restoring primary failed, it failed in the allocation of PCIE2 ..¥ Restoring primary succeeded, PCIE3 was assigned 90| Restoring ioroot failed, it failed in the allocation of PCIE4 ..| Restoring ioroot failed, it failed in the allocation of PCIE5 ./ Restoring primary failed, it failed in the allocation of PCIE6 .¥ Restoring primary failed, it failed in the allocation of PCIE7 (Omitted) Restoring primary succeeded, 15 core(s) were assigned .| Restoring guest1 succeeded, 34896609280 byte memory were assigned DR sequence finished (sequence#=2, message#=6) end PSB#00-0 could not be configured into PPAR-ID 0 due to operating system or Logical Domains Manager error. XSCF> ---------- さらに、いったんこの現象が発生すると 再度addboard を試みても失敗し、ldmdデーモンがコアダンプすることがあります。
回避方法	-m bind=noneオプションを付けてaddboardコマンドを実行し、I/O構成を手動で復旧してください。

表 3-41　すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	－
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	10 Gigabit Ethernetカード（SP1X7HF1F）が搭載された論理ドメインで、OpenBoot PROM環境変数diag-switch?をtrueに設定していると、コンソールに以下のワーニングメッセージが出力されるとともに、エラーログに「Msg: Device error (FCode informed error)」が記録されます。 WARNING: /pci@X,XXXXXX: FCODE mapin doesn't match decoded register type; また、showstatus(8)コマンドを実行すると、該当するPCIカードが搭載されたFRUに対して「Degraded」と表示されることがあります。
回避方法	これらすべての出力は無視してください。 これらの出力を回避する場合は、okプロンプトで以下のコマンドを実行し、OpenBoot PROM環境変数diag-switch?をfalseに設定してください。 setenv diag-switch? false
Bug	－
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	デュアルチャネル10G FCoEカード（SP1X7FBR2F/SP1X7FBS2F/7101683（7101684）+7101687（7101688））を搭載したシステムで物理パーティションの動的再構成（DR）を行うと、emlxsドライバ処理においてパニックが発生することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.2.8.0以降、およびOracle Solaris 10 1/13以降にしてください。 該当するカードが搭載されたシステムでは、物理パーティションの動的再構成（DR）は使用しないで、非活性状態で構成変更を行ってください。
Bug	－
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	Dual Port Gigabit Ethernetカード（MMF）（SP1X7GD1F/7100482（7100481））を搭載したシステムで物理パーティションの動的再構成（DR）を行うと、通信できなくなることがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。 該当するカードが搭載されたシステムでは、物理パーティションの動的再構成（DR）は使用しないで、非活性状態で構成変更を行ってください。
Bug	－
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.1.1.1がインストールされている場合、ldoms/ldmdサービスのログ （/var/svc/log/ldoms-ldmd:default.log）に以下のようなメッセージが出力されることがあります。 [メッセージ例] Get Device ID command failed: Unknown (0x7E) ERROR: Cannot connect to BMC
回避方法	有効な回避方法はありません。 このメッセージはシステム動作に影響ありませんので無視してください。

表 3-41　すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	−
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	whole-core制約（コア全体の制約）付き論理ドメインとwhole-core制約付きではない論理ドメインが混在する物理パーティションで、物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）によりビルディングブロックを交換した場合、whole-core制約付き論理ドメインのCPU数およびメモリサイズが正しく復旧されないことがあります。 論理ドメインのwhole-core制約はldm list-domainコマンドで確認できます。以下の例では、論理ドメインdomain-Aにwhole-core制約が設定されており、論理ドメインdomain-Bにはwhole-core制約が設定されていません。 primary# **ldm list-domain -o resmgmt** NAME domain-A CONSTRAINT 　cpu=whole-core 　max-cores=unlimited ---------- NAME domain-B CONSTRAINT
回避方法	物理パーティション内のすべての論理ドメインにwhole-core制約を設定するか、whole-core制約を設定しないかに統一してください。 whole-core制約の設定方法については『Oracle VM Server for SPARC 3.4 管理ガイド』を参照してください。 [復旧方法] ldmコマンドを実行して、該当ドメインのリソースを手動で復旧してください。
Bug	−
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S**
説明	SPARC M12システム上でSunVTS 7.0 ps19のテストを開始すると、エラーで終了することがあります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-41　すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**27112303**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.1.0.1以降がインストールされている環境において、以下の条件を満たす場合、物理パーティションの省電力動作を「elastic」に設定してもCPUの周波数が下がらない場合があります。 1) 物理パーティションの省電力動作を「elastic」に設定している場合 かつ 2) XSCFのdeleteboard(8)コマンドまたはaddboard(8)コマンドを使用して、物理パーティションの動的再構成を実行した場合
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] XSCFのsetpparmode(8)コマンドで省電力動作を「disabled」に設定したあと、再度、省電力動作を「elastic」に設定してください。 [実行例] XSCF> **setpparmode -p 0 -y -m powermgmt_policy=disabled** XSCF> **setpparmode -p 0 -y -m powermgmt_policy=elastic**

Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法

Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法

Bug	**26822709** **26934364**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにSRU11.3.8.7.0(Oracle VM Server for SPARC 3.4)以降が適用されている環境において、XSCFのdeleteboard(8)コマンドが異常終了し、物理パーティションの動的再構成に失敗することがあります。 本事象は以下の条件に合致した場合に発生することがあります。 1) メモリ故障が発生している(*1)、かつ 2) PPAR DRポリシーを "ratio" または、"auto"に設定している(*2)場合 または、 1) hvdump-reboot=offを設定している(*3)、かつ 2) XSCFのreset xirコマンドまたはハードウェア異常によって、物理パーティションがリセットされた場合、かつ 3) PPAR DRポリシーを "ratio" または、"auto"に設定している(*2)場合 *1: メモリ故障の確認方法 primary# **ldm list-devices -a -S memory** 出力結果において、STATUSの欄が「fail」と表示されていた場合、PA（物理アドレス）からSIZE（サイズ）分のメモリ領域が縮退していることが判断できます。 *2: PPAR DRポリシーの確認方法 primary# **svccfg -s ldmd listprop ldmd/fj_ppar_dr_policy** ldmd/fj_ppar_dr_policy astring auto 上記出力例では、"auto"に設定されていることがわかります。 *3: hvdump-rebootの確認方法 primary# **ldm list-hvdump** hvdump=on hvdump-reboot=off 上記出力例では、"off"に設定されていることがわかります。
回避方法	以下の手順に従って、PPAR DRポリシーを"targeted"に変更してください。 primary# **svcadm disable ldmd** primary# **svccfg -s ldmd setprop ldmd/fj_ppar_dr_policy=targeted** primary# **svcadm refresh ldmd** primary# **svcadm enable ldmd** [復旧方法] XSCFのpoweroff(8)、poweron(8)コマンドを使って、物理パーティションを再起動してください。 物理パーティションが0の場合 XSCF> **poweroff -y -p 0** XSCF> **poweron -y -p 0**

Bug	**26822709** **26934364**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARCM10-4S**
説明	制御ドメインにSRU11.3.2.4.0（Oracle VM Server for SPARC 3.3）以降が適用されている環境において、Oracle Solarisのldm remove-mem コマンドに-gオプションを指定したメモリ操作が失敗することがあります。 本事象は以下の条件に合致した場合に発生する場合があります。 1) メモリ故障が発生している(*1)場合、 　または、 1) hvdump-reboot=offを設定している(*2)場合、かつ 2) XSCFのreset(8)コマンドにxirを指定して物理パーティションをリセットした場合、 　または、 　ハードウェア異常により物理パーティションがリセットされた場合 *1: メモリ故障の確認方法 　primary# **ldm list-devices -a -S memory** 　出力結果において、STATUSの欄が「fail」と表示されていた場合、PA（物理アドレス）からSIZE（サイズ）分のメモリ領域が縮退していることがわかります。 *2: hvdump-rebootの確認方法 　primary# **ldm list-hvdump** 　hvdump=on 　hvdump-reboot=off 　上記出力例では、"off"に設定されていることがわかります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
Bug	**26822709** **26934364**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARCM10-4S**
説明	制御ドメインにSRU11.3.2.4.0（Oracle VM Server for SPARC 3.3）以降が適用されている環境において、Oracle Solarisのldm list-rsrc-groupコマンドを使用したメモリ量の情報が誤った値で表示される場合があります。 本事象は以下の条件に合致した場合に発生する場合があります。 1) メモリ故障が発生している(*1)場合、 　または、 1) hvdump-reboot=offを設定している(*2)場合、かつ 2) XSCFのreset(8)コマンドにxirを指定して物理パーティションをリセットした場合、 　または、 　ハードウェア異常により物理パーティションがリセットされた場合 *1: メモリ故障の確認方法 　primary# **ldm list-devices -a -S memory** 　出力結果において、STATUSの欄が「fail」と表示されていた場合、PA（物理アドレス）からSIZE（サイズ）分のメモリ領域が縮退していることが判断できます。 *2: hvdump-rebootの確認方法 　primary# **ldm list-hvdump** 　hvdump=on 　hvdump-reboot=off 　上記出力例では、"off"に設定されていることがわかります。
回避方法	有効な回避方法はありません。

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**16312511**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	ルートドメインにixgbeドライバの動作する10Gigabit EthernetカードまたはSPARC M12-2Sのオンボード LANを割り当ててSR-IOVを構成した環境において、物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能によりシステムボードを削除した場合、システムボードの削除失敗、仮想機能（VF）の通信停止、およびルートドメインのパニックなどが発生することがあります。
回避方法	上記のSR-IOV構成でのPPAR DRはできません。仮想ネットワーク（vnet）の構成でご利用ください。
Bug	**24567071**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S**
説明	以下の手順で、動的 PCIeバスの割り当てとPCIeエンドポイントの動的再構成機能を実行した場合に、SPARC M12のオンボード ixgbe 2ポートが 1ポートしか認識されなくなります。 1. 動的 PCIeバスの割り当て機能を使用して、オンボードixgbe 2ポートが接続されているPCIeバスをルートドメインに割り当てる。 2. PCIeエンドポイントの動的再構成機能を使用して、手順1で割り当てたPCIeバス配下のオンボードixgbe 2ポートをルートドメインから削除する。 3. PCIeエンドポイントの動的再構成機能を使用して、手順2で削除したixgbe 2ポートをI/Oドメインに割り当てる。 4. PCIeエンドポイントの動的再構成機能を使用して、手順3で追加したixgbe 2ポートを I/Oドメインから削除する。 5. PCIeエンドポイントの動的再構成機能を使用して、手順4で削除したixgbe 2ポートをルートドメインに戻す。
回避方法	これは、SRU11.3.17.5.0 で修正されました。SRU11.3.17.5.0以降を制御ドメインおよびルートドメインに適用してください。 [復旧方法] 動的 PCIe バスの割り当て機能を使用して、ルートドメインからPCIeバスを削除したあと、再度ルートドメインにPCIeバスを割り当てます。
Bug	**24754492**
対象モデル	**SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の条件を満たす場合、ldm shrink-socket コマンドを実行して論理ドメインからメモリを削除すると、論理ドメインがパニックする、または、ldmdデーモンがコアダンプすることがあります。 ■ 論理ドメインで Oracle Solarisが稼働している場合。かつ、 ■ 論理ドメインに同じCPUソケット上の複数のメモリブロックが割り当てられている場合。 CPUソケットごとのメモリ割り当ては、ldm list-socketコマンドで確認できます。 以下の例では、論理ドメイン domain-Aに CPUソケット#0の2つのメモリブロックが割り当てられています。 `# ldm list-socket -o memory domain-A` MEMORY PA　SIZE　SOCKET_ID　BOUND 0x7e0450000000　16G　0　domain-A 0x7e08d0000000　1536M　0　domain-A
回避方法	この問題は、SRU11.3.14.6.0で修正されました。 ldm shrink-socket コマンドの代わりに ldm remove-memoryコマンドを使用して、論理ドメインからメモリを削除してください。

Bug	**24973255**
対象モデル	**SPARC M12-2、SPARC M12-2S**
説明	Oracle Solaris カーネルゾーンに以下の設定を実施しているにもかかわらず、SPARC M12システムからSPARC M10システムへのcpu_arch= sparc64-classを設定しているOracle Solaris カーネルゾーンのウォーム／ライブマイグレーションが失敗する場合があります。 /etc/system ファイル ---------- set enable_1ghz_stick = 1 set uhrt_enable=0x0 ---------- /etc/system ファイルの設定については、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「8.2.3　Oracle Solarisカーネルゾーンの留意事項」を参照してください。 このバグは、Oracle SolarisカーネルゾーンのOSが Oracle Solaris 11.3 SRU11.3.15.4.0 または Oracle Solaris 11.3 SRU11.3.16.3.0 の場合に発生します。
回避方法	この問題は、SRU11.3.17.5.0 で修正されました。ウォーム／ライブマイグレーションを実施するOracle Solaris カーネルゾーンにSRU11.3.17.5.0を適用してください。
Bug	**25262938** **25954620**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S**
説明	nvmeadmコマンドまたはfwupdateコマンドを実行すると以下のメッセージが表示され、コマンド実行が失敗することがあります。 [表示例] # nvmeadm ERROR: Platform not supported # fwupdate ERROR: Platform not supported
回避方法	以下の回避方法を行ってください。 1. /etc/ssm/hmp 配下の構成情報ファイルを削除します。 　　# rm /etc/ssm/hmp/* 2. nvmeadmまたはfwupdateを実行します。 　　# nvmeadm 　　または、 　　# fwupdate 　/etc/ssm/hmp配下に構成情報ファイルが自動作成されます。 3. 下記の構成情報ファイルを作成します。 　テキストエディタで下記の2つのファイルを作成してください。 　　host_profile.xml 　　platforms.json ■ host_profile.xmlの作成 # cat /tmp/host_profile.xml <?xml version="1.0" encoding="utf-8"?> <hmp_profile schemaVersion="1"> 　　<control>

```
        <!-- Time in seconds from Epoch. -->
        <timestamp>1438633604</timestamp>

        <!-- Minimum version of HMP supported -->
        <hmp_min_ver>2.3.2</hmp_min_ver>

        <!-- ilom, host, patch, other -->
        <origin>ILOM</origin>

        <supported_platforms>SPARC M12-1</supported_platforms>
        <supported_platforms>SPARC  M12-2</supported_platforms>
        <supported_platforms>SPARC  M12-2S</supported_platforms>
    </control>

    <tool_support>
        <element>

            <platform_name>SPARC M12-1</platform_name>
            <platform_name>SPARC  M12-2</platform_name>
            <platform_name>SPARC  M12-2S</platform_name>
            <utility_property>
                <name>ALL</name>
                <supported>NO</supported>
                <add_runtime_mode>DEFAULT</add_runtime_mode>
            </utility_property>
            <utility_property>
                <name>FWUPDATE</name>
                <supported>YES</supported>
                <add_runtime_mode>DEFAULT</add_runtime_mode>
            </utility_property>
            <utility_property>
                <name>NVMEADM</name>
                <supported>YES</supported>
                <add_runtime_mode>DEFAULT</add_runtime_mode>
            </utility_property>
        </element>
    </tool_support>
    <platform_data>
    {
        "version": "1.0.0.0",
        "platforms": {
            "aliases": {
                "SPARC  M12-1": "undefined",
                "SPARC  M12-2": "undefined",
                "SPARC  M12-2S": "undefined"
            },
            "hosts": {
                "undefined": {
                    "internal_hbas": {
                        "1000:0050:1000:3060":
                        {
                            "backplanes": [ "internal_4_square" ],
```

```
                                        "nac_name_format": "/SYS/SASBP/HDD%d"
                                    }
                                }
                            }
                        }
                    }
                }
                </platform_data>
            </hmp_profile>
```

■ platforms.jsonの作成

```
# cat /tmp/platforms.json
    {
        "version": "1.0.0.0",
        "platforms": {
            "aliases": {
                "SPARC M12-1": "undefined",
                "SPARC M12-2": "undefined",
                "SPARC M12-2S": "undefined"
            },
            "hosts": {
                "undefined": {
                    "internal_hbas": {
                        "1000:0050:1000:3060":
                        {
                            "backplanes": [ "internal_4_square" ],
                            "nac_name_format": "/SYS/SASBP/HDD%d"
                        }
                    }
                }
            }
        }
    }
```

4. 構成情報ファイルの入れ替えを行います。

```
# rm /etc/ssm/hmp/host_profile.xml
# rm /etc/ssm/hmp/platforms.json
# cp /tmp/host_profile.xml  /etc/ssm/hmp/host_profile.xml
# cp /tmp/platforms.json /etc/ssm/hmp/platforms.json
```

5. 再度、fwupdate、または、nvmeadmコマンドを実行してください。
   エラーメッセージが表示されず、正常にコマンドが実行されるようになります。

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**24819902**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにSRU11.3.8.7.0（Oracle VM Server for SPARC 3.4）以降が適用されていると、少なくとも1つ以上の論理ドメインが別の論理ドメインと共有しているコアをバインドしている場合に、deleteboardコマンドが適切に動作しないことがあります。これは、Oracle VM Server for SPARCが削除すべきコア数を誤って計算するためです。 [例] ■ deleteboard -m unbind=resourceコマンドの実行が成功しますが、必要以上にコアが削除されます。 ■ Oracle VM Server for SPARC 3.3では、deleteboard -m unbind=resourceコマンドの実行が成功する場合と同じコアの割り当てであっても、deleteboard -m unbind=resourceコマンドの実行が失敗します。 ■ 残りのシステムボードに十分な未割り当てのコアがあるにもかかわらず、deleteboard -m unbind=noneコマンドの実行が失敗します。
回避方法	次の(1)または(2)を適用してください。 (1) whole-core制約（コア全体の制約）付きで仮想CPUを割り当ててください。 (2) PPAR DRポリシーを "targeted" に変更してください。 # svcadm disable ldmd # svccfg -s ldmd setprop ldmd/fj_ppar_dr_policy=targeted # svcadm refresh ldmd # svcadm enable ldmd

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**20882700**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成を実施した場合、またはldm add-io/remove-ioコマンドを使用してリソースを動的に追加／削除した場合、リソースが追加／削除されたことを示すメッセージがコンソールに出力されることがあります。 [例1] SUNW-MSG-ID: FMD-8000-CV, TYPE: Alert, VER: 1, SEVERITY: Minor EVENT-TIME: Mon May 11 20:04:48 JST 2015 PLATFORM: ORCL,SPARC64-X, CSN: 2081232009, HOSTNAME: 4S-408-D0 SOURCE: software-diagnosis, REV: 0.1 EVENT-ID: 76d8e4f6-d621-4ede-a86e- 93abcdc908a6 DESC: FRU '/SYS//BB0/CMUU/CMP1/ MEM17A' has been removed from the system. ... [例2] SUNW-MSG-ID: FMD-8000-A0, TYPE: Alert, VER: 1, SEVERITY: Minor EVENT-TIME: Thu May 14 15:50:31 JST 2015 PLATFORM: unknown, CSN: unknown, HOSTNAME: iodom0 SOURCE: software-diagnosis, REV: 0.1 EVENT-ID: 1f8d1ae8-9097-4204-b5d6-d605aac28390 DESC: FRU '/SYS/BB#1-PCI#6' has been added to the system. ...
回避方法	物理パーティションの動的再構成を実施する前、またはldm add-io/remove-ioコマンドを使用してリソースを動的に追加／削除する前に、Oracle Solaris 11.3をインストールしているすべての論理ドメインの/usr/lib/fm/fmd/plugins/fru-monitor.confファイルに以下の設定を追加したあと、論理ドメインを再起動してください。 setprop fmon_alert_enable "false"

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**20950622**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ルートドメインがOracle Solaris 11.3以降の場合、以下の手順で作成されたI/Oドメインを起動／再起動すると、OpenBoot PROMがアボートしI/Oドメインが起動／再起動できなくなります。 [作成パターン1] 1. PCI hotplug機能（PHP）を使用して、PCIボックスをルートドメインに追加します。 2. そのPCIボックスに、PHPを使用して2枚のPCIカードを追加します。 3. それぞれのPCIカードの物理機能（PF）から仮想機能（VF）を動的に作成します。 4. I/Oドメインが起動した状態で、作成したVFを動的にI/Oドメインに割り当てると、I/Oドメイン再起動時にOpenBoot PROMがアボートします。 または 4. I/Oドメインを停止した状態で、作成したVFを静的にI/Oドメインに割り当てると、I/Oドメイン起動時にOpenBoot PROMがアボートします。 [作成パターン2] 1. 動的 PCIeバスの割り当てを使用して、PCIeバスをルートドメインに追加します。 2. そのルートドメインに、PHPを使用して2枚のPCIカードを同じPCIeバス配下に追加します。 3. I/Oドメインが起動した状態で、それぞれのPCIカードを動的にI/Oドメインに割り当てると、I/Oドメイン再起動時にOpenBoot PROMがアボートします。 または 3. I/Oドメインが停止した状態で、それぞれのPCIカードを静的にI/Oドメインに割り当てると、I/Oドメイン起動時にOpenBoot PROMがアボートします。 手順2のあとに、それぞれのPCIカードの物理機能（PF）から仮想機能（VF）を動的に作成し、作成したVFをI/Oドメインに割り当てた場合にも同じ現象が発生します。 [作成パターン3] 1. 同じPCIeバス配下に2枚のPCIカードを搭載した状態で、動的PCIeバスの割り当てを使用して、PCIeバスをルートドメインに追加します。 2. I/Oドメインが起動した状態で、それぞれのPCIカードをI/Oドメインに動的に割り当てると、I/Oドメイン再起動時に、OpenBoot PROMがアボートします。I/Oドメインが停止した状態で、それぞれのPCIカードをI/Oドメインに静的に割り当てると、I/Oドメイン起動時にOpenBoot PROMがアボートします。 手順1のあとに、それぞれのPCIカードの物理機能（PF）から仮想機能（VF）を動的に作成し、作成したVFをI/Oドメインに割り当てると、同じ現象が起こります。
回避方法	OpenBoot PROMのアボートを回避するためには、I/Oドメインを起動／再起動する前に、I/Oドメインに割り当てられているVFおよびPCIカードをldm remove-ioコマンドで削除してください。I/Oドメインを起動したあとに、ldm add-ioコマンドで再度VFおよびPCIカードを動的に割り当ててください。
Bug	**21654442**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	仮想SCSI Host Bus Adapter機能を使用した場合、ルートドメインまたはI/Oドメインにおいて、以下のようなワーニングメッセージが出力されることがあります。 [例] vsan: WARNING: vsan_walk_match_func: iport-dip(40010ef2fd8): dip(40010ef29b8): prop(class) not found
回避方法	これは、SRU11.3.7.5.0で修正されました。 このメッセージは、システム動作に影響ありませんので無視してください。

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**21849217**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.14.5.0 以降、またはOracle Solaris 11.3以降の場合、fwupdateコマンドを実行すると、以下のエラーメッセージが出力され、コマンドが異常終了することがあります。 ERROR: Could not identify host type
回避方法	/etc/ssm/hmp配下のすべてのファイルを削除したあとに、fwupdateコマンドを実行してください。 # cd /etc/ssm/hmp # rm -f * このとき、/etc/ssm/hmpディレクトリは削除しないでください。 また、fwupdateコマンド実行後、/etc/ssm/hmp配下には新たにファイルが作成されます。これらのファイルは削除しないでください。

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**21779989**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたシステムで、Oracle VM Server for SPARC 3.3でサポートされたldm list-hbaコマンドを実行した場合、PCIボックスのSLOT4以降のデバイスエイリアスが誤って表示されます。 [例] # **ldm list-hba -l -t -d primary** NAME　　VSAN ----　　---- /SYS/MBU/SASHBA/HBA0/PORTf [/pci@8000/pci@4/pci@0/pci@0/scsi@0/iport@f] 　: /SYS/PCI1/SLOT2/HBA0/PORT0/0/f 　　SLOT4が正しい [/pci@8100/pci@4/pci@0/pci@1/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@10/pci@0/pci@0/LSI,sas@0/iport@f] 　init-port w500605b0045c8a90 　Transport Protocol SAS /pci@8100/pci@4/pci@0/pci@1/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@10/pci@0/pci@0/LSI,sas@0/iport@f/smp@w50080e52b93fd03f 　tport w50080e52b93fd03f c31t50000394281BBA1Ad0s0 　tport w50000394281bba1a 　lun 0 /pci@8100/pci@4/pci@0/pci@1/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@10/pci@0/pci@0/LSI,sas@0/iport@f/enclosure@w50080e52b93fd03d,0 　tport w50080e52b93fd03d 　lun 0 　:
回避方法	これは、SRU11.3.4.5.0で修正されました。 SRU11.3.4.5.0を適用したあとにも問題が発生する場合があります。その場合は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「10.12　論理ドメインの構成情報をXMLファイルに保存する／復元する」の手順に従い、論理ドメインの構成情報を保存してから、復元してください。 [代替方法] ldm add-vsan等のvHBA関連のコマンドを実行する場合は、デバイスエイリアスの代わりにデバイスパスを指定してください。 [例] **# ldm add-vsan /pci@8100/pci@4/pci@0/pci@1/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@10/pci@0/pci@0/LSI,sas@0/iport@f vsan0 ldom1**
Bug	－
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	fwupdateコマンドを実行すると、以下のメッセージが出力される場合があります。 Get Device ID command failed: Unknown (0x7E) No metadata provided, so version verification can not be completed
回避方法	このエラーメッセージは、コマンドの動作には影響ありませんので、無視してください。

Bug	**20646928**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	以下の環境で、システムボリュームが配置されているシステムボードに対して、物理パーティションの動的再構成機能による動的削除を行った場合、システムボードの削除処理が失敗することがあります。 [発生条件] 1) 複数のディスクを使用して、システムボリュームのZFSミラーを作成する場合、かつ 2) ミラー先、ミラー元のディスクを異なるシステムボードに配置している場合、かつ 3) システムボリュームが配置されているシステムボードの動的削除を行った場合 [出力メッセージ例] XSCF> **deleteboard -c disconnect -m unbind=resource 00-0** PSB#00-0 will be unconfigured from PPAR immediately. Continue?[y|n] :**y** All domains are temporarily suspended, proceed?[y|n] :**y** Start unconfigure preparation of PSB. [1200sec] 0end Unconfigure preparation of PSB has completed. Start unconfiguring PSB from PPAR. [7200sec] 0....¥ The removal of PCIE0 from the domain primary failed. Error message from svc:/ldoms/agents in domain primary: ERROR: devices or resources are busy. end PSB#00-0 could not be unconfigured from PPAR-ID 0 due to operating system or Logical Domains Manager error.
回避方法	これは、SRU11.3.5.6.0 で修正されました。
Bug	**25473170**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris 11.2 SRU8.4 以降で、qlcnicドライバが動作するデュアル10Gbps FCoEカードのネットワークインターフェースを非活性化したあと、再度、活性化した場合（*1）、該当インターフェースを使用した通信中に以下のようなメッセージを表示してパニックする場合があります。 panic[cpux]/thread=xxxxxxxxxxx: Fatal error has occured in: PCIe fabric.(0x40)(0x41) *1: デュアル10Gbps FCoEカードを使用する、以下の場合が該当します。 - 構成変更のため ipadm delete-ip または ifconfig unplumbコマンドでインターフェースを非活性化し、再び ipadm create-ip または ifconfig plumbコマンドで活性化した場合 - 物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能を使用して、FCoEインターフェースが割り当てられている論理ドメインが、一時停止（suspend）、再開（resume）したあとも継続して使用する場合 - PRIMECLUSTER Global Link（NIC切替方式）で、冗長化したNICの切り替え、切り戻しが行われた場合
回避方法	以下の手順を実施してください。 1. /kernel/drv/qlcnic.conf ファイルを /etc/driver/drv ディレクトリにコピーします。 2. コピーしたファイルに "enable_multi_rds_sets = 0;" の行を追加します。 3. OSを再起動します。

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	**25976819**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.3以降がインストールされている環境において、故障CPUの自動交替後、交替したCPUを論理ドメインが認識しない場合があります。
回避方法	これは、SRU11.3.23.5.0で修正されました。 [復旧方法] 問題が発生した論理ドメインを再起動してください。
Bug	**26052693**
対象モデル	**SPARC M12-2S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.4.0.3（SRU11.3.18.6.0）以降がインストールされている環境において、XSCFのdeleteboard(8)コマンドで物理パーティションの動的再構成をしたあと、論理ドメインを再起動すると、論理ドメインがパニックを繰り返す場合があります。 [パニックメッセージ例] panic[cpu0]/thread=xxxxxxxx: tilelet_assign_cb: assigning pfns [4a0000, 4a8000) to mgid 39, mnodeid 57: pachunk 12 already assigned to mgid 3b, mnodeid 59
回避方法	これは、SRU11.3.23.5.0で修正されました。 [復旧方法] パニックが発生している論理ドメインごとに対処します。 - 制御ドメインでパニックが発生している場合 1. 物理パーティションを停止します。 2. XSCFのaddboard(8)コマンドで物理パーティションを再構成前の状態に戻します。 3. 再度、物理パーティションを起動します。 [実行例] XSCF> **poweroff -y -p 0** XSCF> **addboard -y -c configure -m bind=none -p 0 01-0** XSCF> **poweron -y -p 0** - ゲストドメインでパニックが発生している場合 リソースの割り当てを解除し、再度リソースを割り当てます。 [実行例] primary# **ldm stop-domain guest** primary# **ldm unbind-domain guest** primary# **ldm bind-domain guest** primary# **ldm start-domain guest**

Bug	**26176351**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S**
説明	SRU11.3.23.5.0以降がインストールされている論理ドメインにおいて、物理パーティションの省電力動作を「elastic」に設定しても、論理ドメインが使用するCPUに対して Solaris Power Aware Dispatcher(PAD)が機能しないため、CPUの周波数が下がらない場合があります。
回避方法	これは、SRU11.3.23.5.0で修正されました。 制御ドメインにSRU11.3.23.5.0以降を適用してください。 [復旧方法] SRU11.3.23.5.0以降がインストールされているすべての論理ドメインを起動後にXSCFの setpparmode(8)コマンドで省電力動作を「disabled」に設定します。そのあと、再度、省電力動作を「elastic」に設定してください。 [実行例] XSCF> **setpparmode -p 0 -y -m powermgmt_policy=disabled** XSCF> **setpparmode -p 0 -y -m powermgmt_policy=elastic**
Bug	－
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.4(SRU11.3.8.7.0)以降がインストールされている環境において、以下の条件を満たす場合、deleteboard(8)コマンドが失敗することがあります。 [発生条件] 1) deleteboard(8)コマンドを実行したあとに、物理パーティションに存在するCPUコア数よりも論理ドメインの数が大きい場合 　かつ 2) 論理ドメインに2つ以上のCPUコアが部分的に割り当てられている場合 　かつ 3) deleteboard(8)コマンドに-m unbind=resourceオプションを指定して、物理パーティションの動的再構成を実行した場合 [例] XSCF> **deleteboard -y -v -c disconnect -m unbind=resource 01-0** PSB#01-0 will be unconfigured from PPAR immediately. Continue?[y|n] :**y** Start unconfigure preparation of PSB. [1200sec] (略) end PSB#01-0 could not be unconfigured from PPAR-ID 0 due to operating system or Logical Domains Manager error.
回避方法	PPAR DRポリシーを "targeted" に変更してください。 [例] primary# **svcadm disable ldmd** primary# **svccfg -s ldmd setprop ldmd/fj_ppar_dr_policy=targeted** primary# **svcadm refresh ldmd** primary# **svcadm enable ldmd**

表 3-42　Oracle Solaris 11で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

Bug	－
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の条件を満たす場合、論理ドメインがパニックする場合があります。 1) 論理ドメインにSRU11.3.12.4.0以降をインストールしている かつ 2) CPUチップの縮退が発生している かつ 3) 論理ドメインを再起動した場合 [パニックメッセージ例] panic[cpuxxx]/thread=xxxxxxxxxxxx: Could not compute mpo_lgroup[]
回避方法	有効な回避方法はありません。

Oracle Solaris 10で発生しうる不具合と回避方法

Oracle Solaris 10で発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 3-43　Oracle Solaris 10で発生しうる不具合と回避方法

Bug	**15738030**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下の両方の条件を満たした場合、制御ドメインが「BAD TRAP: type=31」でパニックすることがあります。 ■ 制御ドメインのオペレーティングシステムがOracle Solaris 10の場合 ■ ldm list-domain -o memory primaryを実行した結果、RA（実アドレス）が 0x200000000000より大きい場合
回避方法	これは、Oracle Solaris 10のパッチ148888-03で修正されました。 以下の手順を実施してください。 1. ldm list-domain -o memory primaryを実行し、SIZEの値を表示させます。 2. ldm start-reconf primaryを実行し、遅延再構成モードにします。 3. ldm remove-memory 256M primaryを実行し、割り当てられているメモリを減らします。 4. ldm set-memory <手順1のSIZEの値> primaryを実行し、割り当てられているメモリを元のサイズに戻します。 5. 制御ドメインのOracle Solarisを再起動します。 6. ldm list-domains -o memory primaryを実行し、RAが 0x200000000000より小さくなっていることを確認します。 7. ldm add-spconfig <構成情報名>を実行し、XSCFに構成情報を保存します。

Oracle Solaris 11.3で解決された不具合

Oracle Solaris 11.3で解決された不具合を以下の表に示します。これらの不具合は、Oracle Solaris 11.3より前の製品では発生することがあります。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合

Bug	**15813959** **15813960** **(7196117)**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M12/M10システムで、Oracle Solarisのhotplug(1M)によってPCIボックスを追加した場合、PCIボックス上のデバイスが認識されません。
回避方法	hotplug(1M)でPCIボックスを追加する場合は、あらかじめ/etc/systemファイルに以下の1行を追加後、Oracle Solarisを再起動してから実施してください。 set pcicfg:pcicfg_slot_busnums = 4 なお、物理パーティションの動的再構成、またはDynamic PCIe bus assignmentによって追加されたルートコンプレックスにPCIボックスをPHPで追加すると、PCIボックスのデバイスが認識されません。 この不具合が発生した場合は、PCIボックスが割り当てられている論理ドメインを再起動することで、PCIボックスのデバイスが認識されるようになります。
Bug	**17561541**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2230以降が適用されたSPARC M10環境、またはXCP 3021以降が適用されたSPARC M12環境で、遅延再構成中にldm remove-ioコマンドを実施したあと、ldm add-ioコマンドを実行した場合、ldmdデーモンがコアダンプして再起動されることがあります。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、およびOracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 遅延再構成中は、ldm add-ioコマンドを実行したあと、ldm remove-ioコマンドを実行してください。
Bug	**18502702**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC64 X+プロセッサが搭載されたSPARC M10システム上でSunVTS 7.0 ps17.1のテストを開始すると、エラーで終了することがあります。
回避方法	これは、SRU11.2.1.5.0、およびOracle Solaris 10のパッチ151265-03で修正されました。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**18595023**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SR-IOV機能に対応したPCIカードをPCIボックスのSLOT4以降のPCIスロットに搭載し、ldm list-ioコマンドを実行すると、SLOT4以降に搭載されたPCIカードの物理機能の仮名がSLOT2であるように誤って表示されます。また、SLOT4以降に搭載されたPCIカードの物理機能から作成された仮想機能を論理ドメインに割り当てることができません。 [コマンド出力例] # **ldm ls-io -l** NAME　TYPE BUS　DOMAIN　STATUS ----　---- ---　------　------ ... /SYS/PCI1/SLOT5　PCIE PCIE1 primary OCC [pci@8100/pci@4/pci@0/pci@1/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@10/pci@0/pci@1] 　network@0 　network@0,1 ... /SYS/PCI1/SLOT2/IOVNET.PF0 PF　PCIE1 primary [pci@8100/pci@4/pci@0/pci@1/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@10/pci@0/pci@1/network@0] 　maxvfs = 7 ...
回避方法	これは、SRU11.2.2.5.0、およびOracle Solaris 10のパッチ150817-03で修正されました。
Bug	**18615814**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）によりシステムボードを削除する場合、もしくは、ldm remove-ioコマンドを実行してI/OドメインからPCIeエンドポイントデバイスを動的に削除する場合、そのI/Oドメインが以下のメッセージを出力し、Oracle Solarisパニックすることがあります。 panic[cpuX]/thread=XXXXXXXXXXXX: mutex_exit: not owner, lp=XXXXXXXX owner=X thread=XXXXXXXXXXXX
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0で修正されました。 物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）によりシステムボードを削除する前に、もしくは、I/OドメインからPCIeエンドポイントデバイスを削除する前に、I/Oドメイン上でsvcadm(1M)コマンドを実行して、intrd(1M)サービスを無効化してください。 # **svcadm disable intrd** ldm remove-ioコマンドの処理が完了したら、intrd(1M)サービスを有効化してください。 # **svcadm enable intrd**
Bug	**18665751**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	XCP 2210を使用している場合、Oracle VM Server for SPARCのDynamic Resource Management（DRM）が動作しません。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 XCPファームウェアをXCP 2220以降にアップデートしてください。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**18747641**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris Studio 12.3 2013/06/17以降のコンパイラーを使用し、SPARC64 X/SPARC64 X+プロセッサ固有オプションおよび4バイト境界整列を有効（*1）にして作成した倍精度浮動小数点演算を行うプログラムを、Oracle Solaris 11.1以降が適用されたSPARC M10システム上で実行すると、コアダンプしたり、誤った演算結果になったり、パニックしたりすることがあります。 *1: 4バイト境界整列は、64ビットプログラム生成時は常に有効となります。 32ビットプログラム生成時は-xmemalign=Ns (N=1, 2, 4, 8, 16) を指定しない場合、または-fastを指定しない場合に有効となります。 [コンパイラー版数とその確認方法] -V オプションで版数が表示されます。版数文字列の最後は日付を表します。日付が2013/06/17以降のコンパイラーが該当するコンパイラーです。 $ **cc -V** cc: Sun C 5.12 SunOS_sparc Patch 148917-06 2013/06/17 $ **f95 -V**（f90、f77も同様です。） f95: Sun Fortran 95 8.6 SunOS_sparc Patch 148517-05 2013/06/17 $ **CC -V** CC: Sun C++ 5.12 SunOS_sparc Patch 148506-11 2013/06/17
回避方法	これは、SRU11.2.4.6.0で修正されました。 -xarchに以下のフラグを指定し、コンパイルしなおしてください。 -xarch=sparcima
Bug	**19074260**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）実施中または実施後に、ldoms/ldmdサービスのログ（/var/svc/log/ldoms-ldmd:default.log）に以下のようなメッセージが出力され、ldmdデーモンとXSCFの通信が切断されることがあります。 [メッセージ例] Sep 18 13:31:37 warning: Device busy: open_ldc_channel: Open of/devices/virtual-devices@100/channel-devices@200/virtual-channel@3:spds failed 以後、PPAR DRやldm list-spconfigコマンドなど、XSCFとの通信が必要な処理が失敗します。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0で修正されました。 [復旧方法] Oracle Solarisのsvcadm(1M)コマンドを実行し、ldoms/ldmdサービスを再起動してください。 # **svcadm restart ldmd**
Bug	**19310540**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	factory-defaultの構成でaddboard(8)を実行すると、制御ドメインにCPUコアが一部割り当てられないことがあります。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 ldm add-coreコマンドまたはldm add-vcpuコマンドで、追加されなかったCPUコアまたはスレッドを追加してください。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**19310550**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	8つ以上のシステムボードが割り当てられている物理パーティションで、ldoms/ldmdサービス起動時に実行されるハイパーバイザのダンプファイルの採取中に、ldoms/ldmdサービスによって以下のようなメッセージがコンソールに出力され。メンテナンスモードになることがあります。 [メッセージ例] Feb 28 16:19:39 svc.startd[11]: ldoms/ldmd:default failed: transitioned to maintenance (see 'svcs -xv' for details)
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 [復旧方法] 以下の手順で ldoms/ldmdサービス起動のタイムアウト値を600に変更してください。 # **svccfg -s ldmd listprop** : start/timeout_seconds count 180 : # **svccfg -s ldmd setprop start/timeout_seconds=600** # **svccfg -s ldmd listprop** : start/timeout_seconds count 600 : # **svcadm refresh ldmd** # **svcadm restart ldmd**
Bug	**19358400**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ルートコンプレックスが動的に追加／削除された場合、追加／削除したルートコンプレックス配下のPCIeエンドポイントデバイスが、showpparinfo(8)コマンドで表示されるPCIeエンドポイントデバイス構成情報に反映されません。
回避方法	これは、SRU11.2.9.5.0で修正されました。 [復旧方法] ルートコンプレックスを動的に追加／削除した論理ドメインを再起動することで、showpparinfo(8)コマンドで正しい構成情報が表示されます。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**19424242**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle VM Server for SPARC 3.1.0.1以降が適用されたシステムで、CPU故障またはメモリ故障が発生し、I/Oドメインのすべてのcpu、またはすべてのメモリが縮退した場合、ldmdサービスが異常終了します。その結果、ldm(1M)コマンドがエラーで終了します。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 [復旧方法] 故障したCPUまたはメモリを交換してください。 故障したCPUまたはメモリを搭載したままOracle Solarisを起動したい場合は、XSCFで以下の手順で起動してください。 1. poweroff(8)コマンドを実行し、物理パーティション（PPAR）の電源を切断します。 2. setdomainconfig(8)コマンドを実行し、PPARをfactory-defaultの状態にします。 XSCF> **setdomainconfig -p** *ppar_id* **-c default** 3. poweron(8)コマンドを実行し、PPARを起動します。 制御ドメインのみの構成（factory-default）でOracle Solarisが起動されます。
Bug	**19424359**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	縮退構成でドメイン構成が復旧された場合、ハイパーバイザダンプ採取の有効／無効設定、およびハイパーバイザダンプ採取時の自動リブート設定が初期設定値に変更されてしまいます。 [初期設定値] ハイパーバイザダンプ採取の有効・無効設定 : 有効 ハイパーバイザダンプ採取時の自動リブート設定 : 無効
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 [復旧方法] Oracle VM Server for SPARCのldm(1M)コマンドを実行し、ハイパーバイザダンプの設定を変更したあと、ドメイン構成情報を保存してください。 # **ldm set-hvdump hvdump=***XXXX* **hvdump-reboot=***YYYY* # **ldm add-spconfig** ZZZZ 故障部品を交換後、setdomainconfig(8)コマンドを実行して、元のドメイン構成で起動しなおしてください。
Bug	**19513561**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ライブマイグレーションを実行中に該当ドメインのサスペンド処理に失敗した場合、Oracle VM Server for SPARCのldmdデーモンが繰り返しコアダンプすることがあります。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 [復旧方法] 以下の手順で物理パーティションの再起動を行ってください。 1. poweroff(8)コマンドを使用し、物理パーティション（PPAR）の電源を切断します。 2. poweron(8)コマンドを使用し、PPARを起動します。

Bug	**19680186** **19454809**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris 11.2以降の環境において、物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）によりシステムボードを削除した場合、Oracle Solarisがパニックすることがあります。
回避方法	これは、SRU11.2.10.5.0で修正されました。 すべての論理ドメインの/etc/systemに以下の設定を追加して、Oracle Solarisを再起動してください。 **set lgrp_topo_levels=1** SRU11.2.10.5.0以降を適用する前に必ず/etc/systemのset lgrp_topo_levels=1を削除してください。
Bug	**19728345**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）実施中にOracle Solarisのパニックなどによりldoms/ldmdサービスが再起動した場合、PPAR DRが失敗します。
回避方法	これは、SRU11.2.8.4.0、および Oracle Solaris 10用 Oracle VM Server for SPARC 3.2で修正されました。 [復旧方法] ldoms/ldmdサービスが復旧したあと、再度PPAR DRまたは論理ドメインへのメモリの追加／削除を実施すると、ハイパーバイザアボートを引き起こすことがあるため、XSCFファームウェアのpoweroff(8)コマンドを実行して物理パーティション（PPAR）の電源を切断したあと、poweron(8)コマンドを実行してPPARの電源を投入してください。
Bug	**19913088**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたルートコンプレックスをldm add-ioコマンドで動的に論理ドメインに追加する場合、その論理ドメインから以下のメッセージが出力され、Oracle Solarisがパニックすることがあります。 panic[cpuX]/thread=XXXXXXXXXXXX: bad stack overflow at TL 1
回避方法	これは、SRU11.2.10.5.0で修正されました。 論理ドメインにルートコンプレックスを動的に追加する前に、/etc/systemに以下の設定を追加したあと、Oracle Solarisを再起動してください。 set default_stksize = 0xa000
Bug	**20061005** **19200041**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	deleteboard(8)コマンドで、システムボードを動的に削除したあとに、物理デバイスを所持しているゲストドメイン上でipadm(1M)コマンド、またはifconfig(1M)コマンドを使用すると、そのゲストドメインから以下のメッセージが出力され、Oracle Solarisがパニックすることがあります。 panic[cpuXX]/thread=XXXXXXXXXXXX: assertion failed: obj->afo_corep == NULL, file: ../../common/os/numaio.c, line: 724
回避方法	これは、SRU11.2.10.5.0で修正されました。 deleteboard(8)コマンドで、システムボードを動的に削除した場合は、ゲストドメイン上でipadm(1M)コマンド、またはifconfig(1M)コマンドを使用する前に、以下のコマンドを実行してください。 # **modunload -i 0**

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**20458698**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ライブマイグレーションを実行するとき、本来のライブマイグレーションとは異なる処理が実行され、移行元のドメインの無応答時間が長くなることがあります。無応答になることにより、移行元のドメイン上で動作しているネットワークサービスなどがタイムアウトすることがあります。 移行元のドメインが以下の両方の条件を満たしている場合に、この問題が発生します。 ■ 移行元のドメインの最大RA（実アドレス）と最小RAの差分が64 MBで割り切れない場合 ■ 移行元のドメインの最大RAと最小RAの差分を64 MBで除算したときの余りが32 MB以下の場合 なお、ドメインの最大RAと最小RAは以下のコマンドで確認できます。 [例] # **ldm list-domain -o memory domain-name** NAME domain-name MEMORY RA　PA　SIZE 0x10000000　0x7b0fc0000000 1G 最小RA 0x400800000 0x7f01a0800000 11G (a)　(b) 最大RAは、(a) + (b)の値であり、0x6c0800000になります。 0x400800000 + 0x2c0000000(11G) = 0x6c0800000 最大RAと最小RAの差分は、27400 MBになります。 0x6c0800000 - 0x10000000 = 0x6b0800000 = 27400 MB よって、この例では、余りが8 MBになります。 27400 MB / 64 MB = 428 余り8 MB
回避方法	これは、SRU11.2.11.5.0で修正されました。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**20878144**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.8.4.0以降の場合、Oracle Solarisの起動時にshowdomainstatus(8)コマンドやイベントログに「OS Started. No state support」が表示されます。このメッセージは、論理ドメインがOracle Solarisに遷移した状態を表します。 以下はメッセージの例です。 XSCF> **showlogs event** Date Message --- 中略 --- Mar 27 15:55:31 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (OpenBoot Running) Mar 27 15:55:32 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (OpenBoot Primary Boot Loader) Mar 27 15:55:33 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (OpenBoot Running OS Boot) Mar 27 15:55:35 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (OS Started. No state support) Mar 27 15:55:36 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (OS Started. No state support) Mar 27 15:56:42 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (Solaris booting) Mar 27 15:57:37 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (Solaris booting) Mar 27 15:57:37 ** Event: SCF:PPARID 0 GID 00000000 state change (Solaris running) XSCF> **showdomainstatus -p 0** 2015-MM-DD hh:mm:ss Logical Domain Name Status primary OS Started. No state support.
回避方法	これは、SRU11.2.11.5.0で修正されました。 このメッセージは、システム動作には影響ありませんので、無視してください。

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**20974426**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.2が適用されている環境で、構成情報をXSCFに保存したあと、SPARC M10システム筐体または物理パーティション（PPAR）を停止または起動すると、保存した構成情報でSPARC M10システム筐体またはPPARが起動できないことがあります。 以下のいずれかの手段で構成情報を保存した場合に、この問題が発生します。 ■ ldm add-spconfig -rコマンド ■ Oracle VM Server for SPARCのldmdデーモンの自動回復ポリシー3（構成情報の自動保存）による自動回復 ldmdデーモンの自動回復ポリシーは以下のコマンドで確認できます。 自動回復ポリシーのデフォルトは1（ログファイルに警告メッセージを表示）です。 [例] # **svccfg -s ldmd listprop ldmd/autorecovery_policy** ldmd/autorecovery_policy integer 3
回避方法	これは、SRU11.2.11.5.0で修正されました。 [復旧方法] ■ ldm add-spconfig -rコマンドを実行した場合は、保存されている構成情報をいったん削除し、現在の構成で上書き保存してください。 [例] # **ldm remove-spconfig CONF-A** # **ldm add-spconfig CONF-A** ■ 自動回復ポリシーを3に設定していた場合は、以下の手順で自動回復ポリシーを1に変更してください。 [例] # **svccfg -s ldmd setprop ldmd/autorecovery_policy=1** # **svcadm refresh ldmd** 保存した構成情報でSPARC M10システム筐体またはPPARが起動できなかった場合は、factory-default構成でシステムを起動し、あらかじめ退避したXMLファイルで構成情報を復旧してください。
Bug	**21106074**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	暗号化アルゴリズムにaes-128-ccm、aes-192-ccm、aes-256-ccmのいずれかを指定した場合、暗号化を有効にしたZFSのデータセットにアクセスすると、システムがパニックすることがあります。なお、デフォルトの暗号化アルゴリズムはaes-128-ccmです。暗号化アルゴリズムを指定せずに、ZFSの暗号化を有効にした場合は、aes-128-ccmを指定したことになります。 [パニックメッセージ例] panic[cpu34]/thread=2a1053d9c20: bad floating point trap at TL 1 %tl %tpc %tnpc %tstate %tt 1 00000000123eabc0 00000000123eabc4 8880001600 077 %gl: 00 %ccr: 88 %asi: 80 %cwp: 0 %pstate: 16 (略)
回避方法	これは、SRU11.2.12.5.0で修正されました。 /etc/systemファイルに以下の記述を追加して、システムを再起動してください。 set auxv_cap_exclude_hw1=0x10000 set auxv_cap32_exclude_hw1=0x10000

表 3-44　Oracle Solaris 11.3で解決された不具合 (続き)

Bug	**21306352**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris 11.2 SRU11.2.9.5.0以降のルートドメイン（制御ドメインを除く）が存在する環境において、物理パーティションの動的再構成（PPAR DR）機能によりシステムボードを削除した場合、PPAR DRに失敗することがあります。 [実行例] XSCF> **deleteboard -y -c disconnect -m unbind=resource 01-0** PSB#01-0 will be unconfigured from PPAR immediately. Continue?[y|n] :**y** Start unconfigure preparation of PSB. [1200sec] 0.end Unconfigure preparation of PSB has completed. Start unconfiguring PSB from PPAR. [7200sec] 0..... 30..... 60..... 90.....- end Timeout detected during communicate with Logical Domains Manager. XSCF>
回避方法	PPAR DR機能によりシステムボードを削除する前に、あらかじめ、削除対象のシステムボード上のPCIeバスをドメインから削除することで回避できます。 [実行例] primary# **ldm remove-io PCIE8 domainX** : primary# **ldm remove-io PCIE15 domainY** XSCF> **deleteboard -y -c disconnect -m unbind=resource 01-0** [復旧方法] 削除対象のシステムボード上のPCIeバスをドメインから削除したあと、再度XSCFでdeleteboard (8)コマンドを実行してください。 [実行例] primary# **ldm remove-io PCIE8 domainX** : primary# **ldm remove-io PCIE15 domainY** XSCF> **deleteboard -y -c disconnect -m unbind=resource 01-0**

Oracle Solaris 11.2で解決された不具合

Oracle Solaris 11.2で解決された不具合を以下の表に示します。これらの不具合は、Oracle Solaris 11.2より前の製品では発生することがあります。

表 3-45　Oracle Solaris 11.2で解決された不具合

Bug	**15812880**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	メモリを8000 GB（約7.8 TB）以上搭載しているドメインに、telnetやsshで接続しようとすると、接続先の制御ドメインコンソールに以下のようなメッセージが表示され、接続できなくなります。 ■ sshの場合 error: /dev/ptmx: Not enough space error: session_pty_req: session 0 alloc failed ■ telnetの場合 telnetd: open /dev/ptmx: Not enough space
回避方法	これは、Oracle Solaris 11.1 SRU3.5.1、およびOracle Solaris 10のパッチ148888-04で修正されました。 以下のコマンドを実行して、ptmx_ptymaxを変更してください。 [例] # **echo "ptms_ptymax/Z 0x400000" | mdb -kw** ptms_ptymax: 0 = 0x400000
Bug	**15822113**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	シェルスクリプトなどでldm add-vcpu、ldm remove-vcpuを繰り返し実行すると、実行しているプロセスがコアダンプで異常終了することがあります。
回避方法	これは、SRU11.1.7.5.0で修正されました。 SRUが適用されていないことが原因でこの不具合が発生した場合は、再度コマンドを実行してください。 また、ldm remove-vcpuを実行する場合は、プロセスの負荷が低い状態で実行するようにしてください。

Bug	**15823255**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	以下の両方を満たす環境において、Oracle Solarisのpsradm(1M)やpsrset(1M)コマンドでCPUの割り当てを変更したり、Oracle VM Server for SPARCのldmコマンドで仮想CPUの動的構成変更を行ったりすると、Oracle Solarisがパニックすることがあります。 ■ 物理パーティション（PPAR）が2台以上のSPARC M10-4Sの筐体で構成されている場合 ■ 制御ドメインまたは論理ドメイン上でlgrpinfoコマンドを実行すると、以下のようなlgroupが存在する場合 「lgroup　XX (intermediate):」と表示されるlgroup のうち、 「Lgroup resources:」フィールドの「(CPU)」の前に数字が1つしかなく、 かつ、その数字が 「(memory)」の直前に表示されていない場合 [例] # **/usr/bin/lgrpinfo** ... lgroup 12 (intermediate): 　　Children: 10, Parent: 0 　　CPUs: 0 1 　　Memory: installed 520M, allocated 494M, free 26M 　　Lgroup resources: 1 (CPU); 10 11 (memory) 　　Latency: 21 ...
回避方法	これは、Oracle Solaris 11.1 SRU5.5、およびOracle Solaris 10のパッチ150400-01で修正されました。 /etc/system に以下の行を追加し、Oracle Solarisを再起動してください。 set lgrp_topo_levels=2
Bug	**15825208**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10システムにおいて、Oracle Solarisのscp(1)、sftp(1)、ssh(1)コマンドがエラーになったり、Oracle RACのインストールに失敗したりすることがあります。
回避方法	これは、Oracle Solaris 11.1 SRU 1.4で修正されました。 「Oracle Solarisのscp(1)、sftp(1)、ssh(1)コマンドがエラーになったり、Oracle RACのインストールに失敗したりする（CR:15825208）」を参照してください。
Bug	**15826052**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIホットプラグ（PHP）機能を使用して、Quad Gigabit Ethernetカード（SE1X7GQ2F）を、PCIボックス内のPCI Expressスロットに増設することはできません。
回避方法	これは、XCP 2050とSRU11.1.6.4.0で修正されました。 XCP 2050については、RTIF2-130528-001の記述を参照してください。 XCPおよびSRUが適用されていない場合は、増設対象の論理ドメインを停止してから、PCIカードを増設してください。

表 3-45　Oracle Solaris 11.2で解決された不具合 (続き)

Bug	**15840018**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ファームウェアをXCP 2031以降にアップデートしたSPARC M10の場合、またはXCP 3021以降のSPARC M12の場合、Oracle Solaris起動時に以下のメッセージが表示されます。 NOTICE: skipping unsupported token: fjorclnum
回避方法	これは、SRU11.1.6.4.0、およびOracle Solaris 10のパッチ148888-03で修正されました。 また、このメッセージを無視してもシステムに影響はありません。
Bug	**15851224**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	I/Oドメイン起動時に以下のようなメッセージが出力され、パニックし続けることがあります。 recursive rw_enter, lp=XXXXXXXX wwwh=XXXXXXXX thread=XXXXXXXX
回避方法	これは、SRU11.1.12.5.0およびOracle Solaris 10のパッチ150840-01で修正されました。 I/Oドメインの /etc/systemに以下を追加して、Oracle Solarisを再起動してください。 forceload:　drv/vpci なお、I/Oドメインが起動できない状態となっている場合は、I/Oドメインの仮想ディスクサービス（vds）の対象となる仮想ディスク（vdisk）を割り当てているゲストドメインを、ldm stop-domain、ldm unbind-domainコマンドによりinactive状態へ移行してください。これにより、I/Oドメインが起動できますので、I/Oドメインを起動してから上記を設定してください。
Bug	**15851441**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	メモリが故障して縮退すると、Oracle Solaris起動時に以下のメッセージが出力され、パニックし続けることがあります。 tilelet_assign_fini_cb(): tile 0xX in memgrp X was unused また、ldm add-spconfigで論理ドメインの設定を保存したあとに、メモリのミラーモード設定をした場合にも発生します。
回避方法	これは、SRU11.1.11.4.0で修正されました。 「メモリ縮退時にOracle Solarisを起動するとパニックが発生することがある（CR:15851441）」を参照してください。

Bug	**15858713** **16769782**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	メモリ故障が発生して、ゲストドメインに割り当てたメモリがすべて縮退した場合、Oracle VM Server for SPARCのldmdデーモンがコアダンプで異常終了し、ldm(1M)コマンドがエラー終了します。
回避方法	これは、SRU11.1.10.5.0で修正されました。Oracle Solaris 10はOracle VM Server for SPARC 3.1で修正されました。 SRUが適用されていないことが原因でこの不具合が発生した場合は、故障したメモリを交換してください。 故障したメモリを搭載したままOracle Solarisを起動したい場合は、XSCFから以下の手順で起動してください。 1. poweroff(8)コマンドを使用し、物理パーティション（PPAR）の電源を切断します。 2. setdomainconfig(8)コマンドを実行し、PPARをfactory-defaultの状態にします。 XSCF> **setdomainconfig -p *ppar_id* -c default** 3. poweron(8)コマンドを使用し、PPARを起動します。 制御ドメインのみの構成（factory-default）でOracle Solarisが起動されます。
Bug	**15887244**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M10 システムでSunVTS 7.0 ps14およびps15のテストを開始すると、エラーで終了することがあります。
回避方法	これは、Oracle Solaris 11.1 SRU4.6、およびOracle Solaris 10のパッチ149395-02で修正されました。修正を適用せずに回避する方法はありません。
Bug	**16238762**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	factory-defaultの構成で制御ドメインのOracle Solarisを起動したあと、物理パーティションの動的再構成によりシステムボードを追加する場合、または物理パーティションの動的再構成によりシステムボードを追加したあと、ldm add-vcpuコマンドを使用して、追加されたシステムボードのCPUをドメインに組み込む場合、以下のメッセージが出力されパニックすることがあります。 panic[cpuX]/thread=XXXXXXXXXXX: mpo_cpu_add: Cannot read MD
回避方法	これはSRU11.1.7.5.0、およびOracle Solaris 10のパッチ150400-12で修正されました。なお、これらの修正が適用されていると、物理パーティションの動的再構成でシステムボードを追加した場合に以下のメッセージが表示されることがありますが、影響がないため無視してください。 WARNING: mpo_cpu_add: defaulting to lgroup x for CPU x 制御ドメインおよびldm add-vcpuコマンドを使用してCPUを組み込む対象のドメインの、/etc/systemに以下の記述を追加して、Oracle Solarisを再起動してください。 set suspend_count = 1

表 3-45　Oracle Solaris 11.2で解決された不具合 (続き)

Bug	**16292272**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	16BBで1つの物理パーティション（PPAR）を構成しているシステムで、ゲストドメインを多数構成すると、ゲストドメインのバインド処理に時間がかかります。 ゲストドメインごとの新たなバインド処理に要する時間の目安は、(すでにバインド状態のゲストドメイン数＋1)×6＋10秒です。 したがって、バインド状態になっているドメインが1つもない状態から、ldm bind-domainコマンドでゲストドメインを1つずつバインド状態にすると、各バインド処理に要する時間を合計した時間がかかることになります。
回避方法	これは、SRU11.1.6.4.0、およびOracle Solaris 10のパッチ150011-03で改善されました。 なお、システムを1つのPPARで構成せずに、複数のPPARに分割してから、各PPARにゲストドメインを構成することを推奨します。 上記の構成にすることにより、説明にあるような現象が軽減されるだけでなく、耐故障性の向上にもつながります。 バインド処理の時間を短縮するためには、仮想ネットワークスイッチ（vsw）を設定している場合、inter-vnet-linkをoffに設定することで、バインド処理の時間が約半分に短縮できます。なお、inter-vnet-linkをoffに設定した場合の注意事項は、『Oracle VM Server for SPARC Administration Guide』や『Oracle VM Server for SPARC Release Notes』を参照してください。
Bug	**17510986**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ゲストドメインがOracle Solaris 11.1でSRU11.1.9.5.1以降がインストールされている場合、またはゲストドメインがOracle Solaris 10で150400-01以降を適用している場合、ライブマイグレーションまたは物理パーティションの動的再構成を実行中にパニックが発生することがあります。
回避方法	これはSRU11.1.14.5.0、およびOracle Solaris 10のパッチ150400-07で修正されました。

表 3-45　Oracle Solaris 11.2で解決された不具合 (続き)

Bug	**17627526**
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Oracle Solaris起動時に、コンソールに以下のようなメッセージが出力されて、ldoms/ldmdサービスがメンテナンスモードになることがあります。 [メッセージ例] Jan 20 16:01:37 svc.startd[11]: svc:/ldoms/ldmd:default: Method "/opt/SUNWldm/bin/ldmd_start" failed with exit status 96. Jan 20 16:01:38 svc.startd[11]: ldoms/ldmd:default misconfigured: transitioned to maintenance (see 'svcs -xv' for details) このとき、ldoms/ldmdサービスのログ（/var/svc/log/ldoms-ldmd:default.log）に、以下のようなメッセージが出力されます。 [メッセージ例] [Jan 21 20:08:55 Executing start method ("/opt/SUNWldm/bin/ldmd_start").] ldmd cannot communicate with the hypervisor as the required device does not exist: /devices/virtual-devices@100/channel-devices@200/virtual-channel@0:hvctl
回避方法	これはSRU11.1.19.6.0、およびOracle Solaris 10のパッチ150840-04で修正されました。 [復旧方法] 該当するデバイスファイルが存在していることを確認したあと、Oracle Solarisのsvcadm(1M)コマンドを実行し、ldoms/ldmdサービスを復旧してください。 # **ls -l** /devices/virtual-devices@100/channel-devices@200/virtual-channel@0:hvctl crw-------　1 root　sys　148, 2048 Jan　21 20:08 /devices/virtual-devices@100/channel-devices@200/virtual-channel@0:hvctl # **svcadm clear ldmd**
Bug	**17709858**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティションの動的再構成でシステムボードを削除した場合、以下のいずれかの現象が発生することがあります。 ■ 論理ドメインで以下のメッセージを出力してOracle Solarisがパニックする。Fatal error has occurred in: PCIe fabric.(0xxx)(0xxx) ■ 論理ドメインのデバイスのresume処理中にハングアップして、deleteboard(8)がタイムアウトでエラー終了する。
回避方法	これは、SRU11.1.15.4.0で修正されました。

表 3-45　Oracle Solaris 11.2で解決された不具合 (続き)

Bug	**17777004**
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	メモリ故障によってメモリが縮退された論理ドメインがある場合、deleteboard(8)コマンドで物理パーティションの動的再構成を実行すると、メモリが縮退されたドメインのOracle Solarisがパニックすることがあります。
回避方法	これは、SRU11.1.17.5.0およびOracle Solaris 10のパッチ150817-02で修正されました。 物理パーティションの動的再構成を実施する前に、制御ドメインからメモリの縮退が発生していないかどうかを確認します。メモリの縮退が発生している場合は、あらかじめ該当するメモリ領域を削除してください。 [確認方法] ldm list-devices -a -S memoryを実行してください。その結果STATUSの欄が「fail」になっていたら、その行に表示されているPA（物理アドレス）からSIZE（サイズ）分のメモリ領域が縮退しています。 [メモリ領域の削除方法] ldm remove-memory <上記SIZEの合計値><ドメイン名>を実行してください。
Bug	**18055846**
対象モデル	**SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）により新たに活性増設する場合、以下のメッセージが出力され、Oracle Solarisがパニックすることがあります。 panic[cpuX]/thread=XXXXXXXXXX: Fatal error has occurred in: PCIe fabric.(0xX)(0xXX)
回避方法	これは、Oracle Solaris 11.2、およびOracle Solaris 10のパッチ150400-18で修正されました。
Bug	**18112775**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	制御ドメインにOracle VM Server for SPARC 3.1.0.1/SRU11.1.14.5.0がインストールされている場合、Oracle Solaris 10が動作しているゲストドメインに対してldm set-memoryコマンドまたはldm remove-memoryコマンドで動的に割り当てメモリを減らすと、制御ドメインのOracle VM Server for SPARCのldmdデーモンがコアダンプして再起動される場合があります。
回避方法	これは、SRU11.1.17.5.0およびOracle Solaris 10のパッチ150817-02で修正されました。 論理ドメインに割り当てられているメモリサイズをldm list-domainコマンドで確認しながら、ldm remove-memoryコマンドを繰り返して必要なサイズまで減らしてください。一度に削除するメモリサイズは256 MB以下を推奨しますが、これよりも大きいサイズで削除できる場合もあります。 なお、この操作を行っているときに同じ現象が発生して削除に失敗することがあります。その場合はさらに小さいサイズで削除してください。
Bug	**18009532**
対象モデル	**SPARC M12-2S、SPARC M10-4S**
説明	デュアルチャネル10Gbps FCoEカード（SP1X7FAR2F/SP1X7FAS2F/7101673（7101674）+7101677（7101678））を搭載したシステムで物理パーティションの動的再構成（DR）を行うと、活性化されていないqlcnicドライバのサスペンド処理においてパニックが発生することがあります。
回避方法	これは、SRU11.1.19.6.0、およびOracle Solaris 10のパッチ149167-03で修正されました。 該当するqlcnicのインターフェースに対して、事前にifconfig <インターフェース名> plumbを実行してください。

Bug	―
対象モデル	**SPARC M12-1、SPARC M12-2、SPARC M12-2S、SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	SPARC M12システム、またはSPARC64 X+プロセッサが搭載されたSPARC M10システムでJava VMを起動すると、以下のようなメッセージが出力されコアダンプすることがあります。 [メッセージ例] # A fatal error has been detected by the Java Runtime Environment: # # Internal Error (output.cpp:1576), pid=1310, tid=91 # guarantee((int)(blk_starts[i+1] - blk_starts[i]) >= (current_offset - blk_offset)) failed: shouldn't increase block size # <...> # Abort (core dumped) また、Java VMがコアダンプすることが原因でOracle Enterprise Manager Ops Centerで以下の事象が発生することがあります。 1. SPARC M12システム、またはSPARC64 X+プロセッサが搭載されたSPARC M10システムでのOracle Solarisの管理対象登録操作 [Add Asset] が失敗します。 2. SPARC M12システム、またはSPARC64 X+プロセッサが搭載されたSPARC M10システム上へのOracle Solarisのインストール操作 [Install Server] が失敗します。 3. SPARC M12システム、またはSPARC64 X+プロセッサが搭載されたSPARC M10システム上の論理ドメインへのEnterprise Controllerおよび Proxy Controller（Ops Center管理サーバ）のインストールが失敗します。
回避方法	これは、SRU11.1.17.5.0で修正されました。
Bug	―
対象モデル	**SPARC M10-4S**
説明	Dual 10Gbps FCoEカード（SE0X7EC12F/SE0X7EF12F/SG-PCIEFCOE2-Q-TA（SG-XPCIEFCOE2-Q-TA, 7105382）/SG-PCIEFCOE2-Q-SR（SG-XPCIEFCOE2-Q-SR,7105381））を搭載したシステムで物理パーティションの動的再構成（DR）を行うと、qlgeドライバ処理においてパニックが発生することがあります。
回避方法	これは、SRU11.1.8.4.0、およびOracle Solaris 10のパッチ145648-04で修正されました。 修正を適用せずに回避する方法はありません。 該当するカードが搭載されたシステムでは、物理パーティションの動的再構成（DR）は使用しないで、非活性状態で構成変更を行ってください。

Oracle Solarisのscp(1)、sftp(1)、ssh(1)コマンドがエラーになったり、Oracle RACのインストールに失敗したりする（CR:15825208）

[回避方法]
以下の手順で、AES_CTR、AES_CBC_MAC、AES_CFB128アルゴリズムを暗号ユニットのアシスト機能で使用しないように設定を変更してください。

- クライアント機能で使用する場合（scp(1)、sftp(1)、ssh(1)など）
  1. **対象ファイルに設定内容を1行で追加します。スペースが必要なのは「Cipher」と「aes128-cbc」の間だけです。**
     ・対象ファイル
     システム全体の設定：/etc/ssh/ssh_config

ユーザーごとの設定：$HOME/.ssh/ssh_config
・設定内容

```
Ciphers aes128-cbc,aes192-cbc,aes256-cbc,3des-bc,arcfour128,
arcfour256,arcfour,blowfish-cbc
```

■ サーバ機能で使用する場合（Oracle Solarisのsshdデーモンなど）

1. **対象ファイルに設定内容を1行で追加します。**
   ・対象ファイル
   /etc/ssh/ssh_config
   ・設定内容（推奨）

```
Ciphers 3des-cbc,arcfour128,arcfour256,arcfour,blowfish-cbc
```

2. **以下のコマンドでサービスを再起動します。**

```
# svcadm restart svc:/network/ssh:default
```

■ クライアント機能、サーバ機能のいずれの場合も、上記設定でも解決しない場合

1. **上記の設定内容の代わりに以下を追加します。**

```
UseOpenSSLEngine no
```

メモリ縮退時にOracle Solarisを起動するとパニックが発生することがある（CR:15851441）

[回避方法]
メモリの故障によりパニックが発生した場合は、故障したメモリを交換してください。
メモリミラーモードの設定によりパニックが発生した場合は、XSCFから以下の手順で起動してください。
メモリの故障によりパニックが発生した場合も、XSCFから以下の手順で起動すれば回避できることがありますが、確実ではありません。以下の手順で起動してもパニックが発生する場合は、故障したメモリを交換してください。

1. **poweroff(8)コマンドを使用し、物理パーティション（PPAR）の電源を切断します。**
2. **setdomainconfig(8)コマンドを実行し、PPARをfactory-defaultの状態にします。**

```
XSCF> setdomainconfig -p ppar_id -c default
```

3. **poweron(8)コマンドを使用し、PPARを起動します。**

制御ドメインのみの構成（factory-default）でOracle Solarisが起動されます。
メモリのミラーモードを設定する場合、factory-defaultの状態でミラーモードを設定してから論理ドメインを構成し、ldm add-spconfigで設定を保存してください。

また、ミラーモードを使用している環境に、ミラーモード設定していない状態で保存した設定を、ldm set-spconfigやXSCFのsetdomainconfig(8)コマンドで指定しないでください。

第4章

SPARC M10-1のハードウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10-1のハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
- ハードウェアに関する不具合と回避方法

留意点および制限事項

内蔵SASドライブの使用に関する留意点

SPARC M10システムの内蔵SASドライブは、Oracle Solaris MPxIOの設定を有効化して使用することを推奨します。
内蔵SASドライブの種別およびOracle Solarisのリリースによる違い、MPxIOの有効化を推奨する理由、無効時の影響、設定手順、確認手順等の詳細については、「第3章　ソフトウェアに関する情報」の「留意点および制限事項」に記載の「内蔵SASディスクドライブとOracle Solaris MPxIOの設定に関する留意点」を参照してください。

外付けDVDドライブの使用に関する留意点

USBで接続される外付けDVDドライブでは、USBバスパワー駆動はサポートされていません。

USBメモリの使用に関する留意点

USBメモリは、USBメモリからのOracle Solarisインストール、Oracle SolarisのUnified Archives（統合アーカイブ）によるシステムの退避／復元の操作、XSCFコマンドによるデータの保存にご使用ください。

Oracle SolarisコマンドやXSCFコマンドで、データの保存先としてUSBメモリを指定するコマンドを実行する場合は、あらかじめ、媒体となるUSBメモリを接続してください。
なお、保存されたデータにはシステムに関する情報が含まれています。USBメモリをご利用になる場合には、セキュリティ保持の観点から、データが保存されたUSBメモリの管理について留意が必要となります。

- 現在販売されているすべてのメーカーのUSBメモリに対して動作を保証するものではありません。
- USBメモリは、データの長期保存用には向きません。データの長期保存には、磁気テープやディスク装置をご使用ください。
- お使いのUSBメモリによっては、書き込めない／読み出せないなどの異常が発生する場合も考えられます。そのような異常が発生した場合には直ちにUSBメモリの使用を中止してください。
- USBメモリは、サーバのUSBポートやXSCFのUSBポートに直接接続してください。USBハブや延長ケーブルなどを介して接続すると、エラーの要因になる場合があります。
- USBメモリのアクセス中に、USBメモリは抜かないでください。コマンドが応答できないことやエラーの要因になる場合があります。
- OpenBoot PROMの状態で、USBメモリの接続や取り外しを行う場合には、SPARC M10システムを停止してから操作してください。停止せずに操作した場合、OpenBoot PROMが応答しなくなることがあります。

ハードウェアに関する不具合と回避方法

現時点で確認されている不具合はありません。

第5章

SPARC M10-4のハードウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10-4のハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
- ハードウェアに関する不具合と回避方法

留意点および制限事項

内蔵SASドライブの使用に関する留意点

SPARC M10システムの内蔵SASドライブは、Oracle Solaris MPxIOの設定を有効化して使用することを推奨します。
内蔵SASドライブの種別およびOracle Solarisのリリースによる違い、MPxIOの有効化を推奨する理由、無効時の影響、設定手順、確認手順等の詳細については、「第3章　ソフトウェアに関する情報」の「留意点および制限事項」に記載の「内蔵SASディスクドライブとOracle Solaris MPxIOの設定に関する留意点」を参照してください。

外付けDVDドライブの使用に関する留意点

USBで接続される外付けDVDドライブでは、USBバスパワー駆動はサポートされていません。

USBメモリの使用に関する留意点

USBメモリは、USBメモリからのOracle Solarisインストール、Oracle SolarisのUnified Archives（統合アーカイブ）によるシステムの退避／復元の操作、XSCFコマンドによるデータの保存にご使用ください。

Oracle SolarisコマンドやXSCFコマンドで、データの保存先としてUSBメモリを指定するコマンドを実行する場合は、あらかじめ、媒体となるUSBメモリを接続してください。
なお、保存されたデータにはシステムに関する情報が含まれています。USBメモリをご利用になる場合には、セキュリティ保持の観点から、データが保存されたUSBメモリの管理について留意が必要となります。

- 現在販売されているすべてのメーカーのUSBメモリに対して動作を保証するものではありません。
- USBメモリは、データの長期保存用には向きません。データの長期保存には、磁気テープやディスク装置をご使用ください。
- お使いのUSBメモリによっては、書き込めない／読み出せないなどの異常が発生する場合も考えられます。そのような異常が発生した場合には直ちにUSBメモリの使用を中止してください。
- USBメモリは、サーバのUSBポートやXSCFのUSBポートに直接接続してください。USBハブや延長ケーブルなどを介して接続すると、エラーの要因になる場合があります。
- USBメモリのアクセス中に、USBメモリは抜かないでください。コマンドが応答できないことやエラーの要因になる場合があります。
- OpenBoot PROMの状態で、USBメモリの接続や取り外しを行う場合には、SPARC M10システムを停止してから操作してください。停止せずに操作した場合、OpenBoot PROMが応答しなくなることがあります。

ハードウェアに関する不具合と回避方法

現時点で確認されている不具合はありません。

第6章

SPARC M10-4Sのハードウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10-4Sのハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
- ハードウェアに関する不具合と回避方法

留意点および制限事項

内蔵SASドライブの使用に関する留意点

SPARC M10システムの内蔵SASドライブは、Oracle Solaris MPxIOの設定を有効化して使用することを推奨します。
内蔵SASドライブの種別およびOracle Solarisのリリースによる違い、MPxIOの有効化を推奨する理由、無効時の影響、設定手順、確認手順等の詳細については、「第3章　ソフトウェアに関する情報」の「留意点および制限事項」に記載の「内蔵SASディスクドライブとOracle Solaris MPxIOの設定に関する留意点」を参照してください。

外付けDVDドライブの使用に関する留意点

USBで接続される外付けDVDドライブでは、USBバスパワー駆動はサポートされていません。

USBメモリの使用に関する留意点

USBメモリは、USBメモリからのOracle Solarisインストール、Oracle SolarisのUnified Archives（統合アーカイブ）によるシステムの退避／復元の操作、XSCFコマンドによるデータの保存にご使用ください。

Oracle SolarisコマンドやXSCFコマンドで、データの保存先としてUSBメモリを指定するコマンドを実行する場合は、あらかじめ、媒体となるUSBメモリを接続してください。
なお、保存されたデータにはシステムに関する情報が含まれています。USBメモリをご利用になる場合には、セキュリティ保持の観点から、データが保存されたUSBメモリの管理について留意が必要となります。

- 現在販売されているすべてのメーカーのUSBメモリに対して動作を保証するものではありません。
- USBメモリは、データの長期保存用には向きません。データの長期保存には、磁気テープやディスク装置をご使用ください。
- お使いのUSBメモリによっては、書き込めない／読み出せないなどの異常が発生する場合も考えられます。そのような異常が発生した場合には直ちにUSBメモリの使用を中止してください。
- USBメモリは、サーバのUSBポートやXSCFのUSBポートに直接接続してください。USBハブや延長ケーブルなどを介して接続すると、エラーの要因になる場合があります。
- USBメモリのアクセス中に、USBメモリは抜かないでください。コマンドが応答できないことやエラーの要因になる場合があります。
- OpenBoot PROMの状態で、USBメモリの接続や取り外しを行う場合には、SPARC M10システムを停止してから操作してください。停止せずに操作した場合、OpenBoot PROMが応答しなくなることがあります。

クロスバーボックスの交換に関する制限事項

replacefru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの交換は、現時点ではサポートされていません。クロスバーボックスを交換する場合は以下の手順で実施してください。

1. **showhardconfコマンドを実行して、交換対象のクロスバーボックスがマスタ筐体でないことを確認します。**
   「Role:Master」となっているクロスバーボックスがマスタ筐体です。

```
XSCF> showhardconf
          :
   XBBOX#80 Status:Normal; Role:Master; Ver:2038h; Serial:2111206001;
          :
```

2. **交換対象のクロスバーボックスがマスタ筐体の場合は、switchscfコマンドを実行して、スタンバイ状態に切り替えます。**

```
XSCF> switchscf -y -t Standby
```

3. **マスタXSCFが切り替えられたため、XSCFにログインしなおします。**
4. **クロスバーボックスを使用している物理パーティション（PPAR）の電源を切断してから、交換対象のクロスバーボックスの電源を切断します。**
   クロスバーボックスのオペレーションパネルにあるPower-LEDが消灯されたこ

とを確認します。

5. **交換対象のクロスバーボックスの入力電源を切断して、交換を実施します。**

注ー入力電源が切断されたときに、交換対象のクロスバーボックスに対するエラーログが登録されますが、すべて無視してください。

---

6. **クロスバーボックスの電源コードを入力電源に接続します。**
   詳細は、『SPARC M10-4S インストレーションガイド』の「5.3　クロスバーボックスにケーブルを接続する」を参照してください。

   クロスバーボックスのオペレーションパネルにあるSTANDBY-LEDが点灯するまで待機します。

7. **diagxbuコマンドを実行して、交換したクロスバーボックスに対して診断を実施します。**

```
XSCF> diagxbu -y -b XX -t YY -t ZZ
```

   XX、YY、ZZには、電源切断状態のSPARC M10-4SのBB_ID(00～15)を指定します。

8. **showlogsコマンドを実行して、診断中にエラーが発生していないことを確認します。**

```
XSCF> showlogs error
```

9. **故障部品がないことを確認します。**

```
XSCF> showstatus
```

拡張接続用ラック2の増設に関する制限事項

addfru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの増設は、現時点ではサポートされていません。『SPARC M10-4S インストレーションガイド』の「9.4　拡張接続用ラック2を増設する」にある手順17および18を以下に読み替えて、クロスバーボックスの増設作業を実施してください。

17. **クロスバーボックス、SPARC M10-4Sすべての電源コードを入力電源に接続します。**
    詳細は、「5.1　SPARC M10-4Sにケーブルを接続する」および「5.3　クロスバーボックスにケーブルを接続する」を参照してください。

18. **ファームウェアをマスタXSCFと同じ版数にアップデートします。**
    - XCP 2040以前の場合

```
XSCF> getflashimage file:///media/usb_msd/images/XCPxxxx.tar.gz
XSCF> flashupdate -c update -m xcp -s version
```

- XCP 2041以降の場合

```
XSCF> flashupdate -c sync
```

ハードウェアに関する不具合と回避方法

現時点で確認されている不具合はありません。

第7章

PCIボックスに関する情報

ここでは、PCIボックスに関する特記事項や不具合について説明します。

- PCIボックスファームウェア版数とサポート情報
- PCIボックスに対するダイレクトI/O機能
- PCIボックスに関する不具合と回避方法

PCIボックスファームウェア版数とサポート情報

SPARC M10システムでこれまでに公開されたPCIボックスファームウェア版数は、次のとおりです。

表 7-1　PCIボックス ファームウェア版数

版数	おもなサポート情報
1310	■ SPARC M12サポート ■ Dual 40Gb Ethernetカードのサポート
1220	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1210	F160カードのサポート
1200	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1180	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1170	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1150	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1130	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1120	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1110	PCIボックスファームウェア不具合の改善
1100	SPARC M10サポート

PCIボックスに対するダイレクトI/O機能

SPARC M10-1/M10-4はXCP 2044から、SPARC M10-4SはXCP 2050からPCIボックスに対して、Oracle VM Server for SPARCのダイレクトI/O機能がサポートされるようになりました。これにより、PCIボックスのスロットごとに、I/Oドメインに割り当てることができるようになります。なお、Oracle VM Server for SPARCのダイレクトI/O機能の詳細は、お使いのバージョンの『Oracle VM Server for SPARC 管理ガイド』を参照してください。
SPARC M10-4/M10-4SにPCIボックスが接続されている場合は、ダイレクトI/O機能を使用する前に下記の設定を行ってください。なお、SPARC M10-1は、下記の設定を行う必要はありません。SPARC M10-1にPCIボックスを接続するだけでダイレクトI/O機能が使用できます。

ダイレクトI/O機能を設定する／表示する

PCIボックスに対するダイレクトI/O機能を設定する場合は、XSCFファームウェアのsetpciboxdio(8)コマンドを使用します。また、現在の設定を確認する場合は、showpciboxdio(8)コマンドを使用します。
setpciboxdio(8)およびshowpciboxdio(8)コマンドの詳細は、『SPARC M12/M10 XSCF リファレンスマニュアル』または各コマンドのマニュアルページを参照してください。

PCIボックスに関する不具合と回避方法

ここでは、PCIボックスに関する不具合と回避方法をPCIボックスファームウェアの版数ごとに記載します。

すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法

サポートされているすべての版数のPCIボックスファームウェアで発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 7-2　すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法

RTI番号	**RTIF2-170215-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されたPCIeルートコンプレックスをldm add-ioコマンドで動的に論理ドメインに追加した場合、PCIボックスのスロットに搭載されたPCIカードで、以下のいずれかの現象が発生することがあります。 - 以下のエラーが登録されることがあります。 [エラーメッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#0/PCIBOX#0000/PCI#11 Msg: PCICARD failed - lane degradeが発生することがあります。 lane degradeの発生を確認するには、Oracle Solarisのprtdiagコマンドを実行し、"Cur Speed/Width" を確認してください。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 当該PCIボックスが接続されている論理ドメインを再起動してください。
RTI番号	**RTIF2-130724-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスに6Gbps SASカードをPCIホットプラグ（PHP）で組み込む場合、PCI Express 8laneでリンクアップせず、Oracle SolarisのprtdiagコマンドのSpeedが「5.0GTx4」または「5.0GTx2」と表示されることがあります。 [prtdiag出力例] /SYS/PCI0 PCIE　LSI,sas-pciex1000,72 LSI,2008 5.0GTx2 /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@8/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@8/LSI,sas@0
回避方法	物理パーティション（PPAR）またはI/Oドメインを再起動するか、6Gbps SASカードをPHPで再度組み込んでください。
RTI番号	**RTIF2-130724-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）起動時に、PCIボックスのスロット6、7、10、11に搭載されたPCIカードで以下のエラーが登録されることがあります。 [エラーメッセージ例] FRU: /MBU/PCI#0/PCIBOX#0000/PCI#7 Msg: PCICARD failed
回避方法	Oracle Solarisからデバイスが認識できる場合は、このエラーメッセージを無視してください。
RTI番号	**RTIF2-130703-001**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）で組み込む場合、PCIボックスのスロット6、7、10、11のうちHBAが搭載されていない箇所は、Oracle Solarisのcfgadm(1M)コマンドの実行結果がemptyではなく、disconnectedとなります。 表示には問題がありますが、HBAを搭載すると通常どおり動作します。 なお、PCIボックスを接続したあとに論理ドメインを再起動した場合は、この現象は発生しません。
回避方法	表示の問題だけで動作に影響はありません。

表 7-2　すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	**RTIF2-130703-002**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）で組み込む場合、lane degradeすることがあります。
回避方法	PHPを実施する場合は、cfgadm -c connectを実行しないで、cfgadm -c configureを実行してください。
RTI番号	**RTIF2-130703-003**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）で組み込む場合、PCI-Expressコレクタブルエラーが発生し、次回のOracle Solaris起動時にPCIボックスが縮退されることがあります。
回避方法	PCIボックスをPHPで組み込んだあとにフォルトエラーメッセージが出力される場合は、PCIボックスを再度組み込んでください。
RTI番号	**RTIF2-130703-004**
対象モデル	**SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）で組み込む場合、PCIボックスが認識されないことがあります。
回避方法	PCIボックスをPHPで組み込んだあとにPCIボックスが認識されない場合は、PCIボックスを再度組み込んでください。

PCIボックスファームウェア版数1310で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1310で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-3　PCIボックスファームウェア版数1310で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-170214-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されている、物理パーティション（PPAR）の電源を投入した場合、リンクカードのエラーが誤検出されることがあります。 [エラーメッセージ例] XSCF> **showlogs error** Date: Jun 03 19:09:19 JST 2016 Code: 80000480-009d01009fff00d500-11000057d000000000000000 Status: Alarm Occurred: Jun 03 19:09:16.185 JST 2016 FRU: /BB#0/PCI#9/LINK,/BB#0/PCI#9/LINK/MGCBL,/BB#0/PCI#9/PCIBOX#0000/LINKBD,* Msg: TWI access error
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] PCIボックスが接続されている、PPARの電源を切断／再投入してください。

表 7-3　PCIボックスファームウェア版数1310で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-170209-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	以下のいずれかの場合、PCIボックスにおいて、PCIeカードが未実装のPCIeスロットのPOWER LEDが誤って点灯状態となります。 ■ ビルディングブロック構成のシステムでPCIボックスが接続されたSPARC M10-4S（システムボード）を物理パーティション（PPAR）の動的再構成（DR）を使用して、addboard(8)コマンドで追加した場合 ■ PCIボックスが接続されたPCIeルートコンプレックスをOracle VM Server for SPARCのldmコマンドを使用して、動的に追加／削除した場合
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下のいずれかを実施すると、PCIeスロットのPOWER LEDの状態は正常に戻ります。 ■ Oracle Solarisをリブートする ■ PPARの電源を切断する ■ PHPによるPCIeカードの組み込みを行う

PCIボックスファームウェア版数1220で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1220で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-4　PCIボックスファームウェア版数1220で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-161014-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスの電源ユニット（PSU）の故障をPCIボックスファームウェアで検出できない場合があります。
回避方法	以下のいずれかの方法で、PCIボックスのPSU故障を判断してください。PSUの故障と判断した場合は、PSUを交換してください。 ■ 物理パーティション（PPAR）が稼働中、PSUのLEDが点灯（橙）、または点滅（緑）の状態になる ■ PPARの電源を切断後、再投入した際に、XSCFのログにPSUの故障が登録される

PCIボックスファームウェア版数1200で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1200で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-5　PCIボックスファームウェア版数1200で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-150225-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続された構成で、入力電圧が瞬間的に低下した場合、PCIボックスの電源ユニット（PSU）の故障が誤って検出され、PCIボックスのCHECK LED（橙）が点灯することがあります。 この現象は、showlogs error -vコマンドで確認できます。showlogs error -vコマンドの実行結果が「Msg:PSU failed」または「PSU failed(PSU shortage)」で、かつDiagnostic Codeの4行目が以下の値となっている場合は、この不具合に該当します。 1) 4バイト目：左から1番目（x80）のビットが0（0*, 1*, 2*, 3*, 4*, 5*, 6*, 7*のいずれか）の場合。かつ 2) 4バイト目：左から7番目（x02）のビットが0（*0, *1, *4, *5, *8, *9, *c, *dのいずれか）の場合。かつ 3) 5バイト目：左から1番目（x80）のビットが0（0*, 1*, 2*, 3*, 4*, 5*, 6*, 7*のいずれか）の場合。かつ 4) 7バイト目： PCIボックスファームウェア版数が1120以下の場合：任意の値 PCIボックスファームウェア版数が1130以上の場合：左から1番目（x80）のビットが0、かつ、左から2番目（x40）のビットが0（0*, 1*, 2*, 3*のいずれか）の場合 Date: Jan 13 15:19:40 JST 2015 Code: 80000408-00cb000000ff0000ff-110000256001000000000000 Status: Alarm Occurred: Jan 13 15:19:40.742 JST 2015 FRU: /MBU/PCI#1/PCIBOX#1111/PSU#0 Msg: PSU failed Diagnostic Code: 00013131 31310000 0000 00010000 00000000 0000 00010000 00000000 0000 01410800 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下のどちらかの手順を実施してください。 ■ 復旧方法1 PCIボックスが接続されているSPARC M10筐体の電源を切断してから、PCIボックスの両方の電源ケーブルを引き抜いて（AC OFF）ください。その後、30秒待ってから両方の電源ケーブルを挿し込んで（AC ON）ください。 ■ 復旧方法2 故障が誤検出されたPSUを擬似的に活性交換（対象のPSUをいったん取り外し、再度同じPSUを取り付ける）してください。PSUを擬似的に活性交換する場合は、ioxadm(8)コマンドを使用します。なお、ioxadm(8)コマンドを実行するにはfieldeng権限が必要です。

PCIボックスファームウェア版数1180で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1180で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-6　PCIボックスファームウェア版数1180で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-141111-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスにおいて、冗長構成となっている電源ユニット（PSU）のうち、片方のPSUに接続された電源ケーブルを抜いた状態で以下の操作を実施したとき、PSUの故障が誤って検出されます。 ■ 物理パーティション（PPAR）電源投入 ■ PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）で組み込み また、このとき、PCIボックス筐体のCHECK LED（橙）が点灯することがあります。 この現象は、showlogs error -vコマンドで確認できます。 showlogs error -vコマンドの実行結果が「Msg:PSU failed」で、かつDiagnostic Codeの4行目の2バイト目の左から5番目(x08)のビットが1(*8、*9、*a、*b、*c、*d、*e、*fのいずれか)の値となっている場合は、この不具合に該当します。 [エラーメッセージ例] Diagnostic Codeの4行目の先頭2バイト目が「49」の場合 XSCF> **showlogs error -v** Date: Nov 06 17:10:14 JST 2014 Code: 80000408-00d4000000ff0000ff-110000256100000000000000 Status: Alarm Occurred: Nov 06 17:10:10.509 JST 2014 FRU: /BB#0/PCI#9/PCIBOX#2005/PSU#1 Msg: PSU failed Diagnostic Code: 00093131 31310100 0000 00090000 00000000 0000 00090000 00000000 0000 01492800 00000038 00000000 00000000 00000000 00000000 0000
回避方法	有効な回避方法はありません。 ■ 復旧方法1 PCIボックスが接続されているSPARC M10システム筐体の電源を切断してから、PCIボックスの両方の電源ケーブルを引き抜いて（AC OFF）ください。その後、30秒待ってから両方の電源ケーブルを挿し込んで（AC ON）ください。 ■ 復旧方法2 故障が誤検出されたPSUを擬似的に活性交換（対象のPSUをいったん取り外し、再度同じPSUを取り付ける）してください。PSUを擬似的に活性交換する場合は、ioxadm(8)コマンドを使用します。なお、ioxadm(8)コマンドを実行するにはfieldeng権限が必要です。

表 7-6　PCIボックスファームウェア版数1180で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-140715-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスにおいて、冗長構成となっている電源ユニット（PSU）のうち片方のPSUに接続された電源ケーブルを引き抜くと、PSUの故障が誤って検出され、PCIボックス筐体のCHECK LED（橙）が点灯することがあります。このとき、showlogs errorコマンドを実行すると、「Msg: PSU failed」のログが出力されます。
回避方法	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] 以下のどちらかの手順を実施してください。 ■ 復旧方法1 PCIボックスが接続されているSPARC M10システム筐体の電源を切断してから、PCIボックスの両方の電源ケーブルを引き抜いて（AC OFF）ください。その後、30秒待ってから両方の電源ケーブルを挿し込んで（AC ON）ください。 ■ 復旧方法2 故障が誤検出されたPSUを擬似的に活性交換（対象のPSUをいったん取り外し、再度同じPSUを取り付ける）してください。PSUを擬似的に活性交換する場合は、ioxadm(8)コマンドを使用します。なお、ioxadm(8)コマンドを実行するにはfieldeng権限が必要です。

PCIボックスファームウェア版数1170で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1170で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-7　PCIボックスファームウェア版数1170で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-140902-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスの入力電源が切断された（AC OFF）、または停電が発生した場合、PSUの「Information」レベルのエラーログが登録されるはずが、誤って、故障を意味する「Alarm」レベルのエラーログが登録されてしまいます。このとき、PCIボックス前面のCHECK LEDが点灯し、PSUのステータスが「Faulted」と表示され、「AC Fail」のエラーメッセージが表示されます。 この現象のエラーメッセージはshowlogs errorコマンド、ステータスはshowhardconfコマンドを実行することで確認できます。 [エラーメッセージ例] XSCF> **showlogs error** Date: Jul 10 16:25:02 JST 2014 Code: 80000400-00d4000000ff0000ff-1100002a0000000000000000 Status: Alarm Occurred: Jul 10 16:24:57.269 JST 2014 FRU: /BB#0/PCI#8/PCIBOX#2003/PSU#1 Msg: AC FAIL [PSUステータス例] XSCF> **showhardconf** --- 中略 --- PCIBOX#2003; Status:Normal; Ver:1150h; Serial:2121152003; --- 中略 --- * PSU#1; Status:Faulted; Serial:FEJD1201000170;
回避方法	PCIボックスファームウェアを1170以降、およびXCPファームウェアをXCP 2220以降にアップデートしてください。なお、この現象によるシステム運用への影響はありません。
RTI番号	**RTIF2-140902-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスが接続されている構成で物理パーティション（PPAR）が1つ以上稼働している場合、1台のPCIボックスに関するログが、短時間（5〜10分）のうちに複数登録されると、リンクカードの故障が誤って登録されることがあります。 この現象の確認方法は「RTIF2-140902-002の確認方法」を参照してください。
回避方法	このエラーメッセージは、システム動作には影響ありませんので、無視してください。

表 7-7　PCIボックスファームウェア版数1170で解決された不具合 (続き)

RTI番号	**RTIF2-131224-003**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	Part Numberが「CA20365-B60X 007AD/7061035」のリンクボードがPCIボックスに接続されている場合、リンクボードに関する以下のエラーメッセージが表示されることがあります。 [エラーメッセージ例1] FRU: /BB#0/PCI#3/PCIBOX#1234/IOB,/BB#0/PCI#3/PCIBOX#1234/LINKBD Msg: PCI access error [エラーメッセージ例2] FRU: /BB#0/PCI#3/PCIBOX#1234/IOB Msg: PCI access error [エラーメッセージ例3] FRU: /BB#0/PCI#3/LINK,/BB#0/PCI#3/LINK/LINKCBL#-,/BB#0/PCI#3/PCIBOX#1234/LINKBD,* Msg: PCI Express lane is degraded リンクボードのPart Numberは、ioxadm -v listコマンドを実行した場合、「Part Num」の列で確認できます。 [例] XSCF> **ioxadm -v list** Location Type FW Ver Serial Num Part Num State --- 中略 --- PCIBOX#9011/LINKBD BOARD - PP134701CJ CA20365-B60X 007AD/7061035 On
回避方法	有効な回避方法はありません。

RTIF2-140902-002の確認方法

RTIF2-140902-002の現象は、以下の方法で確認できます。

1. **showlogs error -vコマンドを実行すると、出力結果が以下になっている。**
   - FRUが「LINK」または「LINKBD」
   - Msgが「TWI access error」
   - Diagnostic Codeの4行目の1バイト目が「07」

   [誤登録の例]

```
XSCF> showlogs error -v
Date: Dec 20 10:50:05 JST 2013
Code: 80000480-001f010021ff00cc01-11000057d000000000000000
Status: Alarm Occurred: Dec 20 10:49:59.136 JST 2013
FRU: /MBU/PCI#1/LINK,/MBU/PCI#1/LINK/MGCBL,/MBU/PCI#1/PCIBOX#3001/LINKBD,*
Msg: TWI access error
Diagnostic Code:
00010000 00000000 0000
00010000 00000000 0000
00013330 30310000 0000
07100000 00000000 00000000 00000000
^^
00000000 00000000 0000
```

2. **showlogs eventまたはshowlogs errorコマンドを実行すると、同一のPCIボックスに対して10分以内に、以下に示す複数のログが登録されている。**
   - showlogs eventコマンドを実行した場合PCIeカードに関するイベントログが12個以上登録されている。ここで、イベントログの数はイベントの種類に応じて以下のように計算します。

     - PCIeカードの挿入イベント: 2個

     - PCIeカードの挿入以外のイベント: 1個

     たとえば、PCIeカードの挿入と抜去を4回繰り返すと、メッセージは8行ですが、登録されるイベントログの数は3イベント×4=12となり、本問題に該当します。

     [PCIeカードの挿入／抜去の例]

```
XSCF> showlogs event
Dec 20 10:49:59 JST 2013 Attach operation (/BB#0/PCI#1/
PCIBOX#3001/PCI#1) Dec 20 10:49:59 JST 2013 Detach
operation (/BB#0/PCI#1/PCIBOX#3001/PCI#1)
--- 略 ---
```

   - showlogs errorコマンドを実行した場合、PCIボックスファームウェアにより登録されたログ（Codeの第3フィールドの先頭1バイト目が11）が6個以上登録されている。

     [PCIボックスファームウェアによるログ登録例]

```
XSCF> showlogs error
Date: Jun 06 10:55:28 JST 2014
Code: 80000400-00d4000000ff0000ff-1100002a0000000000000000
^^
Status: Alarm Occurred: Jun 06 10:55:28.028 JST 2014
FRU: /BB#0/PCI#1/PCIBOX#3001/PSU#0
Msg: AC FAIL
Date: Jun 06 10:55:34 JST 2014
Code: 10000400-00d4000000ff0000ff-1100002b0000000000000000
^^
Status: Information Occurred: Jun 06 10:55:34.479 JST 2014
FRU: /BB#0/PCI#1/PCIBOX#3001/PSU#0
Msg: PSU RECOVERY
--- 略 ---
```

PCIボックスファームウェア版数1150で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1150で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-8　PCIボックスファームウェア版数1150で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-131224-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	PCIボックスに対するダイレクトI/O機能を使用している場合、Oracle Solarisを起動中にパニックが発生することがあります。この事象は、PCIボックスに搭載されているPCIeカードのカード枚数が多いほど、発生しやすくなります。
回避方法	有効な回避方法はありません。
RTI番号	**RTIF2-131224-002**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	低温環境で、PCIボックスとSPARC M10システムの筐体を光ケーブルで接続していた場合、光ケーブルのエラーログが登録されることがあります。 この現象は、showlogs error -vコマンドで確認できます。 showlogs error -vコマンドの実行結果が「Msg: LINKCBL failed」で、かつDiagnostic Codeの4行目の先頭3バイト目が「10」「50」「60」のいずれかの値となっている場合は、この不具合に該当します。 [エラーメッセージ例] Diagnostic Codeの4行目の先頭3バイト目が「10」の場合 XSCF> **showlogs error -v** Date: Dec 17 15:50:11 JST 2013 Code: 10000400-009eff0000ff0000ff-110000440000000000000000 Status: Information Occurred: Dec 17 15:50:06.930 JST 2013 FRU: /BB#0/PCI#3/LINK/LINKCBL#1 Msg: LINKCBL failed Diagnostic Code: 00030001 00000000 0000 00030000 00000000 0000 00030000 00000000 0000 00001000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000
回避方法	このエラーメッセージは、システム動作には影響ありませんので、無視してください。

PCIボックスファームウェア版数1130で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1130で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-9　PCIボックスファームウェア版数1130で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-131120-001**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	外部要因による瞬間電圧低下などが発生すると、PCIボックスの電源ユニット（PSU）のエラーが誤って検出され、「Msg: PSU failed」のエラーログが登録されることがあります。また、PCIボックス内の2台のPSUでこのPSUエラーの誤検出が同時に発生すると、物理パーティション（PPAR）がシャットダウンします。 外部要因による瞬間電圧低下が原因かどうかは、showlogs error -vコマンドで確認できます。このコマンドの実行結果が「Msg: PSU failed」で、かつDiagnostic Codeの4行目の先頭1バイトから3バイトが以下の値になっている場合は、外部要因による瞬間電圧低下などが原因と考えられます。 1バイト目; "00" 2バイト目; 左から6番目(x04) のビットが0 (*0、*1、*2、*3、*8、*9、*a、*bのいずれか) 3バイト目; 左から3番目(x20) のビットが1 (2*、3*、6*、7*、a*、b*、e*、f*のいずれか) 2、3バイト目の「*」は、任意の値を表します。 <例> Diagnostic Codeの4行目の先頭1バイトから3バイトが"000120"の場合 XSCF> **showlogs error -v** Date: Oct 30 10:27:17 JST 2013 Code: 80000408-00cb000000ff0000ff-110000246101000000000000 Status: Alarm Occurred: Oct 30 10:27:17.597 JST 2013 FRU: /MBU/PCI#1/PCIBOX#7010/PSU#1 Msg: PSU failed Diagnostic Code: 00013730 31300100 0000 00010000 00000000 0000 00010000 00000000 0000 00012000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 0000
回避方法	有効な回避方法はありません。 Diagnostic Codeの4行目の先頭1バイトから3バイトの値が［説明］欄の値と一致しない場合は、PSUの故障とみなしてください。 [復旧方法] ■ 1台のPSUで本事象が発生した場合 ・「Msg: PSU RECOVERY」のエラーログが登録された場合、瞬間電圧低下から復旧しています。システムを継続して運用できます。 ・「Msg: PSU RECOVERY」のエラーログが登録されなかった場合、PSUの故障が発生しています。PSUを交換してください。 ■ 2台のPSUで本事象が発生した場合 PPARがシャットダウンしますので、PPARを再起動してください。PCIボックスの電源が投入できない場合はPSUの故障ですので、PSUを交換してください。

PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-10　PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-130703-009**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）またはI/Oドメイン起動時に、PCIボックスに搭載されている6Gbps SASカードがPCI Express 8laneでリンクアップしないことがあります。
回避方法	6Gbps SASカードがPCI Express 8laneでリンクアップしない場合は、PPARまたはI/Oドメインを再起動するか、6Gbps SASカードをPCIホットプラグ（PHP）で再度組み込んでください。

PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-11　PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合

RTI番号	**RTIF2-130703-007**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）またはI/Oドメイン起動時に、リンクカードが、誤って故障として検出されることがあります。 [メッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#1/LINK Msg: TWI access error
回避方法	本エラーメッセージが表示されても、動作に影響ありません。
RTI番号	**RTIF2-130703-008**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）またはI/Oドメイン起動時にPCI-Expressコレクタブルエラーが発生し、次回のOracle Solaris起動時にPCIボックスが縮退されることがあります。
回避方法	エラーメッセージが出力される場合は、PPARまたはI/Oドメインを再起動するか、PCIボックスをPCIホットプラグ（PHP）で再度組み込んでください。

PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-12　PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合と回避方法

RTI番号	**RTIF2-130703-005**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	物理パーティション（PPAR）またはI/Oドメイン起動時に、PCIボックスに搭載されたPCIeカードまたはリンクボードが、誤って故障として検出されることがあります。 [PCIeカードのメッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#3/PCIBOX#1234/PCI#3 Msg: PCICARD failed [リンクボードのメッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#0/PCIBOX#1234/LINKBD Msg: TWI access error
回避方法	本エラーメッセージが表示されても動作に影響ありません。 リンクボードにこの不具合が発生すると、PCIボックスのCHECK LEDが点灯しますが、次回のPPAR起動時にこの不具合が発生しない場合、CHECK LEDは消灯されます。
RTI番号	**RTIF2-130703-006**
対象モデル	**SPARC M10-1、SPARC M10-4、SPARC M10-4S**
説明	ioxadm -v listコマンドで表示されるPCIボックスのシリアル番号がすべて0（「0000000000」）の場合、PCIボックスの入力電源が投入されてから、物理パーティション（PPAR）の電源が初めて投入されるまでに検出されたハードウェアの故障が、エラーとして登録されません。
回避方法	I/Oボードとファンバックプレーンを同時に交換したり、ほかのPCIボックスで使用したことのあるI/OボードやファンバックプレーンをPCIボックスに搭載したりしないでください。 ioxadm -v listコマンドで表示されるPCIボックスがすべて0（「0000000000」）になった場合は、XSCFファームウェアのioxadm(8)コマンドを実行し、シリアル番号を元に戻してください。 この場合、fieldeng権限が必要です。 詳細は、「PCIボックスのシリアル番号を元に戻す（RTIF2-130703-006）」を参照してください。

PCIボックスのシリアル番号を元に戻す（RTIF2-130703-006）

ioxadm -v listコマンドで表示されるPCIボックスのシリアル番号がすべて0（「0000000000」）になった場合は、XSCFファームウェアのioxadm(8)コマンドを実行し、シリアル番号を元に戻してください。
この場合、fieldeng権限が必要です。

```
XSCF> ioxadm [-fvAM] serial target serial_num
```

targetには対象となるPCIボックス識別子を指定します。この場合は「PCIBOX#0000」です。serial_numには変更前のPCIボックスのシリアル番号を「nnnnnnnnnn」の形式で指定します。シリアル番号はPCIボックス筐体のラベルに記載されています。

このコマンドにより、PCIボックスのシリアル番号と識別子が置き換わります。ioxadm -v listコマンドを実行すると、置き換わったシリアル番号と識別子が確認できます。

以下は、PCIボックスのシリアル番号が「2121212006」の場合の例です。

```
XSCF> ioxadm serial PCIBOX#0000 2121212006
XSCF> ioxadm -v list
Location           Type    FW Ve  Serial Num     Part Num                State
PCIBOX#2006        PCIBOX  -      2121212006                             On
PCIBOX#2006/PSU#0  PSU     -      FEJD1201000170 CA01022-0750-D/         On
PCIBOX#2006/PSU#1  PSU     -      FEJD1245001342 CA01022-0750-D/7060988  On
PCIBOX#2006/IOB    IOBOARD 1110   PP121001JM     CA20365-B66X 007AF      On
PCIBOX#2006/LINKBD BOARD   -      PP123300TR     CA20365-B60X 001AA      On
PCIBOX#2006/FANBP  FANBP   -      PP120904SY     CA20365-B68X 004AC      On
BB#00-PCI#00       CARD    1110                                          On
XSCF>
```

第8章

SPARC M10のマニュアルに関する情報

現時点で確認されている変更内容はありません。